宮城県文化財調査報告書第104集

今熊野遺跡
一本杉遺跡
馬越石塚

昭和60年3月

宮城県教育委員会

目　　次

今熊野遺跡……1

一本杉遺跡……143

馬　越　塚……169

昭和 59・60 年度発掘調査一覧……177

例　　言

1. 本書は宮城県教育委員会が主体となって調査を行なった遺跡の調査報告を集録したものである。

今熊野遺跡:名取市所在(昭和46・47・50年度調査)

一本杉遺跡:宮城郡宮城町所在(昭和58年度調査)

馬 越 石 塚:仙台市所在（昭和57年度調査）

2. 本書の報告をまとめるにあたって次の機関・個人から協力いただいた。

仙台市教育委員会・名取市教育委員会・多賀城市教育委員会

大村　直（市立市川考古博物館）　坂本和俊（埼玉県立本庄高校教諭）

泰　昭繁　　藤原二郎　　太田昭夫

3. 各遺跡の執筆は宮城県教育庁文化財保護課職員の協議を得て下記の職員が担当した。

今熊野遺跡　　丹羽　茂

一本杉遺跡　　小山田正男

馬 越 石 塚　　村田晃一

4. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の次の2万5千分の一地形図を複製したものである。

図幅名　　仙台西南部・仙台東南部・岩沼・仙台空港

5. 各遺跡の調査に関するすべての資料は宮城県教育委員会において保管している。

今熊野遺跡Ⅰ

—古　代　編—

序

仙台平野の南部に位置する名取市は、国史跡雷神山古墳・飯野坂古墳群をはじめ埋蔵文化財が豊富に分布するところである。今熊野遺跡もその一つで、縄文時代から奈良・平安時代にかけての大規模な遺跡で、周囲にはいくつかの古墳群もみられる。

昭和46・47年に宮城県農業センターの建設に先立ち、遺跡の範囲確認調査を行ったところ、縄文時代前期の竪穴住居が約60軒、古墳時代の方形周溝墓が10基、古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居が100軒以上発見され、遺跡の重要性が明らかになった。そのため、宮城県農政部など関係者の間で協議が重ねられ、設計変更によって遺跡の全域をほぼ完全に保存することが決定されたことは感謝にたえない。昭和48年に誕生した文化財保護課にとって今熊野遺跡の保存決定は大きな励みとなり、その後の文化財保護行政に多大な影響をあたえた。今後、この遺跡をいかに後世に伝え、いかに活用してゆくかが私達に与えられた大きな課題といえよう。

今回の報告書は古墳時代以降のものに限られているが、その内容は東北地方の初期古墳時代の社会的様相を解明する重要な資料をふくんでいる。学術研究のみならず、学校教育・社会教育の場などでも大いに活用されることを期待したい。

なお、今熊野遺跡について深いご理解を寄せられ、現状保存のためにご努力をいただいた宮城県農政部をはじめとする関係者に心から感謝申し上げる。

昭和60年3月

宮城県教育委員会
教育長　郷 古 康 郎

例　　言

1．　本書は宮城県農業開発センター建設に伴う今熊野遺跡発掘調査の報告書である。調査資料が膨大なため、今回は古墳・奈良・平安時代に関する資料を収録した。

2．　遺跡記号は北台地区をＩＫ、鴻ノ巣地区をＫＳとした。

3．　調査期間・発掘面積は次の通りである。

第1次調査：昭和46年10月22日～昭和47年1月20　発掘面積:3,200㎡　精査面積:1,000㎡

第2次調査：昭和47年3月23日～ 7月 1日　発掘面積：2,900㎡

第3次調査：昭和47年2月28日～10月16日　発掘面積：9,100㎡

第4次調査：昭和50年3月 4日～19日　　発掘面積:1,200㎡

4．　調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室(課)

志間泰治・氏家和典・斎藤良治・平沢英二郎・藤沼邦彦・白鳥良一・佐々木安彦・岩渕康治・鈴木惣之助・小井川和夫・佐藤庄一・加藤道男・丹羽茂・三浦圭介・斎藤吉弘・田中則和・熊谷幹男・阿部恵・柳田俊雄・高橋守克・遊佐二郎・阿部博志・佐藤好一・芳賀寿幸・林和夫・森貢喜・加藤貞子

5．　調査参加者

東北大学文学部考古学研究室	林謙作・八巻正文・平口哲夫・福田友之
宮城教育大学考古学研究会	土岐山武・千葉宗久・太田昭夫
東北学院大学考古学研究部	中村光一・阿部正光・橋本博幸・佐藤正人・清水毅・高橋勇治・宍戸宏和・田中礼子・佐藤房枝・大槻良子・斎藤真澄・門間敦子
山形大学および山形県	伊藤忍・穂積里志・秦昭繁
宮城県多賀城跡調査研究所	岡田茂弘・工藤雅樹・桑原滋郎・恵美昌之・野崎準

6．　本書では発掘調査時に第9号方形周溝墓としたものを、第11号方形周溝墓と改名した。また、遺構平面図は掘りあげ形態で作成したため、遺構の重複関係（新旧）は断面図で示した。また、発掘調査を終了してから、報告書作成に着手するまで長い空白期間があったため、紛失や不用になってしまった記録資料が一部にあり、報告書としては不備な部分もある。

7．　続編としての縄文・弥生時代編は1985年度(昭和60年度)に刊行する予定である。

目　次

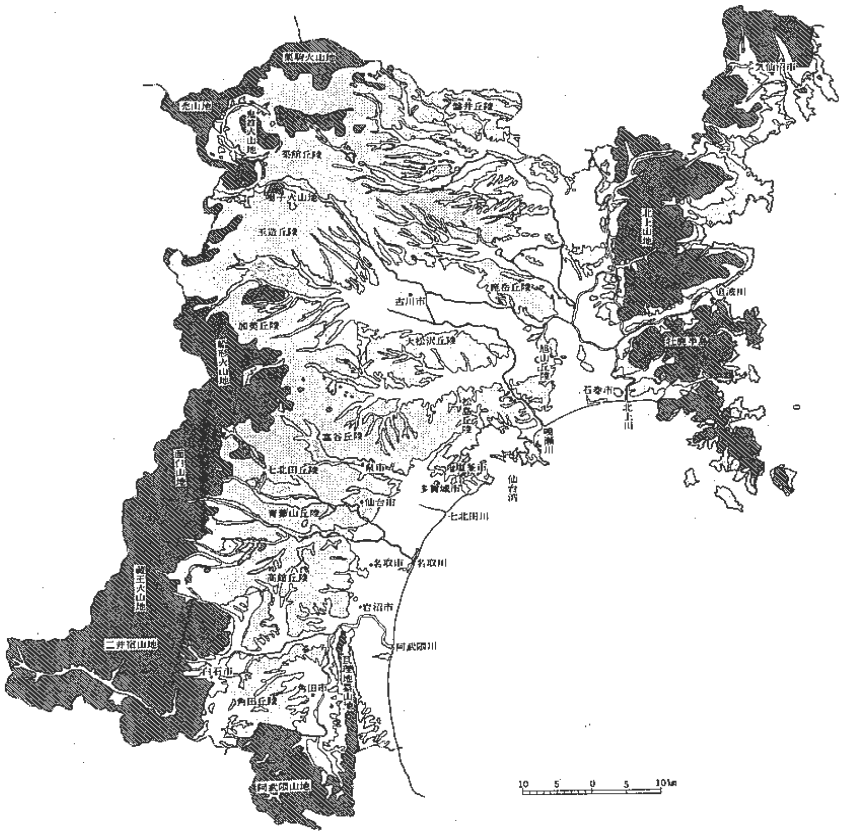
Ⅰ．位置と環境 …… 1
位置と地形環境 …… 1
歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の経過 …… 5
第1～4次調査 …… 5
現地説明会 …… 13
Ⅲ．発見された遺構と遺物 …… 14
第1～11号方形周溝墓 …… 14
北台（ＩＫ）地区の住居跡 …… 33
鴻ノ巣（ＫＳ）地区の住居跡 …… 49
掘立柱建物跡 …… 79
竪穴遺構 …… 79
Ⅳ．考　　察
今熊野遺跡における方形周溝墓群とその集落 …… 82
出土土器の検討と問題の所在 …… 82
塩釜式土器の諸段階 …… 84
第Ⅰ・ⅡＡ・ⅡＢ・Ⅲ段階 …… 84
器種の変遷 …… 103
塩釜式土器における地域性 …… 106
周溝墓と集落 …… 109
今熊野遺跡の方形周溝墓群と集落 …… 109
宮城県内の周溝墓と集落 …… 111
周溝墓の性格 …… 115
古墳と周溝墓 …… 116
宮城県内の前期古墳 …… 116
前期古墳の特性と周溝墓との関係 …… 123
引用・参考文献 …… 126
写真図版 …… 129

Ⅰ．位置と環境

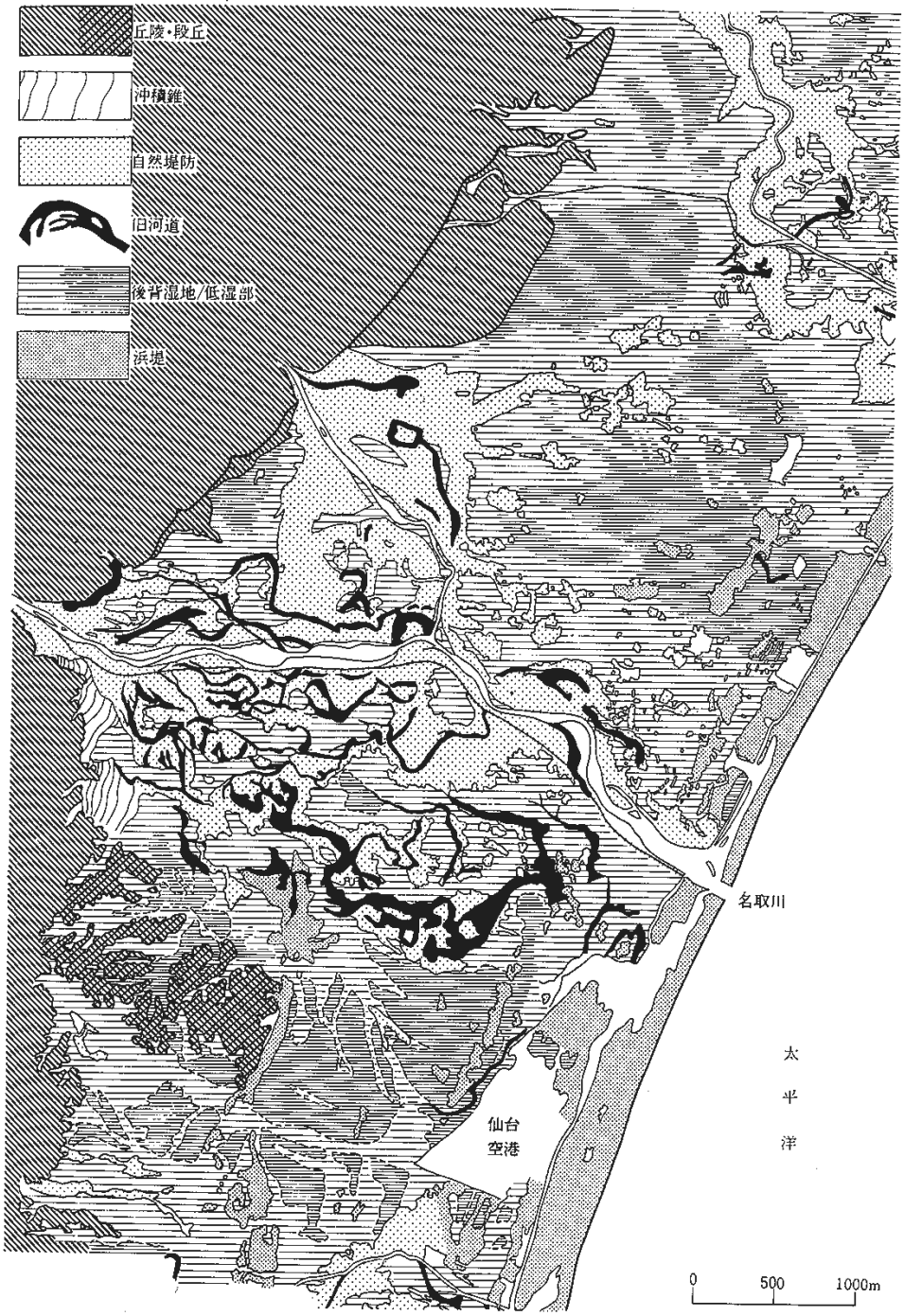
位置と地形環境

今熊野遺跡は名取市高館川上字南台・字北台に所在する。名取市は県庁所在地である仙台市の南側に隣接し、次第にベッド・タウン化が進行している。今熊野遺跡の位置は県庁の南方約11km、名取市役所の西方約3kmの地点である。

今熊野遺跡の位置する宮城県中央部の地形を概観すると、奥羽山地、青葉山・高館丘陵、丘陵縁辺の台地・段丘、宮城野・名取平野からなり、東側は広大な太平洋に面している。奥羽山地の東麓には標高100～500m前後の青葉山・高館丘陵がのびている。これらの丘陵を開析して、広瀬川・名取川が東流し、その流域および丘陵縁辺に青葉山・台の原・上町・中町・下町・愛島などの段丘群を発達させ、下流域に宮城野・名取平野を形成し太平洋に注いでいる。これらの段丘群の中で、愛島段丘は高館丘陵東縁に発達したもので、幅約400m・長さ約2kmの小規模な北部段丘と幅約1.4km・長さ約3kmの大規模な南部段丘とがある。そして、今熊野遺跡は北部



第１図　宮城県地形分類図　西村・中村他(1972)による



第2図　名取川下流域の地形分類図　　中田（1980）・松本（1981）を編集し、愛島段丘を加筆

愛島段丘の北東端に立地している。

広瀬川は仙台市日辺付近で名取川に合流する。広瀬・名取川下流域の地形環境の特性については、既に清水遺跡報告で詳述したが(丹羽・小野寺・阿部：1981.3)、自然堤防・浜堤が顕著に発達し、愛島段丘をあわせると、南北10㎞・東西11㎞・面積約100㎢におよぶ広大な居住可能地および可耕地を擁している。

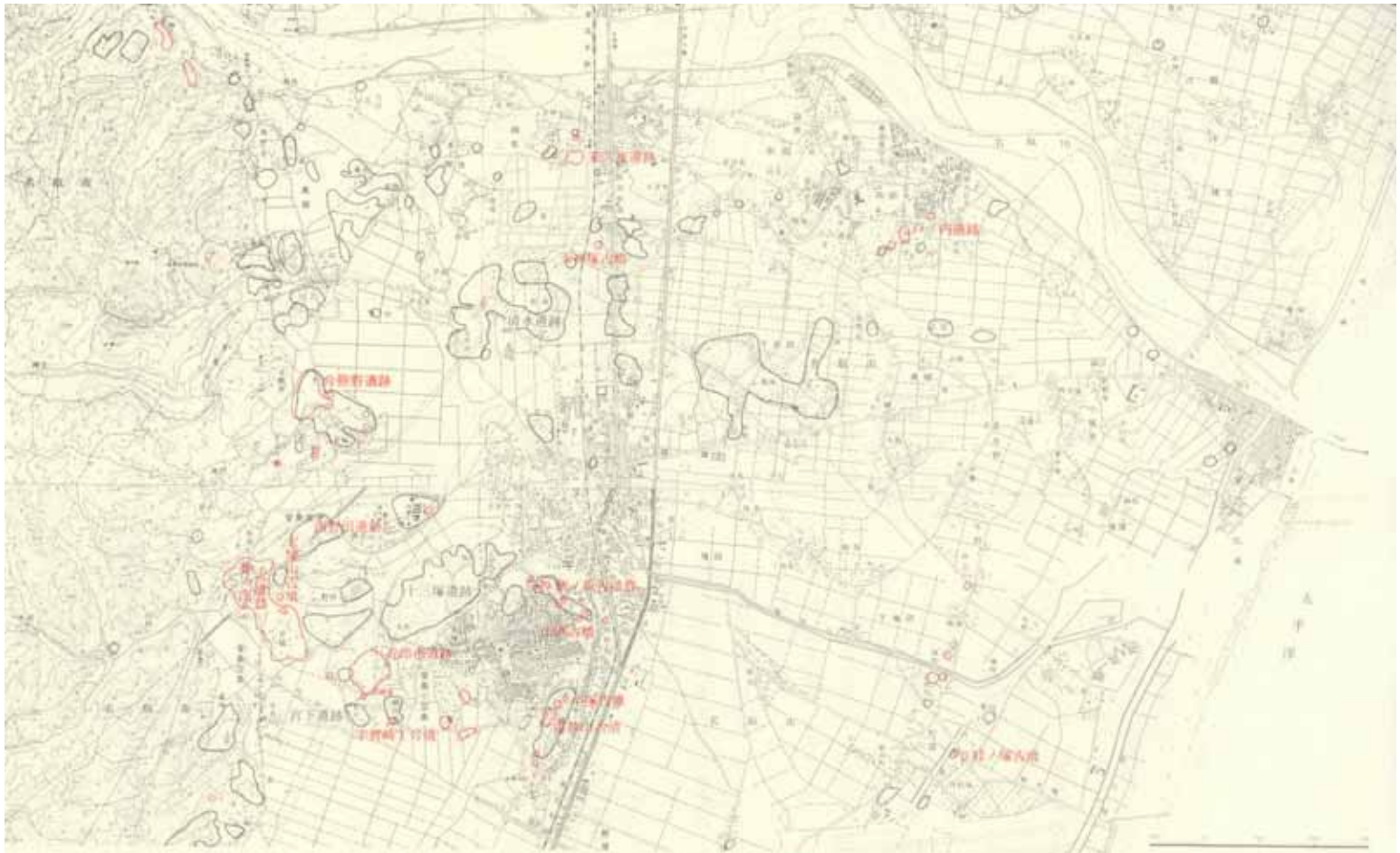
歴史的環境

今熊野遺跡の歴史的環境をみるために、名取川右岸の古代遺跡(古墳・奈良・平安時代)を示したのが第3図である。

古墳の分布をみると愛島段丘と牛野から杉ヶ袋に続く浜堤に集中している。すなわち、南部愛島段丘の東縁には東北地方第1位の規模をもつ雷神山古墳、大型円墳である小塚古墳、北東縁には5基の前方後方墳群からなる飯ノ坂古墳群、中央部南端には方墳を主体とする宇賀崎古墳群、西端尾根上には大塚山前方後円墳、小形前方後円を主墳とする賽ノ窪古墳群などが分布している。この他、小規模な円墳ではあるが、頭椎太刀を出土したことで知られる山囲古墳も飯ノ坂古墳群の南側に隣接している。また、牛野から杉ヶ袋に続く浜堤には、長持形石棺をもち器財形埴輪や鹿角製刀装具の発見で知られる経ノ塚古墳をはじめとして、毘沙門堂・藤根ノ塚・雷神塚・兵糧塚などの古墳が分布している。これらの古墳群は古墳時代前期に造営を開始し、その位置を僅かに移動させながら、中・後期に続くものである。中でも愛島段丘は東北地方において大規模な古墳がもっとも多いという特色をもっている。名取川右岸の自然堤防には小規模ではあるが、天神塚・安久諏訪・弁天囲などの古墳が数少ないながら分布する。また、最近の発掘調査によって、安久東遺跡から前方後方形周溝墓、戸ノ内遺跡から方形周溝墓の発見があいつぎ、古墳時代前期の社会を考える上で、重要な地帯となっている。

また、時代は幾分降るが南部愛島段丘の西端には、詳しい時期は不明なものの、奈良もしくは平安時代と推定される笠島廃寺が存在する。

このように、古墳群や寺院は占地の上で幾分限定をもちながら分布する。それに対して、古代(古墳・奈良・平安時代)の集落跡は高館山丘陵縁辺・愛島段丘・名取川および増田川の自然堤防・牛野および杉田の浜堤など、居住可能地のほとんどに分布している。著名なものとして、古墳時代の集落として知られる宮下遺跡・西野田遺跡・十三塚遺跡、東北新幹線の路線敷という狭い範囲にもかかわらず100軒近い住居跡が発見された清水遺跡、さらには平安時代におよぶ安久・安久東遺跡などをあげることができる。以上のように、名取川右岸のこの地域は広い居住可能地・可耕地に恵まれ、すぐれた農業生産力を基盤にして、古代においてまれにみる発展を遂げた地域である。その中で、今熊野遺跡は10基の方形周溝墓群、100軒余におよぶ住居跡の発見にみられるように、歴史的に重要な役割を果したものと思われる。



第3図　周辺の遺跡　古代集落　古墳・周溝墓

Ⅱ．調査の経過

昭和41年に宮城県農業総合開発センター建設の構想が出され、その適地として名取市西部の高館川上地区が選定され、その敷地内に金剛寺貝塚・今熊野遺跡が含まれることが明らかとなった。

金剛寺貝塚については、昭和45年に農政部から宮城県教育庁社会教育課に遺跡の一部を削って農業センター本館を建設する計画が提示された。話し合いの結果、金剛寺貝塚は縄文時代後期金剛寺式土器の標式遺跡として著名な貝塚であることなどから、遺跡を計画から除外することで同意が得られ、遺跡の保存範囲を確定するための範囲確認調査が昭和46年1月5日～15日に実施された。その結果、遺跡が縄文時代後期後半から晩期を主体としていること、また貝層・遺物包含層が地点を違えて台地縁辺に数ヶ所形成されており、範囲が台地一円におよぶことなどが明らかとなり、金剛寺貝塚は現状のまま保存されることになった。(小井川和夫:1980・3)。

今熊野遺跡は12～13万㎡に及ぶ広大なもので、全体の微地形および小字によって北台・鴻ノ巣・南台の三地区に分かれる。北台地区は南北に長い尾根状の台地で標高約50m、鴻ノ巣・南台地区はそれぞれ北台地区から枝分かれして東・南に延びた台地で、両者とも北台地区よりも一段低く標高30～40mである。今熊野遺跡は北台地区と鴻ノ巣地区が農業センターの実験圃場として選定され、合計4次にわたる発掘調査が文化財保護室(第四次のみ文化財保護課)によって実施された。

第１次調査

発掘期間：昭和46年10月22日～昭和47年1月20日　発掘面積：3,200㎡　精査面積：1,000㎡

遺跡の内容を把握するために、まず北台地区の発掘を開始した。南北に長い北台地区の地形にあわせて、3m単位のグリッドを組み、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表した。アルファベットは北から南、アラビア数字は西から東の順に付した。また、アルファベットによる地区はＡ～Ｔまでの20グリッドで大地区となるようにし、各々の大地区はＡＡ～ＡＴ・ＢＡ～ＢＴ・ＣＡ～ＣＴ……と表記することにした。なお、南北方向のグリッド基準線は座標北から約12°東に偏している(第5図)。

発掘は、5グリッドをつないだ3×15m単位のトレンチを南北・東西に配し、北台地区全体における遺構のあり方を検討した。各地区で住居跡などの遺構が確認されたが、ＤＡ～ＤＳ－34～48区間周辺において、特に遺構が密集していたので、遺跡の性格を知るためにこの地区を重点的に拡張し、さらに遺構の精査を行なった。その結果、縄文時代前期初頭の住居跡が35軒発見され、南東斜面では遺物包含層が確認された。また、古墳時代前期の方形周溝墓が供献土器としての底部穿孔土師器壺とともに発見され、1基を完全に調査した。トレンチで確認した方形周溝墓は3基ある。この他、古墳時代終末期から奈良時代の住居跡2軒を調査した。

北台地区は発掘調査によって、東北地方では今まで例をみない縄文時代前期の大規機な集落跡であることが明らかとなったと同時に、方形周溝墓も東北地方ではじめての発見であった。このような発掘調査の成果は大きな反響を呼び注目を集めた。また、遺跡の重要性が各方面で認識され、北台地区は遺跡の現状を保存しながら農薬センターの圃場として利用されることとなった。しかし、基幹道路の路線敷については工事に先立って事前調査を実施することとなった。

第２次調査

発掘期間：昭和47年3月23日～7月1日　発掘面積：2,900㎡

基幹道路は幅約20㎜で、北台地区を東西に横断する。グリッド名は第1次調査のものをそのまま使用し、路線敷のほぼ全面を発掘調査した。その結果、縄文時代前期初頭の住居跡24軒、同時期の遺物包含層1ヶ所、縄文時代各時期（前期初頭・前期中葉・晩期）の土坑40基、古墳時代前期の方形周溝墓4基、古墳時代終末期から奈良時代の住居跡4軒を調査した。このような調査結果は、第1次調査で明らかにされた遺跡の重要性をさらに裏付けるものであった（縄文時代前期の大集落[注]、方形周溝墓が群として存在）。

第３次調査

発掘期間：昭和47年2月28日～10月16日　発掘面積：9,100㎡

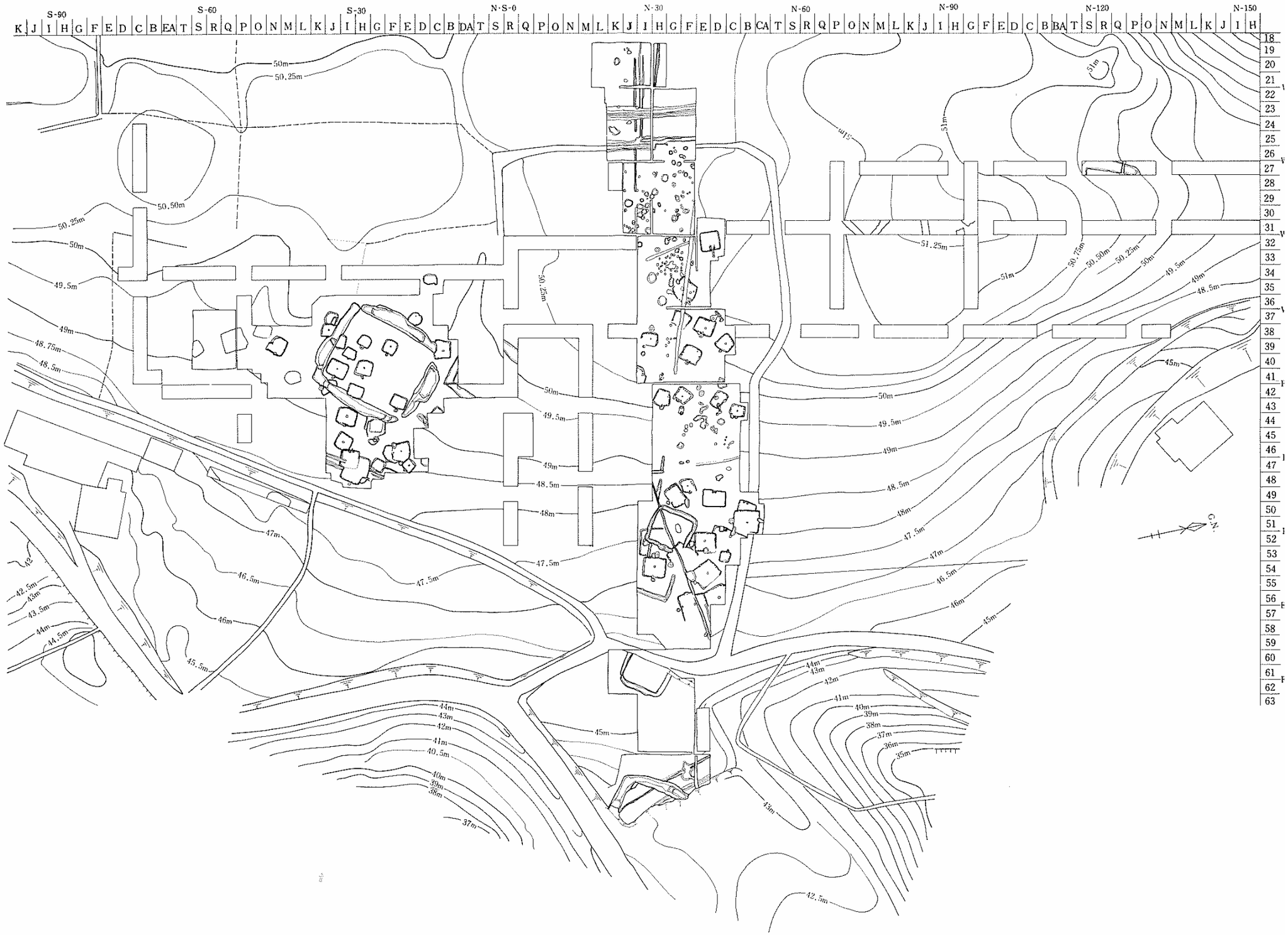
第2次調査と一部併行して、鴻ノ巣地区の発掘調査を実施した。鴻ノ巣地区は台地が東南方向に延びるため、北台地区とは別に、鴻ノ巣地区の地形にあわせたグリッドを組んだ。グリッド名は南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットで表記し、アラビア数字は北から南、アルファベッドは西から東の順に付した。アルファベットによる大地区は北台地区同様20グリッド単位（ＡＡ～ＡＴ・ＢＡ～ＢＴ……）とした。なお、南北方向のグリッド基準線は座標北から約32°東へ偏している。

鴻ノ巣地区の中央部には幅約2㎜の農道が東西に走っている。農道の北側は緩かに東側へ傾斜しているが、ほぼ平坦面となり、南側は斜面となっている。農道北側の平坦面については、3グリッドをつないだ3×12㎜単位のトレンチを主体として、それらを一列おきに配して遺構の分布状況を調べた。農道南側の斜面については、当初トレンチ調査を主体としていたが、遺構が密集することからＢＡ～ＤＣ－67～84区のほぼ全体を拡張して表土を剥いだ。その結果、鴻ノ巣地区全体で、約100軒の住居跡と方形周溝墓、2基を確認した。このうち、拡張した部分の18軒の住居跡を精査したところ、時代の判明したものは古墳時代前期3軒・古墳時代終末期から奈良時代4軒・平安時代2軒であった。したがって、精査を行なっていない住居跡にこれらの時期のものが多数含まれているのではないかと考えられる。この他、精査は行なわなかったが、周辺から弥生土器が出土し、弥生時代ではないかと推定される住居跡も2軒確認された。

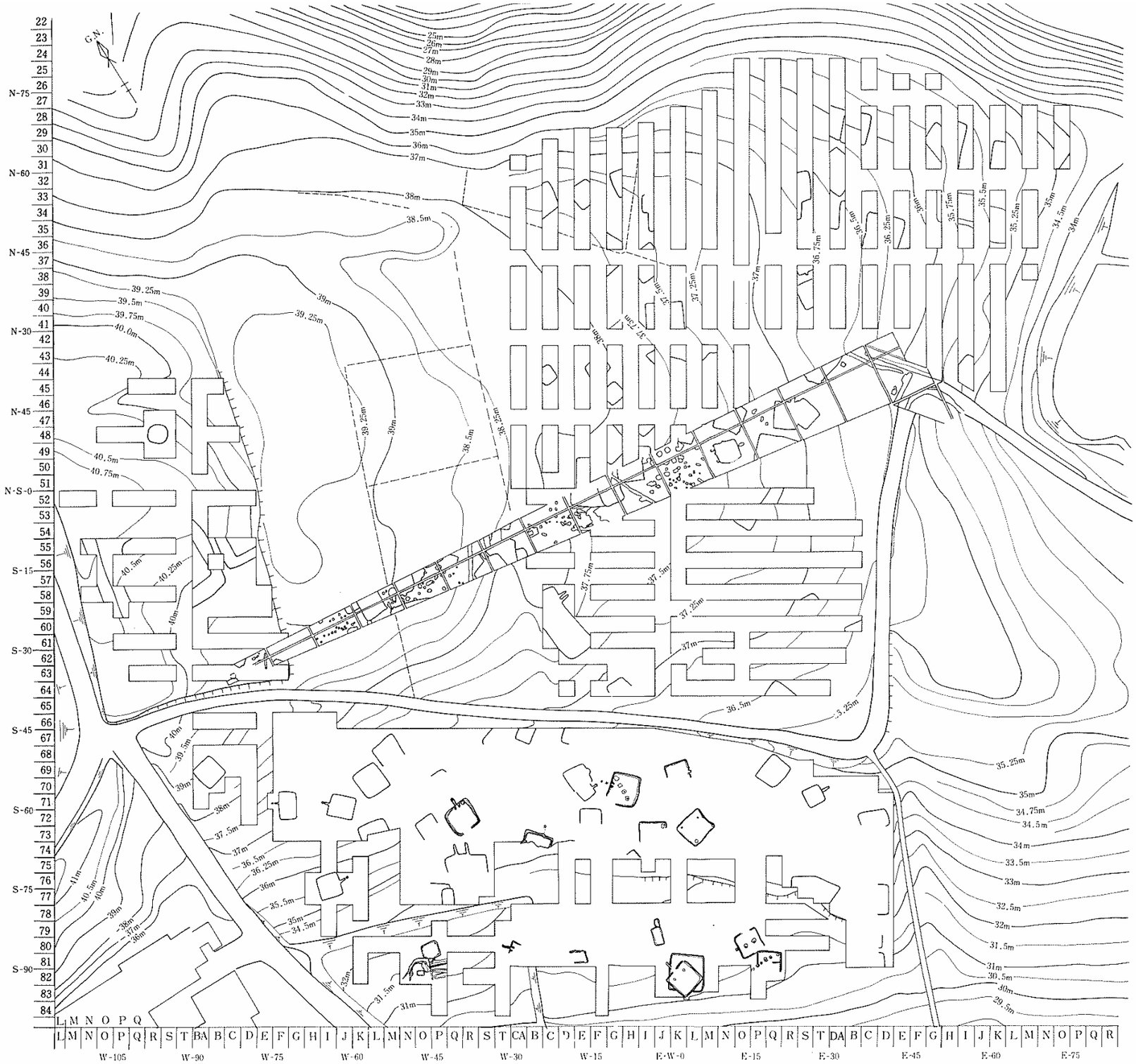
これらのことから、鴻ノ巣地区は弥生時代から平安時代の集落が重複しており、古代集落の

G.N.
51.7m
51.1m
51.3m
50.4m
50.4m
50.6m
51.1
50.7m
51.4m
40.3m
39.3
38.7m
38.1m
42.4m
41.8m
37.1m
32.0m
35.1m
27.4m
27.3m
31.2m
32.6m
0 10 100m

第4図　遺跡全体図


S-90
S-60
S-30
N-S-0
N-30
N-60
N-90
N-120
N-150
K J I H G F E D C B EA T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B DA T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B CA T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B BA T S R Q P O N M L K J I H
18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63
50m
50.25m
50.50m
49.5m
49m
48.75m
48.5m
48m
47.5m
47m
46.5m
46m
45.5m
45m
44.5m
44m
43.5m
43m
42.5m
42m
41m
40.5m
40m
39m
38m
37m
36m
35m
51m
51.25m
50.75m
C.N.

第5図　北台地区主要部



第6図　鴻ノ巣地区主要部

変遷を総合的に知る上で重要な遺跡であることが明らかとなった。また、古墳時代前期の住居跡が発見されたことから、墓域(方形周溝墓群)と集落の関係も明らかとなった。

このような、調査結果に基いて、鴻ノ巣地区も遺跡としての重要性が認識され、北台地区同様遺跡の現状を保存しながら農業センターの圃場として利用されることとなった。

第４次調査

調査期間：昭和50年3月4日～19日　発掘面積：1200㎡

今熊野遺跡は北台地区の幹線道路敷を除き、現状のまま保存されることになった。ところが、昭和50年1月になって、農業センターから鴻ノ巣地区に農業用水道管を布設したい旨の協議があった。そこで、現地をふまえた上で話しあいがもたれ、遺構確認調査を実施し、その結果をみて判断することになった。発掘調査は水道管埋設計画線を基準とした3㎜グリッドを設定して実施し、約1,200㎡を発掘した。その結果、竪穴住居跡22軒・土坑・ピット多数を検出し、鴻ノ巣地区における住居跡確認数が121軒となった。（第6図）。

このように、住居跡をはじめ、各種遺構が多数密集していることが明らかになったので、再度脇識を行ない、水道管は遺構面を掘り下げずに設置することで合意に達し、発掘区は埋戻すことになった。

現地説明会

第1～4次にわたる発掘調査の中で、次々に新しい事実が明らかになった。そこで、それぞれの調査内容がほぼ明らかになった時点で、一般の人々を対象とした現地説明会を開催し、調査内容を公開した。現地説明会は次のように合計3回行ない、県内外から多数の人々が見学に訪れた。第1回は昭和47年1月8日で北台地区の第1次調査に伴うものである。第2回は昭和47年6月11日で北台地区の基幹道路建設に伴う第2次調査である。第3回は昭和47年8月11日で、鴻ノ巣地区の第3次調査に伴うものである。

（注）　第2次調査を実施した基幹道路のさらに西側の斜面から小規模ながら貝層が発見された（小川井和夫：1978.2）

Ⅲ. 発見された遺構と遺物

第１号方形周溝墓

〔位置〕　ＤＧ－40区を中心とした部分に位置する。この場戸は北台台地平坦面の中でもやや南東側に偏った部分にあたり、僅かに東側へ傾斜している。

〔平面形〕　四周に溝をめぐらしたものであるが、三隅（角）において溝が途切れ陸橋状になっている。方向は北東－南西軸(長軸)が真北から約44°東へ偏っており、北隅と南隅を結んだ方向がほぼ真北と一致(東へ4°偏っている)している。確認面における規模は北東－南西が24.0m、北西－南東軸が21.6mで、やや長方形に近い平面形となる。

〔溝の形態〕　各地の溝は台状部側でほぼ直線的であるが、外縁部では中央部が弧を描くようにふくらんでいる。したがって、溝幅は中央部が広く、隅の部分に向かうにつれて狭くなる。溝の深さについても同様で、中央部が深く隅の部分に向かうに従って浅くなる。溝の断面形は逆台形状で、底面は平坦か丸味をもっている。各辺の最大幅・最大深さは、北東辺が4.0m・1.3m、南東辺が2.6m・0.9m、南西辺が3.0m・1.1m、北西辺が3.0m・0.8mである。このように、最大幅は3～4m、最大深さは0.8～1.3mとほぼ共通している。また、南隅の部分では溝はつながっているものの、幅は2mと狭くなり、深さも20～30cmと浅くなっている。

〔台状部〕　溝によって囲まれた台状部は北東－南西軸が18.4m、南東－北東軸が16.0mで、長方形に近い平面形となっている。表土排除後、地山との漸移層があらわれたが、この面で盛土・土坑(埋葬施設)などの痕跡は検出されなかった。

〔構内堆積土〕　溝内堆積土は各部分によって相違し、一様ではない(第8図)。しかし、次のような共通点は指摘できる。1.堆積土は黒褐色土・茶褐色土・暗褐色土などであるが、溝の底面や壁付近では地山土(ローム)がブロック状もしくは多量に含まれる。2.堆積土の上・中部でも地山土(ローム)の混入している部分がある。3.堆積状況は壁際および底面から序々に埋った将棋倒し状をしている。以上の3点の中で、3は溝内の堆積土が自然堆積によるものであることを示している。また、2の堆積土上・中部の地山土(ローム)の存在は台状部盛土の崩壊土を想起させる。また、1の底面・壁付近に堆積した地山土（ローム）の大部分は壁崩壊土であろうが、その一部に台状部盛土崩壊土を含んでいるかもしれない。

〔遺物の出土状況〕　方形周溝墓に関する遺物としては底部穿孔壺形土器（土師器壺を含む）がある(溝内からは多量の縄文前期土器・石器が出土している)。これらには、原形を留めているものと、砕けてしまいほとんど原形をとどめないものがあり、両者をあわせると14個分ある。場所的には南東辺溝が最も多く9個体、次が北東辺溝4個体、北西辺溝1個体で、東緩斜面の

下方部に位置する北東辺溝・南東辺溝に大部分が集中している。また、層位的に見ると、多くの場合横位もしくは斜位の状態で溝底面よりも上部の埋積土中から出土しており、明確に据えられたものはない。このような出土状況（場所・層位）は底部穿孔壺形土器が溝内に据えられたものではなく、台状部に立てならべられたもの(供献)が、台状部盛土の崩壊に伴い溝内に転倒したものである可能性が強いことを示している。

出土遺物

第1号方形周溝墓から出土した土器で、復元できたのは6点である。この他、口縁部から頸部の大破片が1点ある。これらのうち6点が複合口縁の壺、1点が単純口縁の壺である。

複合口縁壺：第9図・10図・第11図1・2

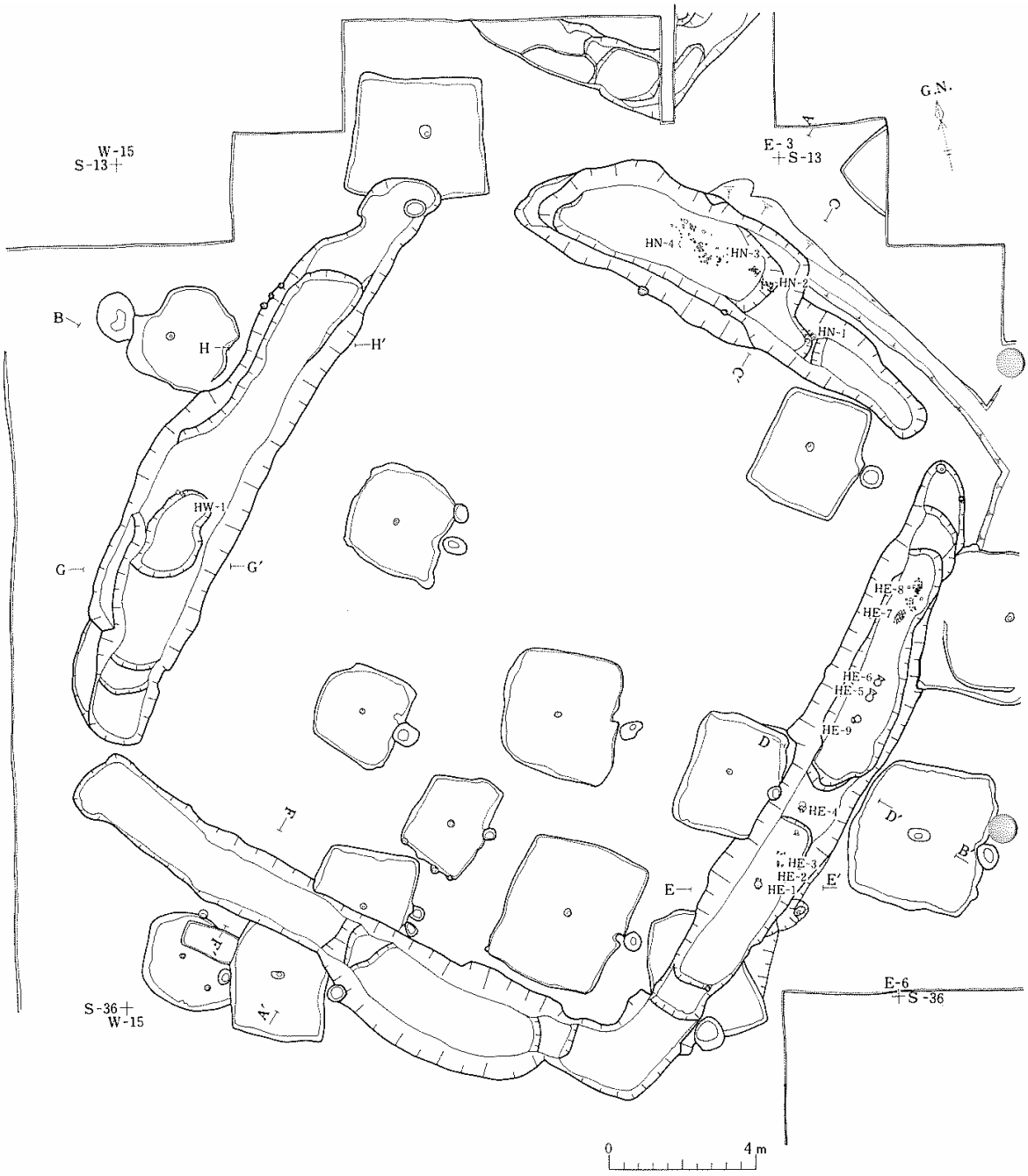
これらの中で、第11図1・2は胴部もしくは胴下部を失っているが、その他のもの(第9・10図)はすべて焼成前の底部穿孔である。器形的にはすべて複合有段口縁の壺で共通していることから、第11図1・2も焼成前底部穿孔と推定される。次に法量・器形・製作技法等の特徴を述べる。

土器の観察　法量は第9図1が器高31.4cm・口径25.1cm・胴径22.2cm・底径6.9cmでやや大きい。この他は器高27cm弱（26.7～27.0cm）・口径22cm前後（21.1～23.2cm）・胴径20cm前後（18.5～20.8cm）・底径6cm前後(5.9～6.6cm)とほぼ共通している。

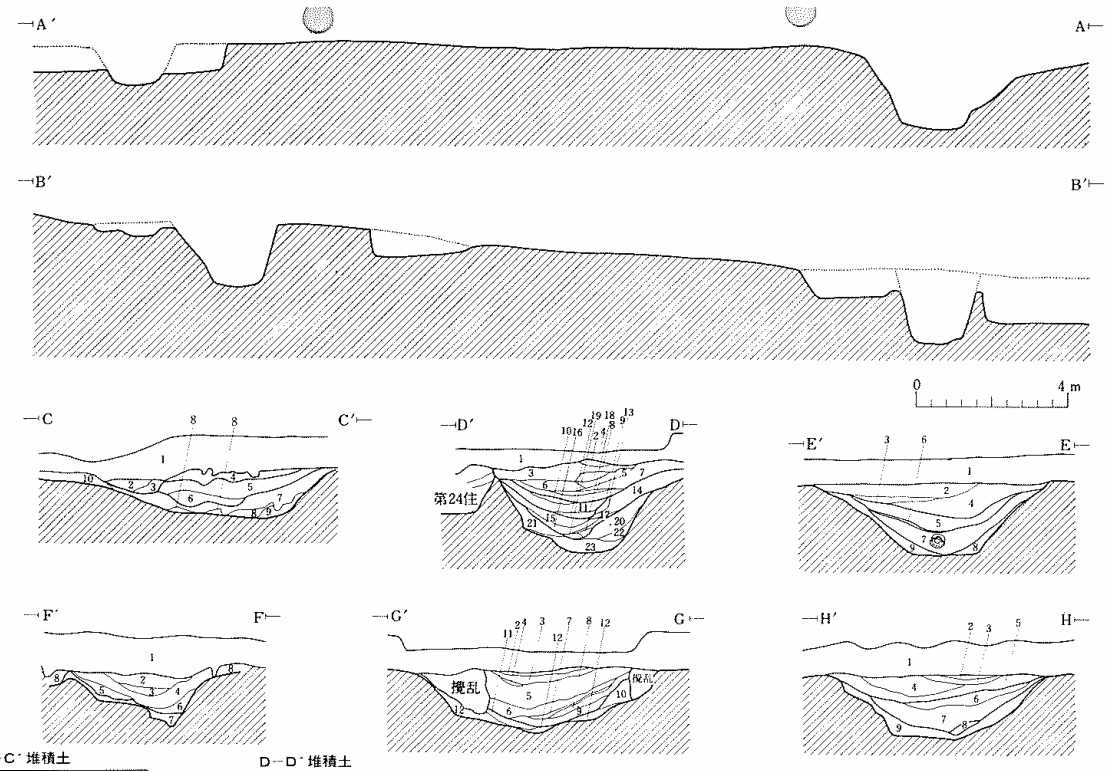
器形は最大径が口縁部に位置する有段口縁の壺である。胴部はほぼ球形で、胴部最大径は胴中央部にある。胴中央部とその下部で膨みが強く、胴下部と明瞭な相違を示している。頸部は外傾して立ちあがり、上端で段を形成する。段の上には大きく外反する口縁部がつく。口縁上部の外反は顕著で、口縁下部は複合口縁を形成している。底部は穿孔されている。孔は底部外縁に沿って平行にあげられている。孔の外縁の形状には外傾するもの(第9図・第10図2)と内傾するもの(第10図1)がある。外傾するものは輪状になった底部外縁の幅がやや広い(3～9㎜)のに対して、内傾するものは極めて狭い（2～3㎜）傾向にある。

外面の器面調整は口縁上部が横ナデ、口縁部から胴中央部が刷毛目、胴下部がヘラミガキ(第9図2・第10図1)である。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ（第10図2）もしくは刷毛目（第9図2・第10図・第11図1・2）、頸部がヘラナデ(第10図2)もしくは刷毛目(第9図2・第11図2)、胴上半部が粘土紐積み上げ時のオサエ、胴中央部がケズリ(第10図2)もしくはヘラナデ?（第10図2）、胴下部が刷毛目である。底部孔は上・中央下部が砂粒の動くヘラケズリで、下端部が砂粒の動かないヘラケズリのものが多い（第9図・第10図2）。ただし、第10図1は磨滅が著しく観察困難であるが、すべて砂粒の動かないケズリの可能性がある。

これらの器面調整について、先後関係の判明するものについて次に記述する。外面の器面調整については第9図1と第11図1では口縁部のヨコナデが刷毛目の後に行なわれている。内面



第7図　第1号方形周溝墓Ⅰ



C−C′ 堆積土

層No.	層位	特徴
1	表土	
2	溝内	ロームを僅かに含み、撹乱を受けている。
3	埋積土	〃 〃 〃
4	第1層	黒褐色土。粘質性およびて堅い。
5	第2層	暗褐色土。粘質性およびるがもろい。
6	第2層	黒茶褐色土。粘質性およびるがもろい。
7	第3層	黒褐色土。ロームブロック含む。
8	第3層	黒褐色土。ロームブロック含む。
9	第3層	明黒色。ロームを僅かに含み、粘質性あり。

D−D′ 堆積土

層No.	層位	特徴
1	表土	
2	第1層	茶褐色土。
3		暗褐色粘質土。木炭・焼土僅かに含む。
4		No.6と同質。焼土・木炭少ない。
5		No.6と同質。木炭焼土含む（No.6よりまい）。
6		茶褐色質粘土。木炭・焼土含む。
7		暗褐色質粘土。木炭多量に含む。
8		暗茶褐色粘土。木炭多量に含む。
9		暗褐色粘質土。木炭・焼土・褐色粘土含む。
10	第2層	茶褐色質粘土。木炭・焼土を微量含む。
11		暗茶褐色質粘土。木炭・焼土・褐色粘土僅かに含む。
12		黒褐色質粘土。No11に比し木炭多く含む。
13	第3層	暗茶褐色土。
14		暗褐色粘質土。
15		暗茶褐色粘質土。木炭・焼土を少量含む。
16		茶褐色粘質土。
17		No.21に比し、ローム・木炭多い。
18		暗褐色粘質土。硬質。
19		暗褐色粘質土。
20	第4層	暗褐色粘質土。褐色ローム細かく入る。
21		暗褐色砂土層。茶褐色粘質土と黄褐色ロームがブロック状に混在。
22		暗黄褐色粘質土。褐色ロームが大きく混入。
23		淡黄褐色砂土層。ローム中に黒褐色土入り込む。

E−E′ 堆積土

層No.	層位	特徴
1	表土	
2	第1層	暗茶褐色土。焼土・木炭含む。
3	〃	黒茶褐色土。木炭多量に含む。
4	〃	暗黒茶褐色土。焼土・木炭僅かに含む。
5	第2層	黒褐色土。焼土・木炭を含む。
6	第2層	暗黄褐色粘土層。
7	〃	暗黒茶褐色土。焼土・木炭・ローム含む。
8	第4層	暗褐色土。ローム多量に含む。
9	〃	〃 〃 〃

F−F′ 堆積土

層No.	層位	特徴
1	表土	
2	第1層	黒褐色土。
3	〃	明るい黒褐色土。
4	〃	黒褐色土。
5	〃	黒褐色土。ロームの粒少量含む。
6	〃	黒褐色土。ロームの小さな粒が多い。
7	第2層	黄褐色土。黒褐色土まじる。
8	漸移層？	黄褐色土。

G−G′ 堆積土

層No.	層位	特徴
1	表土	
2	第1層	暗褐色土。ローム・木炭まじる。
3		黒色土。焼土・木炭まじる。
4		ロームブロック。
5		黒褐色土。焼土・木炭含む層。
6		黒褐色土。No.5より黒い。
7		黒色土。木炭含み、焼土少量含む。
8		黒褐色土。焼土まじり。
9		黒褐色土。焼土、微量のロームまじる。
10	第2層	暗褐色土。ローム・焼土まじる。
11		暗褐色土。しもふり状にロームまじる。
12		暗褐色土。ロームの崩壊土まじる。

H−H′ 堆積土

層No.	層位	特徴
1	表土	
2	第1層	茶褐色土。白色粘土まじる。
3		黒褐色土。焼土、谷子の炭まじる。
4		ロームまじりの暗褐色土（崩土？）
5		暗褐色土。木炭・焼土まじる。
6	第2層	黒褐色土。焼土まじる。
7		黒色土。焼土まじる。
8	第3層	暗褐色土。ロームしもふり状ひまじる。
9		ローム崩土まじる暗褐色土。

第8図　第1号方形周溝墓Ⅱ

の器面調整については第9図2と第11図1では有段部分の刷毛目が口縁下部の粘土帯下にのびている。また、第9図1と第10図1では胴下部の刷毛目が胴中央下部の粘土帯下にのびている。
さらに、第9図・第10図2では底部孔のヘラケズリは砂粒の動くケズリが砂粒の動かないケズリによって切られ、第10図2では砂粒の動くケズリが胴下部の刷毛目を切っている。

製作技術・工程　器形・器面調整の観察結果に基いて、製作技法・工程について次に述べる。製作技法および工程をみると大きく四段階にわかれる。

第1段階は底部から胴下部の製作である。円盤状の粘土の上に粘土紐を積み上げた後、刷毛目等の器面調整を加え、粘土紐積み上げ痕を消すと同時に器壁を締める。その後、ある程度乾燥させ、次に粘土紐を積み上げた場合の荷重に耐え得る強度が確保された時、第2段階の工程に入る。この強度確保の乾燥は製作工程の各段階で行なわれる。すなわち、器面調整の刷毛目等が次の工程で積み上げられた粘土紐によって覆われているのはこのことを示している。

第2段階は胴中央部から肩部の製作で、粘土紐を指でオサエながら(締める)積み上げていく。外面は刷毛目調整がなされるが、内面には顕著な器面調整はみられない。このため、指によるオサエ(第11図2)や粘土紐の積み上げ痕が良く残っている（第9図1・第10図・第11図2）。この場合の粘土紐の幅は約1.5㎝である。ただ、第2段階の工程をやや詳しく見ると、粘土紐の積み上げ痕を良く残しているのは肩部で、胴中央下部にみられるのは1例だけである(第10図1)。さらに、胴中央部から中央下部にケズりの加えられているものも（第10図2）ある。
したがって、第2段階の工程は胴中央部以下の製作(第2ａ段階)と肩部の製作(第2ｂ段階)に細分される可能がある。すなわち、第2ａ段階では磨滅のため具体的調整技法の判別が困難なものもあるが、粘土紐を積み上げた後ヘラケズリやヘラナデなどの器面調整を加えている可能性が高い。それに対し、第2ｂ段階では指でオサエながら粘土紐を積み上げた後、内面には特別な器面調整を加えないという特徴がみられる。その差異は第2ｂ段階になると器形が内傾（弯）し、粘土紐を積み上げる口径が徐徐にせばまり、内面に器面調整を施すことが困難になるという技術的要因と同時に、器壁に加わる荷重が徐徐に軽減されていくという物理的要因も関係していると考えられる。他方、外側から見えにくい部分の器面調整を省くいう視覚的要因も関係しているかも知れない。

また、第2段階の開始にあたっては、顕著な特徴がみられる。すなわち、第2段階になって胴中央下部を製作するため第1段階で製作した胴下部に粘土紐を積み上げる際、外面にさらに粘土を貼り付け補強しているのである（第9・10図）。胴下部と胴中央下部の継ぎ足しは極めて入念に作業が行なわれ、この部分は特に厚くなっている。このため、器形的に胴中央部からその下の継ぎ足し部が強い膨みをもつ印象を与える。

第3段階は頸部の製作で、粘土紐を積み上げた後、内外面とも刷毛目やヘラナデなどの器面

調整を加え、積み上げ痕を消している。第3段階の最後に頸部上端を外方に延ばし段状にするとともに口縁部製作の準備を整える。

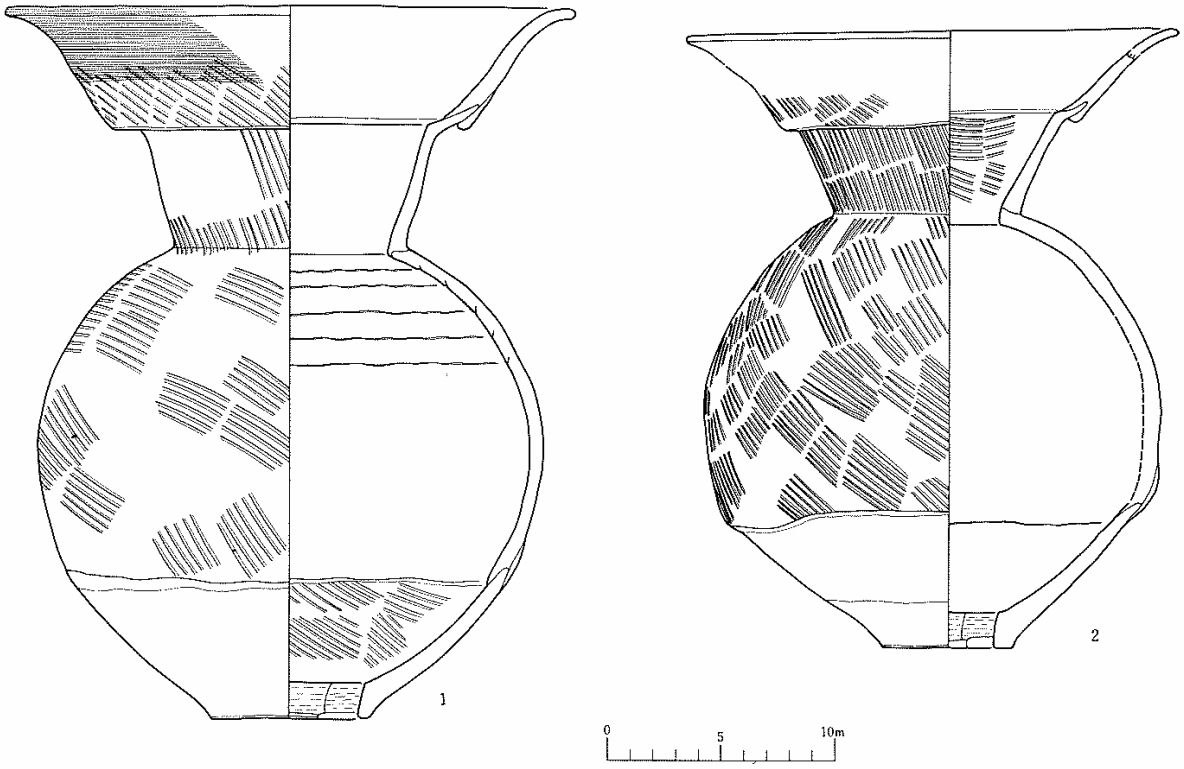
第4段階は口縁部の製作である。第3段階で準備した段状の頸部上端に粘土紐を積み上げる。この場合も継ぎ足し部外面に粘土紐（帯）を貼り付け補強している。この粘土紐貼り付けには丁寧な器面調整が加えられるが、口縁下部を複合状にするという特徴を持ち、補強の他に器形全体のバランスを整え、装飾的効果をも生み出している。

底部穿孔　次に底部孔について検討したい。底部の穿孔はこの四段階の製作工程の中で、どの段階でなされたのであろうか。このことは前提として、円盤状の底部に穿孔したのか、それともはじめから輪状の基底部であったのかという基本的問題を含んでいる。

底部孔を観察すると孔外縁が外傾するもの（第9図・第10図2）と内傾するもの（第10図1）があり、前者が多い。しかし、前者の底部孔を良く観察すると、孔下端部は僅かに内傾しており、第10図2はやや顕著である。これらを製作技法上から見ると、外傾部分は砂粒の移動するヘラケズリ、内傾部分は砂粒の移動しないヘラケズリで、前者は後者によって切られており、先後関係がある。両者のヘラケズリの相違は粘土が未だ軟らかく砂粒の移動が可能な段階、一定程度乾燥して砂粒の移動が困難になった段階のヘラケズリとそれぞれ考えることができ、これは両者の切り合い関係とも一致する。また、輪状をした底部周縁の幅（器壁厚）は孔外縁が外傾するものが4～9㎜、内傾するものが2～3㎜で、1㎝以下である。底部厚はいずれも1.1～1.5㎝である。

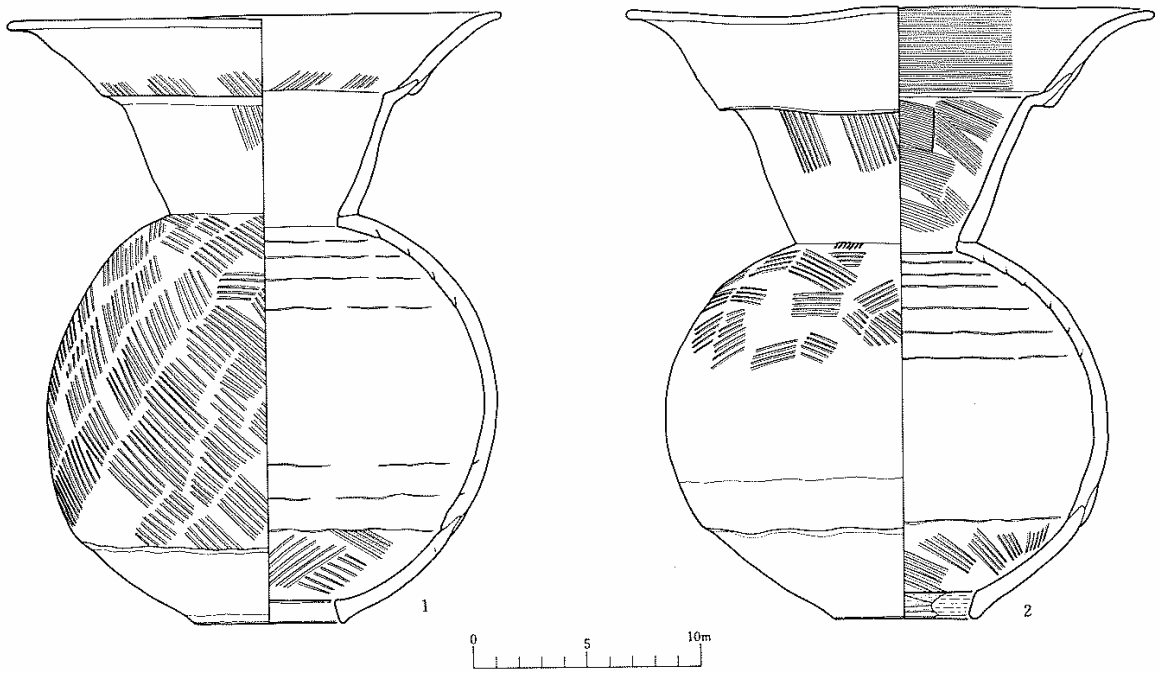
まず、底部孔の大きさ、別な言葉で言えば輪状をした底部周縁の幅・厚さから検討したい。底部孔の大きさは、上述の2種類のヘラケズリが穿孔時のものか、仕上げ時の調整によるものかが問題となる。前者であれば、底部孔の大きさそのものを示す。後者であれば仕上げケズリの前と後では底部孔の大きさに変化のあることが想定される。しかしながら、製作工程で述べたように、各工程間には強度確保の乾燥が必要であるから、仕上げ段階に至った場合、底部の粘土は相当硬化しており、底部孔を大きく変える深いヘラケズリは困難であろう。したがって、後者の場合であっても、底部孔は製作時の大きさを反映していると見ることができる。

底部孔の大きさが製作時と仕上げ時で大きな差がないとすれば、輪状をした底部周縁の幅・厚さは上述のように極めて小さなものとなる(幅2～9㎜・厚さ1.1～1.5㎝)。このような粘土紐の輪を基底部として粘土紐を積み上げ壺を作るのは、その荷重から考えて、技術的に困難な方法と言わなければならない。したがって、円盤状の底部に製作時の一定段階で穿孔したと考えるのがより自然であろう。この場合、砂粒の移動するヘラケズリは粘土が硬化する前のものであるから穿孔時、砂粒の移動しないヘラケズリは粘土の硬化後のものであるから仕上げ時のヘラケズリにあてることができる。これは両者の加えられる位置とも矛盾しない。



番号	種類	地区・層位	特徴	底部外縁幅	器高	口径	胴径	底径	登録
1	土師器壺	南東辺溝・HE－5	有段複合口縁底部穿孔壺 底部孔 外傾	6mm	31.4cm	25.1cm	22.2cm	6.9cm	1周墓 Po. 6
2	土師器壺	南東辺溝・HE－1	有段複合口縁底部穿孔壺 底部孔 外傾	9mm	27cm(推定)	21.6cm(推定)	20.1cm	5.9cm	1周墓 Po. 3

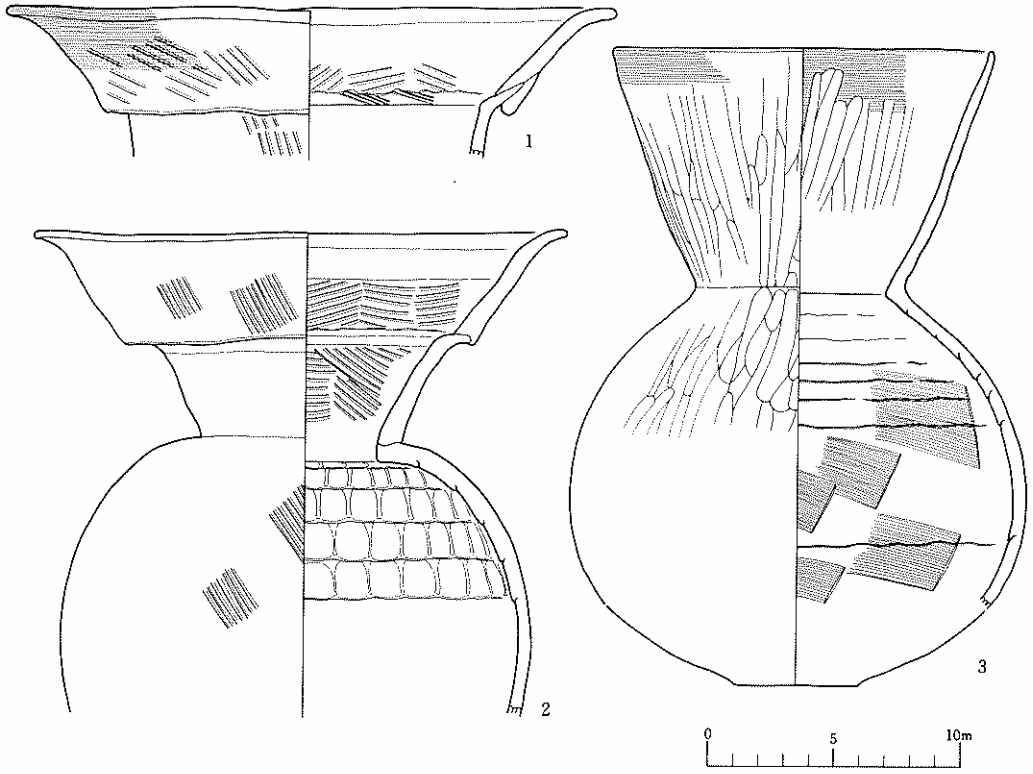
第9図　第1号方形周溝墓出土遺物Ⅰ



番号	種類	地区・層位	特徴	器壁厚	器高	口径	胴径	底径	登録
1	土師器壺	南東辺溝・HE－6	有段複合口縁底部穿孔壺 底部孔 内傾	2～3mm	26.7cm	21.2cm	20.8cm	6.6cm	1周墓 Po. 4
2	土師器壺	南東辺溝・HE－9	有段複合口縁底部穿孔壺 底部孔外傾・下端外傾	4mm	26.8cm	23.2cm	20.4cm	6.3cm	1周墓 Po. 5

第10図　第1号方形周溝墓出土遺物Ⅱ

次に、底部穿孔は製作工呈のどの段階でなされたのであろうか。底部孔には外縁が外傾するものと内傾するものがあり、前者が多いことは既に述べた。底部の粘土を円く切り除く際、孔外縁が直立もしくは外傾するものは、正位の状態で上部からヘラを刺し込むと容易である。すなわち、底部穿孔は第1段階の製作工程に伴って実施するのは容易であるが、第2段階の工程以後になると手を差し入れるための口が狭くなり困難になる。また、底部孔のヘラケズリは胴下部の刷毛目を切っていることから、底部穿孔は第1段階の工程の終了後第2段階の工程までの間になされたと推定される。ただし、孔下端部は内傾しており、砂粒の動かないヘラケズリがみられることから、この部分については全工程終了時の仕上げ時に調整が加えられたとみることができる。



番号	種類	地区・層位	特徴	底部外縁幅	器高	口径	胴径	底径	登録
1	土師器壺	不明	有段複合口縁壺 推定底部穿孔	不明	不明	24.2cm	不明	不明	1周墓 Po. 7
2	土師器壺	南東辺溝・HE－7	有段複合口縁壺 推定底部穿孔	不明	不明	21.1cm	18.5cm	不明	1周墓 Po. 2
3	土師器壺	南東辺溝・HE－9－1?	単純口縁壺 器壁厚3～5mm、薄手で丁寧に仕上げられている。	25.2cm(推定)	15cm	18cm	不明	1周墓 Po. 1

第11図　第１号方形周溝墓出土遺物Ⅲ

底部孔外縁が内傾するものは理解が難しい。可能性としては3つの方法が考えられる。第1は穿孔にやや困難を伴いながら孔外縁が外傾するものと同様第1段階の工程終了後に実施する方法である。この場合、底部周縁の幅が極めて狭いため、壺最下部としての強度の確保が困難となり、壺全体の製作にあまり有利ではない。第2の方法は、壺を倒位の状態にして穿孔する方法である。この場合、底部周縁の幅は狭くても問題はない。しかし、倒位の状態にできるのは第2段階か全工程の終了後にほぼ限られる。全工程の終了後では底部の粘土は乾燥硬化してしまい、仕上げとしての整形(調整)程度のケズリなら可能であろうが穿孔は困難である。第2段階の終了後であれば、相対的に容易であるが、底部の乾燥硬化はかなり進んでおり、決して容易なものとは言えない。第3は第1段階の終了後、直立に近い状態で穿孔し(砂粒の移動するケズリ)、全工程の終了後仕上げケズリ(砂粒の動かないケズリ)によって孔外縁を内傾させる方法である。仕上げの段階で孔下端部を内傾させているものは、他の資料でも一般的に認められることから、仕上げケズリを広汎に使用したものと解釈すれば3つの方法の中で最も妥当なものと考えられる。

なお、製作工程の検討は遺物の観察と同時に製作実験結果を参考としている。

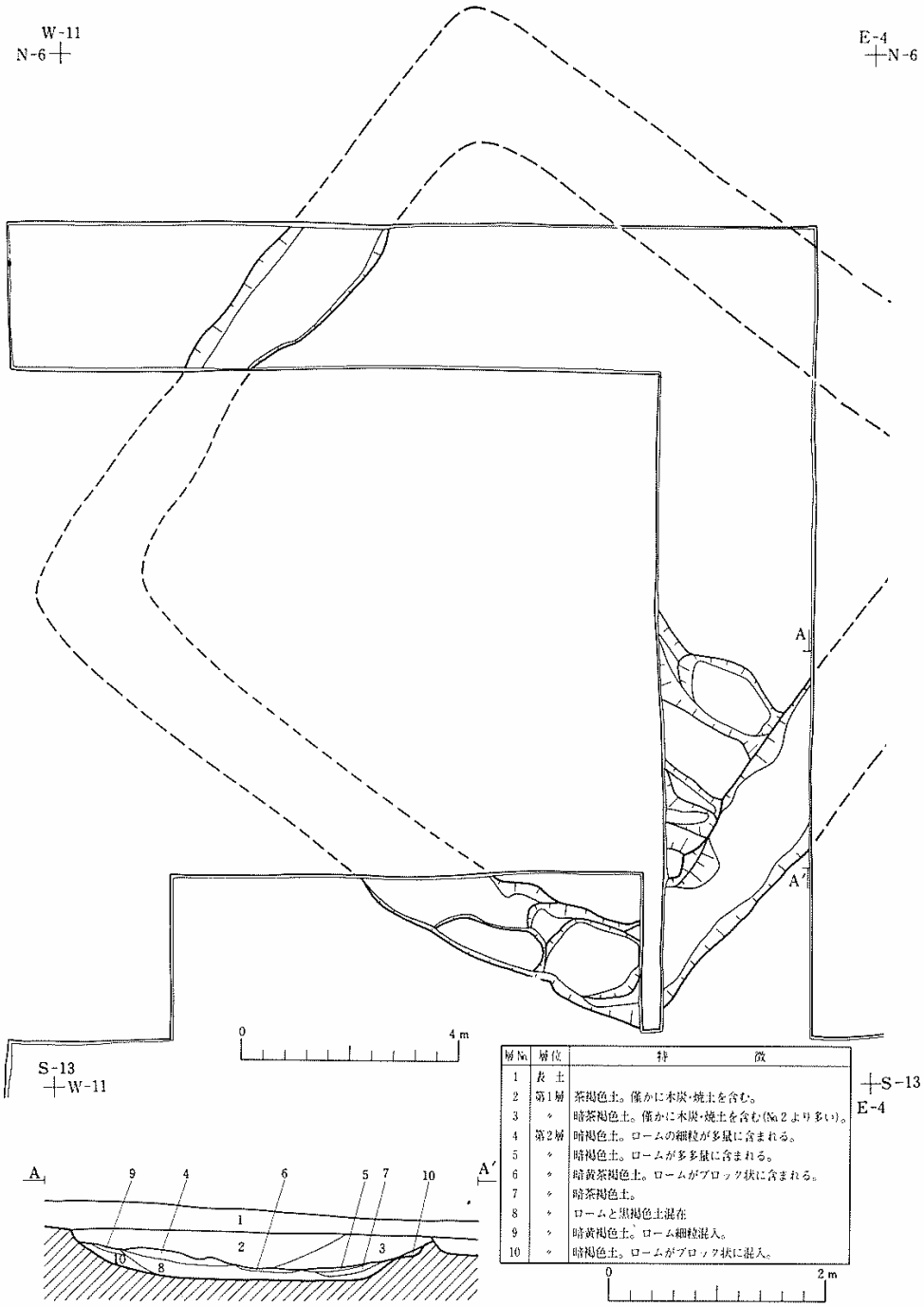
第２号方形周溝墓

〔概要〕　第2号方形周溝墓はＣＳ－41区を中心とした部分に位置しており、第1号方形周溝墓の北側(約1m)に隣接している。したがって、この場所は第1号方形周溝墓同様緩やかな東斜面となっている。

発掘調査では、トレンチ内において、北西辺の一部と南隅の部分を検出したに留まり、全体の調査には至らなかった。検出部分の形状から溝が方形にめぐり、その規模が一辺約14.4mと推定される。方向も北隅と推定される部分と南隅を結んだ線がほぼ真北と一致している(東へ約4°偏っている)。各辺(隅)の溝は検出部分でみると、ほぼ同じ幅(約2m)をもち、深さも共通（約20cm）している。溝の断面は隅丸逆台形で、底面は皿状にやや凹んでいる。溝に囲まれた台状部はほぼ方形で、規模も北東－南西軸・北西－南東軸とも約12mと推定される。

〔堆積土・出土遺物〕　溝内堆積土を南東辺でみると、基本的には2層にわかれる。第1層は木炭や焼土を含む茶褐色・暗茶褐色土、第2層は地山を斑状あるいはブロック状に含む茶褐色・暗褐色土である。これらの層を細別あるいは大別したいずれの立場で見ても、将棋倒し状の堆積状況を示し、底面・壁面に地山土を混じた層が分布している。このことは、溝内の堆積土が自然堆積であること、さらに壁・台状部盛上崩壊土が初期の段階で堆積した可能性を示している。

出土遺物はすべて縄文前期の土器や石器で、方形周溝墓と関連するものはトレンチ内の検出



層No.	層位	特　　徴
1	表　土	
2	第1層	茶褐色土。僅かに木炭・焼土を含む。
3	〃	暗茶褐色土。僅かに木炭・焼土を含む(No.2より多い)。
4	第2層	暗褐色土。ロームの細粒が多量に含まれる。
5	〃	暗褐色土。ロームが多多量に含まれる。
6	〃	暗黄茶褐色土。ロームがブロック状に含まれる。
7	〃	暗茶褐色土。
8	〃	ロームと黒褐色土混在
9	〃	暗黄褐色土。ローム細粒混入。
10	〃	暗褐色土。ロームがブロック状に混入。

第12図　第２号方形周溝墓

部分では発見されなかった。

第4号方形周溝墓

〔位置〕　ＣＧ－52区を中心とした部分に位置する。この場所は北台台地が東側へ傾斜しはじめる部分で、第1号方形周溝墓の北東約50㎡である。

〔平面形〕　四周に溝をめぐらしたもので、明確な陸橋部は認められない。方向は北東－南西軸が真北から約37°東へ偏っており、北隅と南隅を結んだ方向が真北とほぼ一致している(西へ10°偏している)。平面形は隅丸方形で、確認面における規模は北東－南西軸9.0m・北西－南東軸8.7mである。

〔溝の形態〕　各辺の溝はほぼ直線的であるが、隅の部分で外縁が丸みをもつ。溝の断面形は逆台形状で、底面は平坦か僅かに丸みをもっている。各辺の溝は西隅でやや狭くなっているが、幅80～100cm、深さ20～40cmでほぼ共通している。なお、図では東隅の部分が途切れているように見えるが、これは縄文時代前期の住居跡と重複していたものを両者の掘り上げ形態で図化したためである。

〔台状部〕　溝によって囲まれ台状部は方形で、北東－南西軸7.3m・北西－南東軸6.2mである。表土を排除すると地山面で、盛土等は残っていなかったが、台状部中央から約2m北側で隅丸長方形の土坑が検出された。長軸1.6m・幅1.0m・深さ40cmの規模をもち、長軸方向は真北とほぼ直交する(3°東へ偏している)。土坑内堆積土は部分的に相違は見られるものの全体として地山土(ローム)を多量に混入する褐色土で、自然堆積というよりは人為的に埋められた可能性が高い。

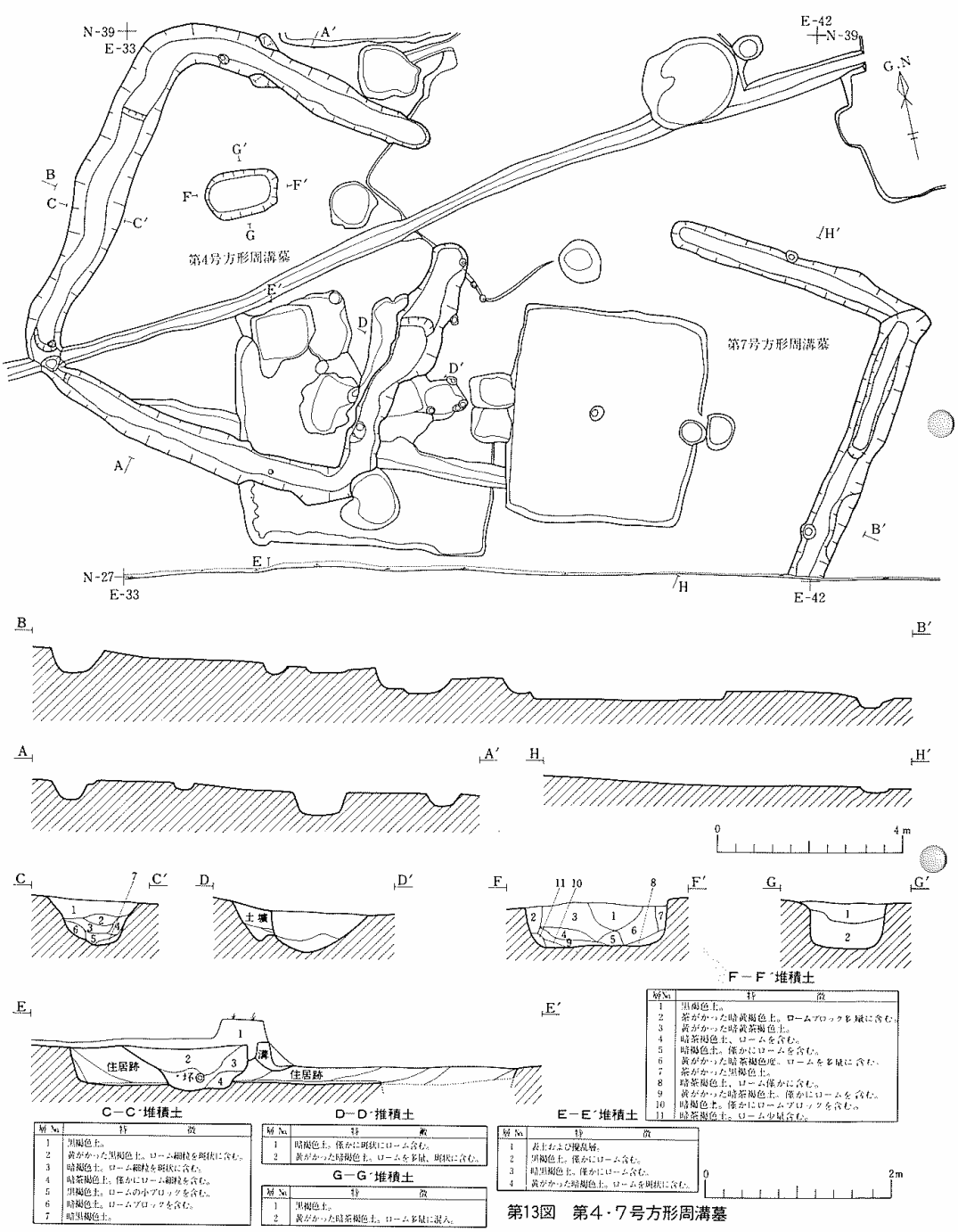
〔溝内堆積土〕　溝内堆積土は一様ではないが暗褐色土や黒褐色土層が将棋倒し状に堆積している。また、層により地山土(ローム)をブロック状あるいは斑状に含み、この傾向は壁に近い部分程著しい。

〔遺物〕　方形周溝墓に関連する遺物としては大形壺と坏がそれぞれ1点ずつ出土している。

大形壺（第17図3）：この壺は北東辺の溝のほぼ中央から斜位の状態で発見された。口縁部を欠いており残存高は約25.5cmである。胴高は22cm・頸径10cm・胴径27.5cm・底径8cmである。底部は僅かに凹底で、胴部は胴中央部が強く膨らむ楕円形をしている。胴部中央には焼成後の穿孔がある。孔の直径は約2cmで、外側から内側に向って丹念にあけられている。頸部は外傾して立ち上がる。

外面は磨滅しているが、部分的にヘラミガキが観察される。内面は頸部・胴部ともヘラナデが加えられ、粘土の積み上げ痕をほとんど残さない。したがって、製作時にあっては内外面とも丁寧に仕上げられたものと推定される。

坏(第17図1)：この坏は南隅に近い南西辺溝から出土している（第13図）。層位的には、溝



層No.	特徴
1	黒褐色土。
2	黄がかった黒褐色土。ローム細粒を斑状に含む。
3	暗褐色土。ローム細粒を斑状に含む。
4	暗茶褐色土。僅かにローム細粒を含む。
5	黒褐色土。ロームの小ブロックを含む。
6	暗褐色土。ロームブロックを含む。
7	暗黒褐色土。

層No.	特徴
1	暗褐色土。僅かに斑状にローム含む。
2	黄がかった暗褐色土。ロームを多量、斑状に含む。

層No.	特徴
1	黒褐色土。
2	黄がかった暗茶褐色土。ロームを多量に混ん。

層No.	特徴
1	黒褐色土。
2	茶がかった暗黄褐色土。ロームブロックを局に含む。
3	黄がかった暗黄茶褐色土。
4	暗茶褐色土。ロームを含む。
5	暗褐色土。僅かにロームを含む。
6	黄がかった暗茶褐色度。ロームを多量に含む。
7	茶がかった黒褐色土。
8	暗茶褐色土。ローム僅かに含む。
9	黄がかった暗茶褐色土。僅かにロームを含む。
10	暗褐色土。僅かにロームブロックを含む。
11	暗茶褐色土。ローム少量含む。

層No.	特徴
1	表土および攪乱層。
2	黒褐色土。僅かにローム含む。
3	暗黒褐色土。僅かにローム含む。
4	黄がかった暗褐色土。ロームを斑状に含む。

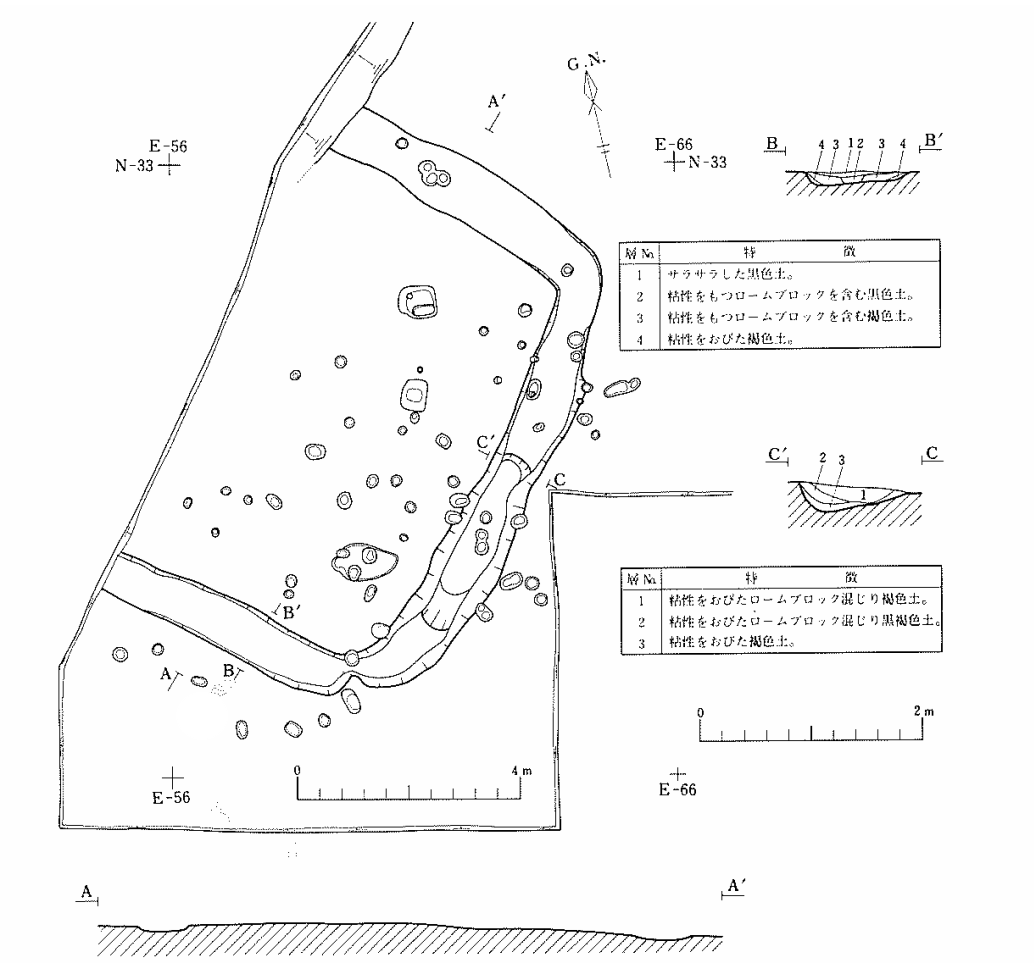
第13図　第4・7号方形周溝墓

底面ではなくNo.3(Ｅ－Ｅ'断面)中から出土しており、溝が埋まる過程で台状部から転落したものと推定される。

法量は器高9.2cm・口径11.3cm・胴径10.3cm・底径2.1cmである。底部は丸く凹んでいる。体部は内弯し、頸部で締まり、口縁部は内弯気味に外傾する。頸部は器高の約2/3の所に位置している。器面調整は磨滅のため明確ではないが、全面に丁寧に加えられている。

第5号方形周溝墓

〔位置〕　ＣＩ－61区を中心とした部分に位置する。この場所は北台台地が東へ傾斜し、鴻ノ巣台地へ延びようとする尾根状部分で、南・北側から沢が入り込んでいる。東側には第6号方形



第14図　第５号方形周溝墓

周溝墓、西側には第7号方形周溝墓がある。

〔概要〕　第5号方形周溝墓は東側半分を検出した。削平が顕著で、北側は溝の底面近くまで及んでいる。検出部分から、平面形は隅丸方形と推定され、確認面における規模は北東－南西軸9.8m、北西－南東軸6.2＋αmである。方向は北東－南西軸が真北から約42°東へ偏していることから、北隅と南隅を結んだ線がほぼ真北と一致するものと推定される。各辺の溝はほぼ直線的であるが、中央部が僅かに膨らんでいる。また、隅の部分は東隅が丸くなり、南隅は幅がせばまり、ややくびれている。このように、南隅は図で見ると陸橋状に近いが、底面の高さに差はなく、削平のために生じた形状である。周溝の断面形は逆台形状で、底面は平坦か僅かに丸味をもっている。確認面における周溝幅は90～100cm、深さは10cm程度の部分が多いが、南東辺中央部で約30cmとやや深くなっている。台状部も方形と推定され、規模は北東－南西軸7.8m、北西－南東軸5.3＋αmである。台状部からはピット群が検出されたが、このピット群は周溝外から連続するもので、直接方形周溝墓との関連は認められない。また、土坑や盛土も検出されなかった。

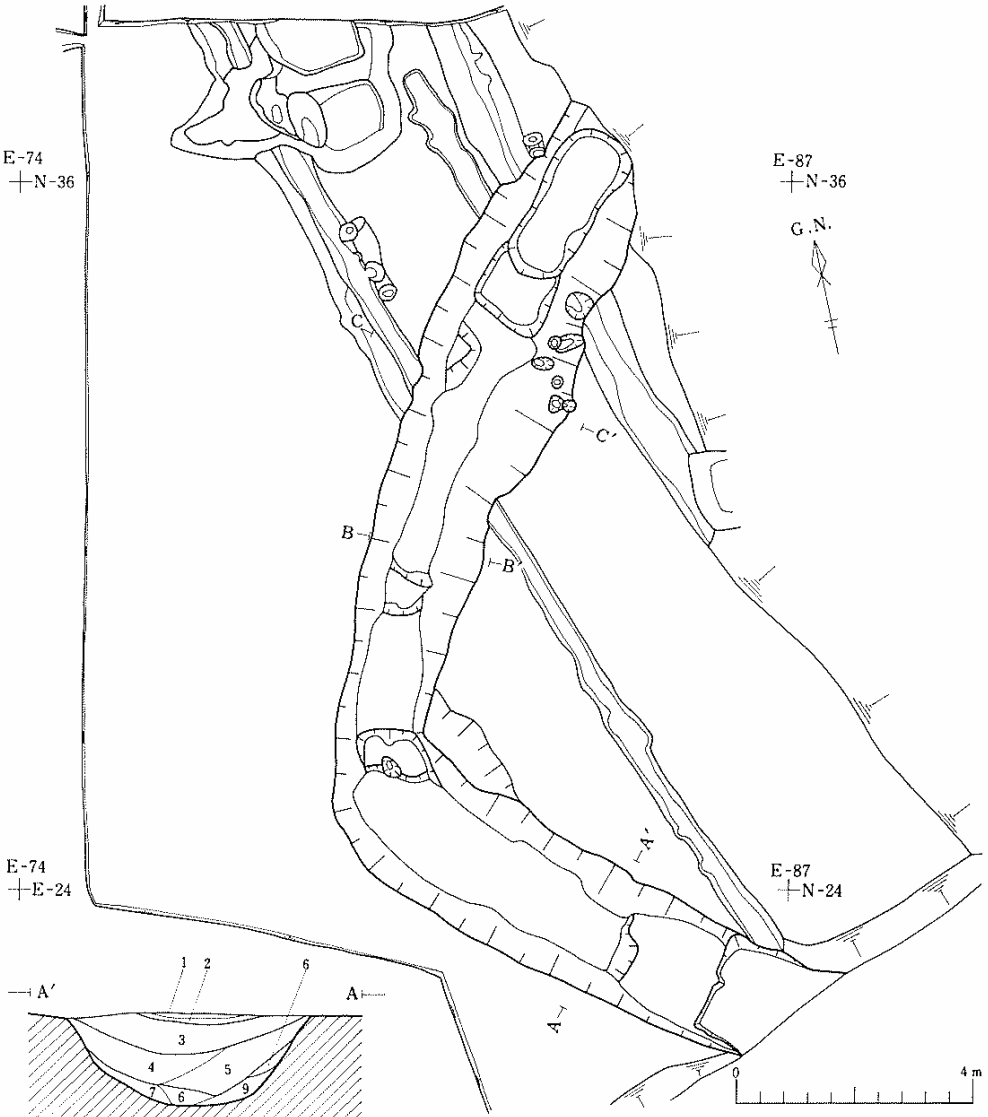
〔堆積土・遺物〕　溝内の堆積土は数層に細分されるが、黒褐色土や褐色土で、地山土（ローム）のブロックを含むのが特徴である。また、堆積状況は将棋倒し状で、自然堆積と推定される。方形周溝墓と関連する遺物は出土しなかった。

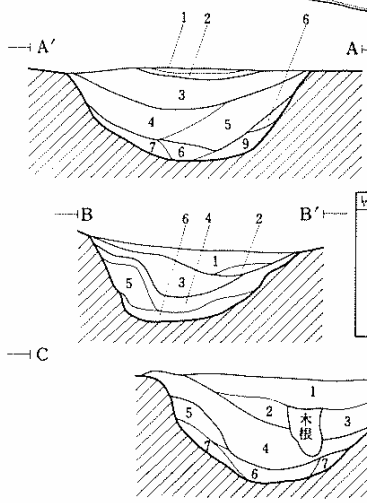
第6号方形周溝墓

〔位置〕　ＣＩ－71区を中心とした部分に立地している。この場所は北台台地から鴻ノ巣台地へ延びる尾根状部分で、第5号方形周溝墓の東側にあたる。

〔概要〕　第6号方形周溝墓は東側が削平されており、検出できたのは西側部分(西辺・南辺西側)だけである。したがって、平面形は方形と推定されるものの、隅が確認できるのは南西部分1ヶ所である。このため、規模についても南北軸14.0m以上、東西軸8m以上ということが判明するにすぎない。ただ、地形的に見て、南東側に谷が入ることから、その規模(東西軸)は20mには及ばないと推定される。西辺・南辺から推定される南北軸の方向は真北から38°東へ偏っている。

周溝は内・外縁ともほぼ直線的であるが、中央部が僅かにふくらみをもっている。また隅の部分も外縁側では丸味をもっている。周溝の断面形は逆台形状で、底面は丸味をもつ部分もある。幅は南辺が2～2.2mとほぼ一定しているが、西辺は南端が1.5m、北側が3mと広くなっている。西辺で最も広くなる部分は第1号方形周溝墓の例からすると辺の中央と推定される。周溝の深さは南辺が70～90cmの部分が多いが、東側の一部（幅110cm）は約30cmと浅くなっている。また、西辺は中央部と推定される最も幅の広い部分で90～100cmであるが、幅の狭くなる南側に向かうに従って浅くなり、30cm前後となる。この南辺と西辺南端にみられる溝の浅い部分は第1号方





A—A′断面

層No.	層位	特徴
1	第1層	黄褐色土。ローム微量含む。
2	〃	灰褐色微砂質砂層。二次堆積か？
3	第2層	明褐色土。微砂層。
4	第3層	暗褐色土。ロームブロックを含む。微砂層。
5	〃	暗褐色微砂層。
6	第4層	濁黄色土。ロームを含み硬い。
7	〃	暗黄色土。ロームを大量に含む。

B—B′断面

層No.	層位	特徴
1	第1層	黄褐色土。微砂層。ローム・石英を僅かに含む。
2	〃	黄褐色土。微砂層。ロームを少量斑状に含む。
3	第2層	暗褐色土。微砂層。木炭・焼土・石英を含む。
4	第3層	濁黄色土。ロームを含む。
5	〃	黄褐色土。ロームブロックが混入。
6	〃	暗黄色土。ロームを多量に含む。

C—C′断面

層No.	層位	特徴
1	第1層	黄褐色土。微砂層。ローム・石英・焼土僅かに含む。
2	〃	明褐色土。微砂層。石英・焼土を僅かに含む。
3	〃	黄褐色土。砂質微砂層。ロームを含む。
4	第2層	暗褐色土。ロームブロック・焼土・石英・木炭を含む。
5	第3層	黄褐色土。微砂質粘土。細かいロームを多量に含む。
6	〃	濁黄色土。ローム含む。
7	〃	暗黄色土。ロームを大量に含む。

0 2 m

第15図　第6号方形周溝墓

形周溝墓の陸橋部とも似ているが、部分的な凹凸なのか、周溝墓の本来的な形に基くものなのか、検出部分が限れらているためはっきりさせることができない。溝内の堆積土は大きく3～4層にわかれ、将棋倒し状の堆積状況を示している。層の特徴は各部分によって多少の相違はあるが、大まかに上部がやや不安定な黄褐色土、中部が暗褐色土、下部が地山土（ロームブロック）を多量に含む黄褐色土となっている。

台状部も検出部分は限られているが方形と推定される。規模が確認できるのは、南北軸10.0m・東西軸8.5mまでである。台状部では盛土・土坑等は検出できなかった。

〔遺物〕　西辺溝から小鉢に近い小形の壺が1点出土している（第17図2）。この壺は器高5.6cm・口径7.4cm・胴径8.4cm・底径4.3cmで、最大径は胴部中央のやや上にある。底部は平底で、胴部は強く内弯し、胴中央から肩部に張りがある。頸部でくびれ、口縁部は外傾するが短い。器面調整は外面と口縁部内面がナデ・ヨコナデ、胴部内面がヘラナデである。頸部内面には口縁部を作るための粘土紐積み上げ痕が明瞭に残っている。

第7号方形周溝墓

〔位置〕　ＣＨ－55区を中心とした部分に位置し、第4号方形周溝墓の東側に隣接している。

〔概要〕　周溝は調査区外の南側にのびているため、全容は判明しなかった。調査区内における周溝は「└」状をしており、この二辺が第4号方形周溝墓の北東および東西辺の方向と一致している。北西辺の溝は検出されなかったが、第4号方形周溝墓の東南辺を共有している可能性もある。その場合西隅は完全な陸橋となり、両者の規模・形態(陸橋の有無)は相違することになる。このため、第7号方形周溝墓については正確な規模は不明である。仮に第4号方形周溝墓の溝を共有していると仮定すれば、北西－南東軸は11.4mの規模となる。

〔溝・台状部・遺物〕　検出された2辺の溝は直線的で、ほぼ直角に折れ曲る。台状部も方形と考えられる。溝の断面形は逆台形状をしており、幅60～80cmで70cm程度の部分が多い。深さは15～20cmでほぼ一定している。台状部からは盛土・土坑等は検出されなかった。また方形周溝墓に関連する遺物は出土していない。

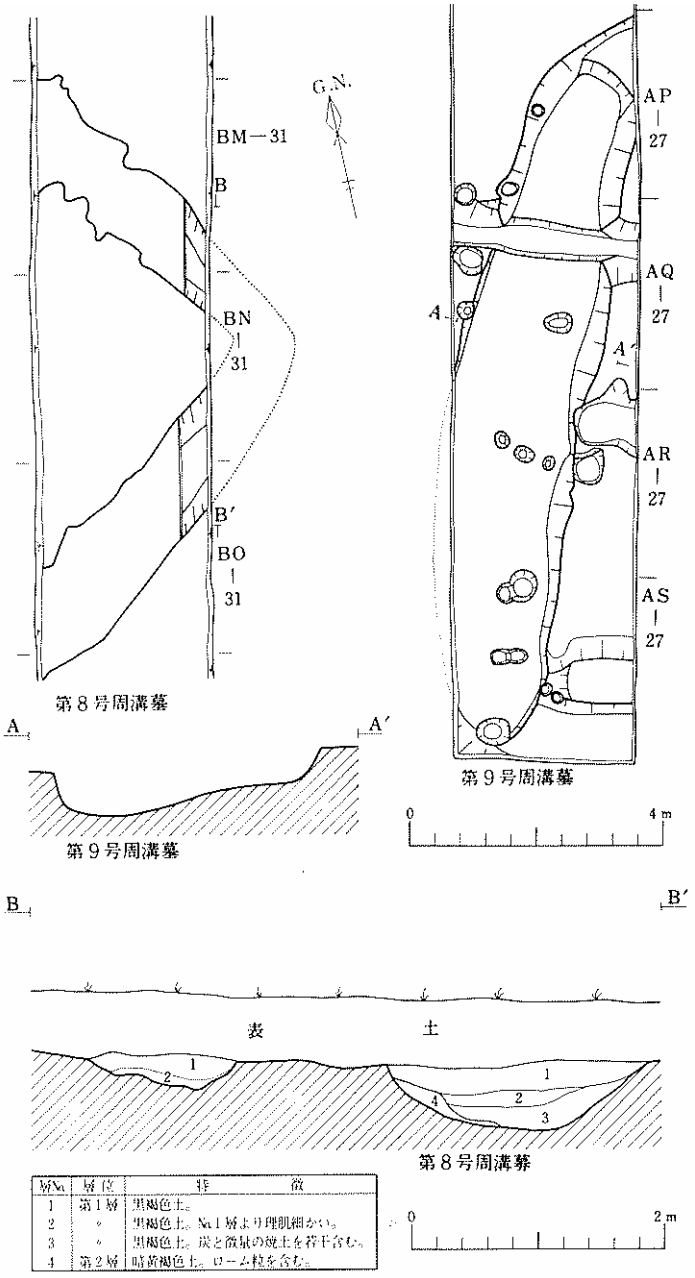
第8号方形周溝墓

〔位置〕　ＢＭ～Ｐ－31区において、幅3mの南北トレンチで検出された。この場所は北台台地北側の平坦面中央である。

〔概要〕　トレンチ内で検出されたのは東隅に近い北東辺と南東辺の東側と推定される部分である。両辺とも周溝の内縁側は直線的で、外縁側は中央部（推定）に向かうに従ってやや膨らむ。周溝の方向は北東辺が真北から約40°西へ偏っている。周溝の幅は1.0～1.5mである。規模は

北東－南北軸7.0m、北西南東軸6.5m以上である。

トレンチの東壁に接する部分の周溝を幅50cm程掘り下げた所、周溝断面は逆台形状で、深さは北東辺側が50cm、南東辺側が30cm程であった。周溝内は2～4枚の層（黒褐色および暗黄褐色土）が堆積している。台状部側の壁際はローム粒を含む暗黄褐色土である。遺物は発見されなかった。



層No.	層位	特徴
1	第１層	黒褐色土。
2	〃	黒褐色土。No.1層より理肌細かい。
3	〃	黒褐色土。炭と微量の焼土を若干含む。
4	第２層	暗黄褐色土。ローム粒を含む。

第16図　第８・９号方形周溝墓

第9号方形周溝墓

〔位置〕　AO～S－27区において幅3mの南北トレンチで検出された。この場所は北台台地の北端近くで、平坦面の幅がせばまっていく所である。

〔概要〕　トレンチ内で検出されたのは西辺と北西隅、南西隅の部分である。西辺周溝は内縁側が直線的で、外縁側が中央部で弧状に膨らんでいる。周溝方向は真北から約20°東へ偏っている。周溝の断面は底面がやや丸味をもった逆台形状で、幅は1.8～2.1m、深さ20～50cmである。幅・深さとも辺の中央部が大きく、隅に向かうに従って狭くなる。したがって、第1号方形周溝墓程明確ではないが、隅の部分は陸橋状を示すものと考えられる。規模は西辺の長さが12mであるから、周溝中央部の膨らみを考慮すると、南北軸12～13m程度と推定される。

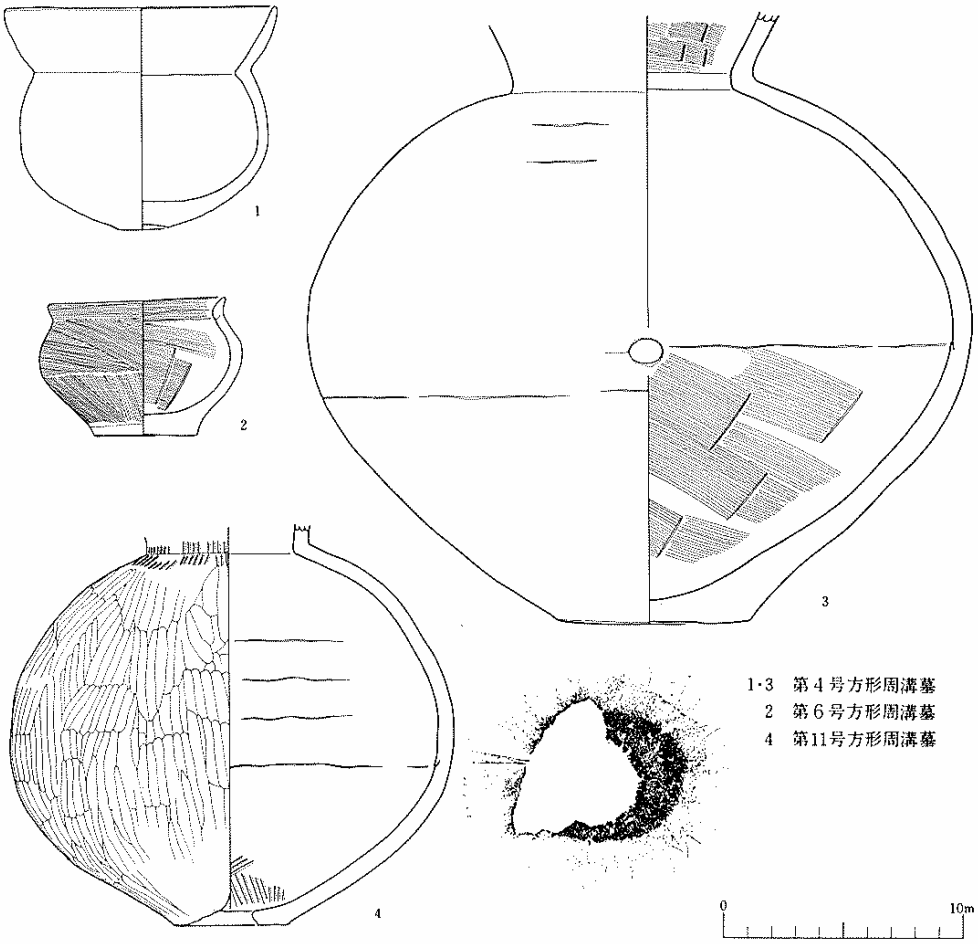
遺物は発見されなかった。

第10・11号方形周溝墓

第10・11号方形周溝墓は北台台地が南北両側に谷の入った部分を経て鴻ノ巣台地に至り、鴻ノ巣台地が東側へ広がりはじめる部分で、トレンチ調査によって確認された。第10号方形周溝墓はＡＳ－56区、第11号方形周溝墓はＢＣ－55区を中心とした部分に位置し、両者は約1mしか離れていず、極めて近接し、方向もほぼ共通している。ただ、両方形周溝墓は遺構配置図に記入したものの1/20の実測図を作成しなかったため、方向・規模等はやや正確さを欠く。方向は両者とも南北軸が真北から僅かに東へ偏っている(第6図)。

第10号方形周溝墓は東辺から南辺に至る部分と北西隅の一部が検出された。溝の幅は2～3mで、規模は南北軸・東西軸とも約20mと推定される。台状部南北軸・東西軸が13～14m程度と推定される。

第11号方形周溝墓は南辺から西辺に至る部分が検出された。溝の幅は約2mである。北辺と



第17図　第４・６・９・11号方形周溝墓出土遺物

東辺は検出されなかったが、トレンチ調査における遺構確認状況から(北側6mのトレンチにはない)、第10号方形周溝墓より小規模なものと推定される。

遺物としては遺構確認時に、第11号方形周溝基から土師器壺が1点出土した(第17図4)。この壺は口縁部と頸部の大部分を欠いている。残存器高は16.5cm、頸径6.7cm・胴径18.4cm・底径4.8cmである。底部は平底で、焼成後に穿孔されている。胴部は最大径が胴中央下部にあり、全体的にやや胴中央下部の膨らむ楕円形となる。頸部の残存は少ないが外傾しながら立ちあがる。外面の器面調整は頸部から肩上部に僅かに刷毛目痕が残るが、全体に丁寧なヘラミガキが加えられている。内面は胴下・底部に刷毛目が加えられている。胴中・上部には粘土紐積み上げ痕を僅かに残しているが、積み上げ時の指頭痕や凹凸は取り除かれている。

底部の穿孔は焼成後になされている。孔は底部中央から外縁の方に片寄って円形にあけられ、その外側が胴下端部まで大きく割れている(第17図4拓本)。この穿孔は敲打によるものと推定されるが、孔の外縁が内傾し円形部分はさらに磨り減らされて、幾分凹凸はあるものの滑らかにされている。この磨り減らしは円形孔外側の大きな割れ口まで一部のびており、大きな割れ口そのものも円孔穿孔時のものと考えられる。

ＩＫ第25号住居跡

〔位置〕　ＤＩ－46区付近で、第1号方形周溝墓の東約8mの所に位置している。

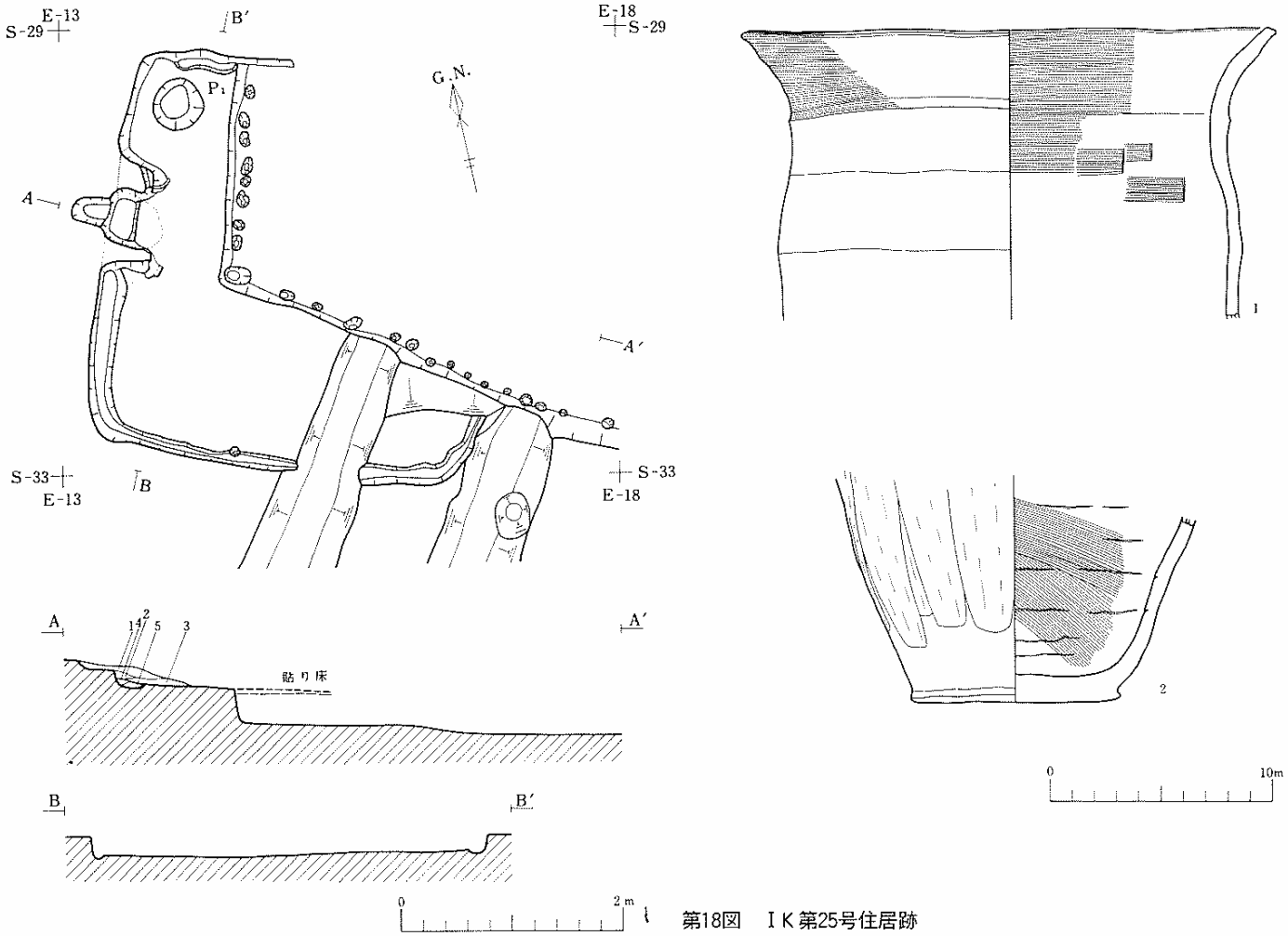
〔平面形・重複〕　この第25号住居跡は縄文時代前期の第9号住居跡と重複し、その堆積土を切って構築している。住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸・東西軸とも3.6mである。なお、平面図は第9・25号住居跡の両者を完掘した後の最終図面のため、重複部分については図化していない。

〔壁〕　検出された壁は第9号住居跡と重複している部分ではその堆積土、その他の部分では地山となっている。残存壁高は東壁約6cm・南壁6～17cm・西壁約20cm・北壁約20cmである。

〔床面・柱穴〕　床面は多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。第9号住居跡と重複している部分では、その堆積土上に黄褐色土の張り床が検出された。この張り床は不均質で斑状を呈し、壁付近ではみられない。

〔周溝〕　カマドより南側では壁直下に連続する周溝がめぐっている。カマドの北側では部分的で、第9号住居跡と重複している部分では明確でなかった。周溝の断面形は「し」状で、幅15～20cm・深さ3～5cmである。

〔カマド〕　住居西壁のほぼ中央にカマドが構築されている。全長90cmで、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は主軸60cm・幅100cmである。底面は焼けているが、奥壁に近い部分ではこの焼面が焼土ブロック状をしており、さらに掘り下げると幅約20cm・深さ5cmの溝状になる。この



第18図　ＩＫ第25号住居跡

溝はカマド本来のものとは考えにくく、その大きさ形状などから壁直下にめぐる周溝と共通し、北壁南側の周溝とも連続性がみられる。第25号住居跡のカマドは立ち割ってその構築方法を直接確かめてはいないが、周溝を掘った後、燃焼部を粘土の積みあげで構築している可能性がある。また、焚き口にあたる側壁端部をオサエるかのように同一個体の土師器甕口縁・胴部大破片2点がみられる(第18図)。しかし、この甕は燃焼部底面からやや浮いた状態で出土した土師器甕胴下・底部(写真図版5・第18図2)と同一個体とみられることから、施設の一部というよりは偶然の所産と考えられる。煙道部は燃焼部底面より一段高く(約15㎝)、住居外にのびている。残っているのは底部付近で、その残存形状は浅い溝状をなし、長さ35㎝・幅20㎝である。

カマド内堆積上は5層にわかれる。第1層は黄褐色土・焼土粒を混じる褐色土で煙道全体と燃焼部の上部に堆積している。第2層は黄褐色土・焼土の硬いブロックを含む暗褐色土で燃焼部の奥壁部分に堆積している。第3層は黄褐色土・焼土粒の点在する明褐色土である。これら第1〜3層はカマドの崩壊に伴い堆積したものと考えられる。第4層は焼上の点在する黒褐色土、第5層は黄褐色土の点在する褐色土で、燃焼部奥壁側底面下の溝(周溝と推定)に埋っている土である。

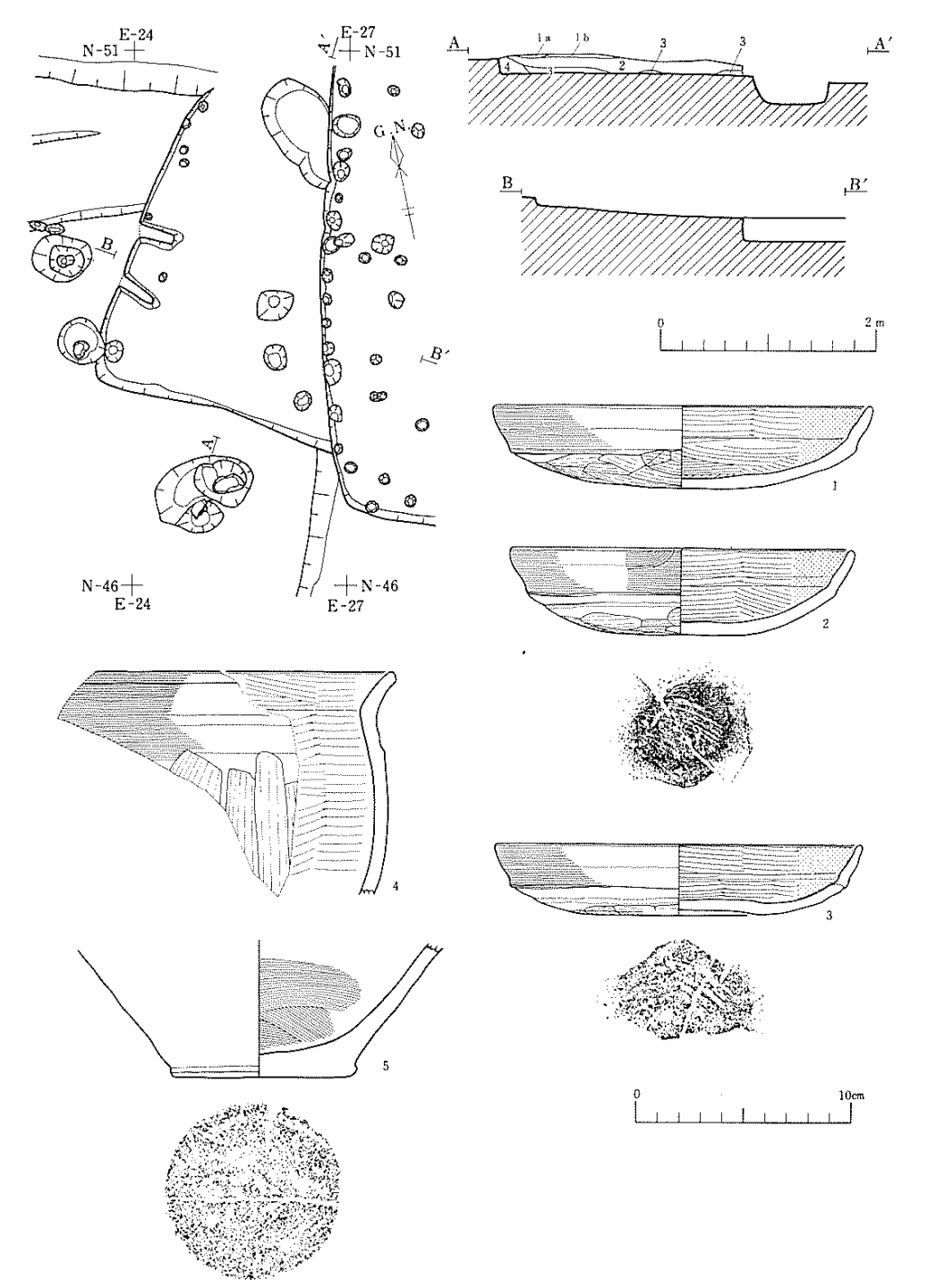
〔その他の施設〕　カマドの右脇に貯蔵穴状ピット(P_1)がある。直径約50㎝の円形で、深さ約15㎝である。ピット内にはブロック状の硬い焼土・木炭を含む土が詰っていた。この他、柱穴等の施設は検出されなかった。

〔堆積土・遺物〕　住居内堆積土は断面図を紛失してしまったが、次のように3層確認されている。第1層は茶黄褐色土で、地山の黄褐色土ブロックを多く混じえている。第2層は茶褐色土である。第3層は床面直上に約1㎝程度の厚さで堆積している黒茶褐色土で、粘性が強く部分的に炭を多く混じえている。第1・2層は住居廃絶後に堆積した層であるが、第3層は生活時に形成されたものと推定される。

遺物はカマドから前述の土師器甕、第3層上面から土師器坏・甕が1点ずつ出土している。しかし、後者の坏と甕は行方不明になってしまった。

第18図1は土師器甕の口縁部から胴上部である。口縁部が外反する長胴の甕で、頸部に段に近い稜がある。口縁端部上面は沈線状に凹んでいる。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向の軽いケズリである。内面は胴部がヘラナデ、肩および口縁部がヨコナデである。

第18図2は同一個体の胴下・底部である。底部外縁が指でつまんだように横に張り出している。底部に木葉痕があり、胴下部外面は縦方向の軽いケズリである。内面は底部がナデツケ、胴部はナデであるが、成形時の粘土紐積み上げ痕を残している。



第19図　ＩＫ第43号住居跡

ＩＫ第43号住居跡

〔位置〕　ＣＡ・Ｂ－50区付近で、第44号住居跡と隣接しその北側に位置している。北台台地が東側に緩やかに傾斜しはじめる部分である。

〔平面形・重複〕　第43号住居跡は縄文時代前期の第63号住居跡と重複し、その堆積土を切って構築している。ただ、両住居跡を掘り上げてから平面図を作成したため、第43号住居跡の西側は不明となっている。また、北側は削平されている。このため、住居平面形は方形と推定されるが、規模については南北軸2.85m以上、東西軸2.3m以上とせざるを得ない。

〔壁〕　検出された壁は第63号住居跡と重複している部分ではその堆積土、その他の部分では地山となっている。残存壁高は南壁が11～12cm、西壁が7～9cmである。

〔床面・柱穴〕　住居床面はほぼ平坦で、僅かに東側に傾斜している。ピットは合計11個検出されたが、いずれも掘り方と柱痕跡の識別ができず、配置に規則性もみられないことから柱穴とみなし難い。

〔カマド〕　住居西壁の中央から南寄りと推定される部分で、カマドが検出された。検出されたカマドは燃焼部で、煙道部については不明である。あるいは削平されたのかも知れない。燃焼部側壁は粘土積み上げによって構築され、規模は奥行40cm・幅75cmである。

〔堆積土〕　住居内堆積土は4層にわかれる。第1層は堆積土上部で薄く狭い分布を示し、第2層が厚く住居全体に分布している。第3層は床面上に堆積しているが、部分的に途切れている。第4層はカマド内堆積土である。ただ、これらの層相については、断面図の注記を紛失したため不明となってしまった。

〔遺物〕　遺物は第1層から土師器甕1点（4）、第3層(床面直上と推定される)から土師器坏3点(1～3)、甕1点(5)が出土している。

第19図4は鉢状の甕で、口縁部が外反している。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のヘラケズリである。内面調整は口縁に平行なヘラミガキで、黒色処理されている。

第19図1～3は外面に段、内面に稜をもつ坏である。1は丸底であるが2・3は中央が平底になっている。外面の段はほぼ中央にある。口縁部はやや屈曲しながら外傾気味に内弯している。大きさは口径16～17.6cm（1．17.6cm　2．16cm　3．17.2cm）、器高3.4～4cm(1．3.8cm　2．4cm　3．3.4cm)とほぼ共通している。いずれも成形の際の粘土紐積み上げ痕を残し、外面は口縁部がヨコナデ、胴底部がヘラケズリで仕上げられている。内面には口縁に平行なヘラミガキが加えられ黒色処理が施こされている。注意しなければならないのは、2・3で底部に静止糸切りによる切り離し痕がみられる。この静止糸切り痕はロクロを使用した土師器や須恵器にみられるのと同様なものである。では、この坏はロクロを使用して製作されたものであろうか。しかし、既に述べたようにこれらの坏は粘土紐積み上げ痕を残し、器面調整は手

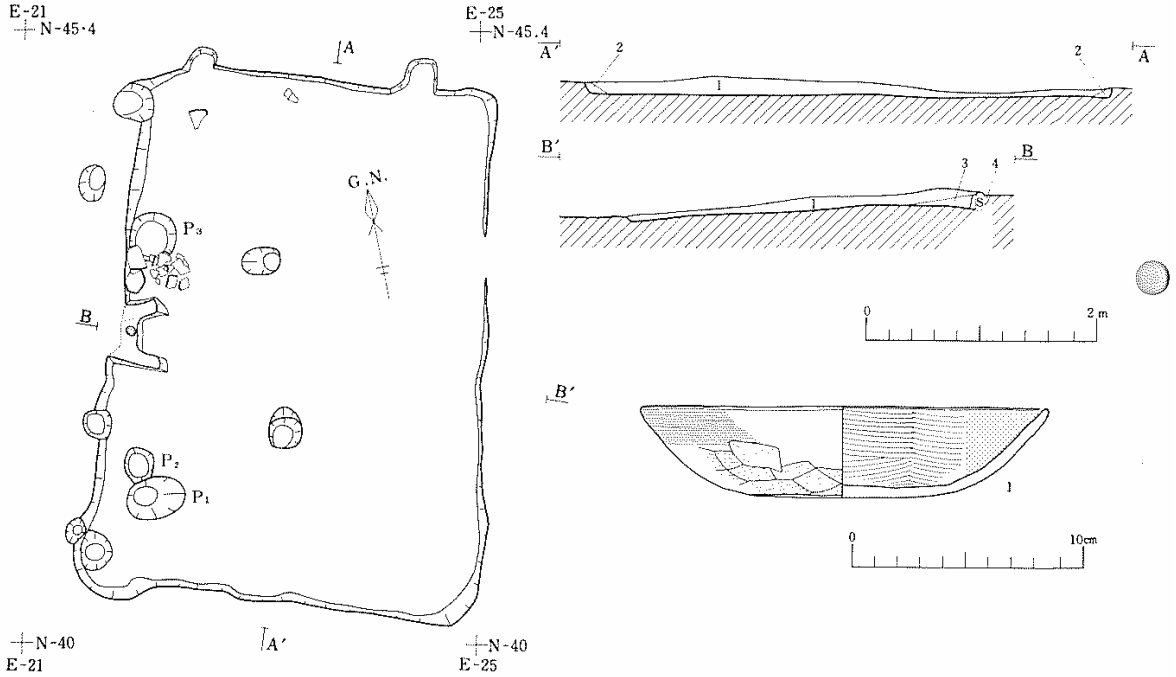
持ちのヘラケズリとヨコナデである。このヨコナデはロクロ土師器や須恵器に一般的にみられるロクロナデとは明らかに相違している。したがって、これらの坏の静止糸切り痕は、台の上で成形し成形後台から静止状態で糸によって切り離したことを示してはいるものの、その台がロクロであると性急に判断することはできない。

もちろん、台の使用ということは、木の葉を利用しその上で成形することと較べれば大きな相違である。また、静止糸切りがロクロ土師器や須恵器にみられるものと共通することから、この台が回転運動を伴うものである可能性は否めない。そして、実際の器面にみられる調整がヨコナデであることを考慮するとその回転力はロクロ土師器や須恵器の製作に用いられるロクロに比し回転力の弱いものであることがうかがえる。したがって、現時点ではロクロ土師器や須恵器を製作するロクロは相違するであろう回転台の存在を想定しておきたい。

第19図5は甕の胴下・底部である。底部には木葉痕があり、外縁が僅かに張り出している。器面調整は外面が粗いヘラミガキ、内面がナデである。底径は8.7㎝である。

ＩK44号住居跡

〔位置〕　C・E－49・50区付近で、第43号住居跡の南西2m、第62号住居跡の西約4mの所に位置している。



第20図　ＩＫ第44号住居跡

〔平面形・重複〕　他の遺構との重複はない。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸4.5m、東西軸3.2mである。

〔壁〕　検出された壁は地山で、床面から緩やかに立ち上がる。壁の残存高は東壁が約4cm、南壁が5～8cm、西壁が約15cm、北壁が約7cmで、西壁の保存が最も良い。

〔床面・柱穴〕　住居床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面(地山)と一致している。床面上で6個のピットを検出したが、いずれも掘り方と柱痕跡の識別ができず、配置に規則性もみられないことから、柱穴とは認め難い。

〔カマド〕　住居西壁中央で、カマドが検出された。検出されたカマドは燃焼部で、奥行30cm・幅60cmである。燃焼部側壁は粘土積み上げによって構築されている。燃焼部底面は焼けている。カマド燃焼部側壁の右側床面から土師器甕が転倒し壊れた状態で出土した。カマド内堆積土は、パミス・焼土を多く含む黄褐色土である。これがカマドに関する調査時の所見である。ところが、今回平面図と写真を検討したところ、カマド燃焼部奥壁が住居壁の約20cm手前にあること、またその間には縦長の楕円礫がみられることに気付いた。さらに、写真では楕円礫の周りの土と、燃焼部側壁延長上の土に相違がみられる。楕円礫は位置などの点でカマド支脚の一般的なあり方と共通することから、周囲の土はカマド内堆積土で、カマド燃焼部奥壁は住居壁とほぼ一致する部分までおよぶものと推定される。この推定線は平面図・断面図に破線で示しておいた。なお、この場合のカマド燃焼部奥行は約50cmとなる。

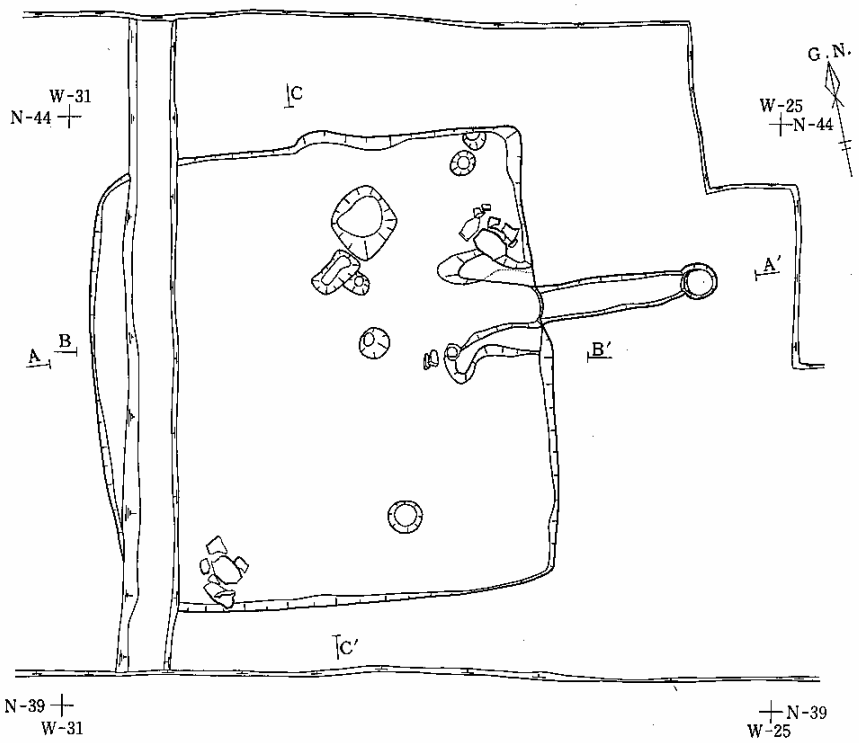
〔その他の施設〕　カマド右側約30cmの所から円形のピット(P_3)が検出された。規模は直径40cm・深さ9cmで、地山土・焼土・炭のブロックを多量に含む暗褐色土が埋まっていた。なお、このピットからは第20図の土師器坏が出土している。

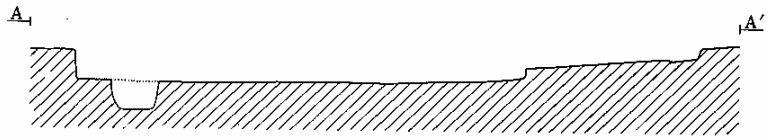
〔堆積土・遺物〕　住居内堆積土は2層にわかれる。第1層は硬い茶褐色粘質土で、焼土・木炭を含み住居全体に分布している。第2層は黄色土ブロックの混じった茶褐色土で壁際にだけ堆積している。

遺物は住居内堆積土・床面・P_2・P_3から出土している。しかし、床面出土遺物は行方不明になってしまった。

第20図1はP_3出土の土師器坏である。器形は無段平底で、器高4cm・口径18cm・底径8cmである。底部はやや丸味を持ち、体下部は内弯しながら緩やかに立ちあがり、口縁・体部は内弯気味に外傾する。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴・底部がヘラケズリである。内面の器面調整は口縁に平行なヘラミガキで黒色処理が施されている。

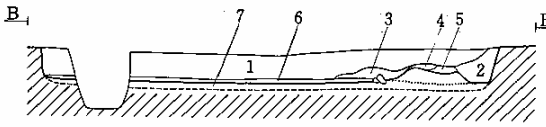
この他、住居内堆積土からは土師器甕口縁部破片2点、P_2からは内黒の土師器坏底部破片1点が出土している。

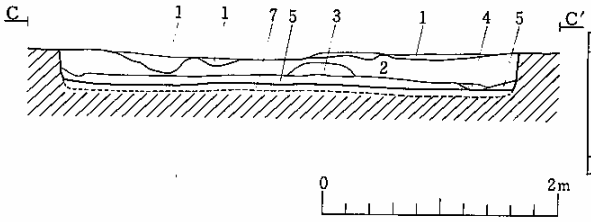




東西断面

層No	層位	特徴
1	第1層	やや黄褐色の土。少量の黄色火山灰がみられ、質はやわらかく、パサパサしている。
2	〃	1・3・4・5より黄色のました土。パサパサしている。
3	〃	2より黄色度は少ないが、やや黄褐色でやわらかくパサパサしている。
4	〃	やや黄褐色で1～3より堅く、パサパサしている。
5	〃	2ほどの黄褐色ではないが、3・4より黄色度を増し、パサパサしてやわらかい。
6	第2層	黄色火山灰を多量にふくみ、わずかに黄褐色土をふくんでいる。
7	床面下	上部に黄色火山灰と黄褐色土をふくんだ混合土がみられるが、下方においては黄色火山灰だけになっている。





南北断面

層No	層位	特徴
1	耕土	茶褐色土。
2	第1層	やや黄褐色の土。やわらかくパサパサしている。
3	〃	やや黄褐色の土。堅く、少量の黄色火山灰を含み、粘性はない。
4	〃	やや黄褐色の土。塊状になった黄色火山灰を斑点状に含む。粘性はない。
5	第2層	やや黄褐色の土。少量の黄色火山灰を含む。粘り気がある。

第21図　ＩＫ第45号住居跡

ＩＫ第45号住居跡

〔位置〕　Ｃ・Ｄ・Ｅ－32区付近で、北台台地がやや西側に傾きはじめる部分に位置している。

〔平面形・重複〕　他の遺構との重複はないが、トレンチ調査時の層位観察用深掘り溝で住居西側の一部を幅40～50㎝で南北に掘り込んでしまった。住居平面形はほぼ正方形で、規模は南北軸3.75ｍ・東西軸3.7ｍである。

〔壁〕　検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁の残存高は東壁が25～30㎝、南壁が26～28㎝、西壁が24～27㎝、北壁が27～30㎝で、ほぼ共通している。

〔床面・柱穴〕　住居床面はほぼ平坦である。「貼床は行なわれず、地山がそのまま床面となっている」と記録されているが、床面下の層の注記に「上部に黄褐色火山灰と黄褐色土を含んだ混合土がみられるが、下方においては黄色火山灰だけになっている。」とあり、掘り方埋土が存在した可能性もある。

床面上で、7個のピットが検出されたが、いずれも掘り方と柱痕跡の識別ができず、配置に規則性もみられないことから、柱穴とは認め難い。

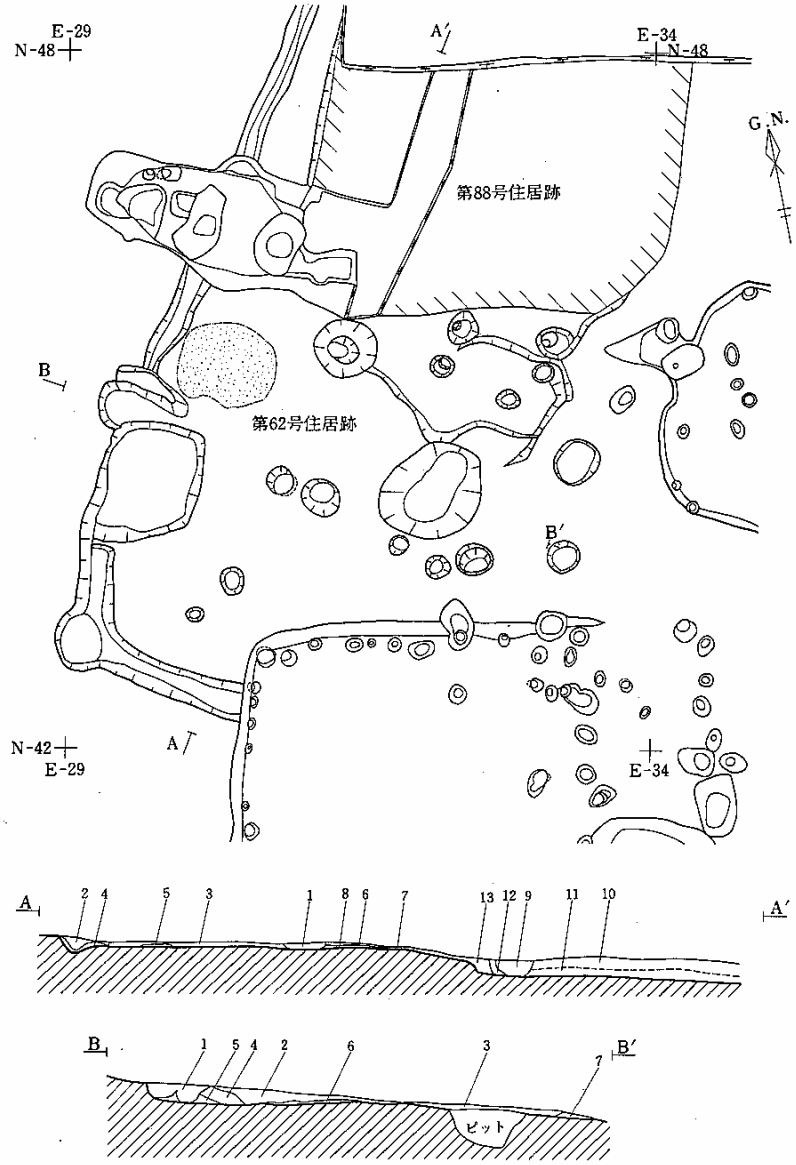
〔カマド〕　住居東壁中央のやや北寄りの部分でカマドが検出された。カマドは燃焼部と煙道部からなり、全長2.35ｍである。燃焼部は奥行90㎝・幅95㎝で、両側壁の内側が赤褐色に焼けている。燃焼部側壁の構築方法については地山削り出しか、粘土積み上げによるものか明確にすることができなかった。

煙道部は溝状に残っており、先端はピット状（煙り出し）になっている。全体の長さは150㎝で、溝状部分の幅は30㎝・深さ4～17㎝である。ピット状部分は直径30㎝・深さ11㎝である。

カマド内堆積土は2層にわかれる。第1層は黄褐色土、第2層は少量の焼土が混じる明るい茶褐色土である。

〔堆積土・遺物の出土状況〕　住居内堆積土は第21図に示した通りである。いずれも黄褐色の土で、細かい特徴にとらわれすぎると、南北断面と東西断面の層の対比は困難であるが、層の堆積状況をみると次のように大別することができる。第1層は南北断面のNo.2～4層、東西断面のNo.1～5層で、住居全体に厚く堆積しているが、床面を直接覆ってはいない。第2層は南北断面のNo.5層、東西断面のNo.6層で、厚さ5㎝以下で住居床面全体を直接薄く覆っている。これらの層の堆積状況は大別あるいは細別した立場でみても、将棋倒し状ではなく、床面の傾斜(ほぼ水平)に沿っており、一般の自然堆積層の特徴とは相違している。層相が黄褐色の土であることを考慮すると人為的に埋められた可能性があろう。

遺物としてはカマド左脇の床面、住居南西隅付近の床面から土師器甕の一括品が出土している。しかし、これらの遺物は残念ながら行方不明となってしまった。



層No.	特　　徴
1	黒褐色土。焼土・木炭混入。
2	黒褐色土。赤褐色の0.3～0.5cm程の焼土粒が多く混入。
3	黒褐色土。木炭が混じる。
4	暗褐色土。ローム混じり。
5	暗褐色土。ローム混じり。
6	黒色土。木炭多量に混入。
7	赤褐色土。焼土層。

層No.	特　　徴
8	黄褐色土。ローム層。
9	ピット。暗褐色土。
10	暗褐色土。ロームブロック含む。
11	暗褐色土。ロームブロック多く含む。
12	黄褐色土。ロームがブロック状に入る。
13	暗褐色土。

層No.	特　　徴
1	暗褐色土。少量の木炭及び黄色ロームのブロック混入。
2	黒色土。木炭多量に混入。少量の焼土混入。
3	黒色土。木炭多量に混入。
4	赤褐色土。赤く焼け硬くしまっている。
5	黄褐色土。黄色ロームブロック混入。
6	暗褐色土。
7	暗褐色土。汚れたロームが入る。

※ 1～8は第62号住居跡堆積度。9はピット。10～13は第88号住居跡堆積度。

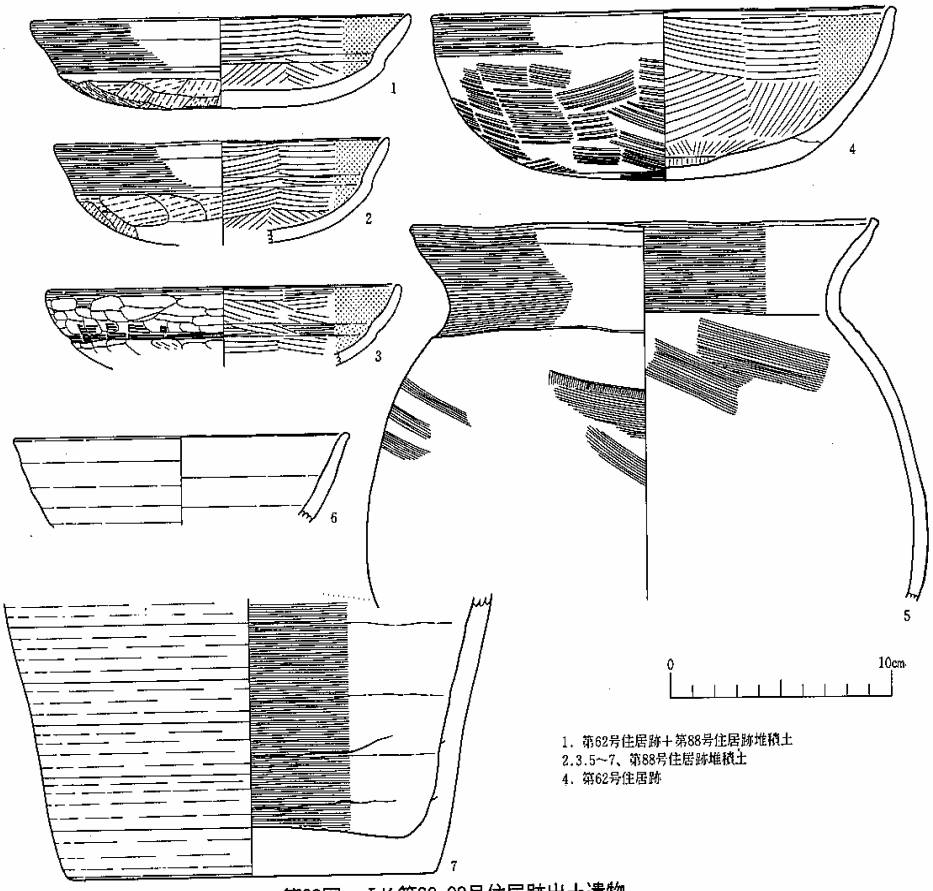
第22図　ＩＫ第62･88号住居跡

ＩＫ第62・88号住居跡

〔位置〕　第62・88号住居跡はＣＤ－52区付近に位置している。第43・44号住居跡と同様北台台地平坦面が東側に傾斜しはじめる部分で、これらの住居跡の東約4mの所である。

〔平面形・重複〕　第62号住居跡は縄文時代前期の第42号住居跡と重複し、その堆積土を切って構築している。しかし、平面図は両者の掘り上げ形態で図化したため、住居平面形が方形を基調としていることは明らかであるが、全体の形状・規模については不明確となった。また、第62号住居跡の調査の過程で、北側部分において第88号住居跡を検出したが、その全容を明らかにするには至らなかった。なお、第88号住居跡残存範囲は斜線で示しておいた。

〔床面・施設等〕　第62号住居跡の床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面と一致している。床面から約10個のピットが検出されたが、掘り方と柱痕跡の識別・配置の規則性などが認められず、柱穴とは見なし難い。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ち上がる。壁の残存高は南壁が10～15cm、西壁が15～20cmである。周溝はカマド左脇のピットを除いた壁直下にめぐっている。周溝の断面は「し」状で、幅30cm・深さ5～8cmである。



第23図　ＩＫ第62･88号住居跡出土遺物

カマドは西壁から検出された。カマドは燃焼部左側壁と底面が残っていた。側壁は粘土積み上げによって構築され、底面は楕円形に激しく焼けている。残存部分から燃焼部の規模は幅1.1m・奥行1.05mと推定される。煙道については不明である。

〔堆積土〕　第62号住居跡の堆積土は数層に細分されるが、基本的には黒褐色土が住居全体を覆い、壁際や周溝にロームを混じえた暗褐色土や黄褐色土が堆積している。その堆積状況は将棋倒し状である。

第88号住居跡の堆積土は全体にロームブロックを含む暗褐色土ないしは黄褐色土である。堆積状況については明確さを欠く。

〔遺物〕　第66号住居跡からは土師器坏(1・2)が出土している。ただし1の坏は第88号住居跡出土坏と接合関係にある。第88号住居跡からは1の他に、土師器坏2点(2・3)・甕1点(5)・須恵器坏1点(6)・甕？1点(7)が出土している。この他、破片として土師器坏口縁部2点・底部1点・須恵器坏口縁部1点がある。出土状況に特にまとまりがみられず、第62・88号住居跡では接合関係も認められることから、ここでは一括して、特徴を述べたい。

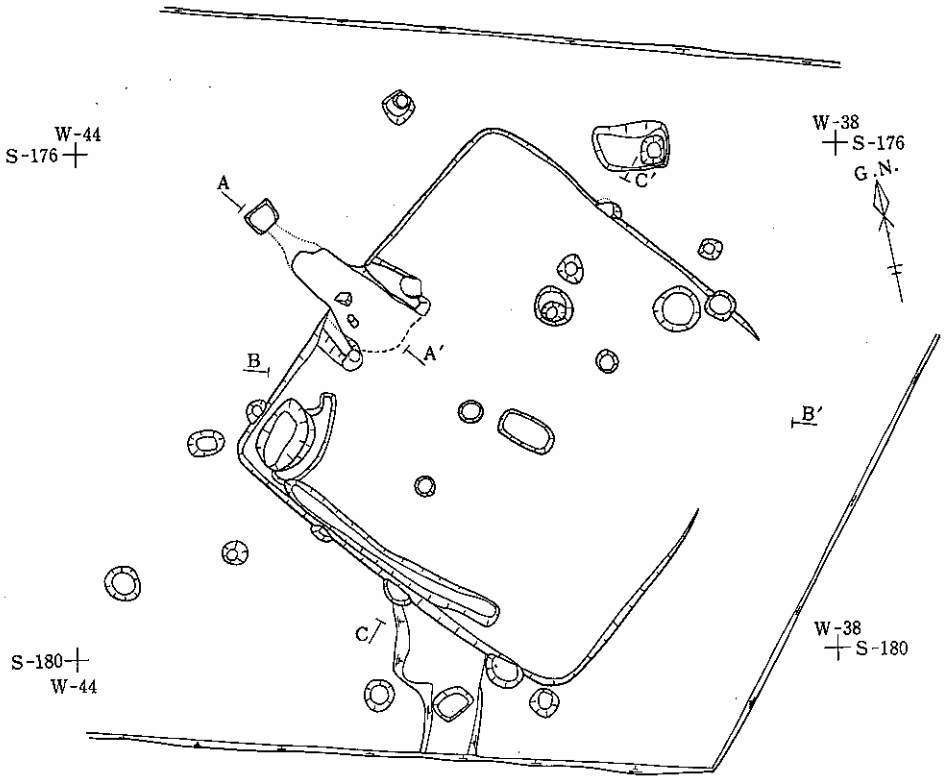
土師坏

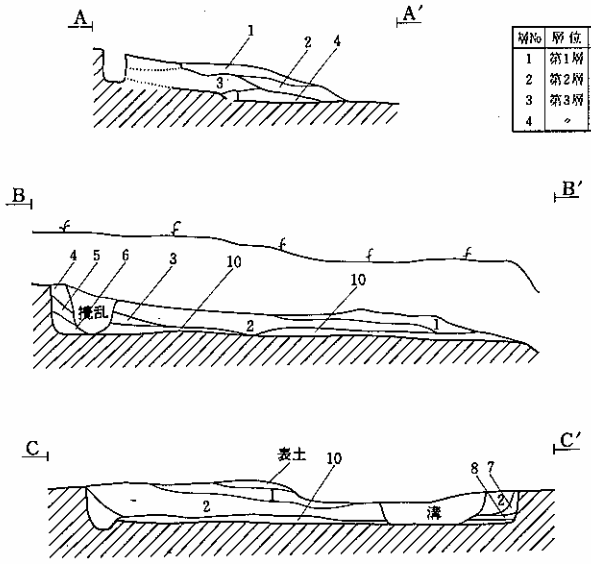
第23図1～3は外面中央に段、内面に稜を形成する坏である。1・2は口縁部が外傾し3は内弯する。内面はいずれも口縁に平行なヘラミガキと黒色処理が施されている。外面の器面調整は、1・2の段の上はヨコナデ、段の下はヘラケズリである。3は段の上がヨコナデの後ヘラミガキが加えられている。注意しなければならないのはこれらの調整の下に刷毛目状の痕跡が残っていることである。この痕跡はヘラミガキの及ばない段の部分で明瞭で、木口状の当りも数ヶ所で観察できる。このことは、坏外面の段が木口状の工具で外面の粘土を削ることによって形成されたこと、ヨコナデはその後の仕上げに用いられたことを示している。もちろん、この段は内面の稜と照応していることから、粘土紐を積み上げる成形の段階で既に意図されていたもので、木口状工具で削りとる粘土の量はそう大きいものではなかったと考えられる。3の事例から考えると1・2の外面の段も木口状工具によって形成され、その痕跡は仕上げのヨコナデによって消し去られた可能性がある。なお、3の段下の器面調整はヘラケズリ後ヘラミガキである。

第23図4は口径21cm・器高7cmの大形の坏である。底部はやや丸味をもった平底で、口縁・胴部は内弯しながら外傾し、端部は僅かに外反する。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、体底部が刷毛目である。内面の器面調整はやや不規則ながら口縁に平行するヘラミガキで、黒色処理されている。

第23図5は頸部がしまる壺状の甕である。口縁部上面が平坦になっている。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ・胴部外面がヘラナデ・内面がナデである。

須恵器





カマド断面

層No	層位	特　　徴
1	第1層	褐色土。若干粘性をおびる。
2	第2層	黒褐色土。炭化物含む。焼土微かに含む。粘性あり。
3	第3層	褐色土。焼土を含む。若干炭化物を含む。
4	〃	褐色土。硬い焼土ブロックを含む。若干炭化物を含む。

住居内堆積土

層No	層　位	特　　徴
1	第1層	濃黒色土。粒子が細かく、部分的にローム混じる。
2	第2層	暗褐色土。比較的大きな木炭を含む。
3	第3層	褐色土。木炭のクズ混入。
4	〃	暗褐色土。
5	〃	暗褐色土。ローム混じる。
6	〃	黒色土。粘性もつ。
7	〃	暗褐色土。ローム含む。
8	〃	暗褐色土。木炭混入。
9	〃	黒色土。粘性含む。
10	第4層	暗褐色土。ローム・焼土・木炭を含む。

0　　2 m

第24図　ＩＫ第70号住居跡

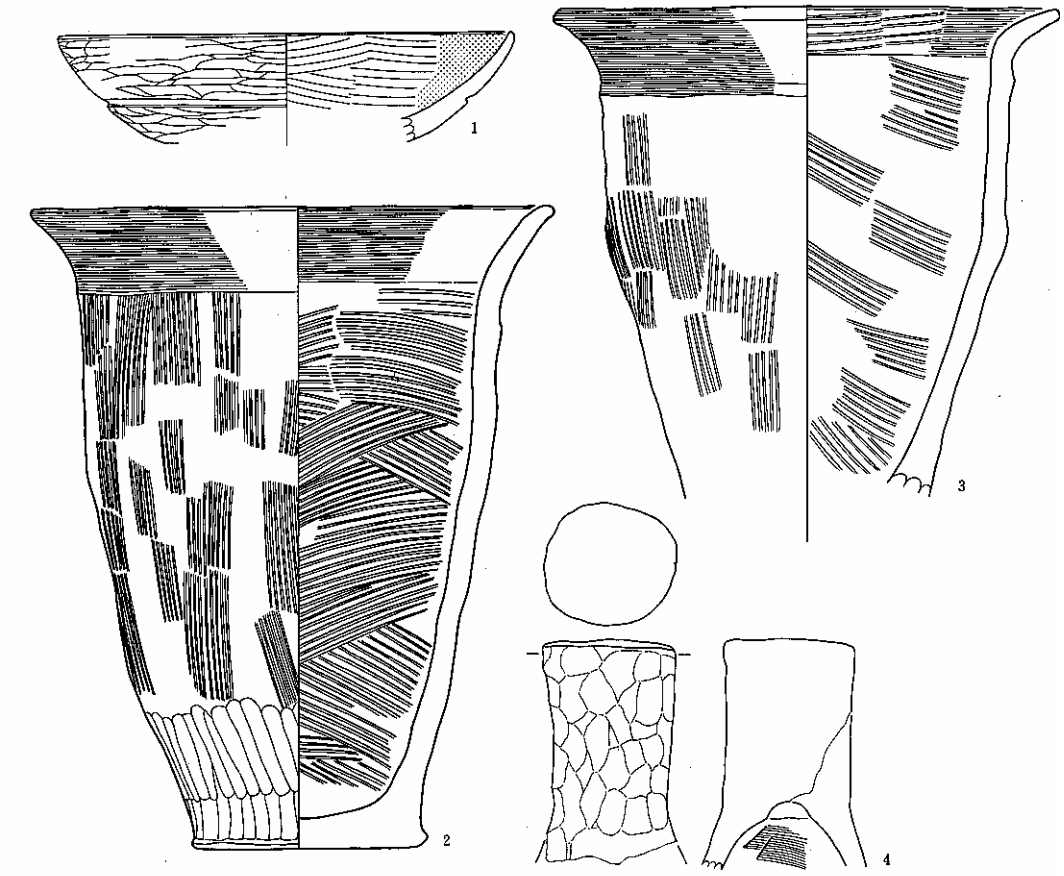
第23図6は須恵器坏で体下・底部を欠いているが、無段平底と推定される。7は甕もしくは鉢の胴下・底部である。外面の器面調整は胴下部が回転ヘラケズリ、底部および内面がオサエ・ナデである。

ＩＫ第70号住居跡

〔位置〕　ＦＲ－28区付近、北台台地が南に延び、くびれて低くなりはじめる部分に位置している。住居跡が検出された所は東緩斜面となっている。

〔平面形・重複〕　第70号住居跡は全体的に保存は良いが、南北に走る後世の溝によって住居跡中央上部が壊され、住居東隅も削平を受けている。住居平面形は隅丸正方形で、規模は北西－南東軸3.3m、北東－南西軸3.2mである。

〔壁〕　検出された壁は地山で、床面から一部周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。壁の残存高は北東壁が0～29cm、南東壁が0～21cm、南西壁が20～37cm、北西壁が30～37cmである。北西



第25図　ＩＫ第70号住居跡出土遺物　0　10cm

壁とその周辺の保存が良い。

〔床面・柱穴〕　住居床面はほぼ平坦である。床面では合計8個のピットが検出されたが、掘り方・柱痕跡の識別ができたのは1個だけである。また、その配置に規則性がみられないことから、これらは柱穴とはみなし難い。

〔カマド〕　住居北西壁中央でカマドが検出された。カマドは燃焼部と煙道部からなり、全長1.9㎜である。燃焼部は奥行60㎝・幅90㎝で、粘土積み上げによって構築されている。側壁前端には土師器甕がオサエとして据えられている。底面には奥壁に近い部分に角礫、左側壁に寄った部分に土製支脚がある。両者とも支脚と考えられるが、土製支脚は原位置を保っているか否か明瞭でない。

煙道部はトンネル式で、先端がピット状になっている(煙り出し)。全体の長さは1.3㎜である。煙道は底面が傾斜し、煙り出しの方に向かって僅かに高くなっている。また、燃焼部側では天井部が崩落しているが、煙り出し側では残っている。煙道の幅は燃焼部側では32㎝と広いのに対し、煙り出しに向かうに従い狭くなり、接続する部分では約10㎝になる。煙り出しのピットは長方形(25×20㎝)で、深さは25㎝である。

カマド内の堆積土は3層にわかれる。第1層は褐色土、第2層は黒褐色土、第3層は褐色土である。第3層はカマド底面を直接覆い、硬い焼土ブロックを含み厚く堆積していることから、燃焼部天井の崩壊土と考えられる。

〔その他の施設〕　カマド左側の住居西隅の部分に楕円形のピット(60×40㎝)がある。深さは12㎝で、位置・形状・規模等から貯蔵穴状ピットと考えられる。また、南西壁直下には幅20㎝・長さ約2㎜の溝がある。断面は「し」状で、深さは約5㎝である。この溝は周溝とも似るが、分布が限られている。

〔堆積土・遺物の出土状況〕　住居内堆積土は4層に大別される。第1層は濃黒色土で、部分的に地山土を混じ、住居中央部に分布している。第2層は暗褐色土で比較的大きな木炭を含み、住居全体に厚く堆積している。第3層は褐色・暗褐色・黒色土など種々の薄い層からなり、住居壁際に厚く堆積している。第4層は焼土・木炭を含む暗褐色土で床面を薄く(2～5㎝)覆っている。第1～3層は将棋倒し状であるが、第4層はほぼ水平で床面に沿った堆積状況を示している。したがって、第1～3層は自然堆積によるものと考えられるが、第4層はそれとは相違している。生活層とも考えられるが、層が約5㎝と厚い部分もあり疑問が残る。

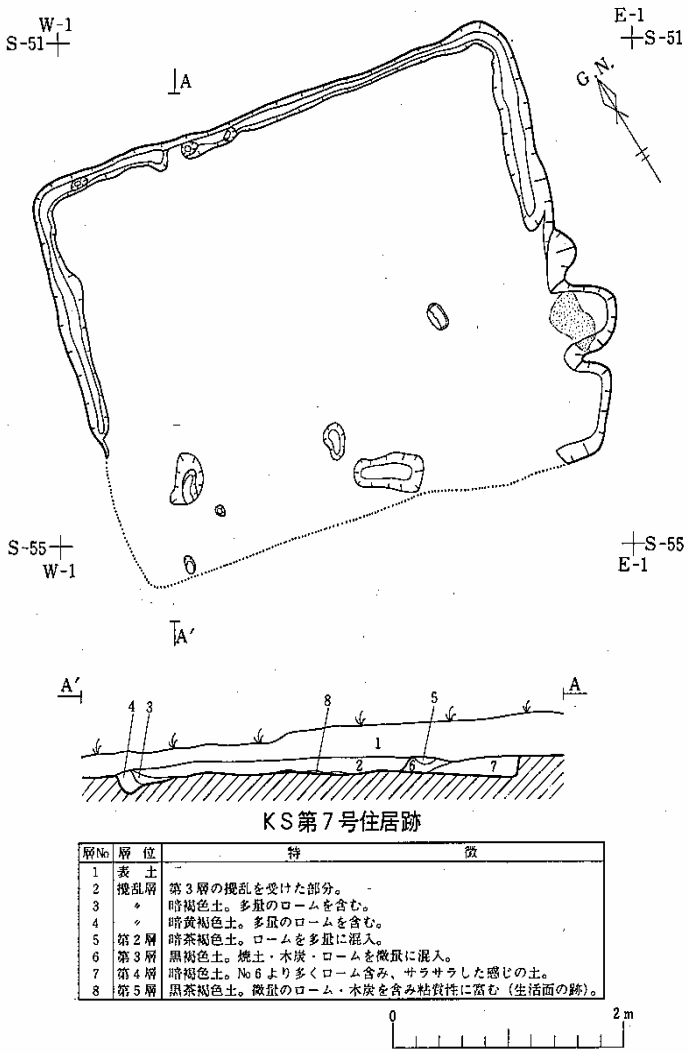
遺物はカマド両側壁端部のオサエ（焚き口）として土師器甕2点(第25図2・3)と床面から土師器坏1点(第25図1)が出土している。この他、カマドから土製支脚1点(第25図4)と住居内堆積上から土師器甕口縁部破片2点が出土している。

〔遺物〕　第25図1は土師器坏で全体の1/4程残存している。口径は18㎝、器高は4.5～5㎝と

推定される。底部を欠いているが、口縁・体部は内弯しながら大きく開く。外面には中位に沈線状の段がある。器面調整は内外面とも口縁に平行なヘラミガキで内面は黒色処理されている。

第25図2・3は土師器の甕で、2は口径20.7㎝、3は20㎝と似た大きさであるが、2の方が僅かに大きい。器高は2が25.4㎝、3は底部を欠いているが胴部下端のあり方から21㎝前後と推定される。両者とも口縁部が強く外反し、頸部に段が付く。胴部は長胴で、底部に向かってすぼまる。2の底部は外縁が張り出している。3も同様と推定される。器面調整は内外面とも口縁部が横ナデ(3は内面に刷毛目残る)、胴部が刷毛目である。2の胴下部外面は粗くヘラミガキされている。

第25図4はカマドの土製支脚である。上部は中実の円筒状で、下部は円錐台状をしている。下端部を欠いているため正確な高さは不明であるが、円筒状部分の直径は約5㎝である。外面はオサエによって調整されている。円錐台状部の内面調整はヘラナデである。



ＫＳ第７号住居跡

層No	層位	特徴
1	表土	
2	攪乱層	第３層の攪乱を受けた部分。
3	〃	暗褐色土。多量のロームを含む。
4	〃	暗黄褐色土。多量のロームを含む。
5	第２層	暗茶褐色土。ロームを多量に混入。
6	第３層	黒褐色土。焼土・木炭・ロームを微量に混入。
7	第４層	暗褐色土。No６より多くローム含み、サラサラした感じの土。
8	第５層	黒茶褐色土。微量のローム・木炭を含み粘質性に富む（生活面の跡）。

第26図　ＫＳ第７号住居跡

ＫＳ第７号住居跡

〔位置〕　ＣＫ－69区付近で、鴻ノ巣台地南斜面発掘区の上部に位置している。

〔平面形・重複〕　他の遺構との明確な重複はないが、住居南辺から南西隅の部分が削平されている。残存部分から、住居平面形は隅丸長方形で、その規模は東西軸4.2m、南北軸3.3mと推定される。

〔壁〕　検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。壁

の残存高は保存の良い北壁で15～25㎝で、東壁が25～10㎝、西壁が15㎝以下である。
〔床面・柱穴〕　住居床面はほぼ平坦で、掘り方底面(地山)と一致する。床面で幾つかのピットを検出したが、いずれも規則性がみられず柱穴とは認め難い。
〔カマド〕　住居東壁の中央から南に偏った部分が幅60㎝、奥行60㎝程掘り込まれ、底面および側壁に硬い焼土がみられる。この掘り込みは形状・硬い焼土(焼け面？)の存在からカマドと推定される。なお、右側壁の手前が袖状になっているが、袖状部分南側の住居東壁は他の部分と較べ方向が不規則である。すなわち、この部分の東壁がピットと重複(新旧は不明)し、カマドとピットの間が袖状に残った可能性もあり、袖状部分がカマドの側壁か否かについては答えを保留したい。
〔周溝〕　住居北半分の垂直下で検出された。断面は「∪」状で、幅15～30㎝、深さ3～6㎝である。住居南半分については削平のためとも考えられるが、確証はない。
〔堆積土・遺物〕　第7号住居跡は攪乱が著しく(№.2～4層)、堆積土の保存が良いのは壁周辺と床面上に限られている。第2層は暗茶褐色土で部分的な層である。第3層は黒褐色土、第4層は暗褐色土で、将棋倒し状の堆積をしている。第5層は粘質性に富む黒茶褐色土で、床面上に薄く貼り付いており、生活層と推定される。
　遺物は堆積土中から土師器甕底部破片が2点出土している。

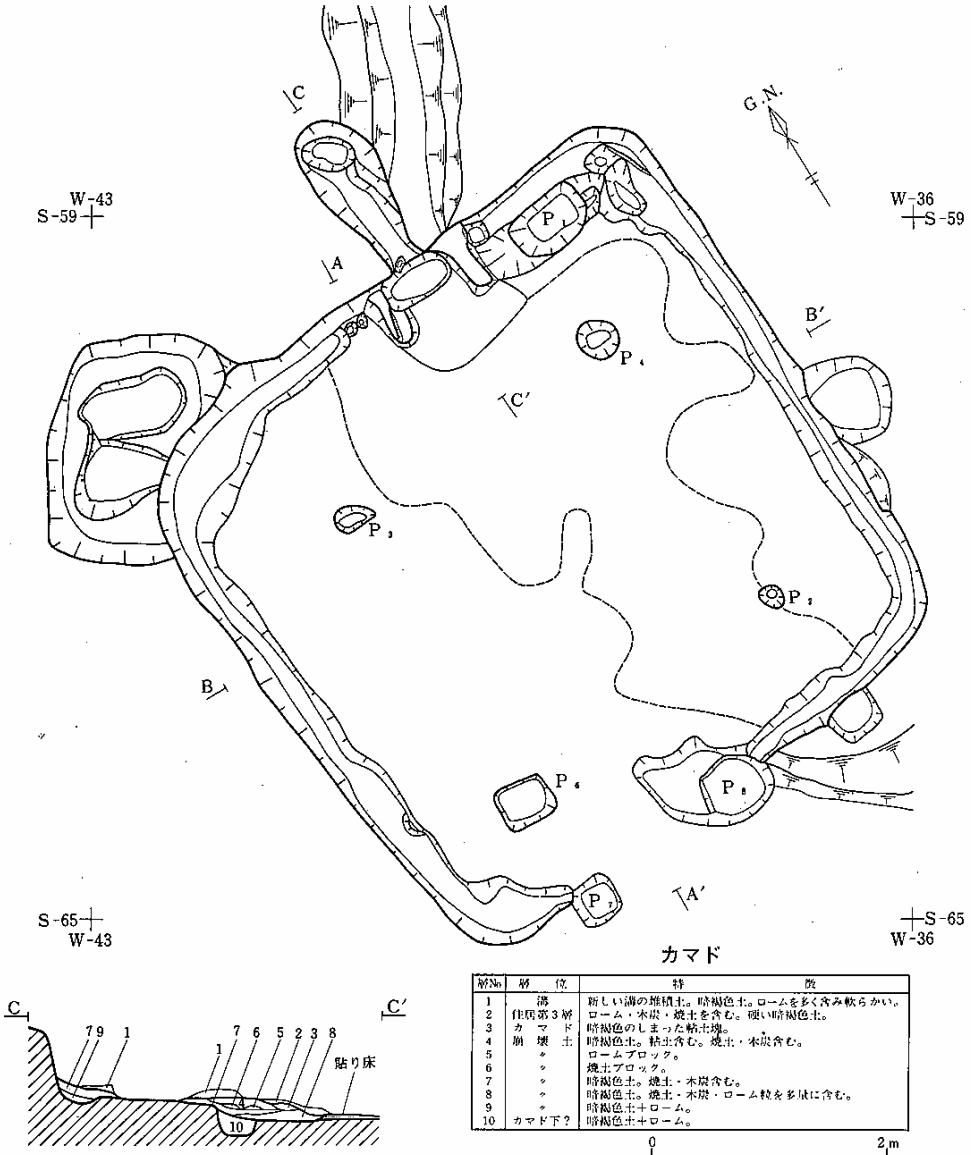
ＫＳ第13号住居跡

〔位置〕　ＢＲ－72区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区の上部中央西側に位置している。
〔平面形・重複〕　第13号住居跡は住居北西隅において土坑を切っているが、南北に走る溝によってカマド上部と南辺中央部西寄りの部分が削平されている。規模は、南北・東西軸とも5.1㎡である。
〔壁〕　検出された壁の大部分は地山で、住居北西隅の土坑と重複している部分ではその堆積土となっている。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ち上がる。
〔床面〕　住居床面はほぼ平坦である。床面を精査した所、カマド付近からやや不規則な形で帯状に南辺に至る貼り床状部分の存在が判明した(第6層)。この層は焼土・灰・ロームを多量に含む非常に粘性の強い黒褐色土である。その範囲は平面図に破線で示した。この貼り床状の層は分布が限られているが、その下から住居床面全体に分布する生活層が検出された(第7層)。この層はローム・焼土・炭をやや混入する粘性の強い黒褐色土である。したがって、第13号住居跡には上下二枚の床面(生活面)が存在したことになる。そして、上位床面は分布が限られていること、周辺部の床面では下位床面が上位床面と同時に使用されていることから、上位床面の存在は床面の部分的な補修を示すのではないかと考えられる。

〔柱穴〕　柱穴は4個検出された（$P_{2,3,4,6}$）。これらの柱穴は住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形になる。

〔周溝〕　ほぼ住居全域の壁直下で、周溝が検出された。周溝は断面「し」状で、幅は一部に広いところもみられるものの20～30cm程度である。深さは12～24cmである。

〔カマド〕　住居北壁中央部の東寄りに設置されており、燃焼部と煙道部からなる。規模は全長2.0m・燃焼部幅1.1m・奥行0.6m・煙道部長1.4m・幅0.3～0.4mである。煙道部の先端は



層No	層位	特徴
1	溝	新しい溝の堆積土。暗褐色土。ロームを多く含み軟らかい。
2	住居第3層	ローム・木炭・焼土を含む。硬い暗褐色土。
3	カマド	暗褐色のしまった粘土塊。
4	崩壊土	暗褐色土。粘土含む。焼土・木炭含む。
5	〃	ロームブロック。
6	〃	焼土ブロック。
7	〃	暗褐色土。焼土・木炭含む。
8	〃	暗褐色土。焼土・木炭・ローム粒を多量に含む。
9	〃	暗褐色土＋ローム。
10	カマド下？	暗褐色土＋ローム。

0　2m

第27図　ＫＳ第13号住居跡Ⅰ

楕円形のピット状（煙り出し）をしており、大きさが45×30cm、深さ60cmである。煙り出し付近で煙道部の幅が広くなっているのは、上半部が崩れたためと考えられる。

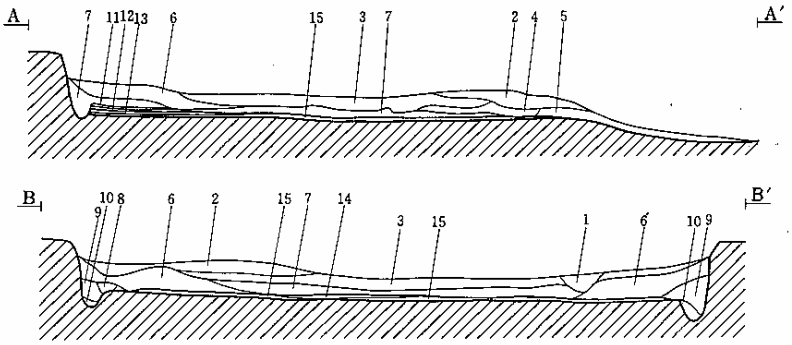
燃焼部側壁は粘土積み上げによって構築されている。底面は焼けている。奥壁に接する部分の底面をさらに精査した所、幅30cm・深さ12cmの溝状になった。この溝状部分は周溝と連続するものとも考えられるが、燃焼部側壁下の調査を行なっていないので、確証はない。

カマド内の堆積土は6層に細分されるが、いずれも焼土・ロームブロック等を含むもので、天井部や側壁の崩壊したものと推定される。

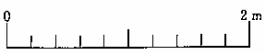
〔その他の施設〕　カマド右脇の部分に隅丸長方形のピットがある。長軸70cm・短軸45cm・深さ32cmで、位置・形状・規模等から貯蔵穴状ピットと考えられる。

〔堆積土・遺物の出土状況〕　住居内堆積土は2層（第1～4層と第5～7層）に大別される。第1～3層は暗褐色ないしは黒褐色土で、第3層にロームの混入が多いのが特徴である。第1・2層は住居全体に分布し、第3層は壁沿や周溝に堆積している。これらの層は将棋倒し状に堆積している。第4層はカマド崩壊土で部分的な層である。第5～7層は貼り床や生活層である。第5層は補修後の貼り床(第6層)上の生活層、第7層は構築時床面の生活層である。

遺物は堆積土・ピット・周溝・カマド・床面から出土している。遺物が多いのは第2・3層・床面である。第2・3層は床面を直接覆って堆積している層であるから、その出土遺物の多くは床面出土のものと同様に、生活時もしくは住居廃絶直後のものである可能性が強い。第2・



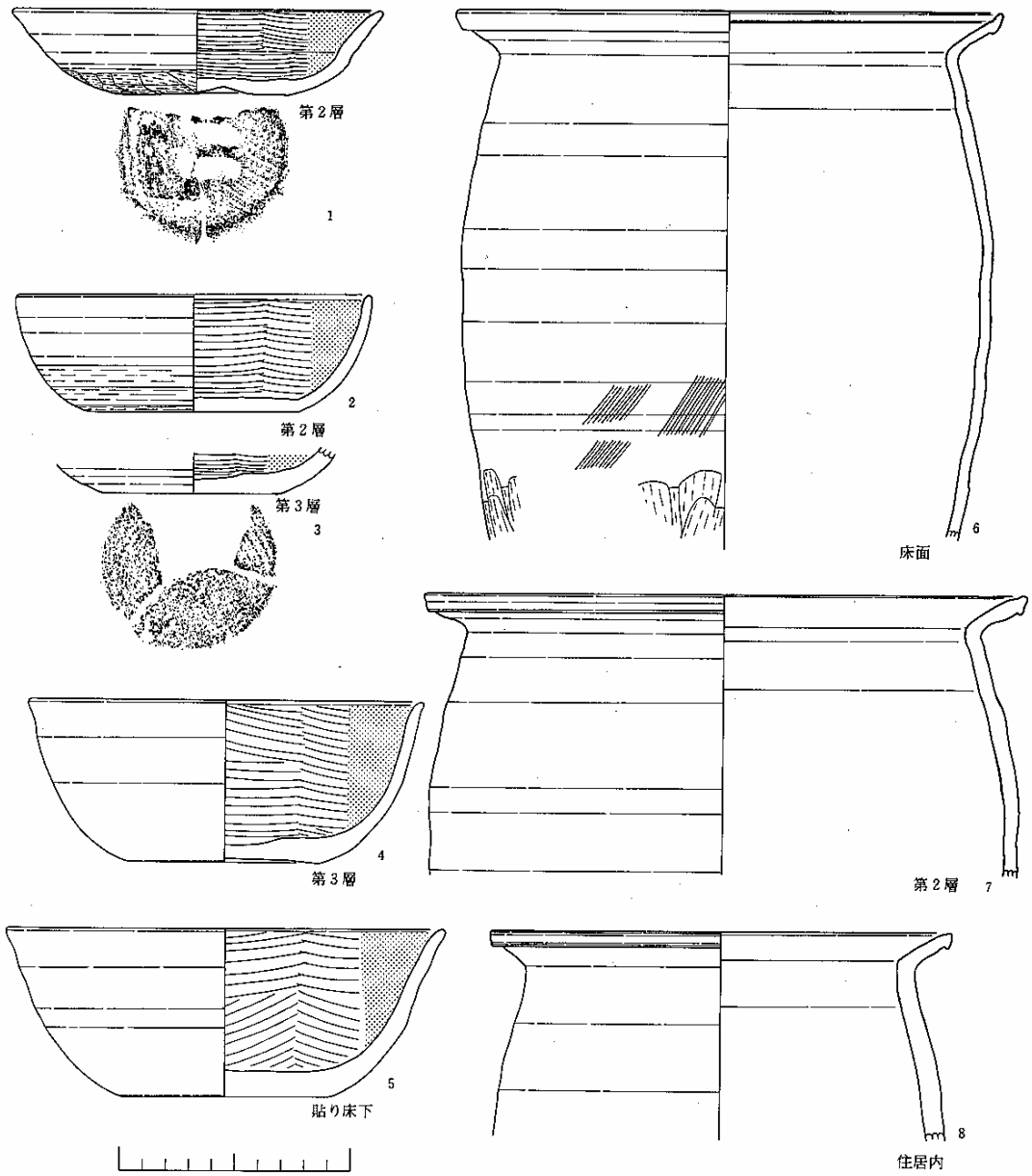
層No	層位	特徴	層No	層位	特徴
1	第1層	硬い黒褐色土。粘質・しまりあり。炭・焼土・ローム微量含む。	9		黒褐色土。ロームを霜降状に含み、パラパラしている。
2		黒褐色土。砂っぽくサラサラしている。やや焼土・ローム・炭含む。	10		汚れたローム＋黒褐色土。
3		暗褐色土。ロームを多量に含み明るい。炭やや含む。	11	第4層	白色粘土＋暗褐色土。粘性あり。カマド崩壊土。
4		暗褐色土。焼土・ローム・炭を多く混じ、しまっている。	12	第5層	黒褐色土。ローム・焼土・炭やや混入。白色粘土やや含む。粘性強い。
5	第2層	黒褐色土。ローム・炭・焼土を混じる。やや砂っぽい。	13	第6層	汚れたローム（硬い）。貼り床状。
6		暗褐色土。粘性なく炭・焼土・ローム混入。	14		焼土・灰・ロームを多量に含み、粘性の強い黒褐色土。貼り床状。
7		黒褐色土。炭・焼土を多量に混じるため暗い。	15	第7層	やや褐色が強い黒褐色土。ローム・焼土・炭やや混入。粘性強い。生活面。
8	第3層	暗褐色土。ロームを混入し霜降状。炭・焼土を微量含む。			



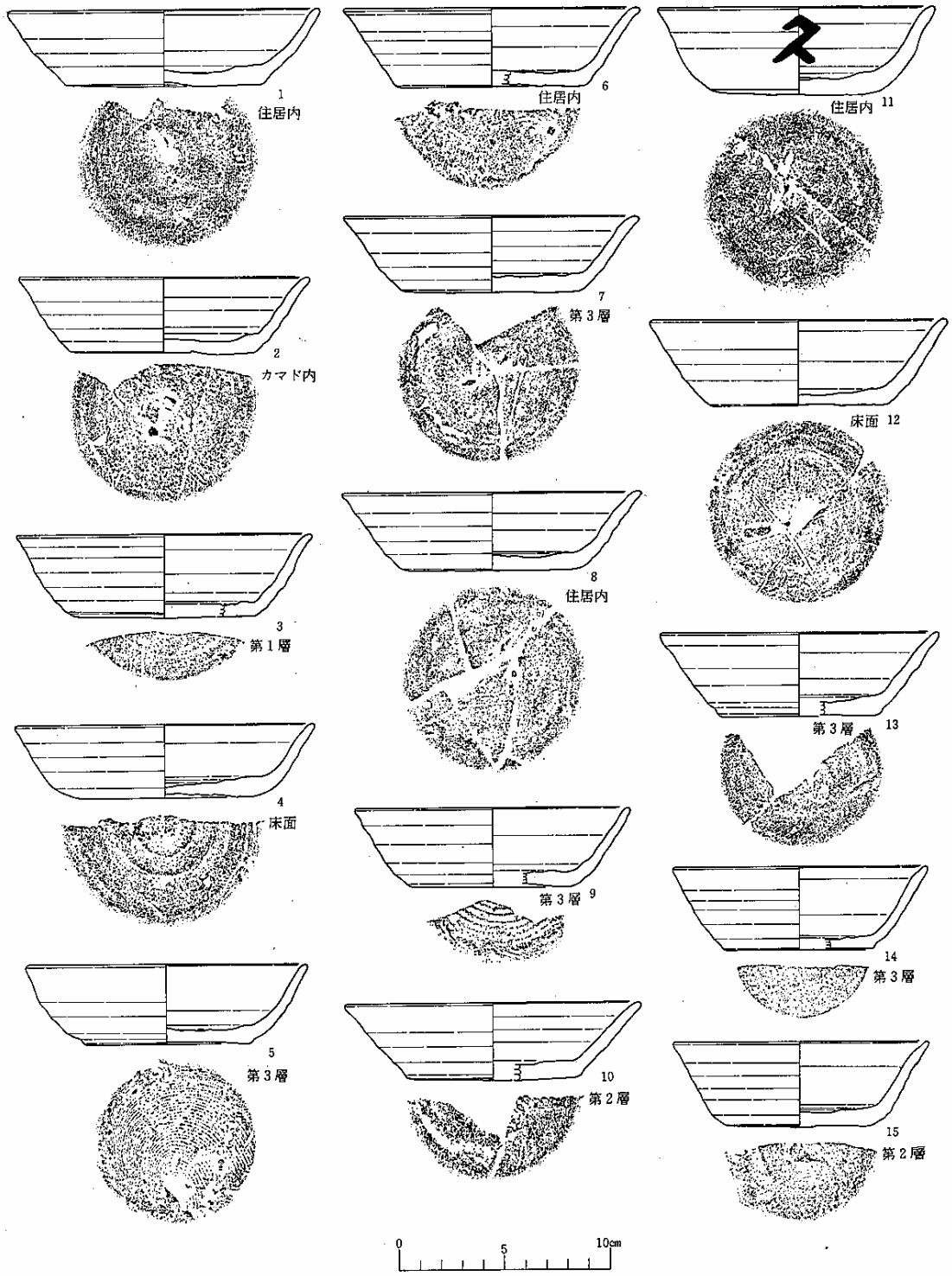
第28図　ＫＳ第13号住居跡Ⅱ

3層・貼床下・床面・カマド・周溝の出土遺物を併せると土師器坏5点・甕2点・須恵器坏12点・盤1点・転用硯1点・銅椀1点・刀子1点で合計23点となり、実測可能な資料の2/3を占める。

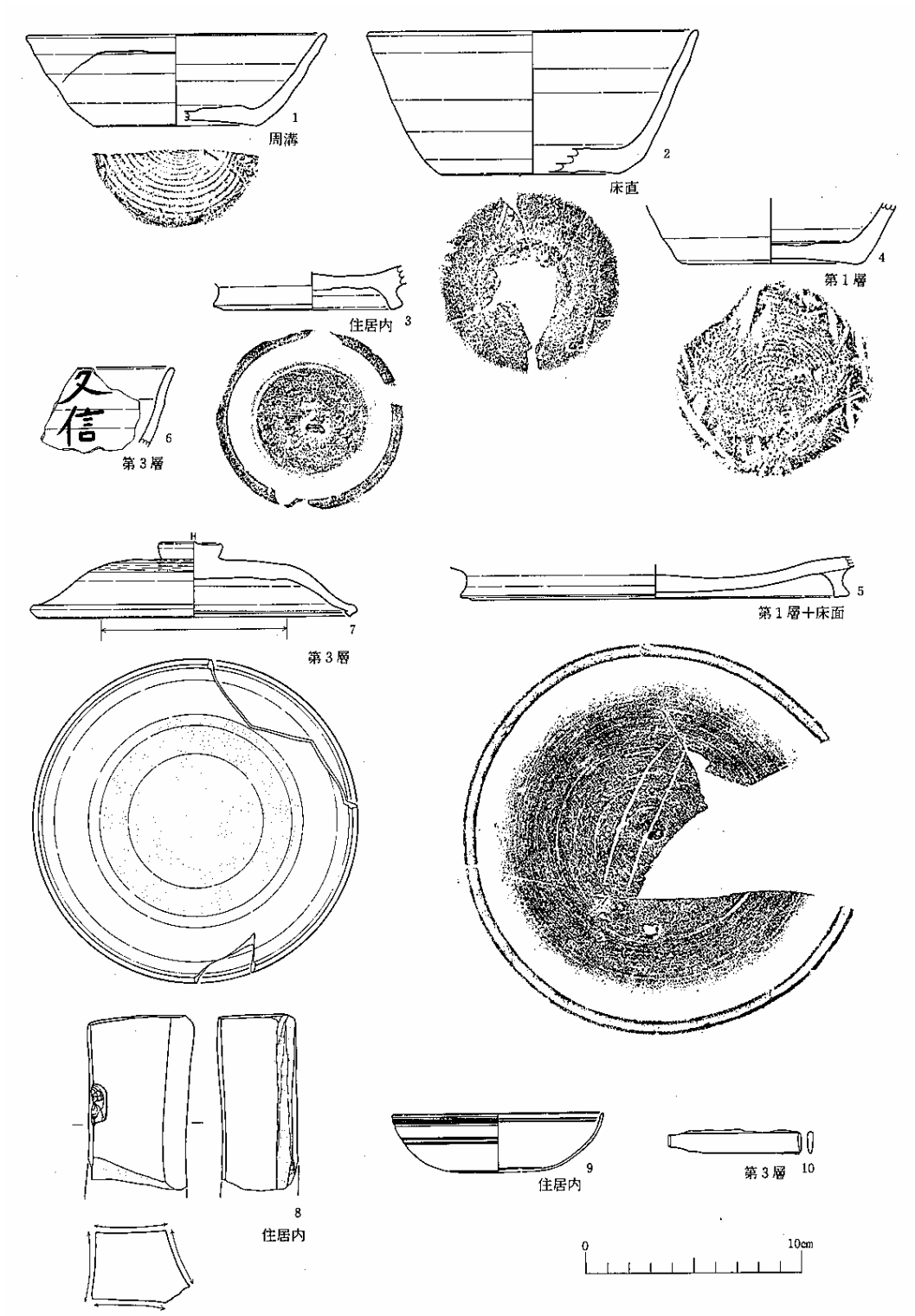
破片資料については別表にまとめてあるが、第2・3層・ピット・床面出土のものが90点(個体)あり、やはり全体(130点)の3/4を占め、同様な傾向を示している。



第29図　ＫＳ第13号住居跡出土遺物Ⅰ



第30図　ＫＳ第13号住居跡出土遺物Ⅱ



第31図　ＫＳ第13号住居跡出土遺物Ⅲ

〔遺物〕　ここでは、実測図を作成したものについてその特徴を述べる。破片資料については前述のように別表でその特徴を示してある。

土師器坏

椀・皿状のものが3点（第29図1～3）、鉢状のものが2点(第29図4・5)ある。1は外面中央に軽い段、内面に弱い稜のある坏である。口縁部は外傾し、体・底部は皿状をしている。
外面の器面調整は口縁部がロクロナデ、体部が手持ちヘラケズリである。底部の切り離し技法は静止糸切りである。内面の器面調整は口縁に平行なヘラミガキで、黒色処理されている。また、底部の形状として、内面側が外面側よりもはるかに外側に位置するのが特徴である。2・3は無段の坏である。2は平底で口縁・体部が内弯している。外面の器面調整は口縁・体上部が弱いロクロナデ、体下・底部が回転ヘラケズリである。内面は口縁に平行なヘラミガキで、黒色処理されている。3は底部資料であるが2と同様な器形と推定される。内面の器面調整も同様であるが、体下部外面はヘラケズリではなく弱いロクロナデである。また、底部切り離しは回転糸切りである。

4・5は無段・平底の鉢状の坏である。4は平底であるものの底部中央に向ってやや凹んでいる。両者とも体部は内弯しながら外傾し、口縁部が外反している。内面側は底部から体部への移行が滑らかで、体部と底部の境が明確ではない。器面調整は外面が弱いロクロナデ、内面は口縁に平行なヘラミガキで黒色処理されている。底部外面は磨滅のため器面調整・切り離し技法の観察は困難である。

土師器甕

口縁・胴部資料3点(第29図6～8)・底部資料1点(第31図4)がある。いずれも製作にロクロを使用し、第31図4の底部は回転糸切りである。第29図6～8は長胴の甕で、口縁部が外傾し端部が受け口状になる。6の胴部には平行叩き目がロクロナデの下に残っている。また、胴下部は手持ちヘラケズリが加えられている。

須恵器坏

椀・皿状のものが16点(第30図・31図1)、鉢状のものが1点(第31図2)ある。いずれも無段・平底の坏で、製作にロクロを使用し、内外面ともロクロナデ調整によって仕上げている。底部のロクロからの切り離しにはヘラ切りと回転糸切りがあり、切り離し後ヘラケズリ調整は加えていない。ただ、ヘラ切りのものは切り離し後ナデ状の調整が加えられ、切り離し痕跡がやや不明瞭になっているものが多い。ヘラ切りによるものは13点、回転糸切りによるものは4点で、前者が2/3強を占めている。

底部は内面側と外面側がほぼ一致しているものが多いが、内面側底部が外側に位置するものもあり（4・5・9・11・15・第31図2）、約1/3に及んでいる。体部は内弯しながら外傾するも

の(1〜5・11・12・15)と直線的に外傾するもの(6〜10・13・14・第31図1・2)がある。口縁部分は外反するもの(2〜4・6・7・11)と外傾したままそのまま収まるもの(1・5・8〜10・12〜15第31図・1・2)がある。両者の相関は必ずしも明確でない。

須恵器坏の特徴は以上の通りであるが、この他墨書・ヘラ書きされたものがある。第30図11は、正反対側の外面に2ヶ所、内面側に1ヶ所「久」の墨書がある。第31図6は口縁部から体部に至る小破片であるが外面に「久信」の墨書が認められる。また、焼成前のヘラ書きが二種類あり(「＝」・「×」、いずれも底部外面にみられる。「＝」、は第30図7・8・10、「×」は第30図11・12にある。

その他の須恵器

第31図3は壺の底部で高台がついている。高台は付高台である。底部のロクロからの切り離しはヘラ切りで、その後ロクロナデが加えられている。

第31図5は盤の底部で、高台がついている。高台は付高台である。底部は全面回転ヘラケズリで、その下にロクロからの底部切り離しを示すヘラ切り痕が残っている。外面には焼成前の「×」)、いずれも底部外面にみられる。「＝」は、第30図7・8・10、「×」は第30図11・12にある。

転用硯

第31図7は須恵器蓋の転用硯である。この須恵器蓋は扁平な宝珠状つまみをもち、口縁部は内側に折りまげ内面側に密着させている。天井部外面の上半部は回転ヘラケズリが加えられている。その他の内・外面はロクロナデで仕上げられている。

KS第13号住居跡破片

	土師器坏		土師器甕		須恵器坏			蓋		計
特徴	口縁部 ミガキ黒 ロクロナデ	底部 不明 ヘラ切り	口縁部 非ロクロ ロクロ	底部 非ロクロ 回転糸切り	口縁部	底部 回転ケズリ 糸切り ヘラ切り	高台		口縁部 底部(ヘラ切り)	
埋土	2		2		8	4		2		18
第1層	2		6	2	5	2	2		3	22
第2層	1	2	1 2	1	19	7 1 1		1	9 3	48
第3層	3		1	3	16			3		26
P₁	1			1						2
P₂										
床面	1	1		1	8	2			1	14
計	10	1 2	10 2	1 7	56	15 1 1	2	6	13 3	130

この須恵器蓋の内面は、ロクロ調整によって凸状になった部分が著しく磨滅し、中央部からその周囲に広汎に及んでいる。この面が硯としての磨り面と推定される。また、扁平な宝珠状つまみは、頂部が研磨され、倒置の状態で硯として使用した時、安定を保つように加工されている。

鉢鉢

底部中央を欠くがほぼ完形である（第31図9）。平底で口縁・胴部は内弯している。法量は口径9.8cm・底径4.0cm・器高2.7cmで、器厚は約1mmであるが、口縁部付近で僅かに厚みを増している。内・外面は平滑に仕上げられ、数条の平行沈線が引かれている。この沈線は非常に鋭く、ロクロを使用していると推定される。外面の平行沈線は口縁部・胴中央上部・底部外縁にある。口縁部の平行沈線は4条あり、下位の一条が幅広く（約1mm）、深い。胴中央上部と底部外縁の平行沈線は二条一対のものが上下に二本ある(計4条)。この二条一対の平行沈線は極めて密接し、沈線間が丸味をもち周囲よりも僅かに低くなっており、一見すると一条の沈線の

観をしている。内面の平行沈線は口縁部と底部外縁にあり、二条を一対としたもの一本ずつである。

刀子

第31図10は刀子であるが鋒と茎先の部分を欠いている。残存部から平棟・平造りと推定される。銹のため明確ではないが両区と推定される。計測値については別表に示してある。

砥石

第31図8は直方体状の砥石で、下部を欠いている。上面と側面の一部は節理による割れ面となっているが、その他の四面は幅広の研磨面となっている。表材はシルト質状で、中・仕上げ砥的なものと思われる。

ＫＳ第15号住居跡

〔位置〕　ＣＬ－73区付近、鴻ノ巣台地南斜面の発掘区の上部東側に位置している。

〔平面形・重複〕　第15号住居跡は住居中央部が土坑(1.8×1.7m)によって壊されているが、その他は保存が良い。平面形は正方形で、規模は南北軸5m、東西軸5.5mである。

KS第13号住居跡破片

	土師器坏		土師器甕		須恵器坏			蓋		計
特徴	口縁部 ミガキ黒ロクロナデ	底部 不明 ヘラ切り	口縁部 非ロクロ ロクロ	底部 非ロクロ 回転糸切り	口縁部	底部 回転ケズリ 糸切り ヘラ切り	高台		口縁部 底部（ヘラ切り）	
埋土	2		2		8	4		2		18
第1層	2		6	2	5	2	2		3	22
第2層	1	2	1 2	1	19	7 1 1		1	9 3	48
第3層	3		1	3	16			3		26
P_1	1			1						2
P_4										
床面	1	1		1	8	2			1	14
計	10	1 2	10 2	1 7	56	15 1 1	2	6	13 3	130

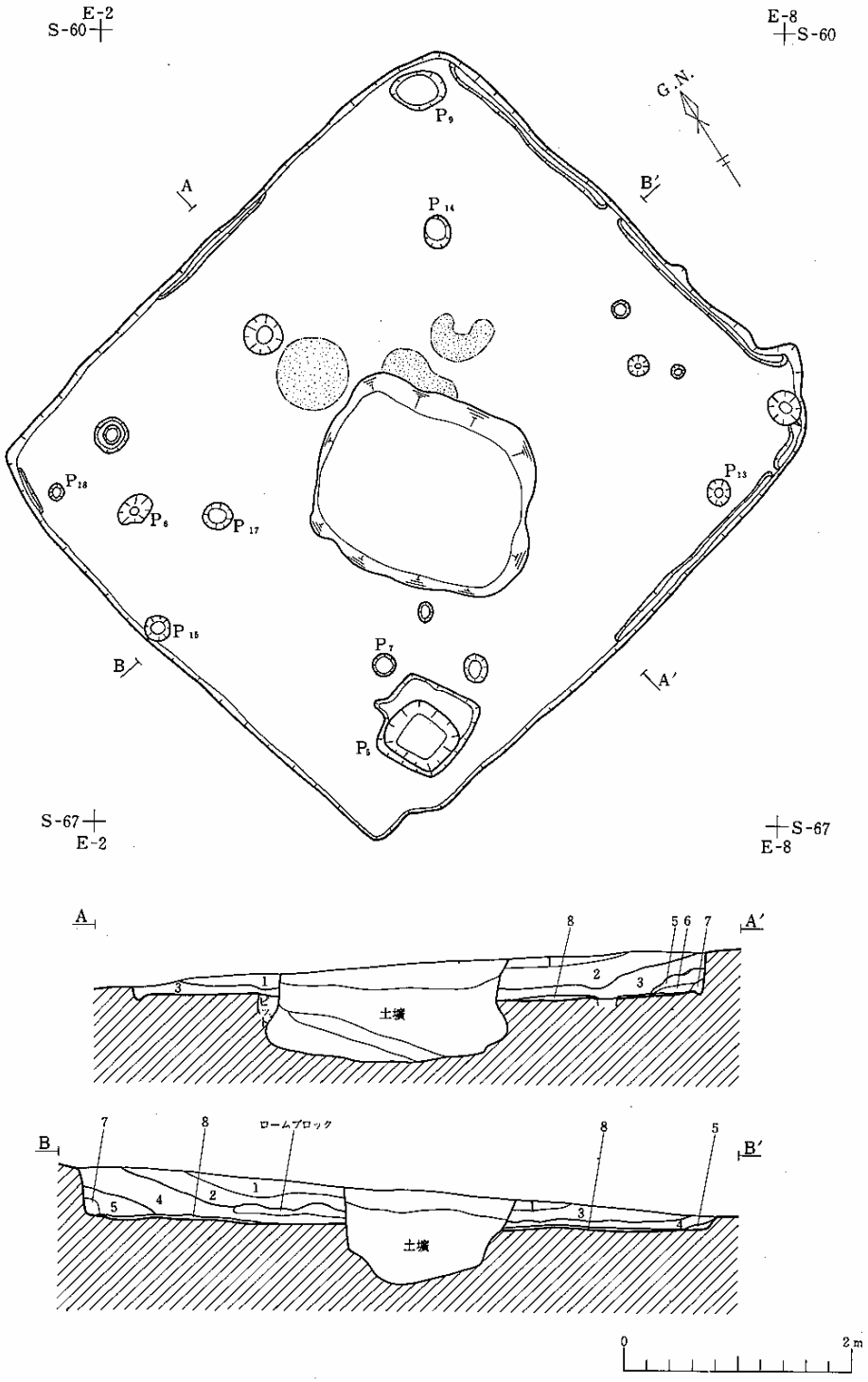
〔壁・周溝〕　検出された壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁は東・北壁が高く25～57cmで、南・西壁は7～25cm程である。

東・南・北壁の直下には溝がめぐっている。東壁の溝はほぼ全域にみられるが、南壁のものは東側半分だけで、西側には延びない。また、北壁の溝は中央部にだけ(長さ1.4m)みられる。溝の断面形は「し」状で、幅10～15cm・深さ4～5cmである。

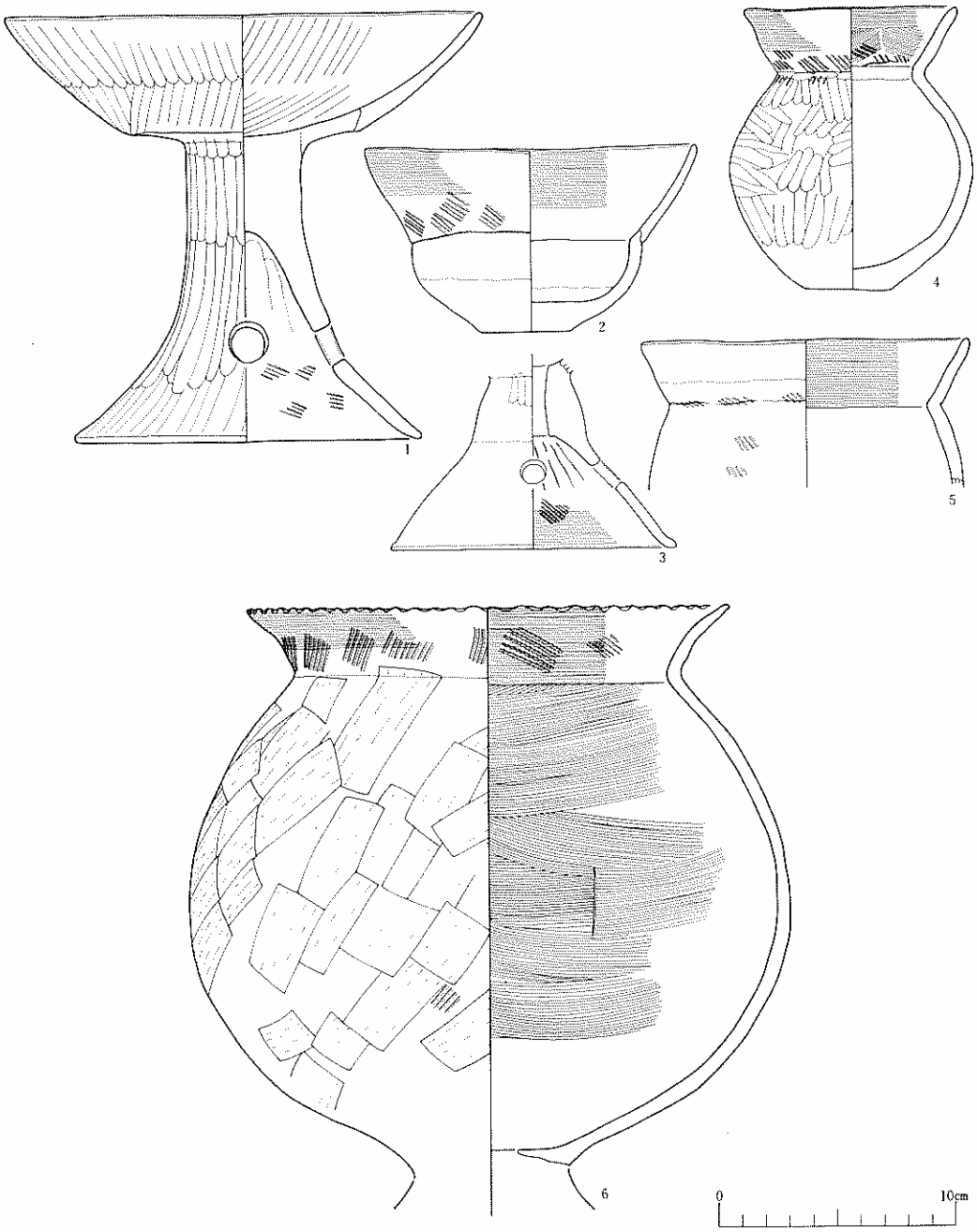
〔床面・柱穴・炉・その他の施設〕　住居床面はほぼ平坦である。床面上からは、住居跡を壊している土坑の他に合計18個のピットが検出された。これらのピットの中で、P_7・P_{14}は住居対角線上の共通した場所に位置しており、柱穴と考えられるが、この他に組みあうものは検出できなかった。住居中央部からやや北側に偏った部分の床面に3ヶ所焼土(焼面？)がみられ、炉と考えられる。焼土の形態は円形もしくは不整楕円形で、その規模は60×60cm・40×60cm・20×70cm（半分土坑に切られている）である。

この他、南西の部分に長方形のピット（P_5）がある。大きさは60×50cm・深さ40cmで、位置・規模などから貯蔵穴状ピットと考えられる。

〔堆積土・遺物の出土状況〕　住居内堆積土は4層に大別され、第1～3は将棋倒し状の堆積状況を示し、第4層は床面に薄く貼りついている。第1層は黒褐色土で、ａ・ｂ層に細分され、



第32図　ＫＳ第15号住居跡



番号	種　類	層　位	特　徴	登録
1	土師器高坏	床　面	坏部：無段の坏。脚部：長脚円錐台状。円窓３個。器高18cm・坏部口径20cm・底径10cm・脚裾部径14.5cm。	Po.3
2	土師器坏	第４層上面	体部中央外面にくびれ、内面に稜。底部平底。器高7.8cm・口径14cm・底径3.8cm。	Po.1
3	土師器器台	第２層	受け部を欠く。器台貫通孔あり　脚部は無脚円錐台状。円窓３個。残存器高８cm、脚裾部径12cm。	Po.4
4	土師器壺	床　面	平底小形壺。器台12cm・口径９cm・頸径6.3cm・胴径10.3cm・底径3.5cm。	Po.6
5	土師器甕	床　面	胴下半部を欠く小形の甕。残存器高６cm、口径13.8cm、頸径11.5cm。	Po.2
6	土師器甕	第２層	波状口縁台付甕。台部を欠く。残存器高23.6cm・口径20cm・頸径16.3cm・胴径25.2cm・底径6.6cm。	Po.9

第33図　ＫＳ第15号住居跡出土遺物

ｂ層の方が暗い。第2層は暗褐色土および黄褐色土で、住居全体に広く分布する。第3層は暗い茶色および黒色土で壁際に堆積している。第4層は1～3層と較べ固くしまっており、粘性が強く、生活層と考えられる。

遺物は大部分が床面や生活層上面から出土し、すべて土師器である。第33図3の器台と6の甕は第2層中出土であるが出土位置は床面に近いもので、これらはすべて住居廃絶時かその直後の一括遺物と考えられる。

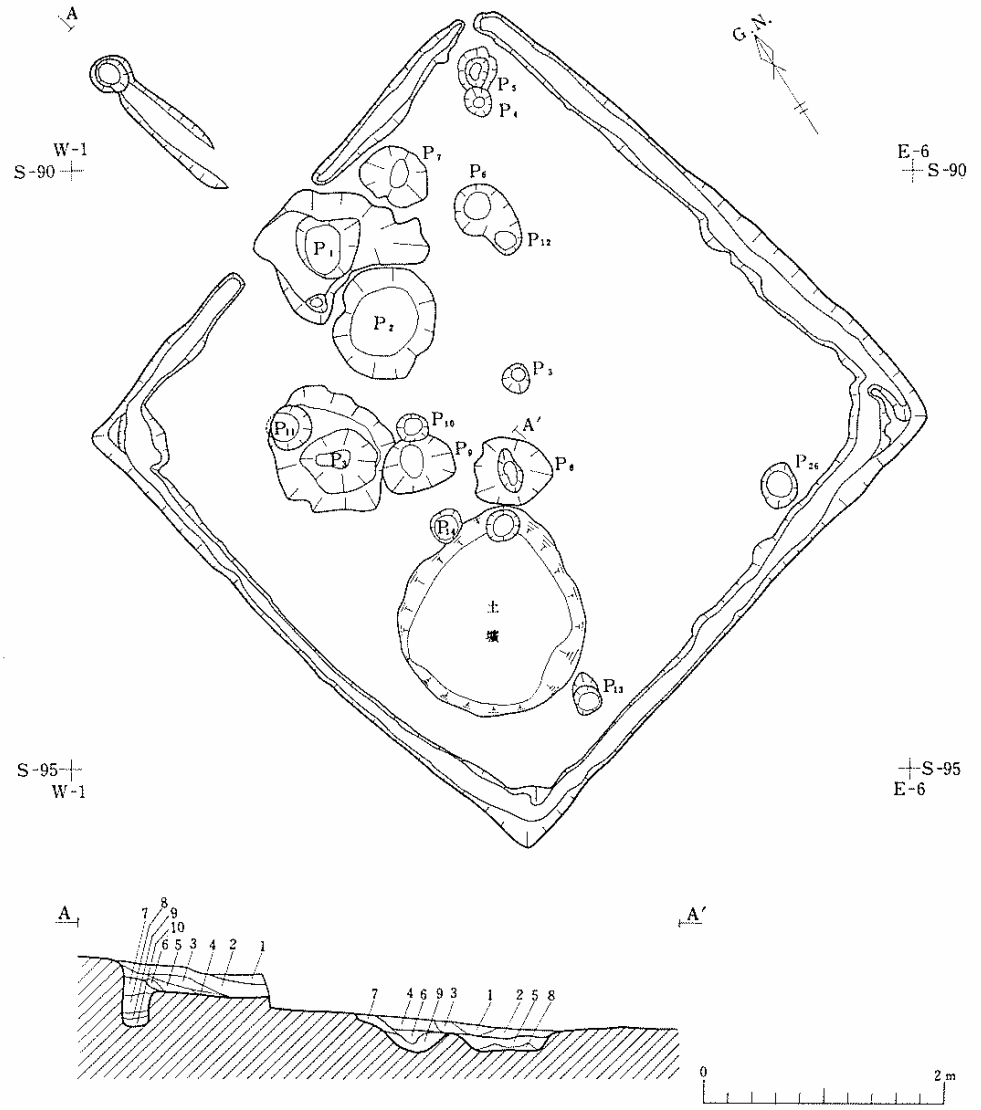
〔遺物〕　**土師器高坏**：第33図は無段平底の坏部と長脚円錐台状脚部からなる高坏である。坏口縁・体部は僅かに内弯しながら外傾している。底部内面は丸底状に緩やかに凹んでいる。器面調整は内・外面ともヘラミガキである。脚上部は柱実で、中央・下部から裾に向かって円錐台状に開く。脚中央下部には直径約1.5㎝の円窓が3個あいている。外面の器面調整はヘラミガキである。内面は上半部がオサエ、下半部が刷毛目である。オサエの下にナデツケ状の縦に長い調整が残っている。

土師器器台：第33図3は受け部を欠く器台の脚部である。脚部は全体として円錐台状であるが、上部と中・下部の境にくびれがある。くびれの上は器壁が厚くなり柱実に近い形状を示すが、この部分に受け部からの貫通孔があけられている。貫通孔は中央部が狭く、上下に僅かに開いている。脚中央部には直径約1.1㎝の円窓が3個ある。外面の器面調整はヘラミガキであるが磨滅が著しい。内面は上半部がナデツケの後ヘラナデを加1えているようであるが明確でない。下半部は刷毛目の後下部をヨコナデしている。

土師器坏：第33図2は体部外面中央にくびれ、内面に稜をもつ坏である。口縁部は内弯気味に外傾し大きく開きながら延びる。体部は内弯し、底部に至ってすぼまる。底部は小さく平底であるが他の部分に較べ部厚い。器形と製作技法の関係で特徴的なのは、くびれの部分で成形時の接合痕(積み上げ痕)を顕著に残している。外面の器面調整は口縁上部がヨコナデ、下部が刷毛目のち軽いヘラミガキ、胴・底部は軽いヘラミガキである。これらの器面調整はくびれ部の接合痕を覆ってはいるものの、それを消すに至っていない。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴底部が粗いヘラミガキである。

土師器壺：第33図4は単純口縁の小形壺である。口縁部は内弯気味に外傾し、胴部は縦長の球形で、底部は小さな平底となっている。最大径は胴部中央にある。器面調整は口縁部が内・外面とも刷毛目後ナデ・ヨコナデ、胴部外面は粗いヘラミガキである。内面の調整は不明であるが、粘土紐積み上げ痕を消し去っている。

土師器甕：第33図5は小形の甕で、破片資料であるが実測図を作成した。口縁部は内弯気味に外傾し、胴部が内弯する。口縁部が肥厚しているのが特徴的である。外面の器面調整は刷毛目であるが、磨滅が著しい。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデである。



カマド煙道部

1	暗褐色土	ローム少量含む、堅い。
2	褐色土	焼土多量に含む。軟らかい。
3	褐色土	焼土少量、ローム多量に含む。
4	黄褐色土	ローム多量に含む。
5	暗黄褐色土	ローム・粘土含む。
6	赤褐色土	焼土をブロック状に含む、堅い。
7	褐色土	砂を含む。軟らかい。
8	暗褐色土	砂を含む。
9	黒色土	多量の炭を含む、粘土少量含む。
10	黄色土	ローム多量に含む。

燃焼部掘り方・土壙

1	暗褐色土	焼土・ローム・木炭少量含む。
2	暗茶褐色土	〃　〃
3	暗茶褐色土	〃　〃
4	暗褐色土	〃　〃
5	暗茶褐色土	焼土・木炭少量含み、ロームを多量（斑状）に含む。
6	黒褐色土	5に比べ、ロームの量少ない。白い粘土含む。
7	褐色土	焼土・木炭を少量、ロームを粒状に含む。
8	暗褐色土	焼土・木炭・ロームを少量含む。
9	暗褐色土	〃　〃

※　1～3・5・8もしくは1～5・8が土壙堆積土の可能性と、1～4、5・8、6・7・9がそれぞれまとまりをもつ堆積土の可能性（浅い掘り方、土壙、カマド掘り方）もある。

第34図　ＫＳ第21号Ａ住居跡

第33図6は台付甕であるが、台の大部分は欠いている。口縁部は外反し、端部が波状をしている。波状は上・下からの交互押圧によって形づくられている。胴部はやや横長の球形である。器壁は約5㎜で、大きさの割に薄く、硬く焼き締っている。色も他の土師器が褐色であるのに対し赤味の強い暗褐色で一見して相違する。器面調整は口縁部内外面が刷毛目後ヨコナデ、胴部外面が刷毛目後ヘラケズリである。胴部内面はヘラナデである。

ＫＳ第21号Ａ住居跡

〔位置〕　ＣＫ・Ｌ－82・83区付近、鴻ノ巣台地の南斜面発掘区の東側袖部分で発見された。

〔平面形・重複〕　第55号住居跡と重複し、その堆積土を切っている。調査の初期の段階では、トレンチ調査であったため、ＣＫ－82・83区にかかる部分を一括して掘りあげてしまい、その時点で二つの住居跡の存在と、平面形を確認するに至った。このため、第22号Ａ住居跡の西側半分は壁の大部分を壊してしまい、周溝を検出するに留まった。

住居平面形は残存部の壁と周溝によってほぼ正方形で、その規模は南北軸・東西軸とも約5.0㎡であることが確認できた。

〔床面〕　住居床面はほぼ平坦で、掘り方底面（地山）と一致している。

〔壁〕　住居壁の大部分は第55号住居跡の堆積土で、一部地山の部分もある。前述のように住居北側部分の壁は調査時に壊してしまった部分が多い。残存部の壁高は東側が約50㎝、南側が約20㎝である。

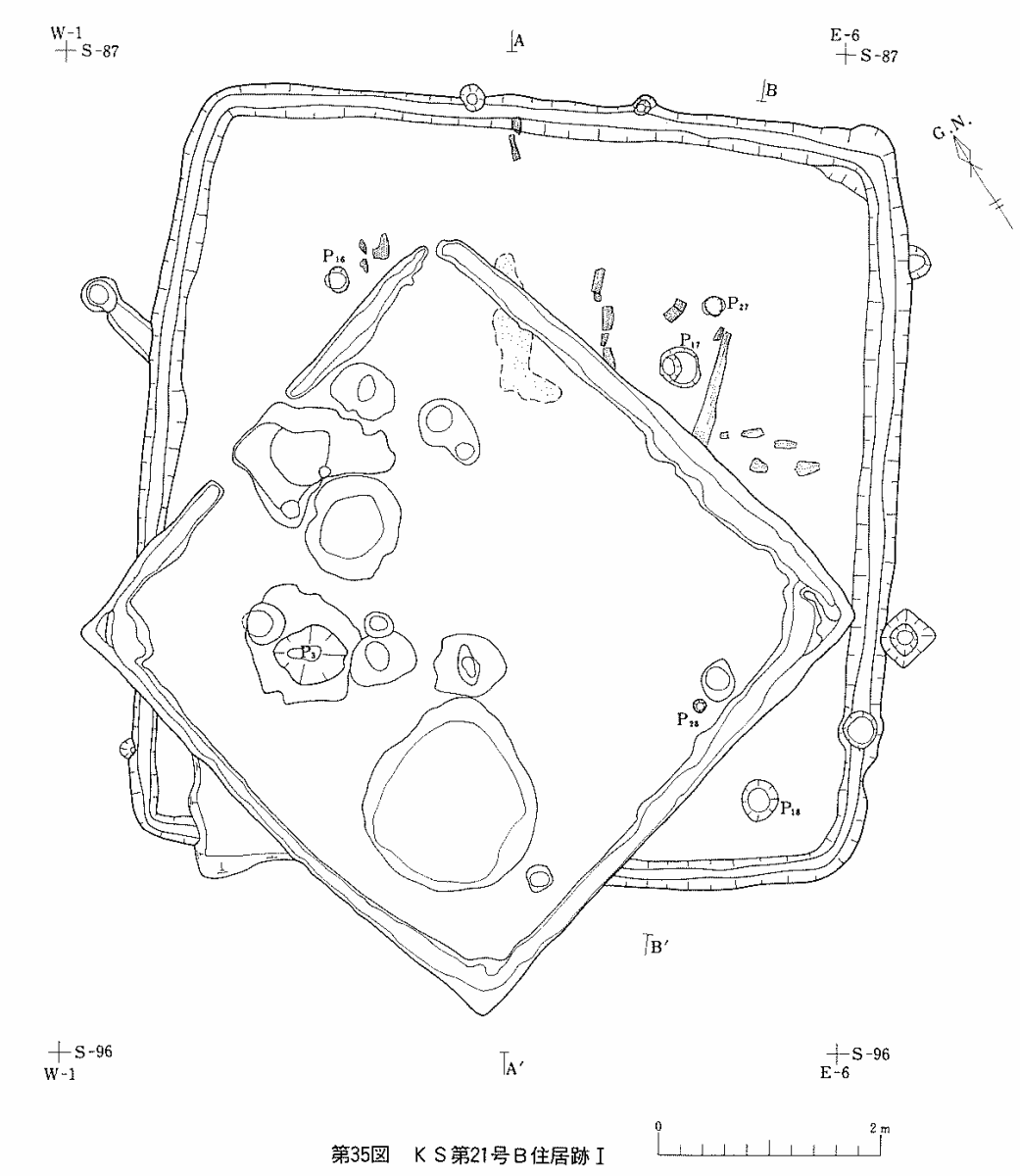
〔柱穴〕　住居内からは12個のピットが検出されている。この中で、$P_{6・26}$と$P_{11・13}$は住居南北軸(カマド主軸線と一致)に対して左右対称な位置にある。また、これらのピットを結んだ線は長方形となり、住居の各辺と平行である。柱穴掘り方と柱痕跡の識別は必ずしも明瞭ではないが、このような配置の規則性から、$P_{6・26・11・13}$は柱穴ではないかと推定される。なお、各々のピットの深さはP_6が65㎝、P_{26}が63㎝、P_{13}が43㎝、P_{11}が68㎝である。柱間は住居東西軸が2.4㎡住居南北軸が3.4㎡である。

〔周溝〕　カマド部分を除き、ほぼ住居全体の壁直下に周溝がめぐっている。周溝は断面「し」状で、幅20㎝・深さ約5㎝である。

〔カマド〕　住居北壁のほぼ中央にカマドが設置されている。カマドは燃焼部と煙道部からなるが、燃焼部全体と煙道部の一部は前途のトレンチ調査の段階で壊してしまった。このため、燃焼部で検出できたのはその掘り方だけである。燃焼部掘り方は不整の隅丸長方形をしており、皿状に凹んでいる（深さ約12㎝）。煙道部は溝状(トンネル式の上部が削平)で、先端がピット状になっている(煙り出し)。カマドの規模は、全長が2.7㎡(燃焼部は掘り方による)、燃焼部奥行0.8㎡・煙道部長1.9㎡・煙道部幅0.3㎡・煙り出しピット径0.35㎡である.また、残存する

煙道部底面と燃焼部付近では約20cmの比高がみられることから、煙道部と燃焼部との間は段状になり、奥壁が存在したものと推定される。なお、煙道部先端の煙り出しピットは煙道部底面より、約30cm深くなっている。

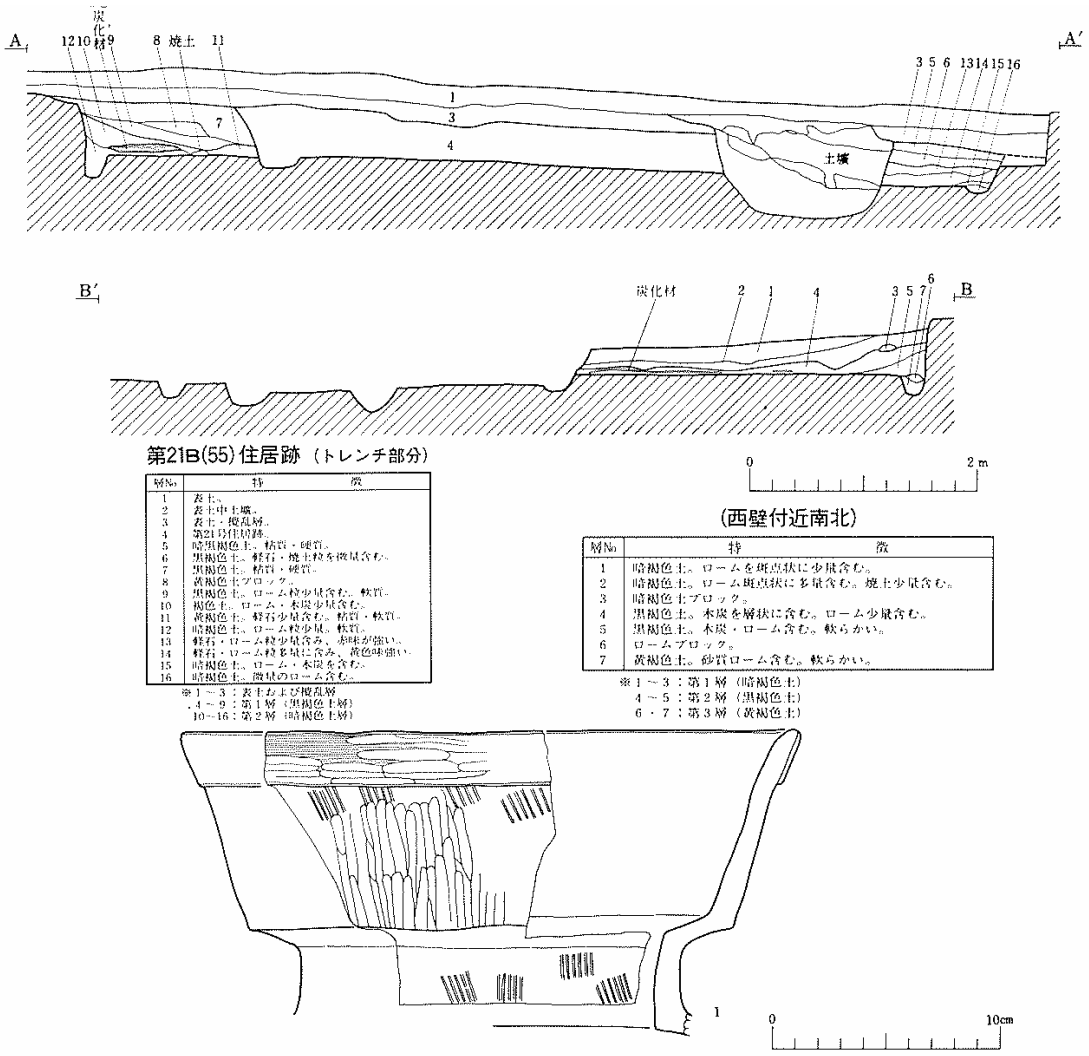
〔その他の施設〕　カマド右脇に楕円形のピット（P_7）がある。大きさは55×45cm、深さ24cmで、位置・規模等から貯蔵穴状ピットと考えられる。



第35図　ＫＳ第21号Ｂ住居跡Ⅰ

〔堆積土〕　住居内堆積土は黒褐色土で、焼土粒・木炭粒・軽石粒を多く含んでいる。

〔遺物〕　出土遺物には土師器坏・甕・須恵器坏・壺の破片がある。土師器坏は口縁部2点がロクロ使用・内面黒色処理、1点がロクロ不使用有段・内面黒色処理のものである。甕は口縁部4点がロクロ使用のもので、その中の1点が内面黒色処理されている。須恵器坏は口縁部が7点、底部が11点でいずれも回転ヘラ切りである。この地高台付坏1点、壺頸部1点がある。これらの遺物は床面出土のものが多いが、堆積土出土のものとの識別ができなくなってしまった。



第36図　ＫＳ第21号Ｂ住居跡Ⅱ

ＫＳ第21号Ｂ住居跡

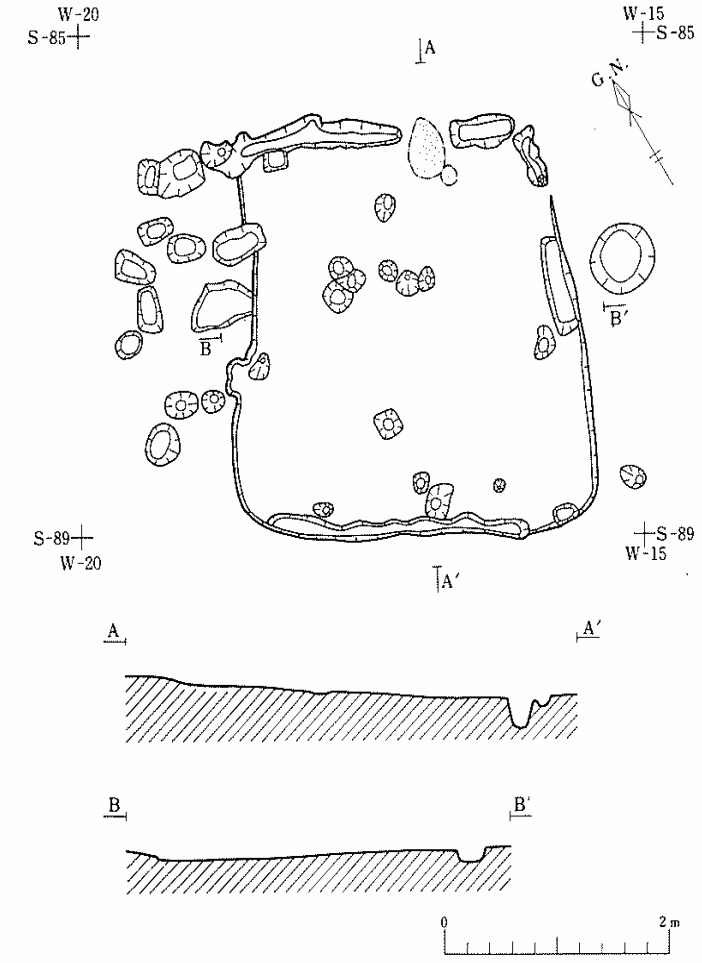
〔平面形・重複〕　第21号Ａ住居跡と重複し、住居中央部から南側が切られている。また、トレンチ調査の段階で大部分の住居西側堆積土を掘りあげてしまった。住居平面形は正方形で、規模は南北軸6.8m、東西軸6.6mである。

〔壁〕　検出された壁はすべて地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕　床面はほぼ平坦である。床面直上には堅い黒褐色土層が約1cmの厚さでみられ、生活層と考えられる（断面図には示せなかった）。

〔柱穴〕　第21号Ａ住居跡と重複している部分を含め、住居内から柱穴と推定されるピットが4個($P_{27・28・3・16}$)発見された。これらのピットは住居対角線上に位置し、各々を結んだ線は住居平面形と相似形になる。また、各々のピットの深さはP_{27}が67cm、P_{28}が72cm、P_{3}が50cm、P_{16}が63cmで、60cm前後と共通している。柱間は、南北軸が3.3～3.6m、東西軸が3.4～3.5mである。

〔周溝〕　住居全域の壁直下にめぐっている(一部掘り過ぎて不明になった部分を除く)。断面「し」状で、幅20～30cm、深さ14～20cm程である。



第37図　ＫＳ第26号住居跡

〔炉・その他の施設〕　住居中央から北側に寄った所に焼土(焼面？)の分布がみられ、炉と考えられる。一部第21号Ａ住居跡の周溝に切られているが、不整帯状で幅40cm、長さ140cmある。この他、特に施設は検出されなかった。

〔堆積土・遺物の出土状況〕　住居内堆積土の記録として、南北2ヶ所（中央部・東側部）で断面図を作成したが、層の対比は充分にできなかった。しかし、次の点だけ指摘しておきたい。1.層の基本的な堆積状況は将棋倒し状である。2.層の

上部は暗褐色土で、中央部および床面付近は暗褐色か黒褐色土（炭化材のためか）、壁際は黄褐色かロームを含む暗褐色土である。3.床面上2～5cmの部分には炭化材が密集しているわけではないが面的に分布する。これらを総合すると火災住居であることと、最終的な埋り方が自然堆積である可能性がみられる。

遺物としては第36図の土師器壺が床面から、坩・高坏・甕などの破片が堆積土から少量出土している。第36図は口縁部から頸部に至る大破片で、口縁上部が複合する有段口縁の壺である。口径は27cm、頸径16.5cmと推定される大形の壺である。口縁部は直線的に外傾している。外面の器面調整は口縁上部の複合部はヨコナデ後ヘラミガキ、口縁中・下部から頸部は刷毛目後ヘラミガキである。内面の器面調整は口縁部がヘラミガキ、段状部分から頸部がヘラケズリで一部刷毛目が施こされている。

ＫＳ第26号住居跡

〔位置〕　ＢＥ－81区付近、鴻ノ巣台地の南斜面発掘区中央部南裾に位置している。

〔平面形・重複・壁〕　第26号住居跡は他の遺構との重複はないが、上部の削平が著しく、壁の残存高はいずれも5cm以下である。住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸3.2m・東西軸2.9mである。

〔施設等〕　北壁および東・南壁の壁直下に周溝がめぐっている。北壁ではカマド（推定）部分を除き全体に、東壁では途切れながら北側に、南壁では両端を除いた全体にみられる。周溝の断面形は「し」状で、幅15～20cm、深さ約10cmである。

北壁の中央から西によった部分の床面に焼土(焼面)がみられる。この焼土は楕円形(50×35cm)で、北端が北壁部分に接し、その両側で周溝が途切れている。焼土の上部構造は削平のため不明であるが、位置・規模などからカマドの燃焼部底面ではないかと推定される。

住居内で合計15個のピットが検出されたが、配置に規則性がみられず、いずれも柱穴とはみなし難い。

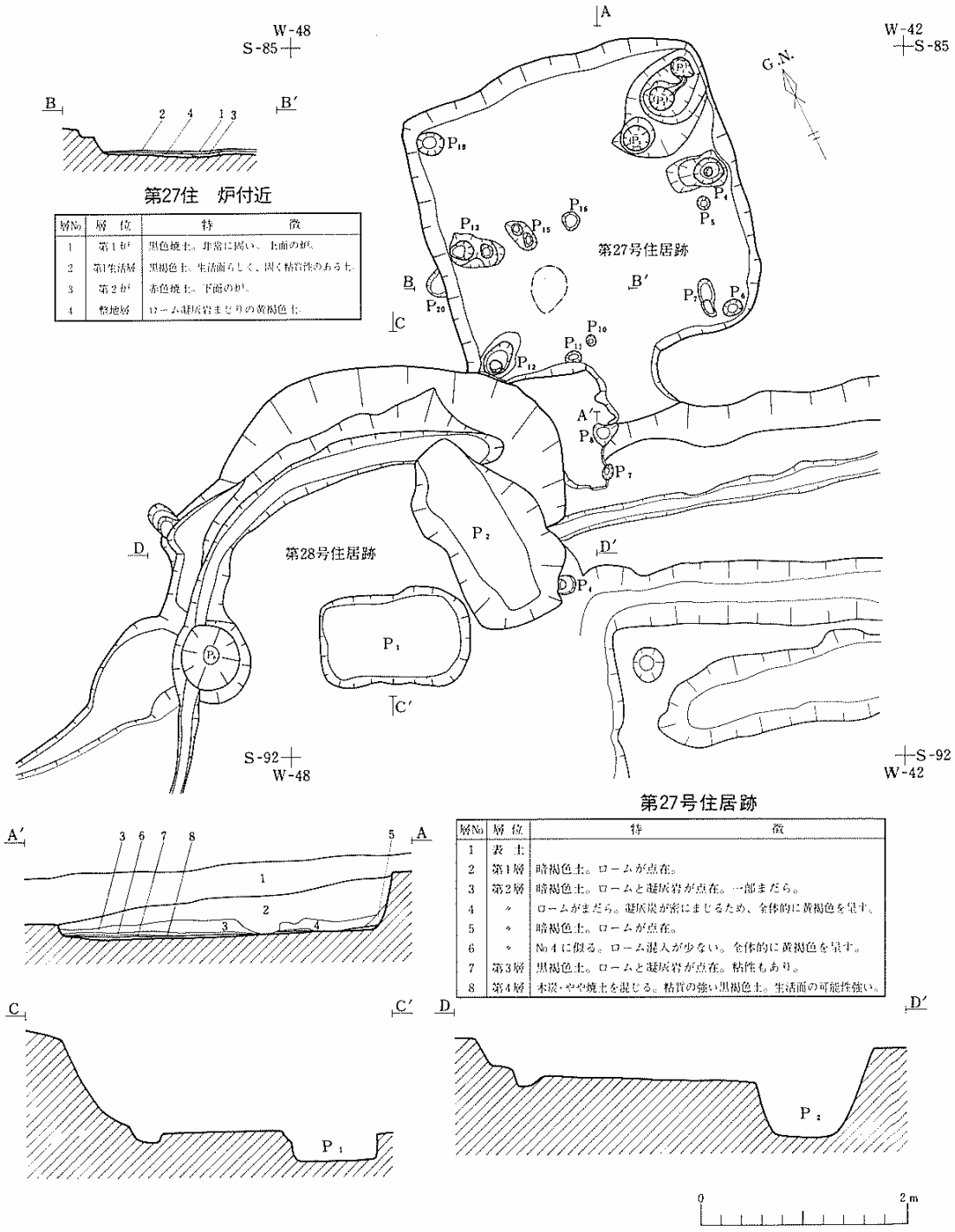
〔遺物〕　遺物は住居内堆積土から須恵器甕破片4点、ピット群から土師器破片8点が出土している。

ＫＳ第27号住居跡

〔位置〕　ＢＰ－80区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区西裾部に位置している。

〔平面形・重複〕　第27号住居跡は南東隅が第28号住居跡の上部と重複しているが切合いについては不明である。この他、南壁中央がピットによって一部壊されているが、住居全体の保存は良い。住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸2.8m、東西軸2.8mである。

〔壁〕　検出された壁は地山(凝灰岩)で、床面からほぼ垂直に立ちあがる。



層No	層位	特徴
1	第1層	黒色焼土。非常に固い。上面の層。
2	第1生活層	黒褐色土。生活面らしく、固く粘質性のある土。
3	第2層	赤色焼土。下面の層。
4	整地層	ローム凝灰岩まじりの黄褐色土。

第27号住居跡

層No	層位	特徴
1	表土	
2	第1層	暗褐色土。ロームが点在。
3	第2層	暗褐色土。ロームと凝灰岩が点在。一部まだら。
4	〃	ロームがまだら。凝灰岩が密にまじるため、全体的に黄褐色を呈す。
5	〃	暗褐色土。ロームが点在。
6	〃	No.4に似る。ローム混入が少ない。全体的に黄褐色を呈す。
7	第3層	黒褐色土。ロームと凝灰岩が点在。粘性もあり。
8	第4層	木炭・やや焼土を混じる。粘質の強い黒褐色土。生活面の可能性強い。

第38図　ＫＳ第27･28号住居跡

〔床面・施設等〕　床面はほぼ平坦で、その上面には生活層が薄く貼りついている。また、住居中央から西側の部分には床面が二面あり、各々に生活層・炉と考えられる焼土が認められる。焼土は楕円形をしており、上面が50×40㎝、下面が40×10㎝である。

住居内で合計15個のピットが検出された。このうち、$P_{1・4・6・12・13・18}$は住居東壁と西壁沿の対称的な位置にあり、$P_{1・4・12}$では掘り方と柱痕跡の識別もなされたことから、柱穴と考えられる。柱間は住居東辺が2.4m(1.1m＋1.3m)、南辺が2.4m、西辺が2.2m(1.1m＋1.1m)、北辺が2.6mである。

この他の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕　住居内堆積土は4層に大別され、第1～3層は水平状（やや将棋倒し状にも近い）に厚く堆積し、第4層は床面に薄く貼りついている。第1層は暗褐色土、第2層は地山の土が混在し、黄褐色や暗褐色土になっている。第3層は黒褐色土で粘性もあり、やや第4層に近い。第4層は木炭や焼土の混じる粘質の強い黒褐色土で、床面に薄く貼りついており、生活層と考えられる。

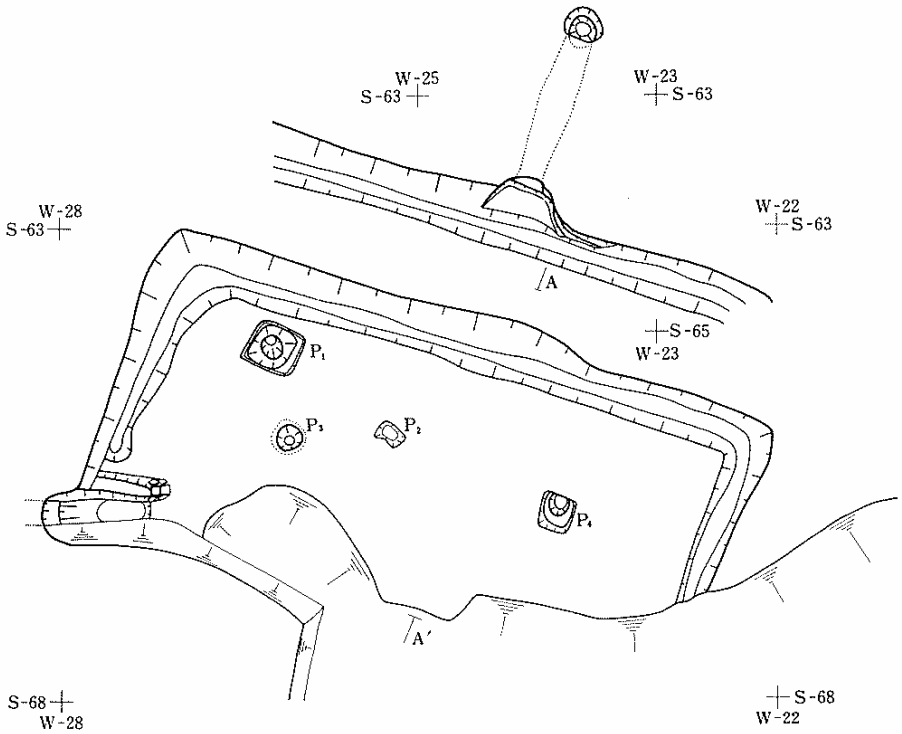
〔遺物〕　遺物としては住居内堆積土から底部切り離しがヘラ切りの土師器坏底部1点・須恵器蓋口縁部1点、生活面を覆っている第2層からロクロ使用後ヘラケズリされた土師坏底部1点が出土している。

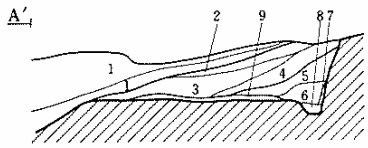
ＫＳ第28号住居跡

〔概要〕　第28号住居跡は北東部分が第27号住居跡と重複しているが、切り合い関係は不明である。また、住居跡南側は削平を受けているため、全体の形状は必ずしも明らかでない。残存している北側部分の平面形は半円状で、その内側に幅30～40㎝、深さ約10㎝の溝がめぐっている。この溝は北壁と西壁に沿ってみられ、北西部分では壁と溝の間が不整三ヶ月状の平坦面（幅20㎝・長さ150㎝）となり、この平坦面は床面より20㎝程高い。床面はほぼ平坦であるが、僅かに南側へ傾斜している。床面には中央部と北東部に隅丸長方形の土坑がある。中央部の土坑（P_1）は長軸1.4m・幅1m・深さ30㎝で、ローム・凝灰岩が一面に混じった灰褐色土が埋まっている。北東部の土坑（P_2）は長軸2m・幅1m・深さ50㎝で、東壁と接している。また、この土坑に埋まっている灰褐色土および黒褐色土は住居床面の一部が埋まってから堆積している。したがって、P_2は住居跡が埋まる過程で掘り込まれた可能性もある。

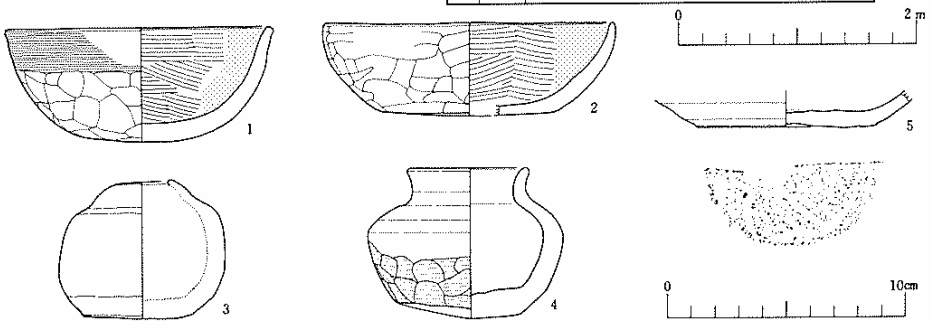
第28号住居跡は平面形が円形を基調とする点において、他の住居跡と大きな違いがある。また、残存部分において炉やカマドも検出されなかった。したがって、ここでは住居跡として扱ったが、住居としても特殊なものか、それともその他の施設なのか検討を要する。

〔堆積土〕住居内堆積土は4層にわかれるが、堆積状況については水平状か将棋倒し状か区





層No	層位	特　　徴
1	表土	
2	第1層	暗褐色土。木炭・焼土・ローム粒を含む。
3	〃	No.2よりローム粒多く、やや明るい。
4	〃	黒褐色土。ローム粒と若干の焼土含む。
5	第2層	ロームを多量に含み、焼土やや含む。暗褐色土。
6	〃	黒褐色土。焼土多く、ローム粒・木炭をやや含む。
7	〃	汚れたローム。
8	〃	ローム＋焼土＋暗褐色土。全体に暗黄褐色を呈す。
9	第3層	チョコレート色。粘性ある土。ローム・焼土含む。（生活面）



番号	種　類	層　位	特　　徴	器　高	口　径	底　径	番　号
1	土師器坏	第1層	口縁部外反　底部丸底の無段坏。	4.8cm	11.3cm	——	Po.2
2	土師器坏	周　溝	口縁・胴部内弯平底の無段坏。内・外面黒色。	3.9cm	12.2cm	7.6cm	Po.3
3	土師器壺	床　面	無頸小形壺。胴径7.0cm。	5.8cm	2.0cm	4.6cm	Po.4
4	須恵器壺	周　溝	口縁部外反短頸小形壺。胴径8.2cm。	6.4cm	4.1cm	5.0cm	Po.5
5	須恵器坏	カマド	無段平底坏。底部切り離し回転ヘラ切り。	——	——	7.5cm	Po.1

第39図　ＫＳ第34号住居跡

別がつかない(断面図を地形の傾斜軸に直交して作成したため)。なお、第1層は暗褐色土、第2層は黄褐色土、第3層は黒褐色土、第4層は暗茶褐色土で、第2～4層は地山の凝灰岩を含むのが特徴である。遺物は出土していない。

ＫＳ第34号住居跡

〔位置〕　ＣＢ－73区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区中央部に位置している。

〔平面形・重複〕　第34号住居跡は他の遺構との重複はないが、住居南側が削平されている。また、後述するようにカマドは作りかえが行なわれている。住居平面形は方形で、規模は南北軸2.2＋2m東西軸5.0mである。

〔壁・周溝〕　検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。残存壁高は保存の良い北・西壁で26～60cmである。周溝は西壁のカマド部分を除き、残存部分全域の壁直下にめぐっている。周溝の断面形は「し」状で、幅20～30cm、深さ10～20cmである。

〔床面・柱穴〕　床面はほぼ平坦である。残存している床面から4個のピットが検出された。このうち$P_{3\cdot4}$は推定住居対角線上に位置している。また、$P_{3\cdot4}$は住居東西の対称的な位置にあり、両者を結んだ線は北壁と平行になることから柱穴と推定される。この場合の柱間は2.3mである。

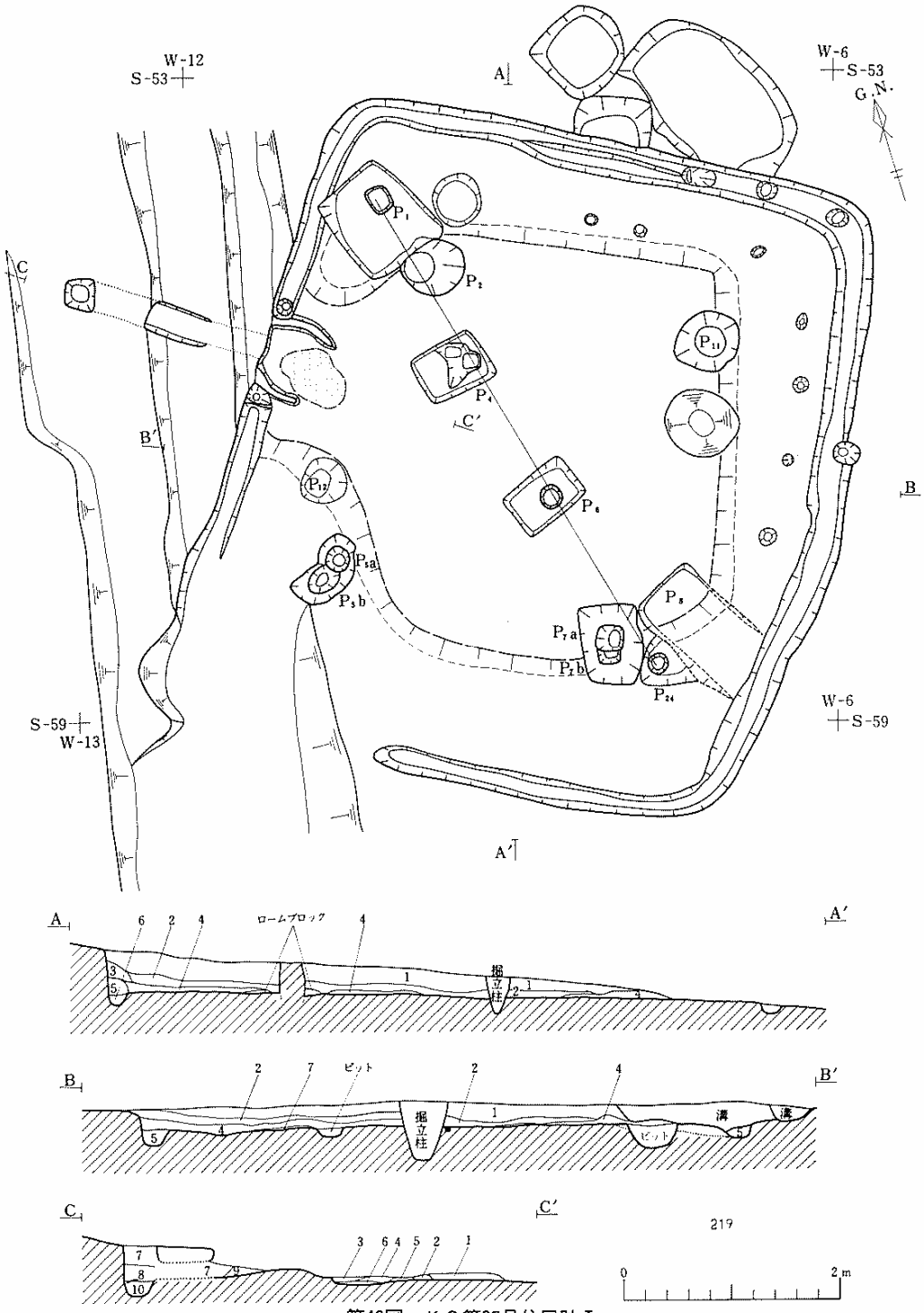
〔カマド〕　残存している西壁の南端部分で、カマド(北半分)が検出された。燃焼部は、奥行80cmで、右側壁は粘土積みあげによって構築している。側壁の前端部分(焚き口)には土師器(甕？)がある。土師器は壊れているため補強として据えたのか、否かはっきりしない。また、燃焼部奥壁から外側に煙道がのびていることは確認できたが、樹木のため全体を調査することはできなかった。

この他、北壁中央部からやや東側に偏った部分で旧い段階のカマドが検出された。このカマドは燃焼部の大部分が失なわれており、奥壁付近と煙道部が残っていた。煙道はトンネル式で、先端がピット状になっている(煙り出し)。煙道の長さは1.5m、先端ピットは直径30cm・深さ90cmである。

〔堆積土〕　住居内堆積土は3層にわかれ、第1・2層は将棋倒し状の堆積を示し、第3層は床面に薄く貼りついている。第1層は暗褐色ないしは黒褐色土である。第2層は地山土や焼土・木炭等を含むのが特徴の暗褐色・黒褐色・暗黄褐色土である。地山は壁の崩落土で、木炭・焼土は旧いカマド崩壊土と考えられる。第3層はチョコレート色の粘性ある土で床面に貼り付いており、生活層と考えられる。

〔遺物〕

堆積土から須恵器坏底部ヘラ切り1点、土製支脚1点が出土している。床面からは土師器壺(3)、



第40図　ＫＳ第35号住居跡Ⅰ

カマドから須恵器坏（5）、周溝から土師器坏（2）、須恵器壺（4）などがややまとまりをもって出土している。

土師器

第39図1・2は両者とも無段の坏であるが、1は口縁部外反底部丸底、2は口縁・体部内弯底部平底である。1の器面調整は外面口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ後軽いヘラミガキである。内面は口縁に平行な粗雑なヘラミガキで黒色処理されている。2は外面がヘラケズリ後ヘラミガキ、内面が口縁に平行なヘラミガキで、内・外面とも黒色処理されている。

第39図3は丸い小形の壺である。外面の器面調整はオサエであるが磨滅が著しい。底面には敷物状の圧痕がある。内面は観察できない。

須恵器

第39図5は上半部を欠くが無段平底の坏で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。

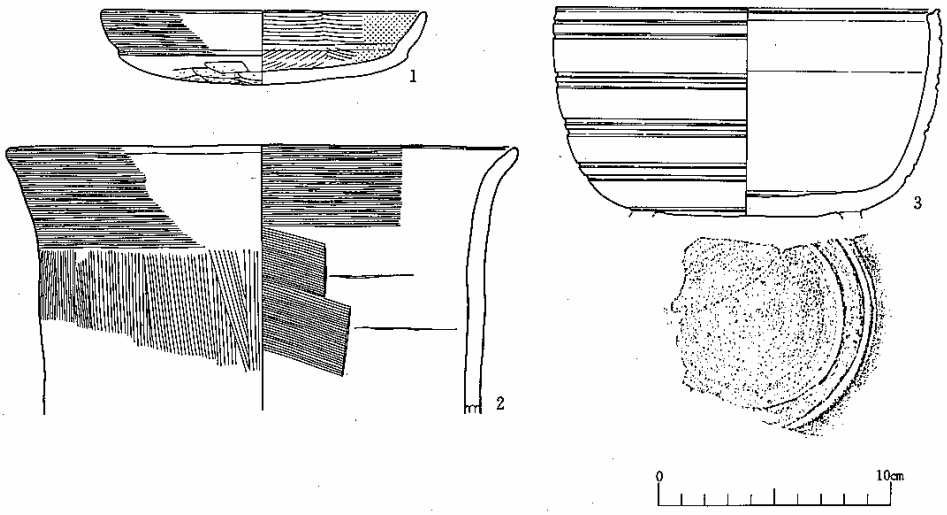
第39図4は口縁頸部の短い小形の壺である。口縁部は短く外反する。器面調整はロクロナデであるが、外面下半部はヘラケズリされている。

ＫＳ第35号住居跡

〔位置〕　ＣＨ－70区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区の上部中央に位置している。

〔平面形・重複〕　第35号住居跡は第1掘立柱建物跡および北東から南西に走る溝と重複し、両者によって切られている。住居平面形は隅丸長方形で、南北軸6.0m・東西軸5.4mである。

〔壁・周溝〕　検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。残存壁高は保存の良い北壁で約40cmである。周溝はカマド部分と削平された南西隅部分を除き、住居全



第41図　ＫＳ第35号住居跡Ⅱ

第35住堆積土

層No.	層位(遺物取り上げ)	特　　徴
1	第1層（第1層）	黄褐色土。焼土・黄色の粒を含む。
2	第2層（　〃　）	茶褐色土。焼土・黄色の粒を含み、その割合は第1層より多い。
3	〃（　〃　）	〃　。ローム粒がNo.2層より多い。
4	第3層（第2層）	暗褐色土。焼土が多量に混じり、スミも多い。
5	第4層（周溝内）	黒色土。
6	〃（　〃　）	黄褐色土。ロームを多く含む。
7	第5層	褐色土。焼土を多少含む。粘性強く固い。

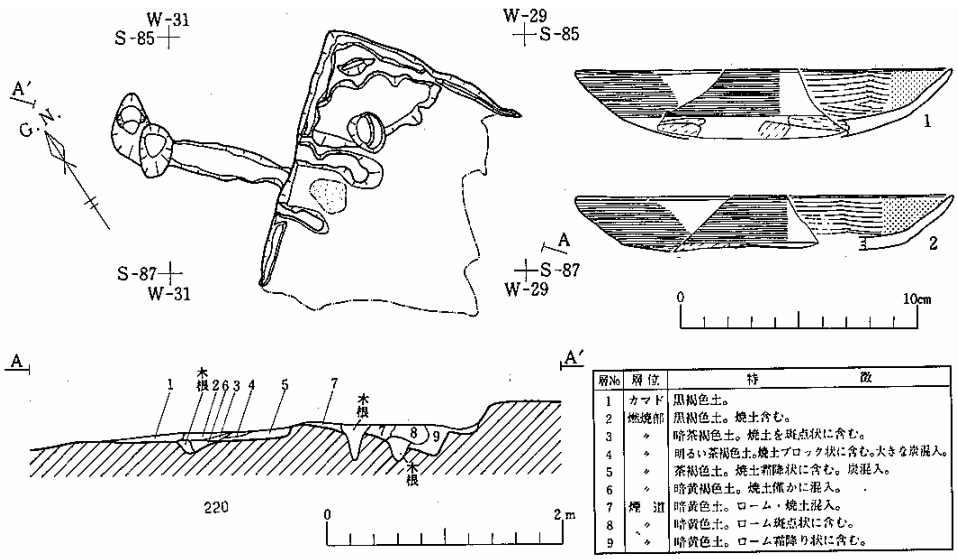
カマド堆積土

層No.	層　位	特　　徴
1	カマド 1層	黒褐色土。白色土の崩壊土（カマド）含む。
2	カマド 2層	暗褐色土。焼土が小さな斑点状に混入。
3	〃	茶褐色土。焼土が霜降状および斑点状に混入。
4	〃	暗黄褐色土。焼土霜降り状にはいる。
5	〃	茶褐色土。焼土つぶ状に入る。
6	〃	暗褐色土。炭の大きな混入。焼土も斑点状、霜降り状にみられる。
7	煙　道　部	暗褐色土。
8	〃	黒色土。焼土混入。
9	〃	暗褐色土。焼土混入。ローム霜降状に含む。
10	〃	暗褐色土。

域の壁直下にめぐっている。周溝の断面形は「し」状で、幅20～30cm・深さ5～8cmである。

〔床面・柱穴〕　床面はほぼ平坦である。床面下を精査したところ、壁に沿う溝状の浅い凹みを検出した。これは破線で図示したが、溝幅約1mで、カマドの部分では途切れている。この溝は住居掘り方と考えられる。床面では4個の柱穴($P_{2\cdot11\cdot7\cdot5}$)が検出された。このうち、$P_{7\cdot5}$では掘り方と柱痕跡の識別が可能であった(7a・7b・5a・5b)。また、$P_{7\cdot5}$については掘下げの過程で、2個の柱穴が重なりあっていることが判明した。これらの柱穴について、配置をみると$P_{11\cdot7\cdot5\cdot2}$は住居対角線上にあり、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。柱間は、住居南北軸が2.8m(P5a・7a使用)と3.0m(P5b.7b使用)、住居東西軸が2.7m(P5a・7a使用)と2.8m(P5b.7b使用)である。この他、北壁から東壁に沿って直径約10cmのピットが7個列状に並んでいる。配置に規則性がみられるので、支柱穴か、何らかの施設に伴う柱穴と考えられる。

〔カマド〕　住居西壁中央のやや北側にカマドが設置されている。カマドは燃焼部と煙道部からなり、全長2.6mである。燃焼部は幅80cm・奥行60cmで、側壁を粘土積み上げによって構築している。底面は焼けており、その焼土は焚き口の手前30cmまで延びている。カマド燃焼部奥壁



層No.	層位	特　　徴
1	カマド	黒褐色土。
2	燃焼部	黒褐色土。焼土含む。
3	〃	暗茶褐色土。焼土を斑点状に含む。
4	〃	明るい茶褐色土。焼土ブロック状に含む。大きな炭混入。
5	〃	茶褐色土。焼土霜降状に含む。炭混入。
6	〃	暗黄褐色土。焼土僅かに混入。
7	煙　道	暗黄色土。ローム・焼土混入。
8	〃	暗黄色土。ローム斑点状に含む。
9	〃	暗黄色土。ローム霜降り状に含む。

第42図　ＫＳ第37号住居跡

部分の両側に1対のピット(直径10～20㎝)があり、カマドに関連する施設(支えの柱？)と考えられる。煙道はトンネル式で、先端はピット状(煙り出し)になっている。煙道は全長1.9㎜・幅約25㎝で、先端のピットは直径30㎝・深さ52㎝である。

〔堆積土・遺物の出土状況〕　住居内堆積土は4層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は黄褐色土で、住居全体の上部に厚く堆積している。第2層は茶褐色土で、住居中央部に広く堆積している。第3層は暗褐色土で、壁際から床面に堆積している。第4層は黒褐色土および黄褐色土で、周溝と壁際に狭い分布を示しながら堆積している。

遺物は堆積土・ピットから出土しており、特にまとまりはみられない。第36図1はP_{10}、2はP_{14}、3は出土層位不明である。破片として土器は有段の坏2点・甕1点が出土している。須恵器は底部ヘラ切りの坏2点・蓋口縁部4点・甕口縁部1点がある。

第41図1は外面の体部中央に段、内面に弱い稜のある土師器坏である。器面調整は段の上がヨコナデ、下がヘラケズリ、内面が口縁に平行なヘラミガキで黒色処理されている。

第41図2は口縁部が外反する土師器の甕で下半部を欠いている。器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面がナデ、内面がヘラナデである。

第41図3は高台付の須恵器坏で、高台部分を欠いている。口径16.5㎝・器高8.9㎝で、埦もしくは鉢に近い器形である。底部は丸底気味で口縁・胴部が僅かに内弯しながら立ち上がる。口縁部上端は外方にのび内側に沈線状の段を形成する。器面調整のロクロナデは内外面とも丁寧で均質に仕上げられている。外面には口縁下部から胴下部に至るまで二条一対の平行沈線が4ヶ所に引かれている。また、高台付け根の部分にも一条の沈線がめぐっている。

ＫＳ第37号住居跡

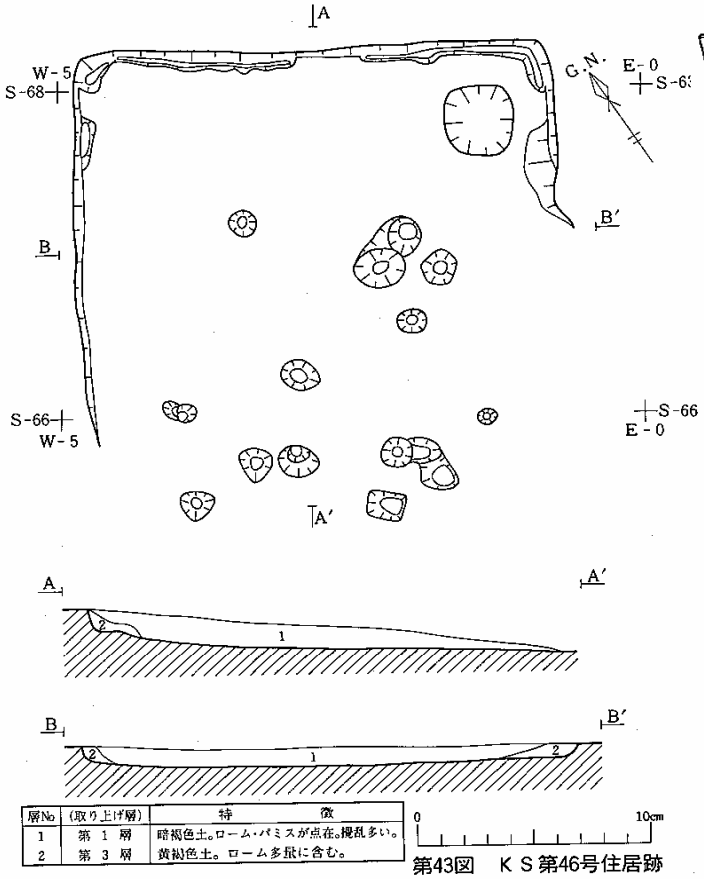
〔位置〕　ＣＡ－80区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区西側下部に位置している。

〔平面形・残存状況〕　斜面に位置しているため、住居南・東側は削平を受けている。残っているのは、住居北隅からカマドにかけてで、この部分から推定すると住居平面形は方形と考えられる。規模等については不明である。

〔壁・周溝〕　検出された壁は地山で、最も保存の良い北側での残存壁高は約20㎝である。周溝はカマド部分を除いた壁直下にめぐっている。断面「し」状で、幅約15㎝・深さ約4㎝である。

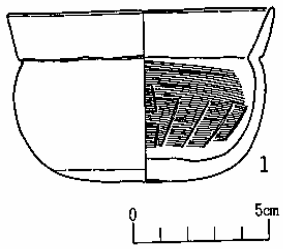
〔床面・施設〕　検出された床面は小範囲であるが(1.8×2.0㎜)、ほぼ平坦となっている。西壁にはカマドが設置されている。カマドは全長2.0㎜で、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は幅80㎝奥行80㎝で、側壁は粘土積み上げによって構築されている。煙道は長さ1.3㎜で先端がピット状になっている。先端のピットは直径30～40㎝の楕円形で、深さは約40㎝ある。

カマドの右脇は皿状に凹んでいる。形はやや不規則な楕円形(110×50)で、深さは15㎝程度



層No	(取り上げ層)	特　　徴
1	第 1 層	暗褐色土。ローム・パミスが点在。攪乱多い。
2	第 3 層	黄褐色土。ローム多量に含む。

第43図　ＫＳ第46号住居跡



である。

〔堆積土〕　住居内堆積土はあまり残っていない。カマド燃焼部には焼土を霜降り状あるいはブロック状に含む茶褐色土が堆積している。

〔遺物〕　出土遺物はすべて破片で、出土状況に特にまとまりはみられない。ただ、堆積土が薄いため床面か、僅かにその上から出土したものが多い。

第42図1・2は土師器坏で、1は体部中央に稜、2は体下部に段をもつものである。器面調整は外面の稜・段の上がヨコナデ、底部がヘラケズリ、内面が口縁に平行なヘラミガキで黒色処理されている。

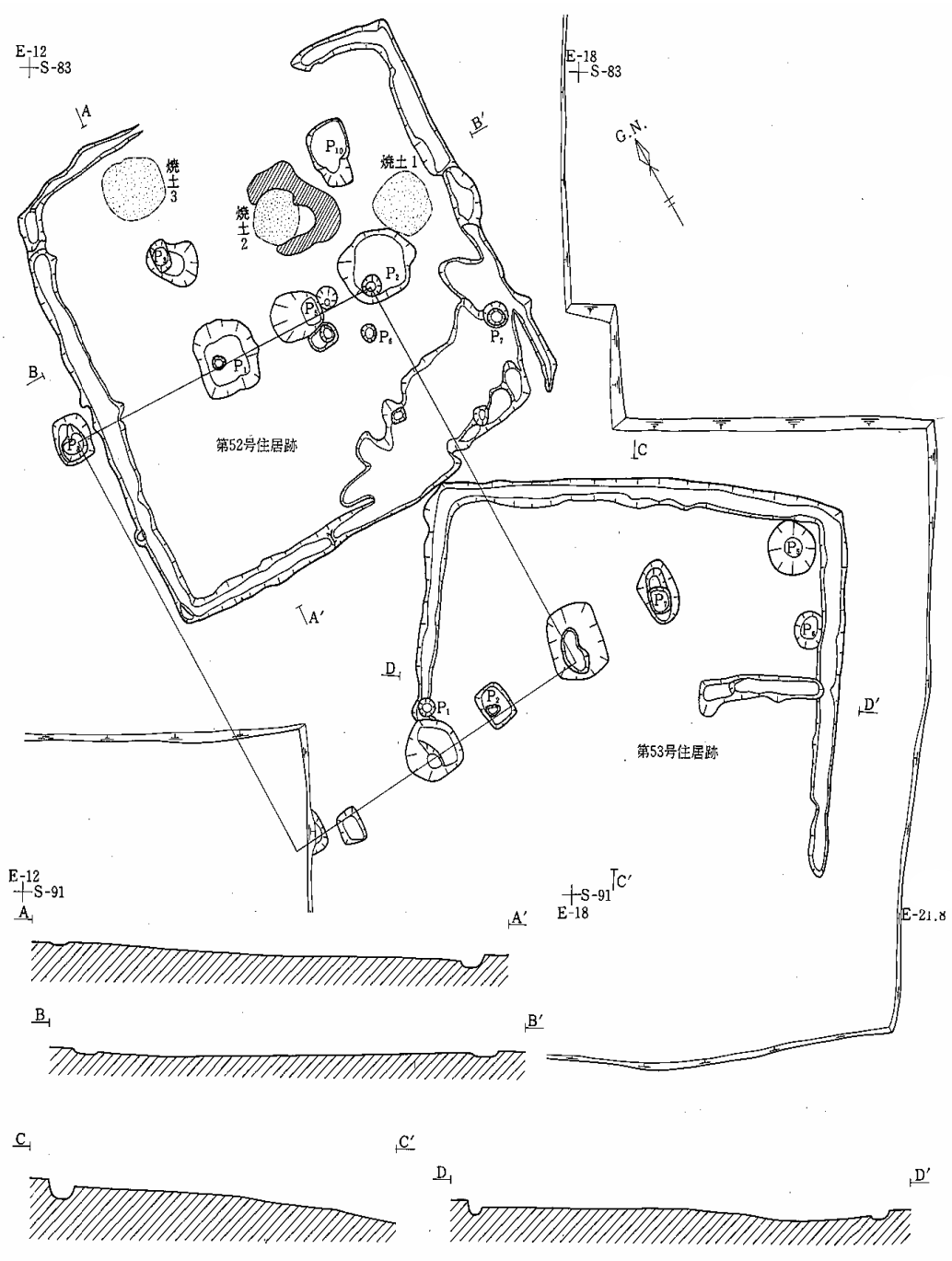
この他、土師器は坏口縁部3点・甕口縁部1点、須恵器は坏口縁部2点：ヘラ切りの底部2点・甕口縁部2点がある。

ＫＳ第46号住居跡

〔位置〕　ＣＩ－73区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区の中央に位置している。

〔平面形・残存状況〕　第46号住居跡は他の遺構との重複はないが、南壁周辺が削平されている。住居平面形は残存部から方形と推定され、規模は南北軸3.5m＋α・東西軸4.0mである。

〔床面・施設等〕　住居床面はやや凹凸があり、南側に向かって僅かに傾斜している。周溝は



第44図　ＫＳ第52・53号住居跡

北壁周辺の壁直下にみられる。周溝の幅は10～20cm、深さ5～10cmである。住居北東隅には隅丸方形のピット(60×60cm)がある。住居推定範囲から、15個のピットが検出されたが、その配置に規則性が見い出せず、柱穴か否か不明である。この他に施設等は検出されなかった。

〔堆積土〕　住居内堆積土は2層にわかれる。第1層は暗褐色土であるが、かなり攪乱を受けている。第2層は壁際に堆積している黄褐色土で、ロームを多量に含んでいる。

〔遺物〕　埦状の坏が1点出土している(第43図)。器高5.9cm・口径9.8cm・胴径9.2cmで、最大径は口縁部にある。口縁部は内弯気味に外傾し、体部は内弯する。底部は僅かに凹んでいる。口縁下部が胴上部と接合する部分は複合口縁状に肥厚し、外面に積み上げ痕を強く残している。器面調整は磨滅のため観察しにくいが、この部分にも及んでいる。しかし、積み上げ痕を消し去るには至らない。体部内面の器面調整はヘラナデである。

ＫＳ第52号住居跡

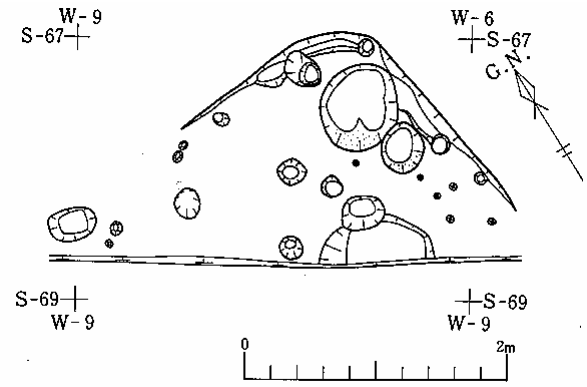
〔位置〕　ＣＯ・Ｐ－80区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区東端裾部に位置している。

〔平面形・重複〕　第52号住居跡はかなり削平を受け、堆積土の残存も僅かである。また、第2号掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の上での新旧関係は不明確である。住居平面形は正方形で、東西軸・南北軸とも4.6mである。

〔壁・周溝〕　検出した壁は地山であるが、前述のように削平著しく壁の残存高は2～3cm程度である。周溝は断面「し」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。

〔床面・施設〕　床面はほぼ平坦であるが、やや南側に傾斜している。床面からはピッ群が検出されているが、この中で柱穴と考えられるのは$P_{3\cdot10}$の2個である。$P_{3\cdot10}$は住居対角線上に位置し、両者を結んだ線は住居北壁と平行になる。この場合の柱間は2.1mである。ただ、これらの柱穴と組み合うと考えられるもう2個の柱穴は検出できなかった。

この他、住居床面には焼土の分布する部分(炉？)が3ヶ所ある。いずれも住居北側に偏った床面にあり、略円形をしている。規模は焼土1が60×60cm、焼土2が50×50cm、焼土3が65×55cmである。なお、焼土2の回りには「コ」状の帯状に白色粘土の分布(幅20cm)がみられる。



第45図　ＫＳ第54号住居跡

〔遺物〕住居内から出土した遺物はすべて破片で、量的にも少なくまとまりは認められない。P_{10}から土師器甕口縁部1点、第1層から須恵器蓋2点、周溝から底部1点が出土している。しかし、これらの遺物が住居跡に伴うか否かわからない。

ＫＳ第53号住居跡

〔位置〕　ＣＱ－81区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区東端裾部に位置し、第52号住居跡に隣接し、その東南側に位置している。

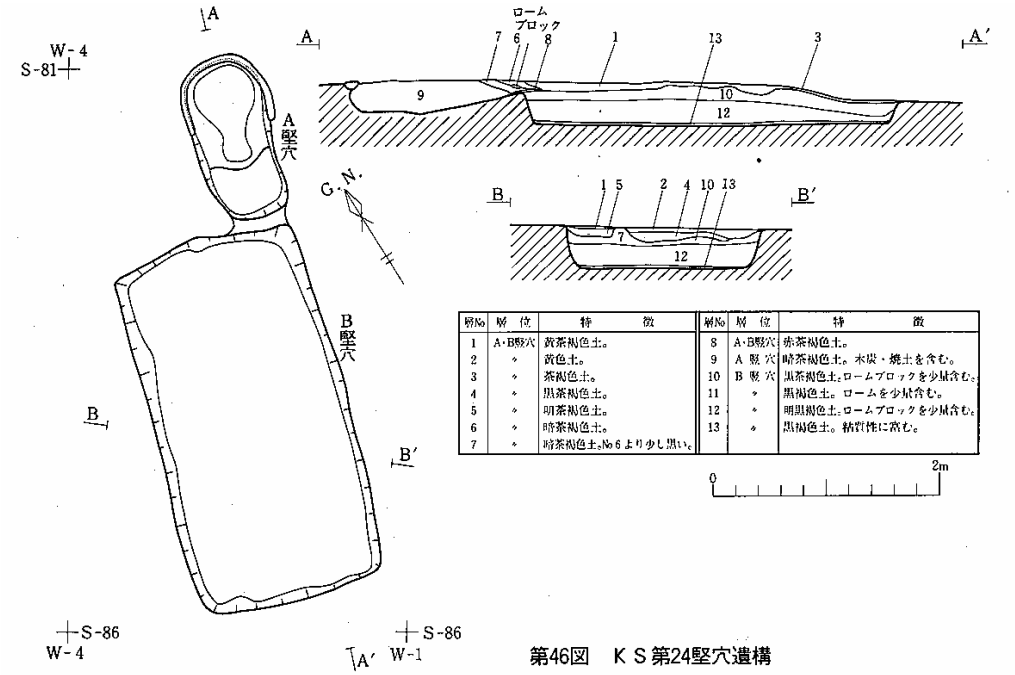
〔平面形・重複〕　第54号住居跡は削平著しく、住居南側は失なわれている。また、第2・第3掘立柱建物跡と重複しているが、遺構の上での新旧関係は不明である。住居平面形は残存部分から方形と推定される。規模は南北軸が3.9m＋α、東西軸が4.6mである。

〔壁・床面〕　検出された壁は地山で、床面から周溝を経て立ちあがる。壁の残存高は最も保存の良い北壁で5～14cmである。周溝は住居残存部分の壁直下にめぐっている。また、東壁直下の周溝には直交する形で長き140cmの溝がみられる。周溝および周溝に直交する溝は断面「し」状で、幅20～30cm、深さ5～20cmである。

〔床面・施設等〕　床面はほぼ平坦であるが、南側に僅かに傾斜している。床面精査時に南側を削り過ぎてしまった可能性もある。遺物はすべて小破片で、量も少ない。

ＫＳ第54号住居跡

〔概要〕　第54号住居跡はＣＨ－74区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区の中央部で検出された。削平が著しく、残っていたのは北隅の部分だけである。残存壁長は北東壁が2m、北西壁が1.5mである。壁は地山で、最も保存の良い北隅の部分で約10cmである。北隅の部分に溝が部分的



層No	層位	特徴	層No	層位	特徴
1	A・B竪穴	黄茶褐色土。	8	A・B竪穴	赤茶褐色土。
2	〃	黄色土。	9	A 竪 穴	暗茶褐色土。木炭・焼土を含む。
3	〃	茶褐色土。	10	B 竪 穴	黒茶褐色土。ロームブロックを少量含む。
4	〃	黒茶褐色土。	11	〃	黒褐色土。ロームを少量含む。
5	〃	明茶褐色土。	12	〃	明黒褐色土。ロームブロックを少量含む。
6	〃	暗茶褐色土。	13	〃	黒褐色土。粘質性に富む。
7	〃	暗茶褐色土。No 6より少し黒い。			

第46図　ＫＳ第24竪穴遺構

にみられるが周溝か否かはっきりしない。この溝は幅15～20㎝、深さ2～3㎝である。床面残存部分はほぼ平坦である。北東壁に沿って住居北隅の部分に焼け面を伴うピットが2個ある。P_6は直径70㎝・深さ10㎝、P_7は直径40㎝・深さ10㎝である。両者とも壁面が焼けている。この他住居残存範囲で約10個のピットが検出されたが、全体の状況が不明なため、柱穴およびその他の施設のいずれか判断できない。遺物は小破片で量も少ない。

第１号掘立柱建物跡(柱列)

この柱列は第35号住居跡の調査過程において検出された(第40図)。すなわち、$P_{1\cdot4\cdot6\cdot24}$からなる柱列で、その柱間寸法は北側から1.8m＋1.5m＋1.8mである。柱穴掘り方はP_{24}を除きいずれも方形で、規模はP_1が90×80㎝・$P_{4\cdot6}$が70×50㎝である。P_{24}については不明確となった。これらの柱列と組み合う柱穴は検出できなかった。

ＫＳ第２号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡はＣＯ・Ｐ－81区付近に位置し、第52・54号住居跡の調査に伴って検出された(第44図)。この建物跡は東西2間の南北棟であることは判明したが、東辺と西辺の柱穴が検出できず、南北が2間もしくは3間のいずれになるか確認できなかった。判明している柱間寸法は北辺が東側から1.8m＋1.8m、南辺が東側から1.8m＋(1.8m)、東辺が4.3m、西辺が(4.6m)である。柱穴掘り方は方形と隅丸方形のものがあり、一辺が50～70㎝の規模をもっている。

ＫＳ第24竪穴遺構

〔位置〕　第24竪穴遺構はＣＩ－79区付近、鴻ノ巣台地南斜面発掘区中央裾部の平坦面に位置している。

〔概要〕　本遺構は、隅丸長方形の小竪穴(Ａ竪穴)と長方形の竪穴(Ｂ竪穴)からなるものとして一括して扱った。しかし、両名の接続部分は堆積土が薄く、同一施設の二つの部分なのか、二つの遺構が重複したものなのか明確には把握できなかった。、次に各々の竪穴について説明を加える。

〔Ａ竪穴〕　平面形は膨みをもった隅丸長方形で、奥壁部分の幅が僅かに広く、膨みも強い。規模は長軸140㎝・幅60～70㎝である。底面は奥壁に近い部分が平坦で最も深く(30㎝)、手前に向かうに従って浅くなり、Ｂ竪穴と接続する部分では深さが10㎝程度となってしまう。また、奥壁とその両側の竪穴上部には幅7～8㎝、厚さ5～6㎝の土堤状の粘土帯がめぐっている。この土堤状の粘土帯は底面の平坦な部分の範囲とほぼ一致している。壁の状況をみると、奥壁部分が抉り込まれた状態、両側壁がほぼ垂直、手前の壁は緩かに立ち上っている。使用痕跡をみる

と、深く平坦な部分の底面とその上部の奥壁が焼けている。

〔B竪穴〕　平面形は長方形で、長軸3.3m・短軸1.7mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上る。残存壁高は最も保存の良い北壁(A竪穴と接続する部分)で40cmである。床面には特に施設は認められないが、住居跡の生活層と類似する粘質に富む黒褐色土が薄く貼りついている。

〔堆積土〕　遺構内堆積土をみると、A・B両竪穴上部に堆積しているNo.1～8層、A竪穴に堆積しているNo.9層、B竪穴に堆積しているNo.10～12層にわかれる。No.1～8層は各種の茶褐色土で層厚10cm以下の薄い層が将棋倒し状に堆積している。No.9層は木炭・焼土を含む暗茶褐色土で、A竪穴全体を埋めつくしている。No.10～13層はロームブロックを含む各種の黒褐色土で、No.10・11・12層はB竪穴内にほぼ水平状に厚く堆積している。No.13層は前述のように床面に貼り付いた生活層類似の層である。

遺物としては土師器坏2点、須恵器坏口縁部1点が出土しているが、いずれも小破片で出土状況にまとまりもみられない。

各地区の出土遺物

トレンチ調査による遺構確認時および表土から出土した遺物が主であるが、記名もれなどのため出土遺構・地区層位が不明になったものについても一括して扱う。

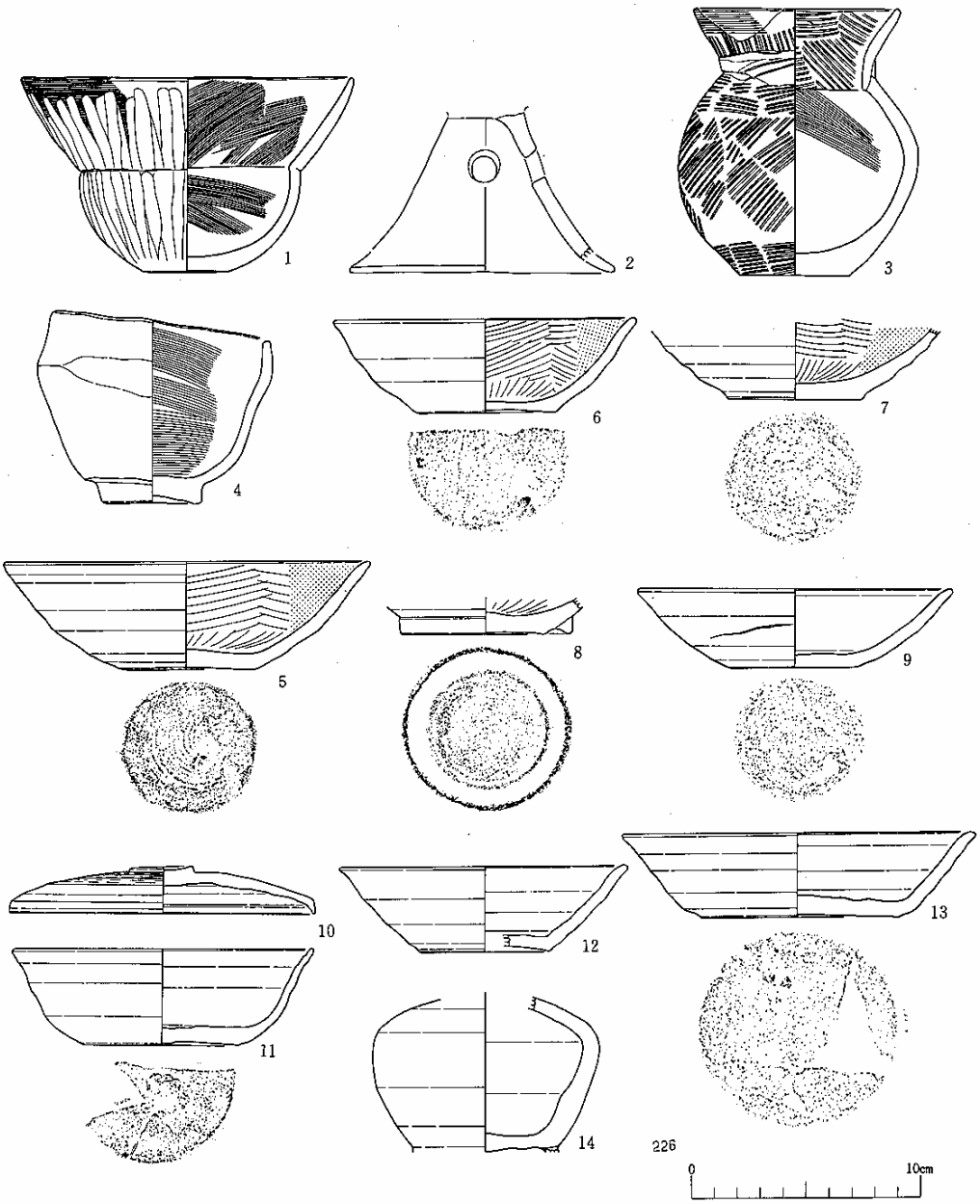
第47図は土師器・須恵器である。1は土師器坏で、外面中央に段(くびれ)、内面に稜がある。くびれ部分は接合痕を強く残している。器面調整は外面がヨコナデ→ヘラミガキ、内面がナデで、比較的丁寧に仕上げられている。2は高坏脚部で、円窓が3個ある。器面調整は磨滅のため不明である。3は小形の壺で、頸部に粘土帯を貼り付け、ヘラで切りこむようにしてナデツケしている。器面調整は内外面とも刷毛目を主体とし、口縁部外面がヨコナデ、胴部内面がナデである。4は天目茶埦に似た器形の小鉢である。底部が厚く高台状になっている。器面調整は外面がケズリ→軽いミガキ、内面がナデである。

6～8は製作にロクロを使用した土師器坏で、9は赤焼土器である。

10は須恵器蓋で、輪状のつまみをもち、口縁部を僅かに外方に向け折り曲げている。

11～13は須恵器坏で、ロクロからの切り離しは11・13がヘラ切り、12が回転糸切りである。

14は小形の壺で、高台付である。肩部が張る。全体にロクロ調整が加えられているが、底部中央はナデである。



番号	種類	地区層位	特徴	登録
1	土師器坏	地区・層位不明	有段。外面ヘラミガキ・ヨコナデ、内面ナデ。	区 Po.3
2	土師器高坏	KS-DC-37-1層	脚部。円窓3個。内外面磨滅。	区 Po.5
3	土師器壺	KS-39住-埋	頸部粘土貼り付け。外面刷毛目、内面刷毛目、オサエ、ナデ。	39住Po.1
4	土師器鉢	KS-CO-73	外面ケズリ→軽いミガキ、内面ナデ。	区 Po.7
5	土師器坏	KS-BP-75-1層	回転糸切り→手持ちケズリ、内面放射状ミガキ・黒。	区 Po.6
6	土師器坏	KS-22住-埋	回転糸切り、内面放射状ミガキ・黒。	22住Po.1
7	土師器坏	KS-42住-埋1	回転糸切り、内面放射状ミガキ・黒。	42住Po.2
8	土師器坏	KS-DD-76-1層	隅丸三角付高台。回転糸切り、内面放射状ミガキ・黒。	39住Po.2
9	赤焼土器坏	IK X-O	回転糸切り、ロクロナデ、粘土積み上げ痕。	区 Po.2
10	須恵器蓋	KS-46住-P_1	輪状つまみ。口縁折り曲げ。ロクロナデ・回転ケズリ。	46住Po.1
11	須恵器坏	KS-42住	ヘラ切り・ロクロナデ。	42住Po.1
12	須恵器坏	IK-23住ピット	回転糸切り・ロクロナデ。	23住Po.1
13	須恵器坏	KS-CE-70-1	ヘラ切り・ロクロナデ。	区 Po.1
14	須恵器蓋	KS-21A住No4	付高台。底部中央ナデ・その他ロクロナデ。	21住No.4

第47図　各地区の出土遺物Ⅰ

Ⅵ. 考　　察

今熊野遺跡における方形周溝墓群とその集落

出土土器の検討と問題の所在

今熊野遺跡では方形周溝墓および鴻ノ巣第15号住居跡から古墳時代の土師器がまとまって出土している。第1号方形周溝墓から有段口縁の壺6点(図示したもの)・単純口縁の壺1点、第4号方形周溝墓から坏1点・壺1点、第6号方形周溝墓から小形広口壺1点、第11号方形周溝墓から壺1点が出土している。また、鴻ノ巣第15号住居跡からは床面を中心として、高坏1点・器台1点・坏1点・小形甕1点・台付甕1点が出土し、いずれも住居廃絶時かその直後の一括遺物と考えられるものである。

これらの土器群は有段口縁の壺・脚部有窓高坏・器台・坩状坏を特徴とするもので、氏家和典氏によって設定された「東北土師器の型式分類」の第Ⅰ型式、すなわち塩釜式に位置づけられる(氏家和典:1957.3)。また、単独出土であるが、鴻ノ巣第21号住居跡の有段口縁壺、さらには同一組成に含まれると推定される鴻ノ巣ＣＡ－39号住居跡、出土地点不明の坏・高坏・壺(第47図1～3)も塩釜式に位置づけられる。

塩釜式土器は一括資料が未発見の段階で、南小泉遺跡出土資料の中で関東地方の和泉式に先行するものに対して設定された型式で、「この型式の典型的な特徴を有する土器は塩釜市における築港工事の際に出土した壺形土器に求められるので、この型式をいま広く一括して塩釜式土器と仮称しておきたい。」(氏家和典:1957.3)とされたものであった。したがって、氏家氏も後に述べているように「塩釜式という型式のなかには古式土師器という点では一致をみるにしても、編年的には細分される可能性ある型式のものまで包括されていたといえよう。」（氏家和典:1972.4）という状況であった。

塩釜式土器の細分を具体的に検討できるようになったのは刈田郡蔵王町大橋遺跡の調査以後である(藤沼邦彦:1971.3　太田昭夫:1980.9)。すなわち、宮城県内において集落跡の発掘調査が本格的に実施され、住居跡等からまとまりのある一括資料が発見されるようになってからである。現在までに塩釜式土器の一括資料を出土した遺跡を宮城県南部からあげていくと、大橋遺跡の他に亘理郡亘理町宮前遺跡（丹羽茂：1983.3）・柴田郡川崎町二本松遺跡(宮城県教委：1984年11月調査)・名取市西野田遺跡(丹羽・柳田・阿部：1974.3)・同市十三塚遺跡(恵美昌之:1979.3)・同市清水遺跡（丹羽・小野寺・阿部:1981.3）・同市今熊野遺跡(本書)・仙台市遠見塚古墳（結城・工藤:1979.3）・同市今泉城跡(篠原・工藤:1980.8)・同市戸ノ内遺跡(仙台市教委：1983.12　早坂・渡部:1985.1)・加美郡色麻町色麻古墳群(古川一明:1983.3)・遠田郡小牛田町山前遺跡（宮城県文化財保護課編:1976.3）・古川市留沼遺跡(手塚均：1980.3)・

栗原郡志波姫町鶴ノ丸遺跡（手塚均：1981.9）の合言14遺跡となる。

これらの遺跡の調査および報告書作成の過程において、塩釜式土器は幾段階かに細分されて考えられるようになった。すなわち、氏家氏は大橋遺跡第1・2号住居跡床面直上・ピットから出土した土器群を基準資料として、さらに古い土器群の存在(浮文系土師器)を予想した(氏家:1972.4)。しかし、天王山式に後続する弥生時代終末の土器が不明確な今、氏家氏の言う浮文系土師器の一括資料が未発見の現状では、それらが果して、大橋遺跡の土師器に先行する古墳時代の土器なのか否か、判断する手立てがない。

その後、発掘調査の結果出土した一括資料に基づく細分が宮城県文化財保護課の手によって着実に進められてきた。すなわち、西野田遺跡では1971年報告(概報)の大橋遺跡出土土器と比較した上で、西野田遺跡の土器が「各々の器形と成形・調整技法そして器形の組合せについて共通する点が多いこと」から塩釜式の範囲に包括されること、「西野田遺跡の高坏や器台に円窓がないこと」、複合口縁壺の頸部に刻み目のある隆帯がめぐっていない点をとりあげ、「塩釜式内部の新しい要素として理解」した(丹羽・柳田・阿部:1974.3)。留沼遺跡では、留沼のセットが西野田のものと強い類似性を示し、「西野田における器種の欠損現象をある程度補う」ものとし、大橋遺跡には認められない特徴を持つことから、「西野田を含めて新しい要素として理解」した(手塚均:1980.3)。また、大橋遺跡の1980年報告(正報告)では「これまで塩釜式として一括されてきた土器に、大橋遺跡の出土土器群と西野田・留沼遺跡の出土土器群の2つのグループがあり、上記の分析からそれらが時期差をもつことが指摘できた」と明確に示した（太田昭夫:1980.3）。このように塩釜式土器の細分については新古の要素の指摘から時期差の設定まで約6年の年月を要している。

塩釜式土器の細分と同時に資料も次第に増加した。すなわち、古い段階のものとして鶴ノ丸遺跡・清水遺跡第Ⅰ群土器、新しい段階のものとして清水遺跡第Ⅱ群土器、また時期差に直接触れないまでも塩釜式土器の一括資料として十三塚遺跡・遠見塚古墳・今泉城跡・色麻古墳群・山前遺跡などの報告があいついだ。さらに宮前遺跡では豊富な住居跡の出土土器を整理する中で、出土状況の相違に基づきA群土器・B群土器・C群土器を摘出し、それらを「塩釜式土器における時期的な諸段階である。」と結論づけ、A群土器の類例として大橋遺跡第1～3号住居跡、B群土器の類例として清水遺跡第Ⅳ層（第Ⅰ群土器）・遠見塚古墳第12トレンチ第Ⅰ土器群・色麻古墳群第12号住居跡・鶴ノ丸遺跡第5・6号住居跡、C群土器の類例として清水遺跡第Ⅲ層（第Ⅱ群土器）・西野田遺跡第5号住居跡・留沼遺跡第1・2次調査出土土器をあげた(丹羽茂：1983.3)。その結果、塩釜式土器細分の大綱はほぼできあがったことになるが、各段階における器形の変遷・細かな地域差の有無、また周溝墓・古墳出土の塩釜式土器については集落跡の調査報告という性格などから検討を加えていない。ここでは今熊野遺跡出土資料さらには

宮前遺跡報告では取り扱わなかった各遺跡の一括資料を加え、塩釜式土器の変遷を整理し、その結果に基づいて周溝墓・古墳出土の塩釜式土器、さらには周溝墓・古墳の歴史的意味・性格について検討を加えることにする。

塩釜式土器の諸段階

宮前遺跡の報告で示した塩釜式土器のA群土器・B群土器・C群土器の諸段階をここでは第Ⅰ段階・第Ⅱ段階・第Ⅲ段階とする。まず、各段階の基準となる資料とその類例を示し、その特徴を述べることにする。

第Ⅰ段階

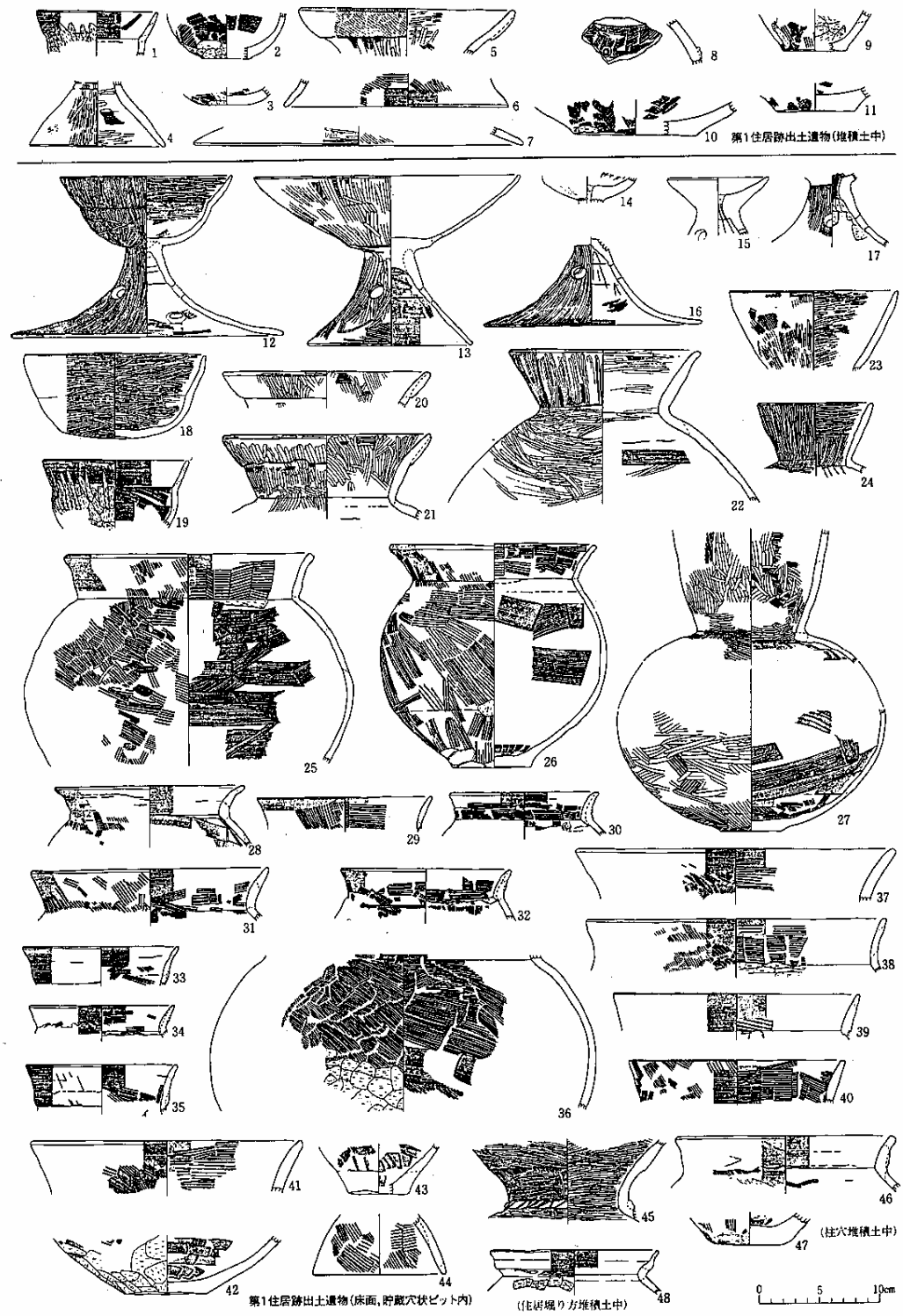
宮前遺跡第53号住居跡・大橋遺跡第1～3号住居跡出土土器を基準資料とし、その類例として戸ノ内遺跡第3・4号住居跡・二本松遺跡第1遺物集中地点出土土器をあげることができる。

大橋遺跡：第1号住居跡床面・貯蔵穴状ピットから良好な状態で一括土器が出土している。第2・3号住居跡からも同様な土器群が出土し、器種構成の上で相違を示しているものの、「時期差にもとづくものではなく、むしろ、同一時期の器種構成を互いに補完する関係にあるものと思われる。」とされている(太田昭夫:1980.3)。この点は住居跡周囲の第Ⅰ・Ⅱ層から出土した塩釜式土器についても同様で、第Ⅱ段階以降の明確な資料は含んでいない。今後、第Ⅰ段階をさらに細分し得る資料が発見されるまでの間、同一時期の器種欠落現象をできるだけ小範囲に留めるため、これらを第Ⅰ段階のものとして一括しておきたい(第48・49図)。

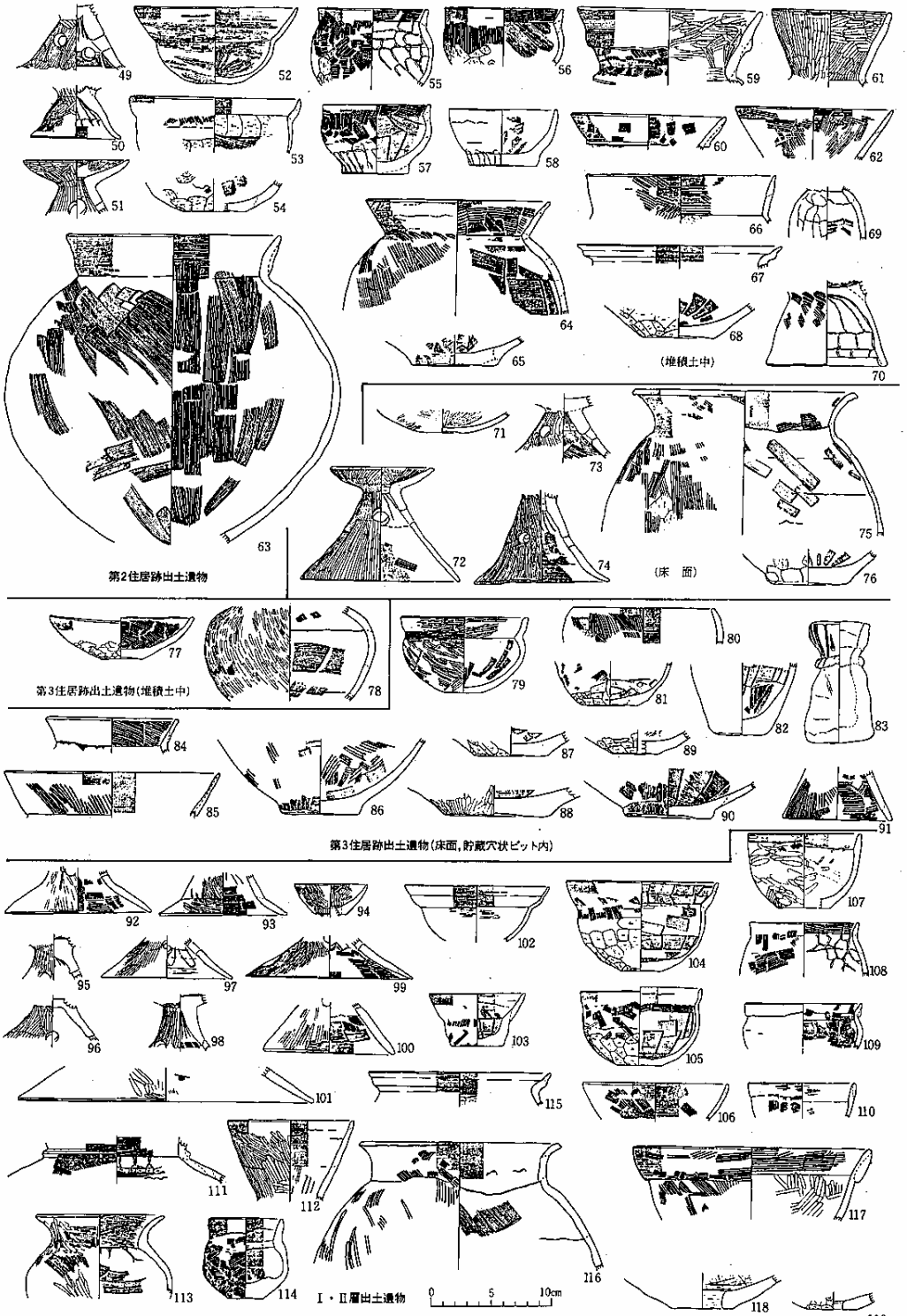
大橋遺跡出土土器には器種として高坏・器台・坏・壺・甕・甑があり、特殊なものとして徳利形土器がある。高坏は坏部が有段丸底状のもの（12）と無段平底状のもの（13）がある。脚部は円錐台状のもの（13）と裾が大きく広がるもの（12）があり、大部分のものに3～6孔の円窓が付いている。器面調整として丁寧なヘラミガキが加えられ、丹の塗られているものが多いが、直接目に触れない脚部内面はヘラケズリ・刷毛目・ヘラナデなどとなっている。

器台は全体の器形の判明するものは1点である（72）。受け部は脚部に較べ小さく、小皿状に内弯しながら開く。脚部は円錐台状で脚上部に4孔の円窓が付き、受け部との間に貫通孔がある。器面調整は高坏同様丁寧なヘラミガキで、脚部内面が刷毛目・ヨコナデである。その他一部破損している資料も、同様な器形を示すものが多いが、14は受け部が有段丸底になる可能性もある。また、94は受け部が無段平底であるが、特に小形で脚部との間に貫通孔がない。

坏は体部中央にくびれもしくは段があり、下部がすぼまる坩状のもの(18・52・102・103)と口縁部が外傾し胴部が膨らみながらすぼまるもの(19・53・55・56・79・104・105・109)、無段平底のもの（58・77・107）などがある。前者は103を除き、ヘラミガキなどで丁寧に仕上げられている。また、102は口縁部が屈曲し二段になっている。後二者は79が丁寧にヘラミガキ・丹塗りが施こされているだけで、大部分のものはヘラケズリ・刷毛目調整でやや粗雑に仕上げら



第48図　大橋遺跡出土土器Ⅰ



第49図　大橋遺跡出土土器Ⅱ

れている。

壺には複合口縁と単純口縁のものがある。前者には口縁部幅が広く口縁下部が肥厚(複合)するもの(45・59)と口縁部幅が狭く全体が複合するもの(5・20・21・60)がある。両者とも口縁部は内弯気味に外傾し、5では顕著である。これらの複合口縁壺は刷毛目の他にヨコナデ・ヘラミガキなどの丁寧な器面調整が加えられる。また、5では口縁部に縄文が施文され、45では頸部に刻目をもつ凸帯がめぐっている。111の頸部に凸帯のめぐる壺肩部も、これらの複合口縁壺の一部と推定される。単純口縁壺には口縁部が外反するもの(22・113)と口縁部が直立気味に外傾もしくは大きく開くもの（23・24・27・61・62）がある。前者は完形品はないが、胴部は球形に近いものと推定される。後者は胴部が張りの強い玉葱状をしている。前者もヘラミガキ等で丁寧に仕上げられているが、後者は特に丁寧で丹塗りされているものが多い。

甕には口縁部が外傾もしくは外反するもの(25・26・28～40・46・64・75)、口縁部が直立する広口のもの（66）、口縁部がＳ字状のもの(48・67・115)、台付のもの(44・70・91)がある。口縁部が外反するものは胴部球形で胴下部がすぼまり、その変換部分が粘土貼り付けによって肥厚し外面に稜を形成する（26）。また、25・63のように胴中央部の膨らみが特に大きいものもある。これらの甕は内外面ともヘラナデ・刷毛目で器面調整されるものが多い。Ｓ字状口縁の甕は口縁下部が肥厚し、胴部外面はヘラケズリされている。台付のものはどの甕に伴うか確実なことはわからない。

甑は単孔丸底で深鉢状のものである(117～119)。複合口縁で、内弯気味に外傾している。器面調整は口縁部内外面と胴部外面が刷毛目、胴部内面がヘラミガキである。

徳利形土器は頸部に刻目のある凸帯がめぐっている。

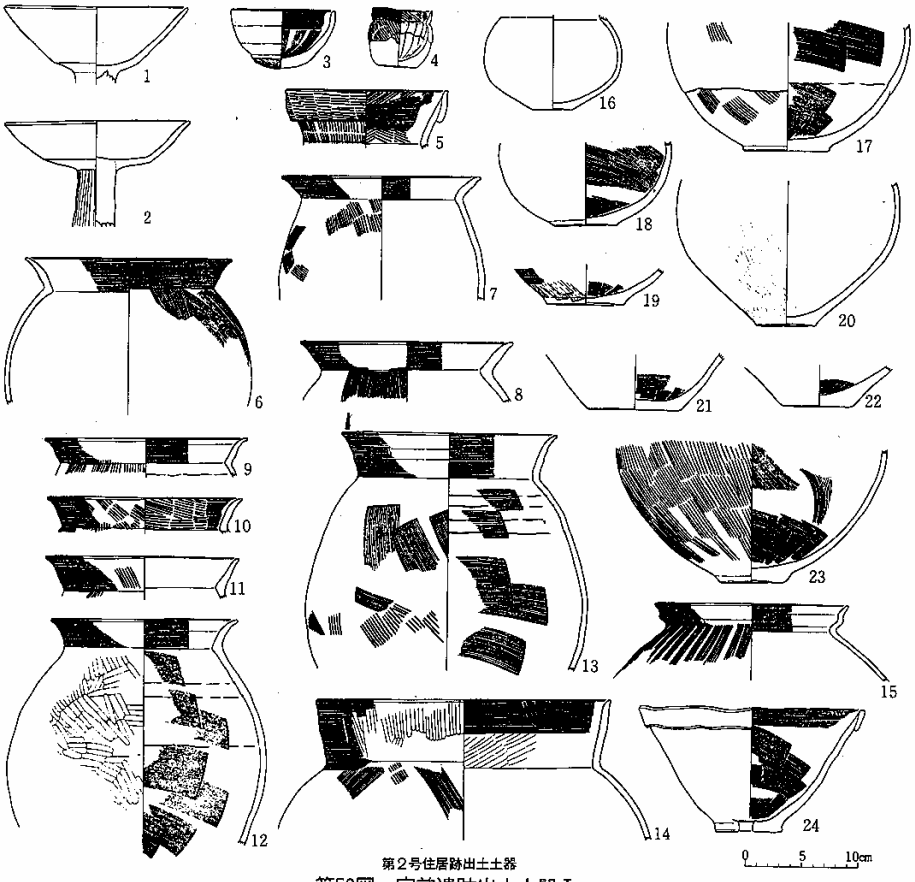
宮前遺跡：第53号住居跡の床面・貯蔵穴状ピットから高坏1点・坏3点が出土している(第51図)。高坏は坏部中央に段がつくもので、口縁部が外反する（47）。脚部は裾の広がるもので3孔の大きな円窓がある。外面と坏部内面はヘラミガキ・ヨコナデで丁寧に仕上げられ、丹塗りされている。脚部内面はヘラケズリ・刷毛目・ナデである。坏は体部中央がくびれ下部がすぼまるもの（48）と口縁部が外傾し胴部が膨らみながらすぼまるものがある(49・50)。器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷目毛である。

この他、戸ノ内遺跡では第3号住居跡から高坏坏部1点・6孔の円窓をもつ器台脚部1点・刻目のある縦位浮文のついた壺口縁部2点(同一個体か?)、第4号住居跡から坏部が無段丸底の高坏2点・有段丸底の高坏2点・脚部2点・受部が丸底状の器台1点・小皿状の器台1点・脚部1点・坏3点が出土している。高坏・器台は脚部に3～9孔の円窓があり、ヘラミガキ・ヨコナデなどで丁寧な器面調整が加えられている。二本松遺跡では一括して廃棄されたと思われる遺物集中地点から高坏坏部・坏・壺胴底部・甕が各1点ずつ出土している。

以上のように、第Ⅰ段階の塩釜式土器は高坏・器台・坏・壺・甕・甑の器種構成を示すとともに極めて丁寧に仕上げられた精製とも言える高坏・器台・坏(一部)・壺(一部)、やや丁寧な坏(一部)・壺、粗い仕上げの甕によって特徴づけられる。高坏は有段丸底、無段丸底・無段平底のものがあり、平底のものも口径に対して底径が小さい。また、坏部は全体に深目である。高坏および器台の脚部は裾の大きく広がるものが特徴的で、円窓も大きく、3〜9孔をもつ。壺は口縁部に刻目縦位浮文・頸部に刻目凸帯を伴うものがある。甕は刷毛目等で仕上げられるが、胴部は球形に近く、器形全体に張りがある。

第Ⅱ段階

宮前遺跡の報告ではB群土器を「A群土器とC群土器の過渡的様相を備えている」ものとして一括したが、再検討したところ細分すべきことが明らかとなったので、ここでは第ⅡA段階・第ⅡB段階とする。その理由を簡単に述べると第ⅡB段階では高坏・器台脚部の円窓消失化



第50図　宮前遺跡出土土器Ⅰ

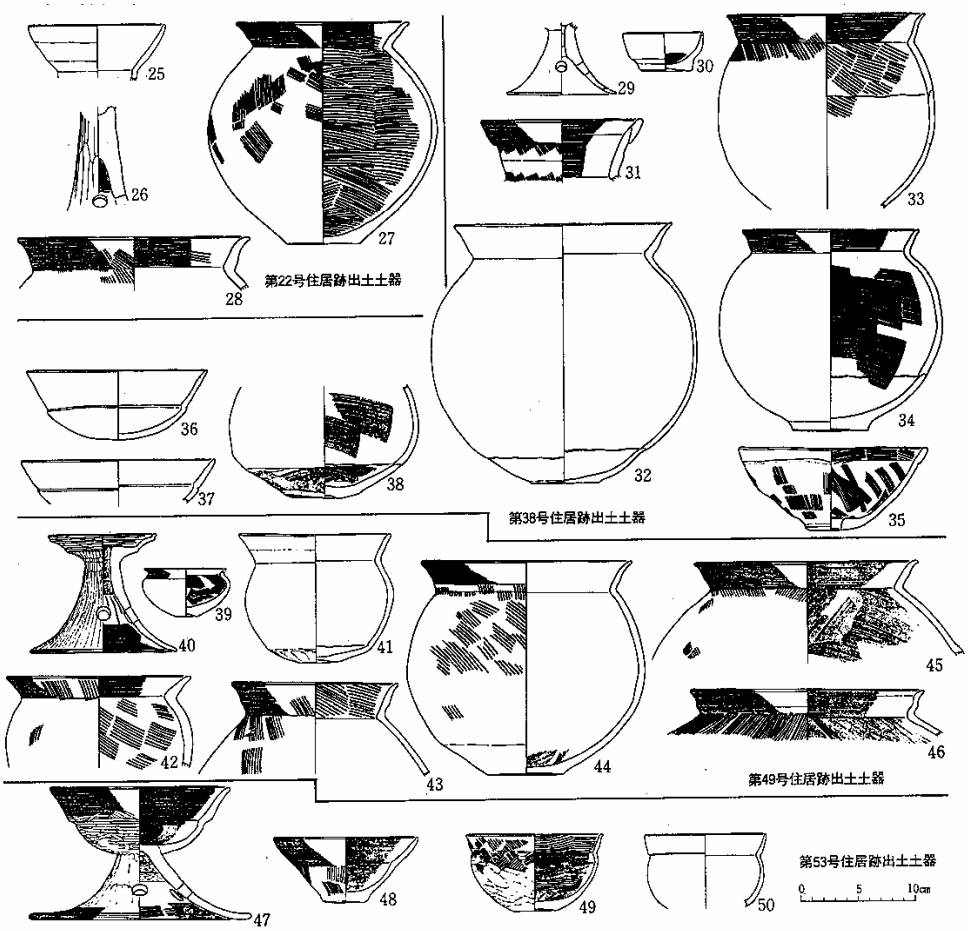
の開始、精製坏のヘラケズリ化、胴部球形壺・甕の長胴化の開始である。また、甑の平底化もあげることができる。

第ⅡA段階

宮前遺跡第38・49号住居跡・色麻古墳群第11号住居跡・清水遺跡第Ⅳ層出土土器を基準資料とし、その類例として、今泉城跡第19号土坑・遠見塚古墳第12トレンチ第Ⅰ土器群出土土器をあげることができる。今熊野遺跡鴻ノ巣第15号住居跡出土土器もこの段階に含まれる。

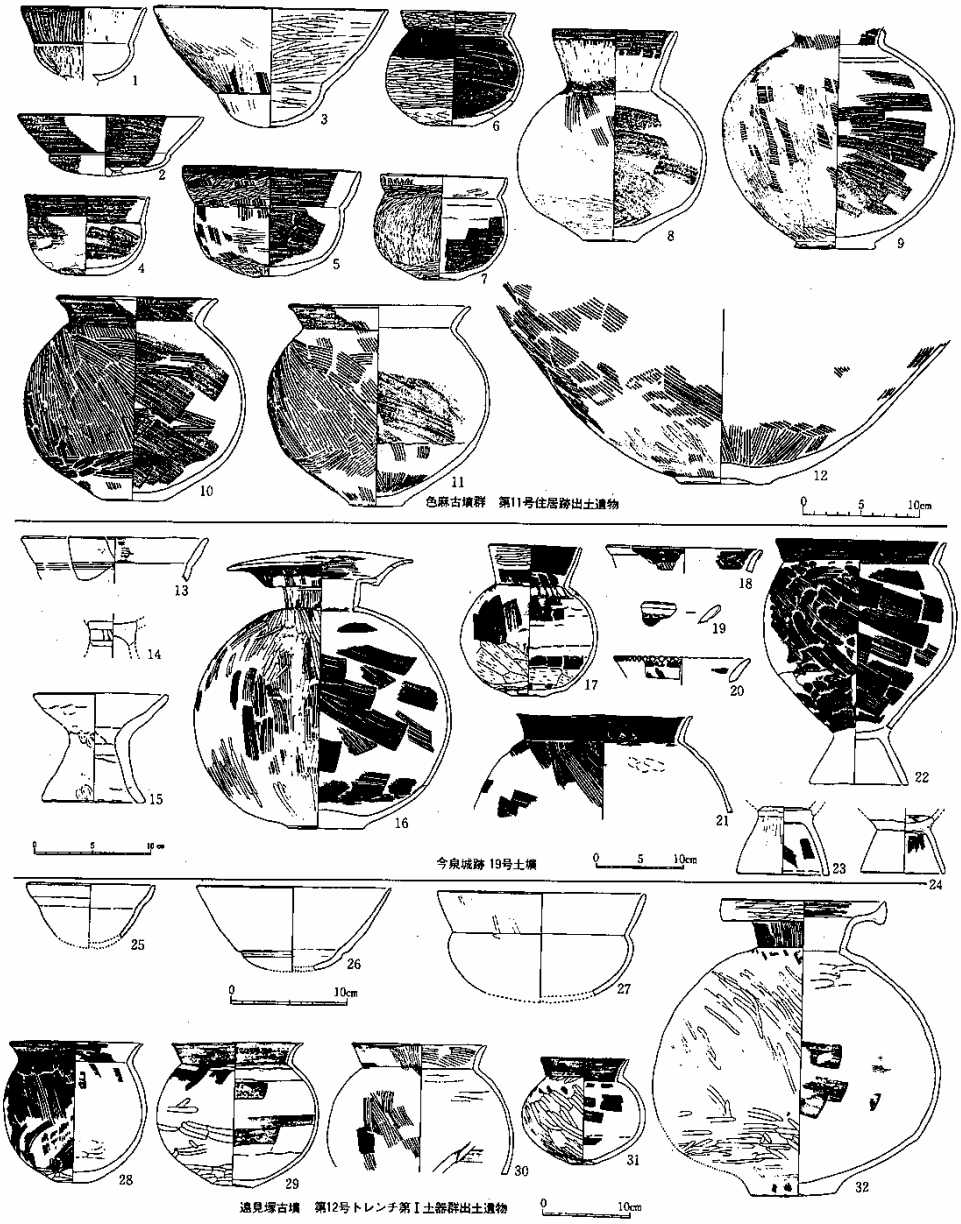
宮前遺跡：第38・49号住居跡から器台・坏・壺・甕・甑が出土している(第51図)。器台は有段平底の受部とやや裾の広がる円錐台状の脚部からなる（40）。胸中央部に3孔の円窓が付き、受け部との間に貫通孔がある。器面調整は外面と受け部内面が丁寧なヘラミガキで、脚部はヘラケズリ・ヨコナデである。29の器台も受け部を欠くが、脚部の形態は共通している。

坏は体部中央に段のつくもので、浅い椀状をしている(36・37)。外面の段はくびれが強い。



第51図　宮前遺跡出土土器Ⅱ

器面は磨滅しているが、37の内面はヘラミガキされている。31は複合口縁の壺で、口縁部が外傾している。器面調整はヨコナデ・刷毛目である。38は単純口縁壺の胴部と推定され、胴下部に稜がある。甕は口縁部が外傾もしくは外反するもの(32～34・41～45)とS字状のもの（46）がある。胴部の判明するものはいずれも滑らかな球形で、胴下部の稜は弱い(32～34・41・44)。器



第52図　色麻古墳群・今泉城跡・遠見塚古墳出土土器

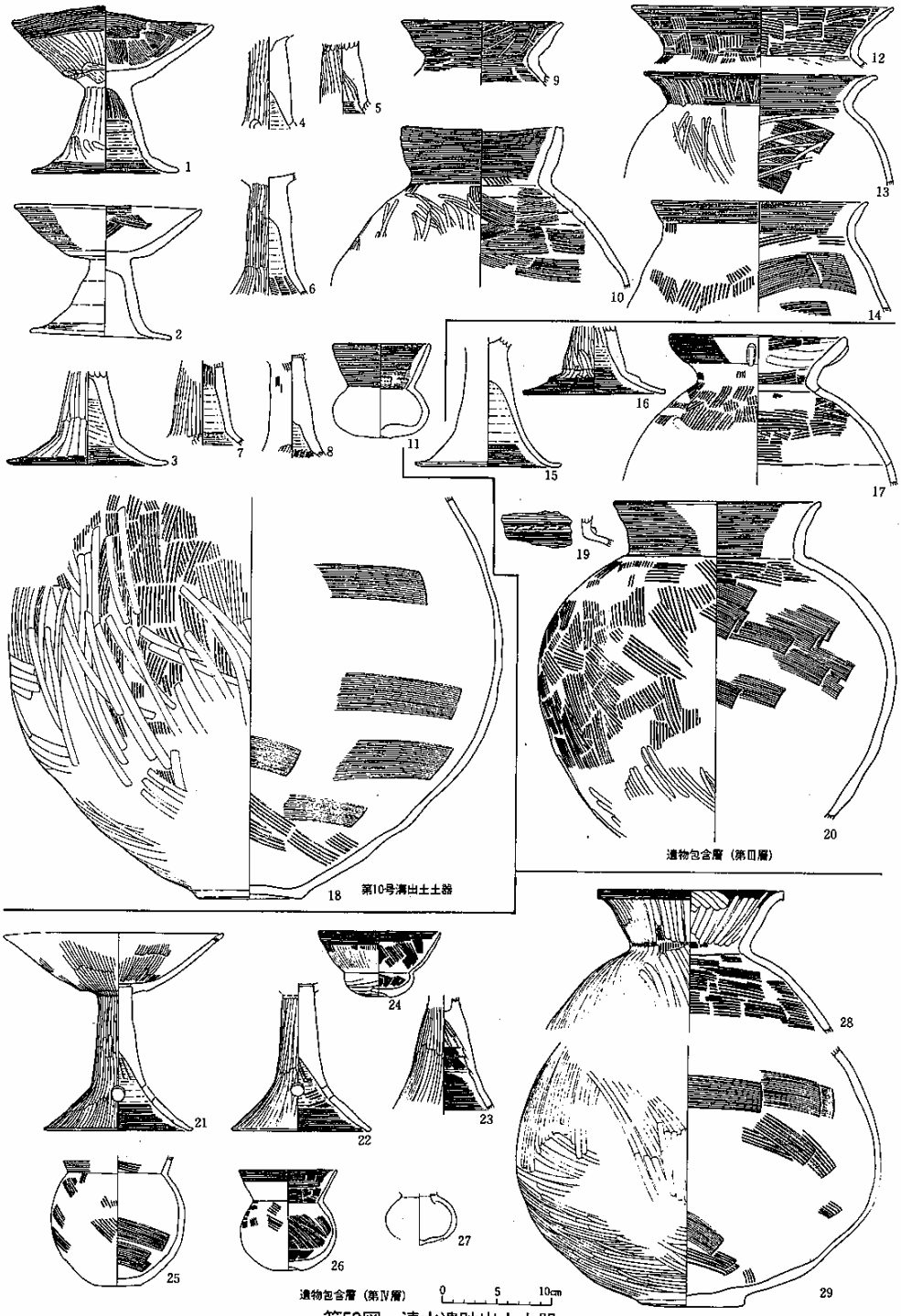
面調整は内面がヨコナデ・刷毛目・ヘラナデで、外面は刷毛目が多い。S字状口縁の甕は口縁部の厚さが均一で、肩が張る（46）。器面調整は口縁部・胴部の内面がヨコナデ・ナデで、胴部外面は縦に長い刷毛目が密接して加えられている。甑は単孔丸底の鉢状をしている（35）。口縁部は複合口縁で僅かに外傾する。器面調整として内外面とも刷毛目が多用される。

色麻古墳群：第11号住居跡から高坏・坏・壺・甕が出土している(第52図)。高坏は坏部が有段丸底状のものであるが、脚部を欠いている（1）。内外面ともヘラミガキ・ヨコナデで丁寧に仕上げられている。坏は体下部に段(くびれ)があり下部がすぼまるもの(2・3)と口縁部が外傾し胴部が膨らみながらすぼまるもの(4・5)がある。2は浅い椀状、3～5は深い椀状をしている。2・3は宮前遺跡同様外面の段はくびれが強く、3ではその部分に積み上げ痕を明瞭に残している。器面調整はヘラミガキ・ナデ・刷毛目である。壺には広口で口縁部が短かいもの(6・7)と口縁部が直立気味に外傾し高くのびるもの（8）がある。胴部は器高の高い滑らかな玉葱状で、8は胴下部に稜がある。9は口縁部を欠くが、胴部が滑らかな球形をしており、壺と推定される。これらの壺の器面調整は外面がヘラミガキを主体とし、一部ナデや刷毛目もある。甕は口縁部が外反し、胴部は滑らかな球形で、胴下部の稜は弱い(10・11)。器面調整は刷毛目・ヨコナデ・ヘラナデで、胴部外面は刷毛目である。

清水遺跡：遺物包含層第Ⅳ層から高坏・坏・壺が出土している(第53図)。高坏は脚上部が柱実で中・下部が円錐台状に開くもの(21・22)と、脚部全体が円錐台状に開くもの（23）がある。前者は円錐台状部の中・上部に3孔の円窓がある。21の坏部は無段平底であるが底部は小さい。いずれも外面と坏部内面は丁寧なヘラミガキが加えられているが、脚部内面はヘラケズリ・刷毛目・ヨコナデである。坏は体下部に強い段(くびれ)があり、深い椀状をしている（24）。器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目・ヘラナデで、外面はヘラミガキを多用している。壺は単純口縁である(26・28)が、28は整った縁帯状をしている。26は広口で器面調整に刷毛目・ナデを多用し甕に近い。25も同様なものと推定される。28の器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目であるが、口縁部内外面・胴部外面にヘラミガキを多用し、丁寧に仕上げられている。29も同様な壺の胴部と推定される。胴中央下部の膨らむ滑らかな球形で、外面はヘラミガキされている。

以上の他に今泉城跡第19号土坑・遠見塚古墳第12トレンチ自然溝斜面上部第Ⅰ土器群、今熊野遺跡鴻ノ巣第15号住居跡からまとまった資料が出土している。今熊野遺跡例については既に述べたのでここでは触れない。

今泉城跡第19号土坑からは高坏・器台・壺・甕が出土している(第52図)。全体の器形が判明するものは器台（15）・壺(16・17)・台付甕（22）である。器台は鼓形のものであるが、器面調整はナデで粗雑な作りである。16の壺は口縁部の大きく外反する有段口縁で、胴部は膨らみをもつ滑らかな球形である。外面は刷毛目の後ヘラミガキで仕上げられている。17は直立気味に外傾する



第53図　清水遺跡出土土器

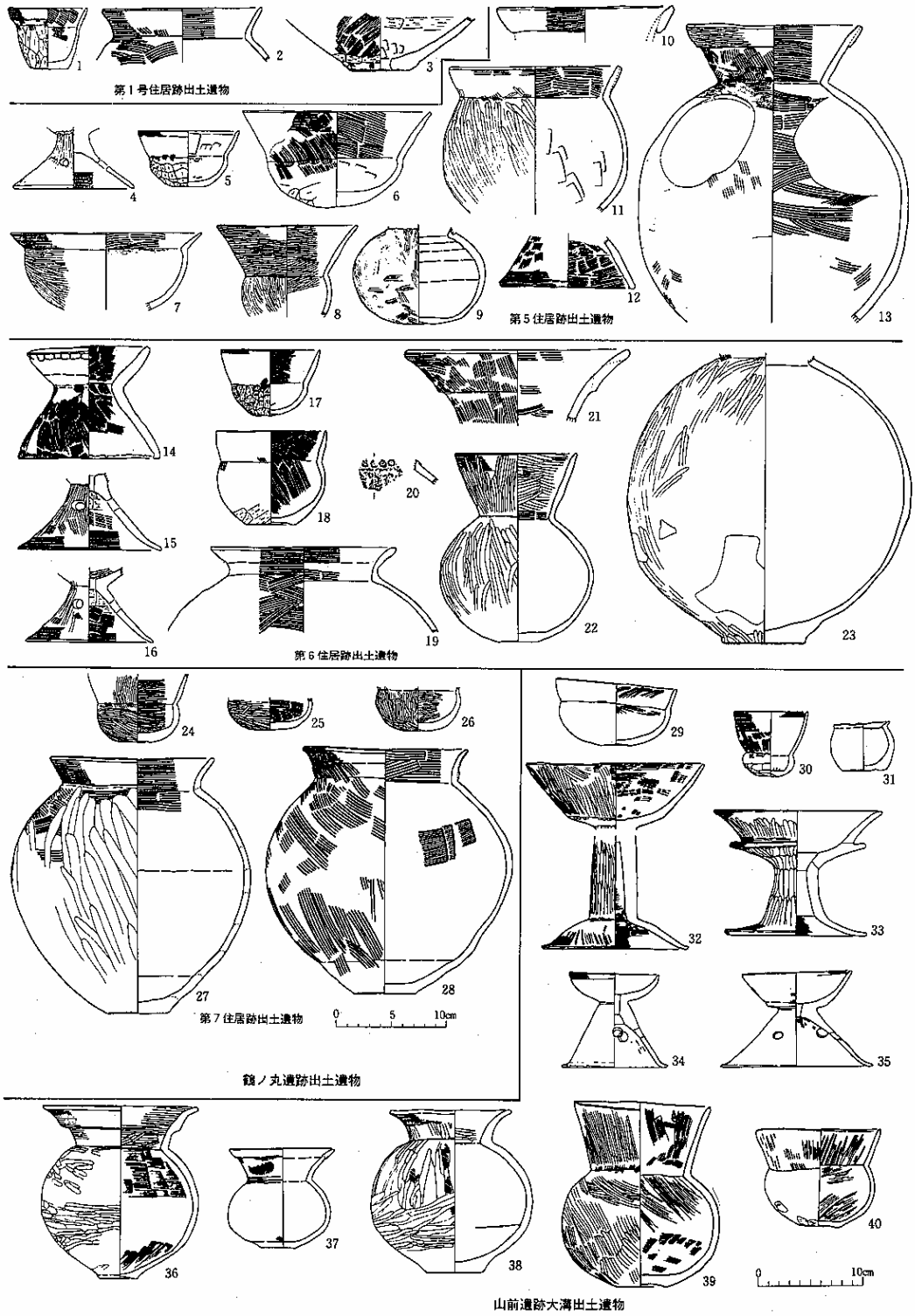
単純口縁の壺で、胴部は球形に近い玉葱状である。外面はヘラミガキ・刷毛目・ヘラケズリで、胴下部に稜がある。台付甕は広口で胴下半部が外傾している。胴部外面は刷毛目である。この他破片であるが、「棒状工具の腹縁の押圧による波状口縁」の甕がある(20)。

遠見塚古墳第12トレンチで検出された自然溝斜面上部からは壺4点・甕40点・台付甕2点・高坏6点・坏3点が一括して出土したことが報じられている。図示されたのは坏・壺・甕8点であるが(第52図)、今後この時期の一括資料として基準になりうるものである。坏は体部に段(くびれ)をもち下部がすぼまるもの(25・26)と、口縁部が外傾し胴部が膨らみながらすぼまるもの（27）がある。26はくびれが強い。いずれも磨滅しているが27の外面にヘラミガキの痕跡がある。壺は有段口縁（32）と単純口縁（31）のものがある。有段口縁の壺は口縁部が肥厚し垂直に立ち上り、胴部は下膨らみの球形である。外面の器面調整はヘラミガキで、頸部が刷毛目となっている。単純口縁の壺は口縁部が短かく外傾し、胴部は球形の玉葱状をしている。外面は刷毛目後ヘラミガキである。甕はいずれも口縁部の外反するもので、胴部は滑らかな球形をしている。胴部外面の器面調整は刷毛目が多用される。

以上、第ⅡA段階に位置づけられる資料を紹介した。器種構成は特殊なものを除けば第Ⅰ段階と同じで、それは第Ⅲ段階まで継承される。しかし、各器種ごとに若干の相違がある。すなわち、高坏は坏部が丸底のものより無段平底のものが多くなる。高坏・器台の脚部は裾の大きく広がるものがほぼ姿を消し、円窓も3孔のものが一般的となる。器面調整は丁寧であるが、第Ⅰ段階のものにはおよばない。坏は粗製化が目立ちはじめ、器面調整もヘラミガキの他に刷毛目やナデに留まるもの、両者の併用されるものが特徴的である。また、外面の段はくびれが強く、接合部分に継ぎ足し痕を残し充分な器面調整が及ばないものもある。複合口縁壺は刻目縦位浮文・刻目凸帯がほぼ失なわれ、簡素ではあるが均整のとれた滑らかな器形となる。また、口縁部幅の狭い複合口縁壺は口縁部が内弯気味外傾から単純に外傾する傾向にある。単純口縁壺も坏同様粗製化が目立ちはじめ、ヘラミガキの他に刷毛目、ヘラケズリが併用され、器形も強く押しつぶされた張りのある玉葱状胴部から張りの弱い幾分膨らんだ玉葱状のものが特徴的となる。口縁部の外反する甕は胴部の張りが失なわれ全体に滑らかな球形胴部となり、胴下部の稜も目立たなくなる。S字状口縁の甕は口縁部の器厚が均質になる。甑は丸底単孔ではあるものの、丸い鉢状になり口縁部の屈曲が弱く僅かに外傾する複合口縁となる。したがって、第ⅡA段階は総じて第Ⅰ段階の器形を継承しながらも全体に簡素化・粗製化が開始されるとみることができる。

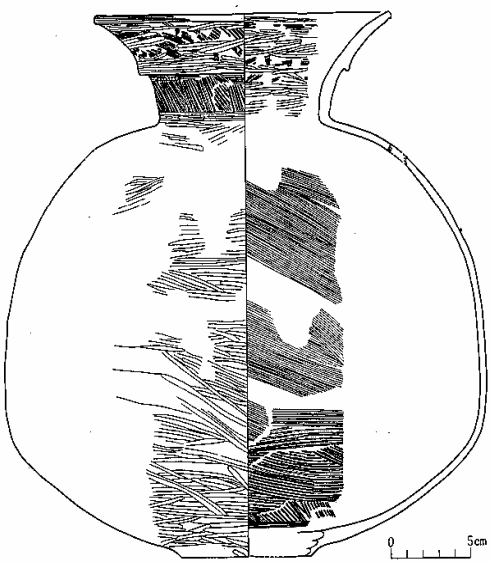
第ⅡB段階

鶴丸遺跡第1・5・6号住居跡出土土器を基準資料とし、その類例として山前遺跡大溝・十三塚遺跡尾根第2号住居跡・宮前遺跡第22号住居跡出土土器をあげることができる。

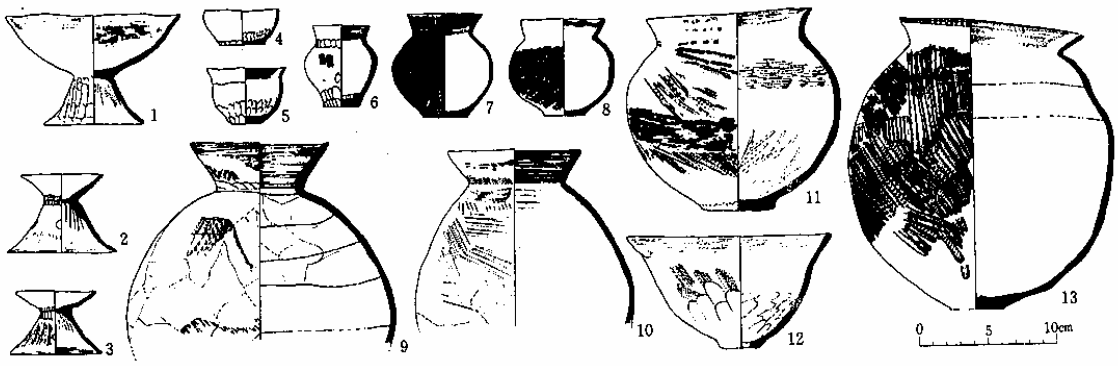


第54図　鶴ノ丸遺跡・山前遺跡出土土器

鶴ノ丸遺跡：第1・5・6・7号住居跡から高坏・器台・坏・壺・甕・甑が出土している(第54図)。高坏は脚部で円錐台状に開き、中央部に3孔の円窓がある。外面の器面調整はヘラミガキである（4）。器台は脚部で円錐台状に開くもの（15・16）と鼓形14のものがある。前者は受け部を欠いているが脚上部に3孔の円窓があり、受け部との間に貫通孔がある。外面は刷毛目後ヘラミガキで仕上げられ、裾はヨコナデされている。後者は全体に肉厚で、器面調整は口縁部が指頭によるオサエ、外面がナデである。坏は体部中央に段(くびれ)がつき、下部がすぼまるもの（5・6・8・17・24）と広口の鉢状のもの（7）・小鉢状のもの(1・18)がある。前者には内・外面がヘラミガキで仕上げられるもの(8・24)とヘラケズリや刷毛目で口縁部だけヨコナデされるもの(5・6・17)がある。広口鉢状のものは口縁部が強く外傾し、胴部内外面がヘラミガキされている。小鉢状のものはヘラケズリ・刷毛目・ナデなどで粗い仕上げである。壺は複合口縁（10・13・21）と単純口縁（22）のものがある。10・13は口縁部幅が狭い複合口縁壺で、10は口縁部が外傾し、13は僅かに外傾している。13の胴部は長胴気味の球形である。23もこの種の壺に伴う胴部と推定される。外面の調整はヘラミガキ・刷毛目が併用されている。22は口縁部が直立気味に外傾して開く単純口縁壺で、胴部は張りのない膨らんだ玉葱状をしている。外面はヘラミガキで仕上げられている。9も同種の壺と推定される。甕は広口で胴中央下部が膨らむもの（11）と口縁部が外反し長胴気味の球形胴部をもつものがある(27・28)。外面の器面



第55図　多賀城市新田遺跡第60号土坑出土土器
（多賀城市教委原図一部訂正）



第56図　十三塚遺跡尾根第２号住居跡出土土器

調整は刷毛目・軽いヘラミガキが併用されている。12は台付甕である。甑は単孔平底(丸底風)鉢状のものである（3）。外面調整は刷毛目・ヘラケズリである。

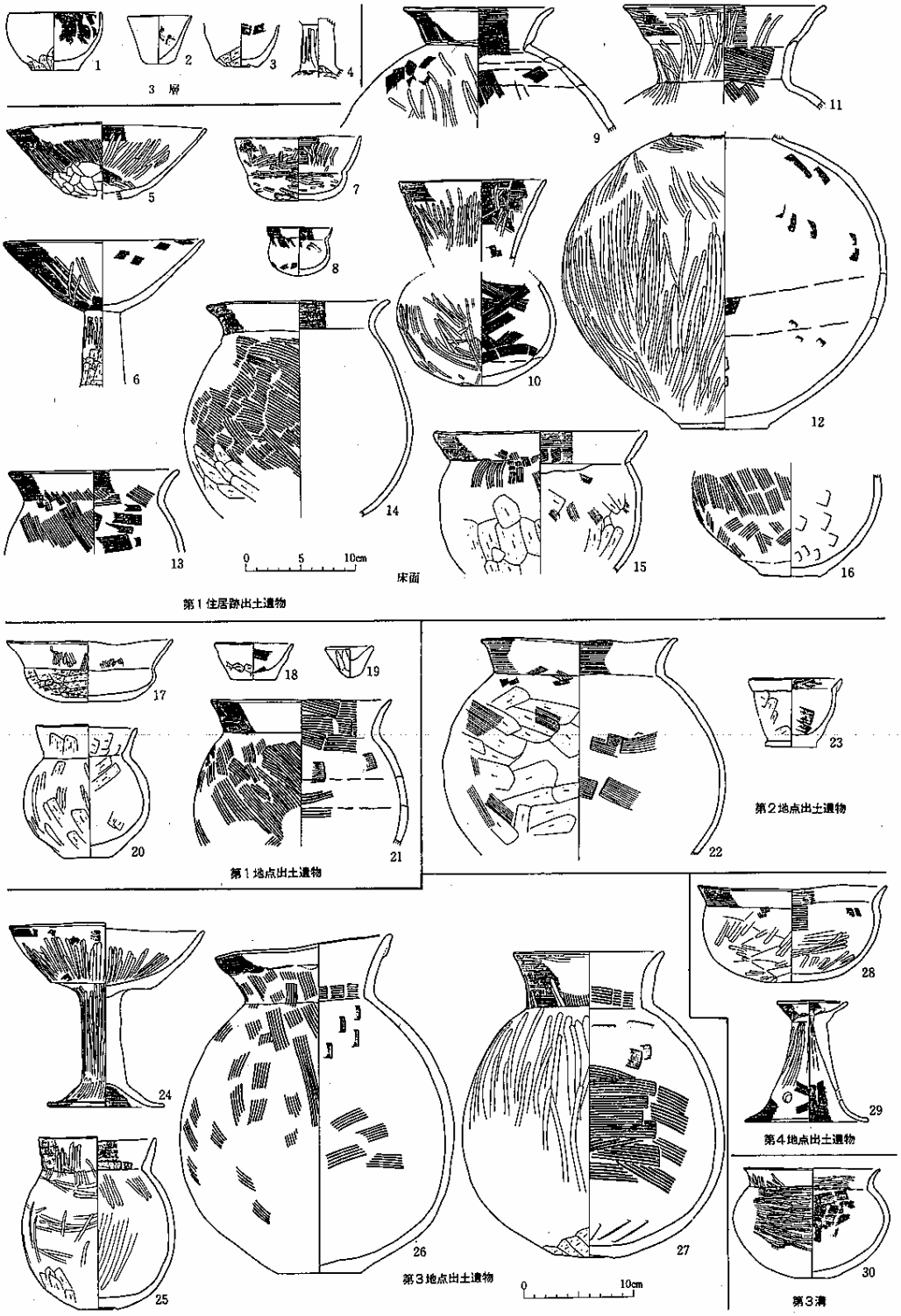
山前遺跡では大溝底面付近からまとまって土師器群が出土しており、高坏・器台・坏・壺12点が図示されている(第54図)。高坏は無段平底の坏部と円筒状脚部からなる（32）。脚下部は扁平で膨らみの強い円錐台状をしている。外面はヘラミガキされている。器台は坏をのせた形状のもの（33）と受け部のままのもの(34・35)がある。前者の脚部は下方に開いた円筒状で裾が広がり、受け部との間は筒状になっている。後者の脚部は円錐台状で中央部に円窓があり、受け部との間に貫通孔がある。坏は体下部にくびれをもつもの（30）と広口鉢状のもの（29）がある。器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目などである。壺は複合口縁（36・37）と単純口縁のもの(38～40)がある。複合口縁壺の胴部は球形もしくはつぶれた球形をしている。外面の器面調整はヘラミガキおよび刷毛目である。単純口縁壺には口縁部が外反するもの（38）・直立気味に外傾するもの（39）・広口のもの（40）がある。胴部はつぶれた球形が張りを失った玉葱状で、外面はヘラミガキ・刷毛目・ヘラケズリ等で仕上げられている。

十三塚遺跡尾根第2号住居跡からは高坏・器台・壺・甕・甑などが出土している(第56図)。高坏は無段丸底で、脚部は円錐台状をしている(1)。器台は埦・皿状の受け部と円錐台状の脚部からなり、脚中央部3～4孔の円窓がある。受け部との間には貫通孔がある(2・3)。壺は口縁部の外傾する単純口縁で、胴部は下膨らみの球形で、長胴気味である(9・10)。甕は口縁部が外反し、胴部が滑らかな球形のもの（11）と外反する刻目口縁で、胴部が長胴気味球形のもの（13）がある。甑は単孔平底で、丸味をもつ鉢状のものである(12)。資料は実見したが、細かな器形の特徴・器面調整については充分な観察をなし得ていない。

宮前遺跡第22号住居跡からは高坏・坏・甕が出土している(第51図)。高坏は脚上半部で、上部が柱実、下部が円錐台状をなすと推定され、円窓がある。外面はヘラミガキされている(26)。坏は体下部でくびれるもので、丹塗りされている(25)。甕は口縁部が外反し、胴部が長胴気味の球形をしている(27)。内・外面とも刷毛目調整である。

以上、第ⅡB段階の資料を紹介した。この段階の特徴については、第Ⅱ段階の冒頭で述べた通りである。資料的に補足すると、鶴ノ丸遺跡の複合口縁壺21は胴部を欠いている。類似した口縁部形態をもつ壺は多賀城市新田遺跡第60号土坑からも発見され、口縁部径もほぼ等しい。

新田遺跡の壺は下膨みで、長胴気味球形の胴部をしており、外面はヘラミガキされている。また、同遺跡ではＳＫ52土坑からこの段階の高坏・壺・甑などがまとまって出土している(多賀城市教委:1983.10)。

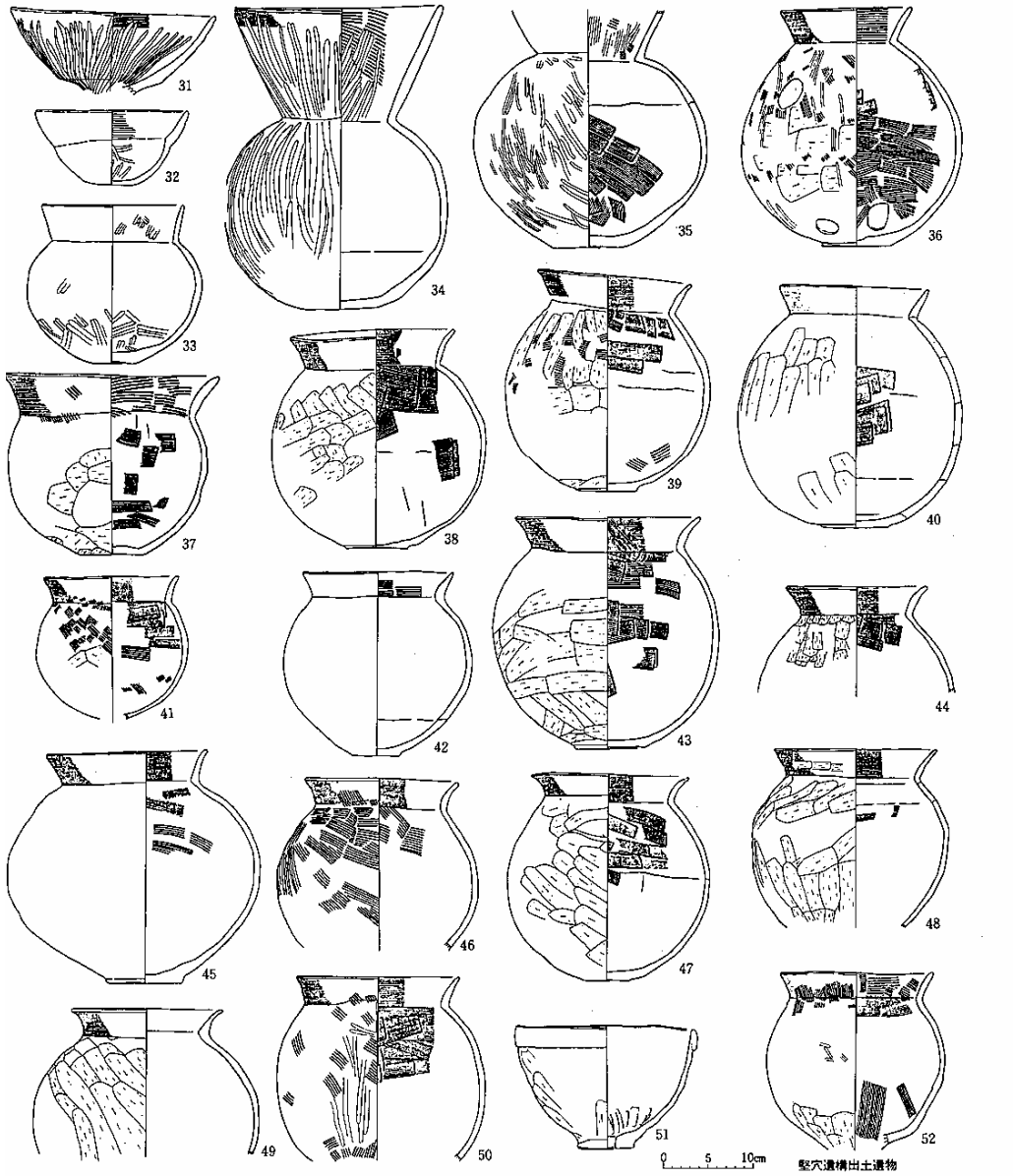


第57図　留沼遺跡・第1・2次調査区出土土器Ⅰ

第Ⅲ段階

留沼遺跡第1・2次調査区出土土器を基準資料とし、その類例として西野田遺跡・清水遺跡第10号溝・遺物包含層第Ⅲ層・宮前遺跡第2号住居跡出土土器をあげることができる。

留沼遺跡：第1号住居跡・第1～4遺物集中地点・竪穴遺構・第4層上面からまとまって遺物が出土している。これらの土器は第1号住居跡の遺物を媒介として検討すると大部分のもの



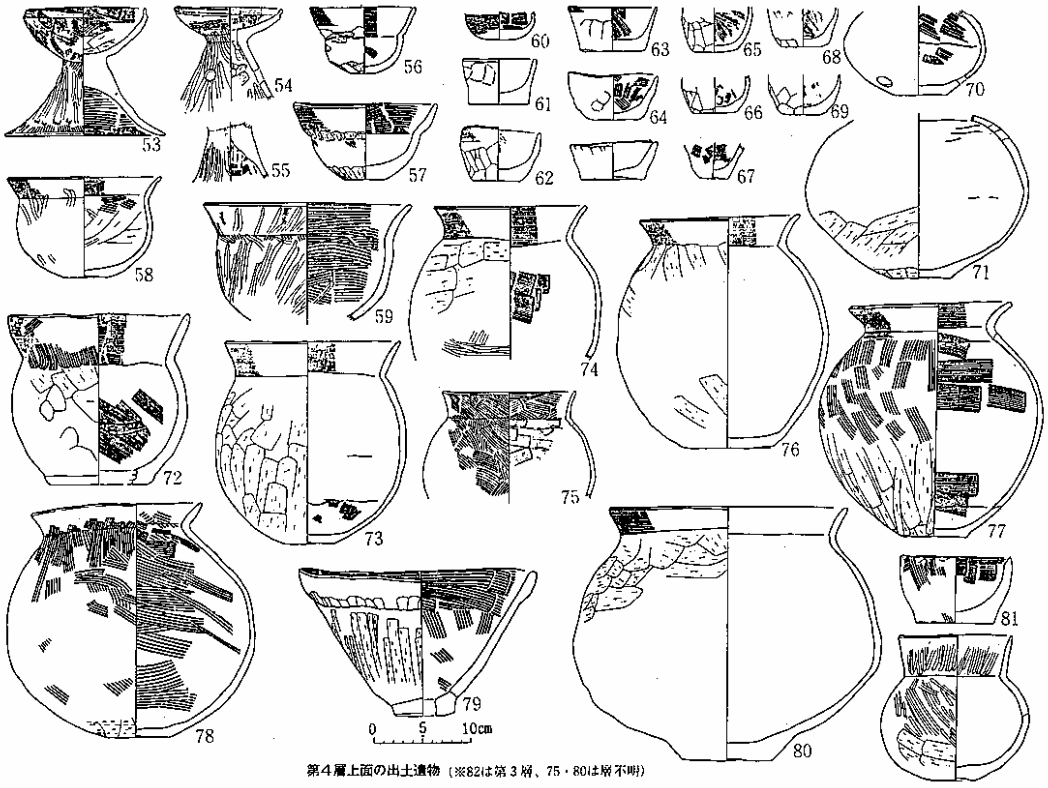
第58図　留沼遺跡・第１・２次調査区出土土器Ⅱ

に共伴関係が指摘でき、共伴関係の不明な一部のものについても「各器種の器形・調整などの諸特徴をみると、ある限定された時期の所産である可能性が強く感じられる。」と述べられている(手塚均：1980.3)。また、これらの遺構・遺物が第1・2溝の北側に限定されて発見されていることも興味深く、そこから出土する土器に第ⅡB段階にさかのぼるもの、南小泉式土器に降ることが明らかなものは含まれていない。したがって、第1・2次調査で出土した土器をすべて第Ⅲ段階に位置するものとして一括しておきたい。

留沼遺跡出土土器には高坏・器台・坏・壺・甕・甑がある(第57～59図)。高坏は無段丸底(5・6)と無段平底(24)のものがあり、後者は比較的底径が大きい。脚部は柱実で下部が偏平な円錐台状に開く(24)。器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目・ヘラケズリなどが併用される。

器台は椀・皿状の受け部と円錐台状の脚部からなる(29・53・54)。椀状受け部は口縁部に軽い段をもつ(53・54)。29・54は脚部に3孔の円窓をもち、受け部との間に貫通孔があるが、53では両者を欠く。外面の器面調整はヘラミガキ・ナデ・刷毛目などが併用され、受け部内面はナデを主体とし、ヘラケズリのものもある（53）。

坏は体部中央に段（くびれ）をもつもの(17・32・56・57)、口縁部が外傾する広口鉢状のもの（28）・小鉢状のもの（23）・無段平底のもの(7・1・18)などがある。7・17は薄手に仕上げられて

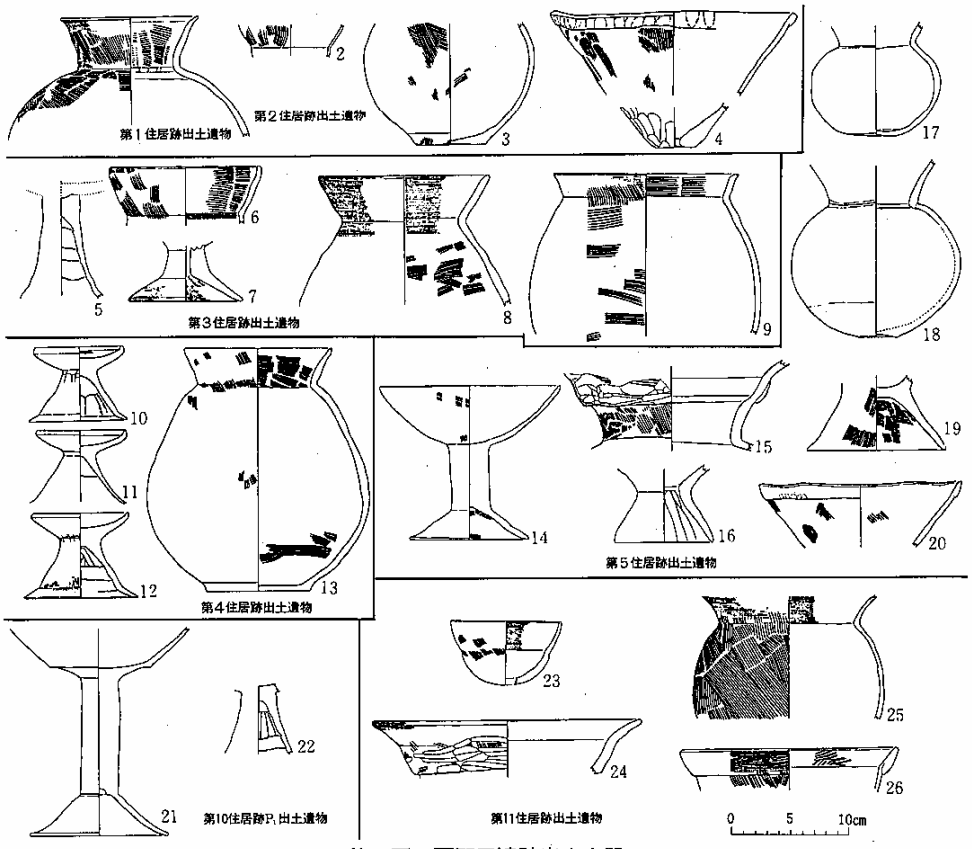


第59図　留沼遺跡・第１・２次調査区出土土器Ⅲ

いるが、厚手で粗雑な作りのものが目立つ。器面調整はヘラミガキの他にナデ・刷毛目・ヘラケズリが多用される。

壺は複合口縁状のもの(11・26)と単純口縁のもの(9・10・20・25・27・33～35)がある。11は有段口縁状に口縁部が屈曲し外反する。26は口縁部に粘土紐を貼り付け肥厚させている。口縁・頸部内面は連続的で外反気味に外傾する。26の胴部は下膨らみで、長胴気味の球形である。単純口縁の壺には口縁部が大きく外反するもの（9）、頸部が直立し口縁部が小さく外反するもの（27）、口縁部が直立気味に外傾するもの(10・34・35)・短頸壺状のもの（20・25・33）・広口壺状のもの（30）がある。胴部は25が長胴気味の球形、27が下膨らみで長胴気味の球形、10・34・35はやや押しつぶされた球形である。12は有段口縁壺もしくは口縁部が大きく外反する大形壺の胴部と推定されるもので、胴中央部が膨む長胴気味の球形をしている。これらの壺の外面調整はヘラミガキ・刷毛目・ナデであるが、ヘラミガキはあまり丁寧でない。

甕はいずれも口縁部が外傾もしくは外反し、球形の胴部をもつものであるが(14・21・22・38～50・73～80)、一部に広口のもの(37・58・59・72)、台付と推定されるもの（52）がある。球



第60図　西野田遺跡出土土器

形胴部は、大部分のものが長胴気味で全体に丸味をもっている(21・38〜43・46〜50・73〜77)が、一部に胴中央部の膨らむもの（22・45・78）、下膨らみのもの(14・36)もある。外面の器面調整は刷毛目とヘラケズリであるが、後者が多用される。この点は広口甕・台付甕も同様である。ただ、広口甕の場合はヘラミガキも併用される(58・59)。

甑は単孔・平底の鉢状のもので複合口縁である(51・79)。胴部は内弯するもの（51）と直線的に外傾するもの（79）があるが、口縁部への移行は連続的である。外面の器面調整はヘラケズリである。

西野田遺跡第1〜5・10・11号住居跡からは高坏・器台・坏・壺・甕が出土している(第60図)。高坏は坏部が丸底状のもの（14）と平底状のもの（21）がある。両者とも脚部は中実の円柱状で、下部が偏平な円錐台状に開く。この他、脚部全体が円錐台状に開くものもあり、内面に粘土紐積み上げ痕を残している(5・22)。器台は脚部が円錐台状のもの(10〜12)、脚上部が短い円柱状でその下が円錐台状に開くもの（7）、鼓形のもの（16）がある。前者は受部口縁が立ちあがり、貫通孔や円窓をもたず、脚部内面にナデツケや粘土紐積み上げ痕を残している。16の鼓形器台も粗雑な作りである。坏は体部中央に段(くびれ)をもち薄手に仕上げられているもの(2・6)と厚手のもの（23）がある。壺は有段口縁(15・24)と単純口縁のもの(1・17・18)がある。単純口縁のものは口縁部が大きく外反するもの（1）と口縁部が直立気味に外傾して開くもの（17・18）がある。後者の胴部はつぶれた球形をしている。甕は口縁部が外傾し、下膨らみで長胴気味のものである(8・9・13)。台付甕も1点ある（19）。甑は単孔平底で、底部から口縁部に直線的に開く(4・20)。口縁部は複合口縁である。これらの土器は磨滅しているものが多い。しかし、器面調整の全体的特徴として、外面に刷毛目を多用していることがうかがえる(8の外面は軽いヘラミガキ)。

清水遺跡遺物包含層第III層・第10号溝からは、高坏・壺・甕が出土している(第53図)。遺物包含層第III層の下層である第IV層からは第ⅡA段階の土器が出土しており、土器群の変遷が層位的に確かめられている。

高坏の坏部は無段平底のもの(1・2)で、底径は1が小さく2が大きい。脚部は円錐台状に開くもの（1・2・3・16）と上部が円筒状になるもの（7）、柱実の円柱状になるもの(4〜6・8・15)がある。脚裾部の開き方には滑らかに開くもの（15）、僅かに屈曲して開くもの(1〜3)、段を形成して開くもの（16）など多様である。器面調整は外面がヘラミガキ・ナデ・刷毛目で、脚部内面はヘラケズリを加えているものが多い。壺は有段口縁状のもの（9）と単純口縁で大形のもの（10・17・20）・小形のもの（11）がある。17の口縁部には縦位浮文状の丸味をもった隆帯が1本ある。20の胴部は胴上部に張りをもつ長胴気味の球形である。18も大形壺の胴部と推定され、長胴気味の球形である。甕はいずれも口縁部が外反するものである(12〜14)。これらの壺

・甕の外面調整は刷毛目とヘラミガキが併用され、ヘラミガキは壺に、刷毛目は甕に多用される。

宮前遺跡第2号住居跡からは高坏・坏・壺・甕・甑が出土している（第50図）。高坏は坏部が無段平底で、底径が小さいもの（1）と大きいもの（2）がある。2の脚部は柱実の円柱状である。外面はヘラミガキされている。坏は厚手のもので、体下部に段(くびれ)がある。体下部はヘラケズリされている（3）。壺は複合口縁で、口縁・頸部内面が連続的で外傾する(5)。外面調整は刷毛目である。16～20は各種壺の胴下部と推定される。甕には口縁部が外反もしくは外傾するもの（6～13）と直立気味に外傾する広口のもの（14）、S字状口縁のもの（15）がある。前者の胴部はほぼ球形のもの（6）と下膨らみで長胴気味球形と推定されるもの(7・12・13)がある。広口甕の胴部は肩が張っている（14）。これらの甕の外面調整は刷毛目・ヘラナデ・軽いヘラミガキが併用される。S字状口縁甕は口縁部の厚さが均質である。胴部は肩の張らないもので、外面の刷毛目は縦に長いが、1単位ごとに間隔があいている。甑は単孔平底の鉢状で、底部から口縁部に直線的に開く(24)。口縁部は複合口縁である。

以上、第III段階に位置づけられる資料を紹介した。その基本的特徴は高坏・器台・坏・壺・甕・甑からなる器種構成をもつという点で、第Ⅰ・Ⅱ段階と共通する。しかし、それぞれの器種を見ていくと塩釜式土器の最終段階であることを示している。すなわち、高坏・器台の脚部から円窓の消失が本格化し、器台における受け部・脚部間の貫通孔が失なわれたものが出現することである。もちろん、第Ⅰ段階においても受け部・脚部間に貫通孔のないものもある。しかし、それは受け部が極端に小さい場合に限られ、第III段階の貫通孔の消失は一定の普遍性に近いものであり、それはとりもなおさず器台そのものの消失過程を示している。そのことは、塩釜式土器を特徴づける複合口縁・有段口縁壺においても同様で、口縁部の複合・有段は立体性を失ない微弱なものが多く、第Ⅰ・Ⅱ段階における球形胴部もこの段階では長胴化の傾向が著しくなる。また、器面調整の点から見ると、高坏や器台・坏などの精製器種についても粗略化が著しく、丁寧なヘラミガキはみられなくなる。それに代って刷毛目やヘラケズリ仕上げのものが特徴的となる。甕の場合は、第Ⅰ・Ⅱ段階で主体的に採用されていた刷毛目が減少し、ヘラケズリ・ヘラナデ・軽いヘラミガキに器面調整が転化する。

このような特徴は別な面から見れば塩釜式土器の第III段階が南小泉式土器の直前に位置づけられることを示している。すなわち、南小泉式土器の古い段階に位置づけられる多賀城市山王遺跡第13号遺構(高倉敏明:1981.3　丹羽茂:1983.3)と比較すると興味深い。器台・坩状坏・台付甕が消失し、高坏・坏・壺・甕からなる南小泉式的器種組成を示し、坏が無段丸底・平底のものに転化しているものの、高坏・壺・甕などの器種に塩釜式土器第III段階からの連続性を認めることができる。器形的には近似し、相違点として高坏における無段平底坏部の底径の

増大、脚裾部の屈曲が著しくなること、脚部内面調整がナデツケやヘラナデに変化すること、壺・甕においては長胴化が一層促進されることをあげ得る程度である。

器種の変遷

塩釜式土器第Ⅰ～Ⅲ段階の基準資料を紹介し、その特徴を説明した。その結果をまとめて示したのが第61図である。ここでは各器種ごとにその変遷を整理しておきたい。

高坏：坏部は丸底のものと平底のものが一貫して存在するが、古い段階に丸底、新しい段階に平底のものが盛行する傾向がある。そして、有段丸底のものは第Ⅰ段階に多く、第ⅡB段階以降はみられない。

脚部は円錐台状のもの、上部が円柱状で中・下部が円錐台状のもの、上・中部が円筒状で下部が円錐台状のもの、上・中部が円柱状で下部が円錐台状のものがある。脚部全体が円錐台状のものは、一貫して認められるが、第Ⅰ段階では脚裾部が大きく広がるものが特徴的に存在し(15・16)、第Ⅱ段階以降はほとんどみられない。また、脚上部が円柱状で中・下部が円錐台状のものは各段階にみられるが、第ⅡA段階にもっとも特徴的に存在する(13・14)。脚上・中部が円柱状のものは第Ⅲ段階に特徴的に存在する(7・8)。脚上・中部が円筒状のものは山前遺跡に1例あるだけなので判断に困難を伴うが（10）、外観は脚上・中部円柱状のものと共通していることから、新しい段階に特徴的なものの一部とも考えられる。また、各種の脚部形態(前記四種)は系譜上の問題で、それぞれが変遷している可能性が強く、それは上述のように円錐台状脚部のものについて変遷を指摘できるが、その他のものについては資料が不充分である。

脚部の円窓は第Ⅰ段階では3～9孔、しかも径の大きなもの、多段のものが存在する(15・16・18)。それに対し、第Ⅱ段階以降は一段に限定され、径も小形化し、数もほぼ3孔となり、第Ⅲ段階では無窓のものが多くなる(1～4・7・8)。

外面および坏部内面の器面調整は、第Ⅰ・ⅡA段階では丁寧なヘラミガキを主体とするが、第ⅡB段階以降はナデや刷毛目を併用するものが多くなり、第Ⅲ段階ではヘラケズリ仕上げのものも一部にみられるようになる。

器台：脚部が円錐台状で受け部が小皿.・埦状のもの、坏をのせた状態のもの、脚上部が円柱状で中・下部が円錐台状のもの、鼓形のものなどがある。鼓形のものは資料が少なく変遷を指摘できないが、他のものについては可能である。時期的変遷を明瞭に示すのは受け部・脚部間の貫通孔と円窓である。貫通孔径は第Ⅰ段階程大きく（34）、第Ⅱ段階以降小形化し(27～29)、第Ⅲ段階では失なわれるものが一定の普遍性をもって出現する(21・23)。円窓は高坏脚部の場合と同様な傾向を示す。

外面および坏部内面の器面調整は、第Ⅰ段階では丁寧なヘラミガキであるのに対し、第Ⅱ段階以降刷毛目やヘラナデが出現し、第Ⅲ段階では受け部内面をヘラミガキするものは少なくな

る。

坏：体部中央もしくは下部に段（くびれ）をもつ坩状のものと、埦・鉢・小鉢状のものがある。第Ⅰ段階の坩状坏には一部に平底で粗雑なものもあるが(55・56)、丸底のものはいずれも丁寧なヘラミガキで仕上げられている（52～54）。また、口径に対して器高も大きく、全体に深目である。口縁部に段がみられ、体部中央の段をあわせると二段になるものもある(52)。これに対し、第ⅡA段階以降は口径に対し器高の低い偏平気味のものが特徴的に現われる(39・40・49)。また、段の位置が体下部のものも多く認められる。

第ⅡA段階では段の上に積み上げられる粘土紐の下端が器面調整を受けずに外面に残されているものが特徴的に存在する（48・50）。また、器面調整としてヘラミガキの他に刷毛目・ナデが併用されるようになる。第ⅡB段階になると下半部のヘラケズリ仕上げが加わり、第Ⅲ段階では刷毛目・ヘラケズリが主要なものとなり、ヘラミガキも軽いものへと変化する。このように坩状坏は高坏・器台と同様に精製とも言える仕上げの丁寧なものから粗略なものへの変化が指摘できる。

埦・鉢・小鉢状のものは第Ⅰ段階から刷毛目・ナデ・ヘラケズリ調整を採用し、第Ⅲ段階まで変化が乏しい(57～79)。しかし、口縁部を複合状に肥厚させるのは第Ⅰ段階の特徴であり(70・71)、全体的にみれば第Ⅰ段階から第Ⅲ段階へ粗雑化の傾向が看取される。

壺：複合・有段口縁壺は、第Ⅰ段階では頸部に刻目凸帯、口縁部に刻目縦位浮文のみられるものがある（92）。複合口縁壺は、頸部上端に稜を形成するか屈曲しながら、口縁部が内弯気味に外傾する（94）。第ⅡA段階では口縁部が頸部上端で稜を形成し、そのまま外傾する(89)。第ⅡB段階では外傾の程度が弱くなり、頸部上端の稜も弱くなる(87)。第Ⅲ段階では頸部から口縁部まで直線的もしくは滑らかに移行する(83・84)。

有段口縁壺の段は、第ⅡA段階で最も顕著で(88・90)、第ⅡB段階以降は弱くなる。複合・有段口縁壺の胴部は第ⅡA段階で整った球形（90）、下膨らみ球形のもの（88）が存在するが、第ⅡB段階以降長胴気味になり（87）、第Ⅲ段階では長胴化が促進される（84）。

複合・有段口縁壺の外面調整は、ヘラミガキ・刷毛目が多用されるが、次第に刷毛目の比重が高まり、ヘラミガキも丁寧なものから軽いものに変化する。

単純口縁壺には口縁部が外反する球形胴部を基調とするもの(大・中形:95～102)と、口縁部が直立気味か直線的に外傾して開く玉葱状胴部を基調とするもの(中・小形:103～107・111・112・114～116・119～122)、広口壺(中・小形:108～110・113・117・118)などがある。前者の器形・器面調整は複合・有段口縁壺と同様な道を歩む。玉葱状胴部をもつものは全体に変化が乏しい。しかし、第Ⅰ段階のものは頸部で強くすぼまり、肩と同時に全体に張りがある(119・122)。抽象的表現ではあるが緊張感にあふれた力強さをもっている。器面調整も丁寧なヘラ

ミガキである。それに対し、第Ⅱ段階以降は肩および全体の張りを失ない力強さに欠け、器面調整のヘラミガキも軽いものになり粗略化する。広口壺は変遷を知る上で資料が充分でない。

甕：口縁部が外反する平底甕を主体として(124～128・131・133～136)、広口(129・130・132・138・139)・S字状口縁(140・143・148・149)・波状口縁(147)・台付甕がある。口縁部が外反する甕には胴部が強く膨らむもの(A)・胴下部に強い張りをもつ球形のもの(B)・滑らかな球形のもの(C)・長胴気味球形のもの(D)・長胴化した球形のもの(E)などがある。第Ⅰ段階にはA(136)・B(135)があり、Bが特徴的存在である。Aは第Ⅱ段階では不明であるが、第Ⅲ段階にもみられる(126)ことから変遷しながら継続すると考えられる。第Ⅰ段階のA・Bは口縁部が肥厚するものが多く、力強く屈曲しながら端部に至るのに対し、第Ⅲ段階では単純に外反する。また、第Ⅰ段階の胴部外面は刷毛目であるのに対し、第Ⅲ段階のAはヘラケズリになっている。Cは第ⅡA段階の特徴で主体的に存在する(133)。この種の甕も一部第Ⅲ段階まで継承されるが(124)、器面調整が刷毛目からヘラナデに変化している。Dは第ⅡB段階に特徴的に存在し（131）、球形胴部の長胴化の開始を示す。そして、この段階まで胴部外面調整は刷毛目を主体としている。Eは長胴化が促進されたもので、第Ⅲ段階の特徴である(127・128)。Eには胴部全体が丸味をもって長胴化したものと(127)、下膨らみのものがある(128)。前者の胴部外面調整はヘラケズリを主体とし、刷毛目も併用される。後者では刷毛目・ヘラナデ・軽いミガキが併用される。

広口甕は資料的に少ないが、口縁部が外反するもの(129・132・138)・直立気味のもの(130・139)があり、器面調整において、前述した一般の甕と同様な変遷を原則的にたどるものと推定される。

S字状口縁甕は、第Ⅰ段階のものは口縁下部が肥厚する(148・149)のに対し、第Ⅱ・Ⅲ段階では均質な器厚でS字状になる(140・143)。また、少ない資料ではあるが、第Ⅱ段階のものは肩が張る(143)のに対し、第Ⅰ・Ⅲ段階のものは肩が張らない(140・149)。肩部の器面調整は第Ⅰ段階がヘラケズリ、第Ⅱ段階が密接した縦に長い刷毛目、第Ⅲ段階が単位ごとに間隔をおいた縦に長い刷毛目である。

波状口縁甕は第ⅡA段階のものが今熊野遺跡(147)に、刻目口縁のものが今泉城跡にある。この他、山前遺跡住居跡・六反田遺跡(田中則和他:1981.12)からも出土しているが、いずれも古い段階に伴うものである。ただ、刻目口縁の残存形態を示すものが十三塚遺跡にもあるので、第ⅡB段階まで残る可能性が高い。

台付甕は第Ⅰ～Ⅲ段階まで存在するが、どの種の甕と組みあうか明確ではない。

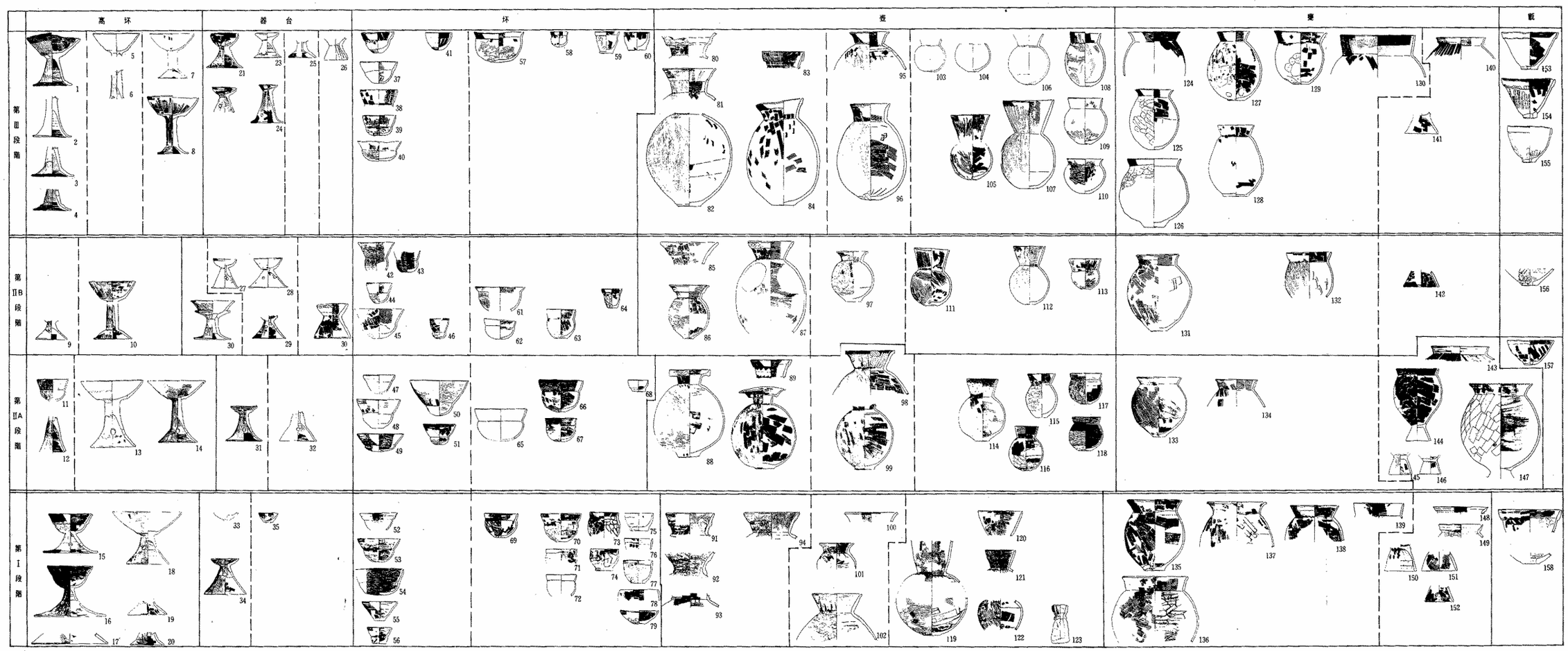
甑：いずれも単孔のもので、複合口縁の鉢状をしている（153～158）。底部は第Ⅰ・ⅡA段階が丸底、第ⅡB・Ⅲ段階が平底である。胴部は第Ⅰ・Ⅱ段階が内弯、第Ⅲ段階が内弯と直線的

外傾のものが併存し、後者が多い。口縁部は第Ⅰ段階のものが内弯気味に外傾(158)、第ⅡA段階のもの(157)が僅かに外傾し、第Ⅲ段階のものが胴部から直線的(153・154)もしくは滑らかに(155)移行する。外面の調整は、第1・Ⅱ段階では刷毛目であるのに対し、第Ⅲ段階ではヘラケズリのものも出現する。

塩釜式土器における地域性

塩釜式土器は宮城県内の資料を見る限り、際立った地域性はみられない。それは地域性を見る上で資料が充分にそろっていないということもあるかもしれない。その意味では第Ⅲ段階が最も資料が豊富なので、その点を検討してみたい。高坏・器台・坏・壺については相違を指摘することが困難である。しかし、甕については器形・器面調整に若干の相違を見い出すことができる。すなわち、宮城県中・南部に位置する西野田遺跡・宮前遺跡と宮城県北部の留沼遺跡について甕を比較すると、胴部が長胴化した球形という点では共通するものの(時期的共通性)、西野田・宮前遺跡では下膨らみのものが多く、胴部外面器面調整として刷毛目・ヘラナデ・軽いヘラミガキが併用される。それに対し、留沼遺跡では胴部全体に丸味をもったものが多く、下膨らみのものは少ない。胴部外面の器面調整もヘラケズリを主体とし刷毛目を併用するという特徴をもっている。このように、塩釜式土器には際立った地域性はみられないものの、第Ⅲ段階の甕については器形細部・器面調整などに細かな地域的相違を指摘できる。この点を隣接する山形県の状況と簡単に比較してみたい。西村山郡下槇遺跡では第1・4・5・7・9・10号住居跡から高坏・器台・坏・壺・甕・甑がまとまって出土しており、各器種の特徴は第Ⅲ段階に併行することを示している。その中で、甕をみると口縁部が直立もしくは外傾する広口のものが多い。この種の甕は宮城県でも出土するが量的に少なく客体的存在で、地域性を示すものと考えられる。

このような地域性が第Ⅲ段階に至って形成されたのか、それとも第Ⅰ段階から継承されたのか、さらにはもっと大きな地域的系譜に基づくものなのかは、まだ検討できる資料が充分でない。また、甕の中で、波状口縁甕・Ｓ字状口縁甕は前者が関東地方、後者が東海地方および群馬県地方からの外来的要素の強いものと一般的に理解されているが、東北地方における土師器の成立過程そのものが未解明の今、積極的に検討できる段階にはない。もちろん、今態野遺跡の波状口縁甕や宮前遺跡のＳ字状口縁甕を見ると、在地的もしくは在地化した器種と較べ相対的ではあるが、胎土・器形・器面調整・全体的印象として違和感を感じる。しかし、それは第Ⅰ～Ⅲ段階の時期差を越えるものではなく、Ｓ字状口縁甕にあってはその変遷を示し得る範囲のものである。外来系土器および要素については弥生時代終末もしくはそれらに接続する第Ⅰ段階以前の資料が明らかになった段階で検討を加えたい。



第91図　塩釜式土器の変遷

周溝墓と集落

今熊野遺跡の方形周溝墓群と集落

方形周溝墓の特徴

今熊野遺跡からは既に述べたように、発掘調査によって10基の方形周溝墓が発見され、そのうち2基(第1・4号方形周溝墓)を完掘した。その他、部分的調査(調査区内もしくは削平され一部残存)を実施したのが6基、確認のみのもの2基である。これらの方形周溝墓の特徴を整理すると次のようになる。

○分布:北台台地では台地中央部の東緩斜面から、台地北端で平坦面が狭まる部分まで分布する。また、その分布は北台台地の南北両側に谷の入った部分を経て鴻ノ巣台地に至り、鴻ノ巣台地が東側へ広がりはじめる部分まで続く。

○形状:基本的には方形を基調とするが、長方形に近いものもある。また、周溝は各辺の中央部外縁が膨らみをもち、深さを増す場合が多く、その傾向は大規模なもの程著しい。また、第1号方形周溝墓は三隅に陸橋部をもっている。

○規模:長軸が7mから24mまでのものがあり、10m前後(7〜15m)のものが多い。その中で、特に大きいのは第1号方形周溝墓(24×21.4m)と第10号方形周溝墓（20×20m）である。

○方向:北隅と南隅を結んだ方向がほぼ真北のもの(第1・2・4〜8号周溝墓)、長軸方向がほぼ真北のもの(第10・11号周溝墓)、任意方向のもの(第9号周溝墓)がある。

○埋葬施設・盛土：いずれも明確に残っていたものはない。第4号方形周溝墓から土坑1基が検出されたが、位置的に偏りがある。

○遺物:いずれも転落した状態で、周溝の堆積土から発見された。遺物が出土したのは第1号方形周溝墓(土師器壺14個体。そのうち図化できたのは7個体。)・第4号方形周溝墓(土師器坏・壺各1個体)・第6号方形周溝墓(土師器壺1個体)・第11号方形周溝墓(土師器壺1個体)である。

以上が、今熊野遺跡の方形周溝墓の特徴である。分布範囲は上述の通りで、北台台地の南側および鴻ノ巣台地中央部以東の平坦面および南緩斜面には及ばない。それでも部分的な調査で10基検出され、分布範囲の面積を考慮すれば20基前後の群集形態をとるものと推定される。

方形周溝墓群の時期――土器編年との関係――

方形周溝墓群の時期についてその出土土器から検討してみたい。第1号方形周溝墓から出土した土器で器形の判明するのは図示した有段口縁壺6点と単純口縁壺1点である(第9〜11図)。有段口縁壺はいずれも焼成前底部穿孔で、仮器化したものである。したがって、日常生活に用いられる壺に較べ部分的な誇張が存在する可能性はある。しかし、底部穿孔土器は土師器に包

括されるものであり、基本的には共通する時期的特徴を示すと考えられる。6点の有段口縁壺は口径・胴径・器高などに接近した数値を示し、大きさの点で共通している。また、最大径は口縁部にあり、胴径よりも僅かに大きい。口縁部は明瞭な有段口縁で、口縁部が大きく外反する。胴部はほぼ球形である。このような特徴をもった壺は第ⅡA段階の遠見塚古墳自然溝斜面上部第Ⅰ土器群の壺、今泉城跡第19号土坑の壺にみいだすことができる。また、明瞭な有段口縁、胴部球形は第ⅡA段階の特徴であり、第ⅡB段階以降は長胴気味球形胴部へと変化していく。したがって、第1号方形周溝墓の有段口縁壺は第ⅡA段階に位置づけられる。しかし、胴部の特徴をよく見ると、遠見塚・今泉城例などと較べ胴径に対する胴高の割合が僅かに大きい。この点を重視すれば、第ⅡA段階でも第ⅡB段階に接近した時期とみることができる。また、口縁部が直立気味に外傾する単純口縁壺も胴部の特徴でみると、第ⅡA段階の今泉城跡や色麻古墳群第11号住居跡出土壺と、第ⅡB段階の鶴ノ丸遺跡第6号住居跡出土壺との中間的様相を示している。したがって、仮器としての底部穿孔有段口縁壺と日常器である単純口縁壺の編年観は矛盾せず、第1号方形周溝墓の時期も第ⅡA段階の中で、より第ⅡB段階に接近した頃に求めることができる。

第4号方形周溝墓からは口縁部を欠く壺と坏が出土している(第17図)。この壺は胴部中央が膨らむ球形で、第ⅡB段階以降にはみられないものである。また、器面調整があまり丁寧でないことから第Ⅰ段階に遡るものでもない。したがって、消極的ではあるが第ⅡA段階頃のものと考えられる。坏は口縁部が内弯気味に外傾し、底部が凹み底になるもので、第Ⅰ段階の宮前遺跡第53号住居跡出土坏とも似るが、口縁部が単純化している。その点からすれば、壺と同様第ⅡA段階に位置づけられる。第4号方形周溝墓も第ⅡA段階のものと考えられる。

第6号方形周溝から出土している小形広口壺(状の坏)その帰属が難しい(第17図)。口縁部の肥厚した特徴からすれば第ⅡA段階を中心としたその前後の時期とみることができ、第6号方形周溝墓の時期もその頃に求められる。

第11号方形周溝墓から確認調査で出土した壺は焼成後の底部穿孔で、口縁部を欠いている。胴部の特徴は第ⅡA段階の今泉城跡第19号土坑・色麻古墳群第11号住居跡出土壺と近似し、第ⅡB段階までは降らない。したがって第11号方形周溝墓とともに第ⅡA段階に位置づけられよう。

以上のように、土器を出土している4基の方形周溝墓は若干の時間的幅はあるかもしれないが、いずれも第ⅡA段階を中心とした時期に位置づけられる。これらの方形周溝墓群は第1号方形周溝墓が南端、第4・6号方形周溝墓が中央、第11号方形周溝墓が東端に位置し、相互に離れているにもかかわらず、ほぼ共通した時期のものである。このことは今熊野遺跡の方形周溝墓群が第ⅡA段階を中心として築造された可能性を示している。そして、土器が残っていな

かったものも含めて、今熊野遺跡の方形周溝墓群は、塩釜式土器第ⅡA段階を中心とする限られた時期に連続的に営まれた群集墓と理解することができる。

その中で、第1号方形周溝墓は際立った規模をもっている。また、この第1号方形周溝墓は三隅に陸橋部をもつという他の方形周溝墓にはみられない構造をもち、仮器化された有段口縁の焼成前底部穿孔壺が多量に供献されるという特徴をもっている。有段口縁壺の焼成前底部穿孔は日常器から独立したもので、葬送儀礼に伴ない墓に供献されることを目的とした仮器の成立という点で歴史的意味がある。そして、今熊野遺跡方形周溝墓群は限られた時期に連続的に営まれたもので、方形周溝墓という共通した墓制をもつものの、規模・構造・供献土器などに相違がみられ、その中に階層差の存在を認めることが可能である。

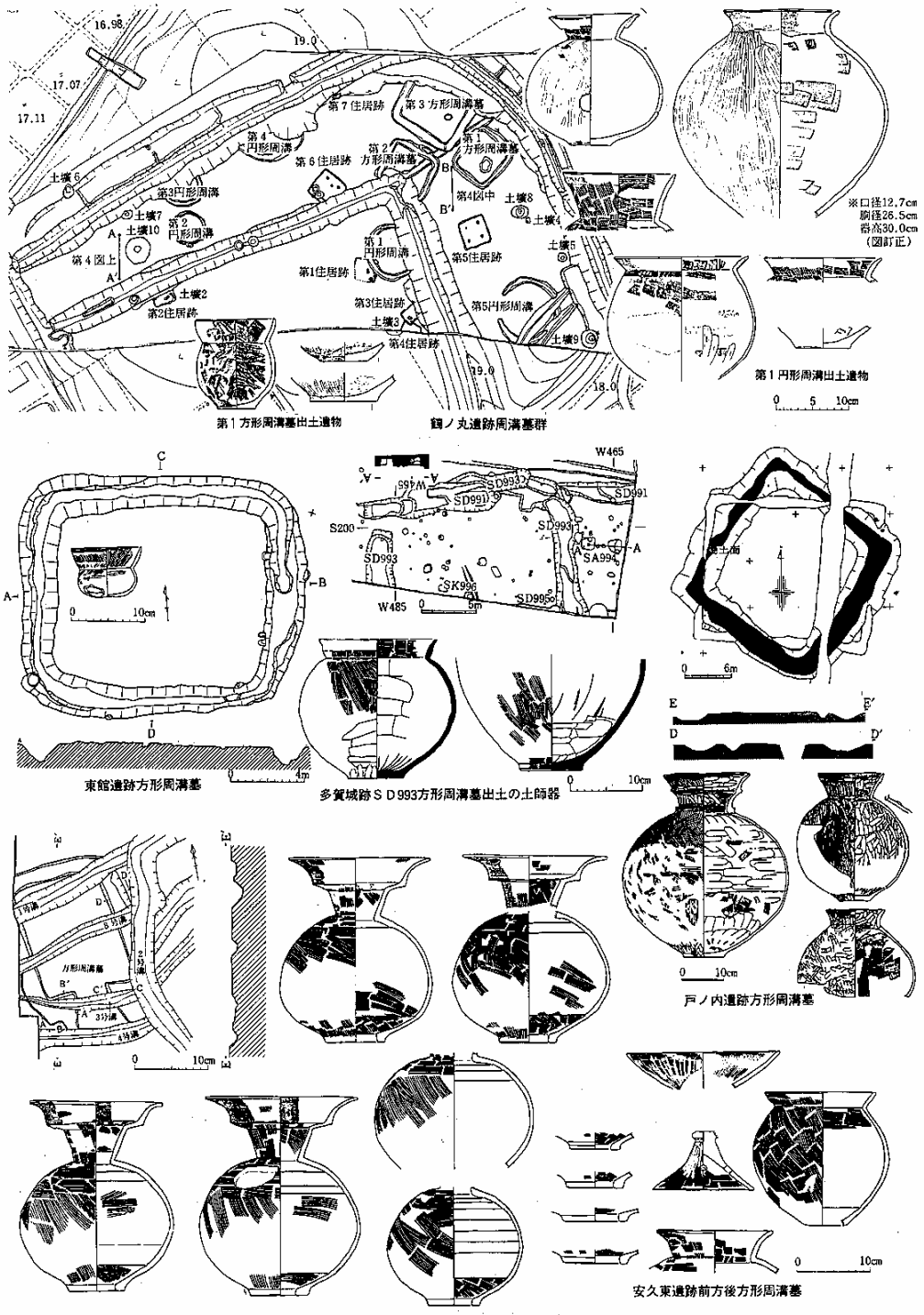
集落との関係

古墳時代前期(塩釜式期)の住居跡は鴻ノ巣台地に存在し、方形周溝墓群の密集する北台台地にはみられない。すなわち、発掘調査を行なった住居跡で、塩釜式期のものは鴻ノ巣台地南緩斜面に位置する第15・21・46号住居跡である。第15号住居跡出土土器は既に述べたように第ⅡA段階のものである。そして、第21号住居跡の複合・有段口縁壺も第ⅡA段階に位置づけられる。第46号住居跡の坏は第ⅡA段階か第Ⅰ段階に遡る要素をもつものである。確認調査で出土したCA－39号住居跡・地点不明の壺・坏は第ⅡA段階か第Ⅰ段階に遡るものである。この他、第52・54号住居跡は土器こそ出土しなかったが、地床炉をもつもので、塩釜式期の可能性が高い。また、鴻ノ巣台地で発掘調査を実施した住居跡は南緩斜面の一部に過ぎず、この他に広い中央部平坦面で数多くの住居跡を確認している。これら時期未確認住居跡の中に塩釜式期のものがかなり含まれていると考えられ、方形周溝墓群に併行する集落が鴻ノ巣台地に広く展開していた可能性が強い。

したがって、今熊野遺跡では鴻ノ巣台地に古墳時代前期（第ⅡA段階中心）の集落が営まれ、集落よりも一段高い北台台地を主体として群集墓としての性格をもつ方形周溝墓群が築造されたものと考えることができる。もちろん、方形周溝墓群の基盤となったのは鴻ノ巣台地の集落に限定されるものではなく南台台地を含めた複数の集落に基づくものと思われる。

宮城県内の周溝墓と集落

今熊野遺跡の方形周溝墓は宮城県さらには東北地方において最初の発見であった。その後、宮城県内で各種の周溝墓の発見があいついでいる。すなわち、仙台市安久東遺跡の前方後方形周溝墓（土岐山武:1980.9）、同市戸ノ内遺跡の方形周溝墓(仙台市教委：1983.12　早坂・渡部：1985.1)、多賀城市多賀城跡五万崎地区の方形周溝墓(宮多研:1978.3)、栗原郡高清水町東館遺跡の方形周溝墓(加藤道男:1980.3)、同郡志波姫町鶴ノ丸遺跡の方形周溝墓・円形周溝墓(手塚均:1981.9)などがある。また、遺物の出土はないが、集落跡との関係から塩釜式期の円形周



第62図　宮城県内の周溝墓とその出土土器

溝墓・方形周溝墓と推定されるものが名取市西野田遺跡(丹羽・柳田・阿部:1974.3)・栗原郡志波姫町宇南遺跡(斎藤吉弘:1979.3)から発見されている。各遺跡の周溝墓とその出土土器は第62図に示した。

第Ⅰ段階：塩釜式土器第Ⅰ段階の周溝墓としては、戸ノ内遺跡(1基)をあげることができる。戸ノ内遺跡の方形周溝墓は長・短軸約24㎡という大規模なものであるが、溝の深さは均一で、陸橋部を形成していない。周溝内からは複合口縁壺・単純口縁壺・高坏などが出土し、さらには周溝壁に正位の状態で埋納された有段口縁壺が発見されている。また、方形周溝墓に隣接して、北側および東側から4軒の住居跡が発見されている。調査範囲が限られているため方形周溝墓が群集するものか否か明らかでない。

第ⅡA段階：塩釜式土器第ⅡA段階のものとしては、安久東遺跡の前方後方形周溝墓(1基)と多賀城跡五万崎地区の方形周溝墓(1基)をあげることができる。安久東遺跡の前方後方形周溝墓は前方部前端が後世の溝によって切られているために正確な規模は明確でないが、主軸長24.5～26.0㎡、後方部幅18㎡と大規模なものである。周溝は後方部で幅2～3㎡と共通しているが、くびれ部で広くなり、前方部では前端に向かって狭くなる。深さは一様ではないが、後方部で深く、前方部で浅くなる。遺物としては、後方部および前方部（くびれ部）縁辺におかれたものが周溝内に落ち込んだ状態で、有段口縁壺・高坏・甕が出土している(14個体図示)。この中で主体を占めるのは焼成前底部穿孔の有段口縁壺で、10個体図示されている。この種の壺が多量に供献されたものと思われる。底部穿孔壺および日常器としての高坏・甕は第ⅡA段階の特徴を示すものである。また、底部穿孔壺を今熊野遺跡第1号方形周溝墓のものと比較すると、口縁部の大きく開く有段口縁であること、胴部がほぼ球形であること、底部が焼成前穿孔であるという点で共通している。しかし、その特徴をさらに検討すると、今熊野例は最大径が口縁部にあり、胴径より僅かに大きいのに対し、安久東例は口縁部径が胴径より僅かに小さい。胴部は胴径と胴高の比が今熊野列では1:0.86～0.95で0.92前後のものが多いのに対し、安久東例では1:0.85～0.87で0.85前後のものが多い。この比率は安久東例が今泉城跡・遠見塚古墳・色麻古墳群例に近い値であるのに対し、今熊野例が僅かに胴高の占る比率が高いことを示している。また、底部孔を比較すると今熊野例は穿孔ケズリの他に仕上げケズリを一部もしくは全体に施したものがみられ、底部孔外縁が内傾するものもあるのに対し、安久東例は仕上げケズリが顕著なものはみられない。以上の相違は同じ第ⅡA段階でも安久東例が今熊野例よりも先行する可能性を示している。

前方後方形周溝墓は西側が未調査なので、群集するか否かは不明である。なお、東側約75㎡の所から周溝墓に併行する時期の住居跡が2軒発見されている（岩渕・田中:1976.3）。

多賀城跡五万崎地区からは方形周構墓の北側半分(ＳD993)が検出されている。北辺が19.5㎡

と規模の大きいもので、北西隅と北東隅が陸橋状をしている。周溝下層から甕や壺が多量に発見されたとし、甕2点が図示されている。胴部球形と長胴化した甕である。前者は第ⅡA段階の特徴を示すものであるが、後者は新しい要素をもつものである(注)。また、ＳD993方形周溝墓の東側に隣接してＳD975とされる「⊏」状の溝が検出されている。幅2m・西辺の長さ約15mで、東側は調査区外にのびている。形状は方形周溝墓と何ら変りはないが、須恵器や瓦が出土したことから除外されたものと思われる。しかし、周溝が埋まりきらないまま新しい遺物が捨てられたとも考えられる。ＳＤ－975が方形周溝墓とすれば、調査区の東側に向かって方形周溝墓が群集して存在する可能性は多分にある。

第ⅡB段階：塩釜式土器第ⅡB段階のものとしては、鶴ノ丸遺跡の方形・円形周溝墓群(合計8基)・東館遺跡の方形周溝墓(1基)をあげることができる。

鶴ノ丸遺跡の方形周溝墓3基・円形周溝墓5基と住居跡5軒が一見混在する形で発見されている。5軒の住居跡はいずれも第ⅡB段階のものである。周溝墓で遺物が出土しているのは、第1・3方形周溝墓・第1円形周溝墓で、いずれも住居跡同様第ⅡB段階のものである。したがって遺物の出土しなかったものも含め、鶴ノ丸遺跡の周溝墓群は第ⅡB段階を中心として築かれたものと推定される。また、第1円形周溝墓は同じ第ⅡB段階の第1住居跡を切っていることから、周溝墓群と住居跡群はそれぞれ限定された時期幅の中で占地を変えたものと思われる。両者の分布をみると台地縁辺に周溝墓が多く、その内側に住居跡群が立地し、その接点で両者が重複している。したがって、住居と周溝墓が混在しているとみるよりは、両者が極めて近接して営まれたと考えるのが妥当であろう。

また、円形・方形周溝墓の規模をみると、長軸もしくは直径が6.65～14.5mで、10m前後のものが多い。第3方形周溝墓は14.5m、第4円形周溝墓は12m(推定)、第5円形周溝墓は12.2mとやや大きいが、今熊野遺跡の第1号方形周溝墓のように際立った相違を示すものではない。そして、これらの周溝墓群からは仮器化した焼成前底部穿孔壺は発見されず、いずれも日常器そのものか、焼成後に胴部に穿孔したものが出土している。したがって、鶴ノ丸遺跡の周溝墓群は占地・規模・供献土器からみて、階層差の少ない集団（首長層）の群集墓とみることができる。

東館遺跡では長軸15.4m・短軸13.2mの方形周溝墓が1基検出され、焼成後体部穿孔の坩状坏が1点出土している。周溝は埋まる過程で、土器の捨場として利用され、上部から南小泉式土器が出土している。坩状坏は第6層から出土し、堆積土上部の南小泉式土器とは層位的に区別される。坩状坏は薄手で、ヘラミガキによって仕上げられたもので、内部から穿孔されている。発掘調査で検出された方形周溝墓は1基だけであるが、発掘区が丘陵平坦面の東南端に限定されているため、単独で存在するのか、それとも群集するのか必ずしも明らかでない。

その他の周溝墓：以上の他に、遺物は出土していないが、隣接する集落との関係から周溝墓と推定されるものに、名取市西野田遺跡の円形周溝墓（2基）と栗原郡志波姫町宇南遺跡の方形周溝墓(1基)がある。西野田遺跡の円形周溝墓は第1号が直径17.5m、第2号が直径14.5mで、第III段階の集落に隣接して南緩斜面に営まれている。地形状の制約からこれ以上は群集しない可能性が強い。

宇南遺跡の方形周溝墓は長・短軸とも10mの規模をもち、陸橋部は形成していない。方形周溝墓から約100m離れて第II段階の遺物を出土する住居跡が3軒発見されている。トレンチ調査を主体としていること、さらには調査対象面積が限られていることから、方形周溝墓が群集するか否か明確でない。

また、名取市五郎市遺跡では1984年度の調査で、円形・方形周溝墓群が発見された。恵美昌之氏の教示によると、方形周溝墓と推定されるもの6基、円形周溝墓と推定されるの2基が群集する形で確認されたという。本格的な調査は1985年度に継続して行なわれるというので、その成果に期待したい。

周溝墓の性格

宮城県内で今まで発見された周溝墓は上述の通りである。その特徴は次のように整理することができる。すなわち、第1点として周溝墓は群集する傾向が強いということである。すなわち、調査範囲が限られているため群集するか否か不明なものを除くと西野田遺跡の2基を最少として鶴ノ丸遺跡の8基以上、今熊野遺跡の20基前後(確認された10基から推定)、五郎市遺跡の8基以上などをあげることができる。そして、これらの周溝墓は短い時期幅の中で、連続して営まれるという群集墓としての性格をもっている。第2に、これらの周溝墓は程度の差こそあれ、その時期の集落と隣接して営まれていることをあげることができる。すなわち、戸ノ内遺跡・今熊野遺跡・西野田遺跡・鶴ノ丸遺跡は近接し、その中で鶴ノ丸遺跡では部分的に占地が重複している。戸ノ内遺跡・今熊野遺跡・西野田遺跡は近接しているものの、周溝墓と集落の場所は区別され、それは今熊野遺跡において地形的にも明瞭である。やや離れて隣接しているものとしては安久東遺跡・宇南遺跡などをあげることができる。そして、これらの周溝墓群は隣接する単一もしくは複数(少数)の集落を基盤としているものと思われる。第3に、周溝墓は10～15m前後の規模をもつものが多いのに対し、今熊野遺跡第1号方形周溝墓(24m)、安久東遺跡前方後方形周溝墓(24.5～26.0m)のように25m前後の際立った規模をもつものが存在する。これらは、陸橋部を持ったり、前方後方形を示す周溝墓で、多量の焼成前底部穿孔土器(仮器)が日常器とともに供献されている。これらの際立った周溝墓は10～15m前後の規模で日常器の供献される一般的な周溝墓と、周溝墓という枠組みの中で差違がみられ、それらは被葬者あるいは造営者の階層の差違に基づくものと考えられる。

古墳と周溝墓

周溝墓の性格は前述の通りであるが、その中には日常器の供献される一般的規模のものと、仮器である焼成前底部穿孔壺が多量に供献される際立った規模の周溝墓が存在することを指摘した。前者は弥生時代以来の伝統的な周溝墓の性格を継承したものとも言え、それは塩釜式土器の第ⅡＢ・Ⅲ段階まで続いていることが確認された。また、後者は周溝墓の枠の中にありながら、一般的な周溝墓から際立った姿を示している。その歴史的意味をさらに明確にするために、周溝墓より遅れて、しかしまた併行して造営された古墳との関係を検討してみたい。

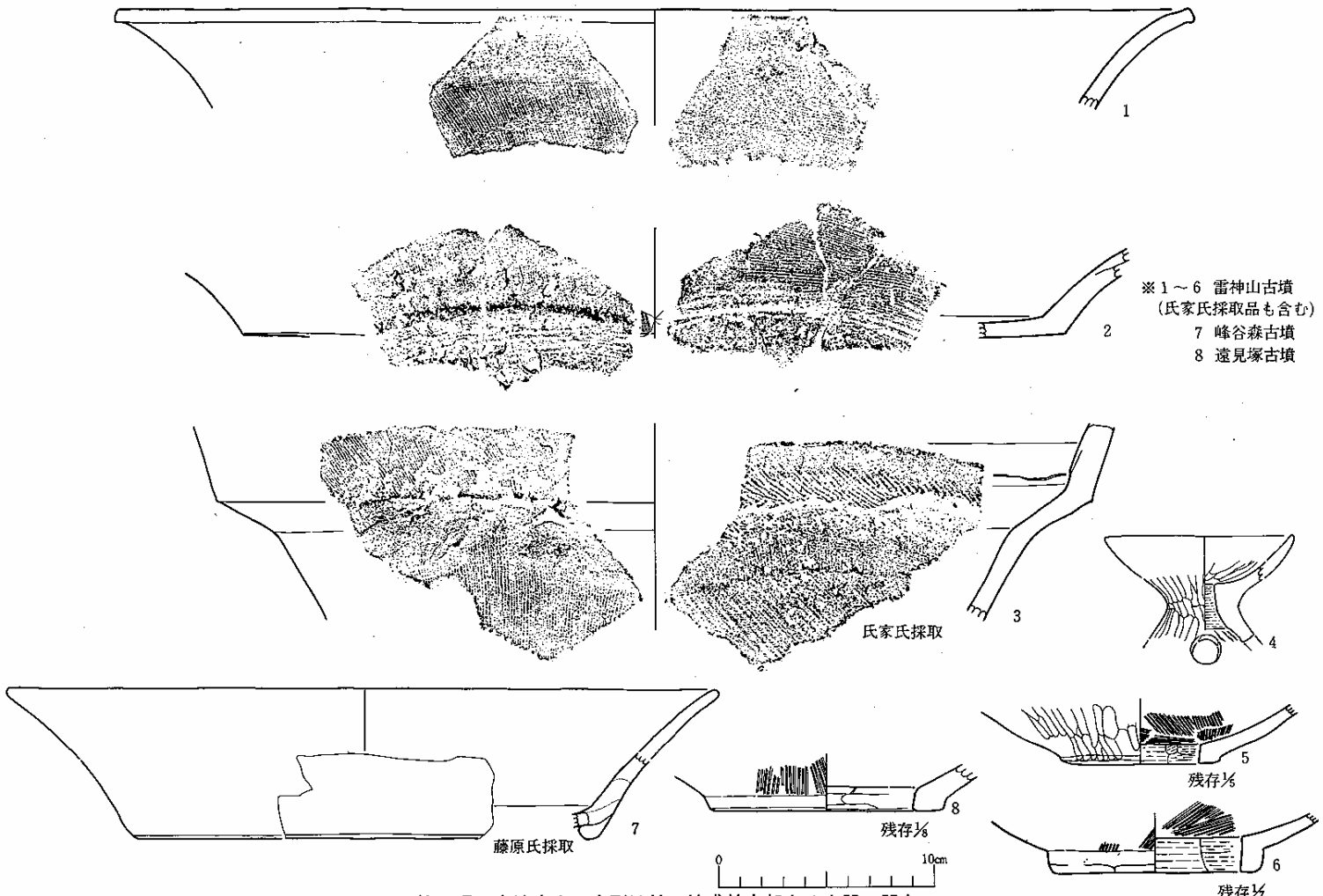
宮城県内の前期古墳

宮城県内の古墳で塩釜式土器を出土し、古墳時代前期に位置づけられるものとして、県南部では角田市関ノ内古墳（山田稔他:1978.3）、県中央部では名取市雷神山古墳・同市小塚古墳(恵美昌之:1977.3・1978.3)・同市宇賀崎1号墳（太田・氏家：1980.3）・仙台市遠見塚古墳(岩渕康治他:1976.3　岩渕・田中・結城:1977.3　結城・工藤:1979.3　結城慎一:1980.3　工藤哲司:1981.3　結城・工藤：1983.3)、県北部では古川市青塚古墳(太田昭夫：1981.3)・加美郡宮崎町夷森古墳（太田昭夫:1981.3）・遠田郡小牛田町蜂谷森古墳(本書所収)をあげることができる。

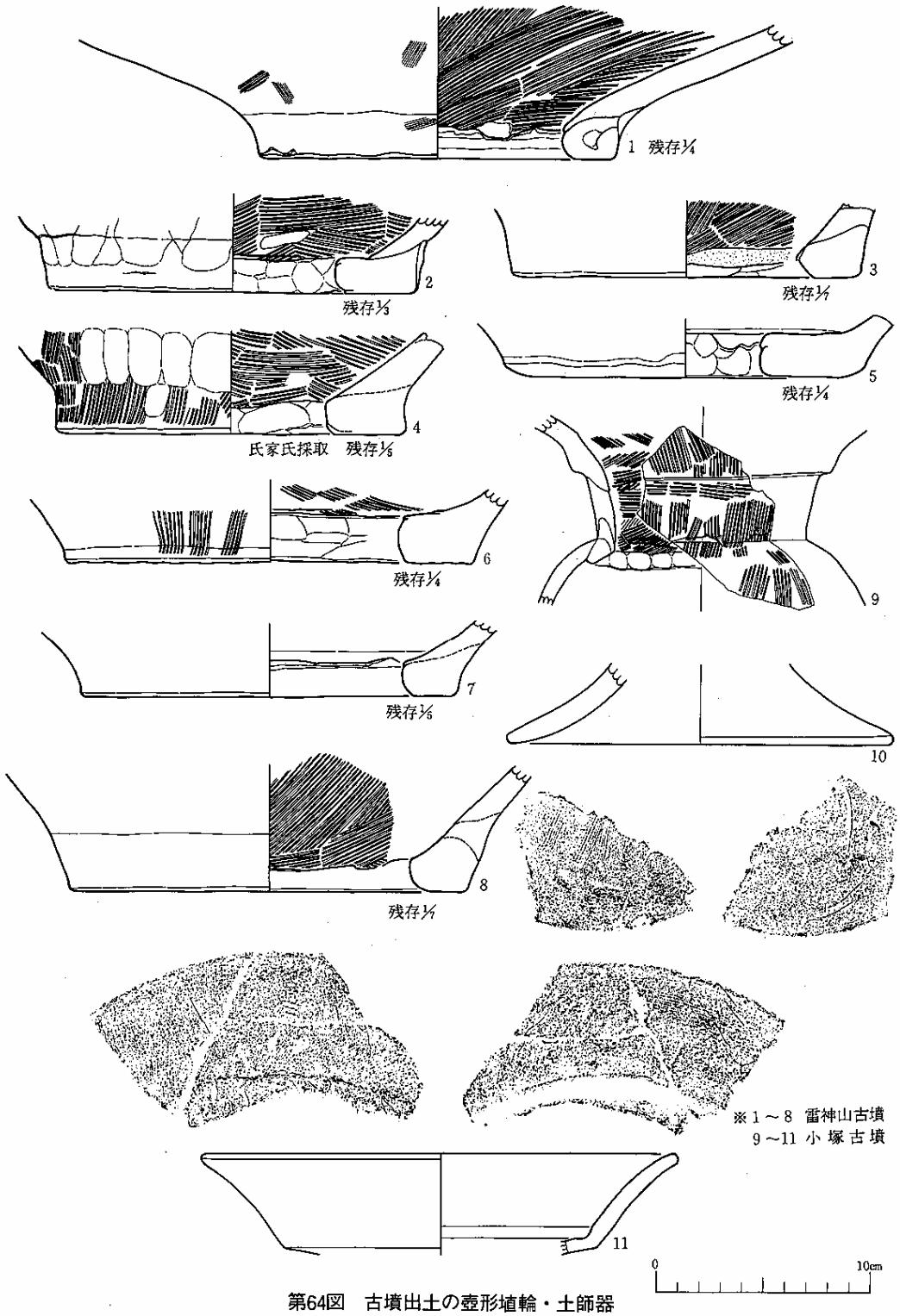
関ノ内古墳:伊具盆地中央に位置する横倉古墳群の1基で、樹枝状丘陵の先端に立地している。墳丘は下部を地山の削り出し、上部を積土によって築いたもので、墳麓に幅1.5〜2㎜の周溝が部分的に途切れながらめぐっている。墳形はやや歪んだ円形で、規模は16.5×15㎜（墳麓）、高さ約2㎜である。主体部は船底状墓坑をもつ隅丸長方形の土坑墓（土坑掘り方:長さ3.6㎜・幅2㎜）である。墳丘外表から土師器壺2点・「コップ状土器」1点の出土が報じられている(第65図)。土師器壺は単純口縁と複合口縁のもので、前者は西野田遺跡例と共通し、後者は鶴ノ丸例とやや似ているが小破片なので明確でない。ここでは第Ⅲ段階頃のものと考えておきたい。したがって、古墳の時期も第Ⅲ段階頃に求められる。

関ノ内古墳は吉ノ内古墳を主墳とする横倉古墳群の中で、小規模な円墳である。主墳の吉ノ内古墳は全長約66㎜の前方部が撥状に開く前方後円墳で、古墳群の形成過程を考慮をすると、第Ⅱ段階がそれ以前に遡る可能性を多分に持つものと言える。

宇賀崎1号墳:南部愛島段丘の中央部南端に位置し、舌状に延びた台地の先端に立地している。墳丘は下部を地山の削り出し、上部を積土によって築いたもので、周囲は平坦になっている。墳形は方形で、規模は一辺20㎜強と推定され、高さは約2.9㎜である。主体部は粘土床をもつ割竹形木棺と推定され、2基確認されている(土坑掘り方:長さ7.5㎜・幅2.6㎜墓坑：長さ6.5㎜・幅0.8㎜)。遺物としては主体部の側に埋設された土師器壺、墳丘外表から出土した土師器壺口縁部・底部穿孔土器(壺)などがある。埋設土器(壺)は口縁部を欠くが、胴部球形で今泉城例と共通する。複合口縁壺も口縁部が内面に稜を形成して外傾するもので、宮前遺跡第



第63図　古墳出土の壺形埴輪・焼成前底部穿孔土器・器台



第64図 古墳出土の壺形埴輪・土師器

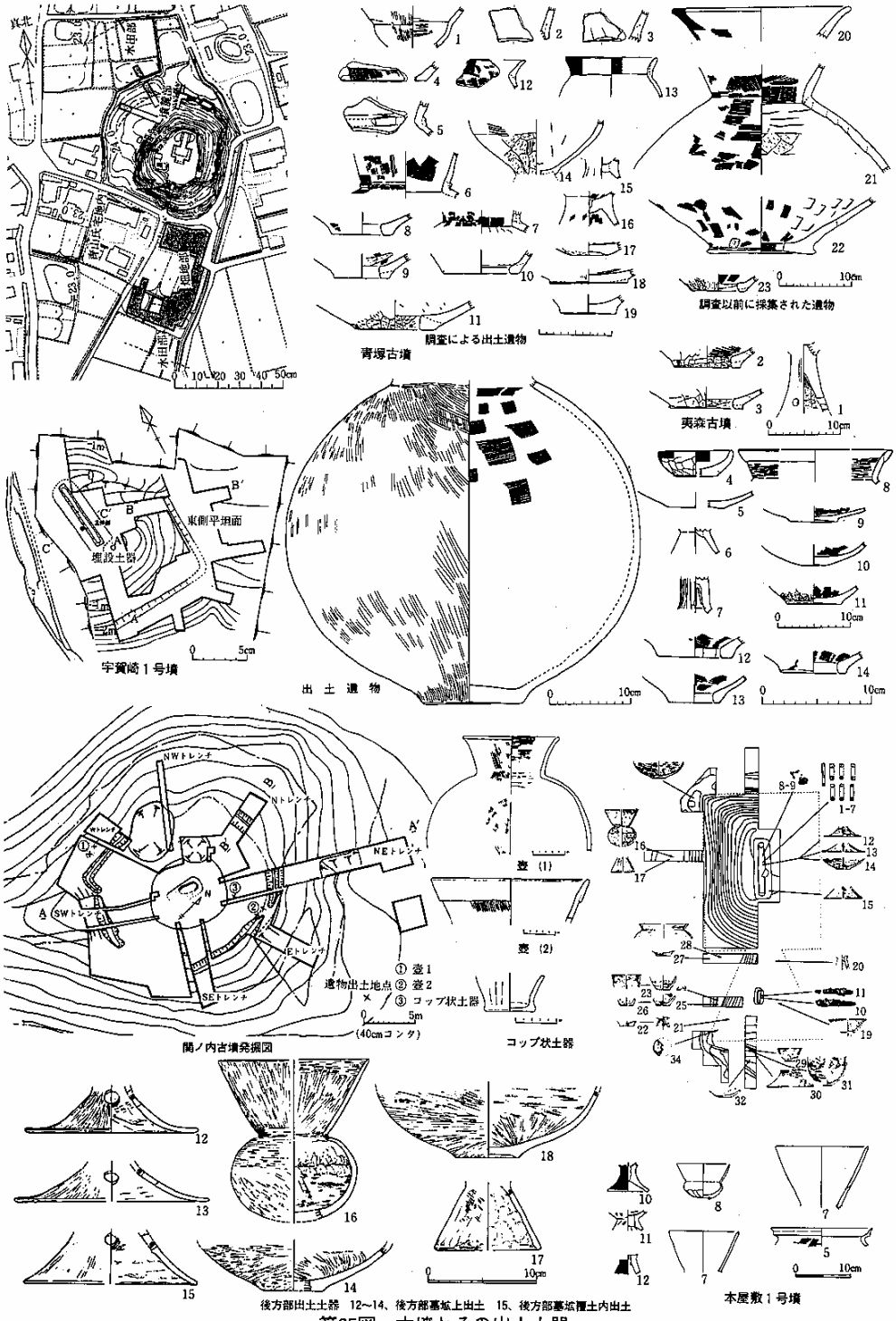
38号住居跡例と共通し、これらは第ⅡA段階に位置づけられる。したがって、宇賀崎1号墳も第ⅡA段階のものと考えられる。

雷神山古墳：南部愛島段丘の東縁に位置し、南北に長い小丘陵の中央部に立地している。全長168㎜、後円部の高さ12㎜、前方部の高さ6㎜の規模をもつ前方後円墳で、下半部を地山の削り出し、上部を積土によって築造し、周囲は平坦面となっている。墳丘外表は後世の畑地・墓地などのため削平が著しいが、保存の良い所では葺き石が残っている。

主体部は未調査のため明らかでないが、外表調査によって土師器器台・焼成前底部穿孔土器(壺)・壺形埴輪が出土している。第63・64図はその中のおもなもので、この他名取市教育委員会によって復元された底部穿孔土器が1個体ある(恵美昌之:1978.3　第10図1)。

器台は受け部上半と脚下半部を欠いているが、受け部は小皿もしくは小椀状、脚部は円錐台状と推定される（4）。受け部と脚部の間には貫通孔があり、脚部円窓も残存部分で確認できる。受け部内・外面と脚部外面はヘラミガキされている。この種の器台は貫通孔・円窓・器面調整などで西野田・留沼遺跡例の第Ⅲ段階まで降るものではなく、第Ⅰ・ⅡA段階の大橋遺跡・宮前遺跡第49号住居跡例程丁寧な作りではない。最も近いものとしては第ⅡB段階の鶴ノ丸遺跡第6号住居跡出土の器台をあげることができる。底部穿孔土器(壺)は底部7～10㎝で、底部孔外縁が僅かに外傾し、穿孔ケズリが観察される(第63図5・6)。名取市教育委員会で復元した底部穿孔土器も同様な底部孔をもつもので、胴部は球形であり、第Ⅱ段階に位置づけられる。

出土遺物で主体を占めるのは壺形埴輪である。第63図1～3は口縁部、第64図1～8は基底部である。これらの壺形埴輪は底部穿孔土器と較べると画然とした大きさをもっている。すなわち、今熊野遺跡・安久東遺跡の底部穿孔土器は口径17～27㎝・底径6～8㎝であるのに対し、雷神山古境の壺形埴輪は口径約50㎝・底径16～18㎝で約2倍の大きさを持っている。また、今日まで我々の知っている塩釜式土器の壺でもっとも大きいものとして、宇賀崎1号墳および清水遺跡の例をあげることができる。しかし、宇賀崎1号墳の壺は胴径43㎝・底径13㎝、清水遺跡の壺は胴径45㎝・底径10㎝ではるかに及ばない。その差は歴然としている。また、底部穿孔土器と壺形埴輪は前者が底部に穿孔しているのに対し、後者は輪状の基底部から作りあげるという基本的相違を示している。底部穿孔土器の底部孔については今熊野遺跡第1号方形周溝墓出土例で既に詳述したが、雷神山古墳の壺形埴輪は基底部内側(底部孔外縁)に粘土紐積み上げ痕およびその合わせ目を明瞭に残している。これらの中には、輪状基底部の上に粘土紐を積みあげ、そのまま成形するもの（1）とオサエや何らかの調整を施すもの(2～8)がみられるが、いずれの場合も一部もしくは大部分に成形時の積み上げ、合せ目痕を残しており、輪状基底部から成形していることは明らかである。このためか、基底部内側の断面は全体に丸味をもっており、底部穿孔土器の直線的な底部孔外縁の形状とは相違する。この他、底部穿孔土器との相



第65図　古墳とその出土土器

違点を補足すると、器壁が厚いこと、全体に荒い仕上げであること、器面調整の刷毛目の単位が長いこと、焼成が硬質なことなどをあげることができる。器壁の厚さは基底部において顕著で、2㎝前後を測る。底部穿孔土器の場合1.0～1.5㎝で1㎝前後のものが多い。このことは壺形埴輪が大形であることとともに、輪状基底部から成形するという性格上、基底部を強固にする必要があったことと関連するものと考えられる。荒い仕上げは第63図3に特徴的で、口縁部外面に部分的に粘土を薄く貼り付け、貼り付け痕を残したまま刷毛目を加えていることなどにみられる。また、刷毛目の単位が長いこと、焼成が硬質なことなどは、後出の朝顔形埴輪と共通する要素でもある。

以上のように、雷神山古墳は日常器としての器台、仮器としての底部穿孔土器に加えて、多量の壺形埴輪が供献もしくは樹立されたもので、上述の出土遺物から第ⅡB段階頃のものと推定される。

小塚古墳：雷神山古墳の北東に隣接する直径54㎜の円墳で、下部を地山削り出し、上部を積土によって築いており、幅5.8～8.8㎜の周溝がめぐっている。小塚古墳の外表からは、明確な埴輪は出土せず、焼成の点で雷神山古墳の壺形埴輪と似た土師器壺・高坏が出土している(第64図9～11)。9は壺の口縁～肩部で、有段口縁である。この種の有段口縁壺は鶴ノ丸遺跡例に近いが、成形や調整が極めて粗い。すなわち、成形時の積み上げ痕が刷毛目によっても消えず、段に近い形状で残っている。10は高坏の脚部であるが、全体に厚手で、内外とも刷毛目がみられる。高坏脚部外面の刷毛目は一般的なものではなく、第ⅡB段階以降に部分的に採用されるものである。11は有段口縁壺か高坏か明確でない。有段口縁壺であれば、外反が弱いことから第ⅡB段階、高坏であれば坏底部の大きさ、外面刷毛目の特徴から第ⅡB段階以降に位置づけられる。

以上のように、小塚古墳出土土器は第ⅡB段階頃の特徴を示しているが、焼成・器厚・器面調整などの点で、一般の土師器と較べると異質なものを感じさせる。それは小塚古墳の性格と密接に関連するものかもしれない。そして、小塚古墳の時期は出土遺物から第ⅡB段階頃で、雷神山古墳とほぼ同じか僅かに遅れるものと推定される。

遠見塚古墳:広瀬川左岸の自然堤防上に立地する全長110㎜・後円部高6.5㎜・前方部高2.5㎜の前方後円墳で、幅22～42㎜の周湟がめぐっている。主体部は粘土槨2基で、埋葬施設は割竹形木棺と推定される。棺の痕跡の幅は約1.1㎜、墓坑掘り方は幅11㎜である。両槨の両端下部には礫を詰めた暗渠排水溝があり、前方部の方へぬけている。東郭から副葬品として管玉1点・小玉4点・竹製黒漆塗りの竪櫛20点が出土している。

遠見塚古墳の時期を知る上で参考となる資料は、第2次調査で主体部から出土した丹塗りの底部穿孔土器(第63図8)と第1・5次発掘調査で墳丘外表から出土した縦位浮文有段口縁壺・

第3次発掘調査第12トレンチ自然溝斜面上部で発見された第Ⅰ土器群などがある。この中で、第Ⅰ土器群は西側周湟外縁と接する溝上部のやや平坦な部分から「壺形4個体・甕形40個体・台付甕2個体・高坏6個体・坏3個体」が出土したもので、そのうち壺2個体・坏3個体・甕3個体の実測図が公表されている(第52図下段)。この土器群は「単なる廃棄土器群と考えられないところがある。遠見塚古墳の造営の前後における何らかの祭祀との関係も考えられる」と理解されているものである。この第Ⅰ土器群は「塩釜式土器の諸段階」で述べたように、第ⅡA段階に位置づけられる。

墳丘外表から出土した縦位浮文有段口縁壺はいずれも破片であるが7点ある。これらの縦位浮文は断面三角形で素面のものである。縦位浮文は第Ⅰ段階の戸ノ内遺跡例では刻目をもつものの、断面円形の一条だけのものは清水遺跡例でみられるように第III段階まで続く。その点、多条で断面三角形であることから、第Ⅰ段階に後続するもので、第ⅡA段階頃のものと推定される。

主体部から出土した焼成前底部穿孔壺も破片であるが、底径10㎝と推定され、同時に出土した同一個体の頸部とともにかなり大形の壺と考えられる。外面は細かな刷毛目が施され丹塗りされている。底部孔は穿孔後、仕上げケズリもしくはヘラミガキ状の調整が加えられている。この種の比較的丁寧な仕上げの壺は第ⅡA段階頃のものではないかと考えられる。

以上、第Ⅰ土器群・墳丘外表・主体部出土土器を検討したところ、いずれも第ⅡA段階もしくは第ⅡA段階頃に位置づけられ、相互に矛盾はみられず、遠見塚古墳の時期もその頃に求められる。

青塚古墳:大崎平野の中央部、古川市塚ノ目の自然堤防上に立地している。墳丘の現状は直径55～60㎜の円墳状をしている。しかし、発掘調査によって周湟幅が現墳丘の北側で約37㎜、南側で約65㎜で、南側周湟が北側周湟の約2倍であることが確認された。また、現墳丘南側の青山氏宅南端部分で、前方部側縁墳麓かと推定される周湟状落ち込みを確認した。調査範囲が狭いため確実性に欠けるが、周湟が墳丘に沿った規則的なあり方を示すと仮定すれば、全長80～90㎜前後の前方後円墳となる可能性は多分にある。また、円墳部は下部を地山削り出し、上部を積土によって築いている。

遺物には墳丘外表よび周湟から出土したもの、発掘調査以前に故佐佐木忠雄氏によって採集されたものがあり、土師器坏・壺・甕・台付甕・底部穿孔土器(壺)などがある(第65図)。坏は坩状のもので、内外面ヘラミガキで仕上げられている（1）。壺は有段口縁で(2～4)、頸部に素面凸帯のめぐるもの（5・6）がある。甕は全体の器形が判明しない。坏や壺は第ⅡA段階の特徴を示している。底部穿孔土器(壺)は6点ある。大部分のものは底径8～11㎝で、大形の壺と推定されるが、22は15.5㎝と非常に大きく、雷神山古墳の壺形埴輪に近い大きさを示している。

以上のように、青塚古塚は発見された土器から第ⅡA段階に位置づけられるが、古墳をとりまく周辺の遺跡からも同時期の遺物が多量に出土している(『青塚古墳報告』「古墳周辺の出土の土師器」)。

夷森古墳:大崎平野西側の宮崎町米泉に位置し、台地上に立地する直径50m・高さ約11mの円墳である。墳丘外表は葺石に覆われている。墳麓付近から高坏脚部1点と焼成前底部穿孔土器(壺)2点が採取されている(第65図1～3)。高坏脚部は小さな円窓をもち、外面はヘラミガキされており、第ⅡB段階頃の特徴を示しており、夷森古墳の時期もその頃と推定される。底部穿孔土器(壺)は底径が9・10.5cmで、大形の壺と推定される。

峰谷森古墳:大崎平野東側で、小牛田町中心部西側の独立小起伏丘陵上に立地する現存規模約20m・高さ5～6mの円墳である。有段口縁壺の口縁下部と肩部の破片が藤原二郎氏によって採取されている(第63図7)。口縁部は軽く外反し、外面はヘラミガキされている。口径約33cm前後の大形壺と推定される。器形・器面調整から第ⅡB段階頃と推定される。また、峰谷森古墳の立地する丘陵南斜面は山前遺跡である。山前遺跡は堰状施設を伴う大溝によって囲まれた集落跡である。

前期古墳の特性と周溝墓との関係

宮城県内の前期古墳については上述の通りである。現在確認されているだけでも伊具盆地・仙台平野(名取川両岸の宮城野・名取平野)・大崎平野にみられ、伊具盆地では第Ⅲ段階以前、仙台平野・大崎平野では第ⅡA段階には出現していることが明らかである。また、第ⅡA段階の遠見塚古墳・青塚古墳はそれぞれ仙台平野・大崎平野中央部に立地し、全長110m・80～90m（推定）と大規模なもので、広い地域（一平野全体もしくはその中のまとまりある範囲）を統括した首長墓としての性格が強い。それは伊具盆地でも同様で、関ノ内古墳を含む横倉古墳群は盆地中央部にあり、その主墳である全長約66mの吉ノ内古墳も第ⅡA段階に遡る可能性は多分にある。したがって、第ⅡA段階の頃にはそれぞれの地域において前方後円墳に象徴される支配体制がほぼ成立したものと考えられる。さらに第ⅡB段階になると、仙台平野の愛島段丘東縁に立地し、一望のもとに北・東・南方を見渡せる場所に、全長168mの雷神山古墳が築かれ、その地域支配体制はさらに大規模なものに統括されたと推定される。すなわち、仙台平野において前方後円墳は遠見塚古墳から雷神山古墳へと一段と大規模化するのに対し、大崎平野では青塚古墳をしのぐ古墳は築造されず、同程度かそれ以下の規模に留まるのである。それは伊具盆地においても同様である。

一方、大規模な前方後円墳に象徴される地域支配とともに、古墳時代前期には宇賀崎1号墳・関ノ内古墳などに示されるような20m前後の小規模な方墳や円墳が存在する。この種のものとしては名取市上余田の天神塚古墳をあげることができる(恵美昌之:1981.3)。天神塚古墳は

23×30㎡程度の小規模な方墳で、壺形埴輪の頸部が発見され、第ⅡB段階かそれ以降のものと推定される。このように、広い地域を統括する大規模古墳と併存して小規模古墳も築造され、それらは確認されたものこそ未だ少ないが、かなりの数にのぼるのではないかと思われる。これらの前期古墳は単独で存在するものが多く、横倉古墳群のように群集するものがあっても前期から中期へと長期間にわたって形成されるという特徴をもっている。このような特徴は既に検討した周溝墓のあり方と基本的な点で相違している。しかし、その中で規模・構造の点で際立った姿を示す前方後方形周溝墓、陸橋部をもつ方形周溝墓等は小規模古墳と共通する面がみられ、首長層の階層として重複する部分があるのではないかと思われる。このようにみてくると、古墳時代前期の首長層には、周溝墓に代表されるような単一もしくは少数の集落を統括する首長層、小規模古墳に代表される少数の集落もしくはかなり限定された地域を統括する首長層、大規模古墳に代表される一盆地・一平野もしくはその中のまとまりをもつ一地域を統括する首長層など、かなり多様な階層が存在したものと考えられる。そして、第Ⅰ段階から第ⅡA段階を経て第ⅡB段階には雷神山古墳が示すように広い地域を統括する大首長を登物させたものと思われる。その過程は、首長層間の階層差を拡大させながらそれぞれの首長層を併存させ、かつ統括するという特質をうかがわせる。

以上のような支配体制が、序々にかつ急速に古墳時代前期の社会で進展したものと推測されるが、未だ不明な点も多い。すなわち、現在の所宮城県内では第1段階に属するものとして、仙台市戸ノ内遺跡の方形周溝墓が1基確認されているだけで、第ⅡA段階の遠見塚古墳との間には隔絶したものがある。また、周溝墓・小規模古墳と大規模古墳の間を埋める中規模古墳、すなわち、一平野の中のまとまりある一地域の首長層については、少なくとも仙台平野では未解明である。現在の所、この問題を積極的に解明できる確実な資料は未だ蓄積されていない。このような状況の中で、仙台平野の南部愛島段丘北東縁に立地し、名取平野を一望のもとに見渡せる場所に位置する飯野坂前方後方墳群は重要な意味をもつものと考えられる。すなわち、全長60㎡前後の前方後方墳が5基存在する。そのうち薬師堂古墳の後方部裾から恵美昌之氏によって壺形埴輪の頸部と推定される大破片が1点採取されている。この資料に従えば、薬師堂古墳は第ⅡB段階以降のものと考えられる。また、東北地方の前方後方墳で発掘調査が行なわれたものとして福島県双葉郡浪江町本屋敷古墳群第1号墳（伊藤玄三他：1982～1984.3）、同県耶麻郡塩川町十九壇古墳群第3号墳(中川・大川原・小滝・中村・穴沢:1973.2)・山形県置賜郡川西町天神森古墳(藤田宥宣:1984.2)があり、いずれも塩釜式土器を出土し、古墳時代前期のものである。この中で、本屋敷1号墳は後方部主体部および外表から第Ⅰ段階の土器がまとまって出土し(第65図)、現在まで知られている東北地方の古墳で最古のものである。このような前方後方墳の諸例から、飯野坂古墳群も古墳時代前期を中心として築かれたものと推定

される。そして、第ⅡB段階の薬師堂古墳を除いた他の4基の中には本屋敷1号墳のように第Ⅰ段階に遡るものがあっても不思議ではない。第Ⅰ段階に属する古墳が、東北地方にあっては前方後方墳に限られるのか、それとも前方後円墳も成立するのかは今後の課題である。この種の中規模古墳が仙台平野において遠見塚古墳の前段階に存在した可能性は多分にあり、その一例として名取川南岸の飯野坂古墳群が検討の対象となろう。

なお、本書で紹介した焼成前底部穿孔土器の他に、宮城県内では栗原郡築館町照明寺蔵(加藤孝他:1970.11)・加美郡中新田町熊野堂遺跡出土のもの(1985年度東北学院大学考古学研究部調査)がある。焼成前底部穿孔土器によって、照明寺付近遺跡・熊野堂遺跡に周溝墓もしくは小規模古墳の存在が予想される。

また、仙台平野・大崎平野・伊具盆地・さらには今回触れることができなかった円田・村田・白石盆地・亘理平野における具体的な歴史的展開、また相互の関係については資料が蓄積された段階で検討を加えることにしたい。今回は塩釜式土器の編年を基軸にして、周溝墓・古墳・集落・地域社会のあり方について検討したが、資料的には未だ満足できる段階とは言えない。したがって、土器の編年についてもさらに資料を蓄積し、より確実なものにしていきたい。そのことによって、古墳時代前期社会の詳細かつ具体的な分析が可能になるものと思われる。

(注)　したがって、多賀城跡五万崎地区の方形周溝墓ＳＤ993は第ⅡB段階の可能性もある。

引用文献

伊藤玄三他（1982～1984.3）：「本屋敷古墳群発掘調査概報」1～3　P.1～39　P.1～35　P.1～40
法政大学文学部考古学研究室

岩渕・田中(1976.3)：　「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第10集
P.1～68

岩渕康治他(1976.3)：「史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書』
第11集　P.1～17

岩渕・田中・結城(1977.3)：「史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報」『仙台市文化財調
査報告書』第12集　P.1～20

氏家和典(1957.3)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』　P.1～14　東北史学

氏家和典(1972.3)：「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号
北奥古代文化研究会

恵美昌之(1977.3)：「史跡　雷神山古墳」『名取市文化財調査報告書』第3集　P.1～12　PL.
実測図

恵美昌之(1978.3)：「史跡　雷神山古墳」『名取市文化財調査報告書』第5集　P.1～17
図版　実測図

恵美昌之(1979.3)：「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書』第6集　P.1～26　図版

恵美昌之(1981.3)：「天神塚古墳」『名取市文化財調査報告書』第10集　P.2～6

太田・氏家(1980.3)：「宇賀崎1号墳」『宮城県文化財調査報告書』第67集　P.183～216

太田昭夫(1980.9)：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集　P.289～369

太田昭夫（1981.3）：「青塚古墳」『宮城県古川市文化財調査報告』第5集　P.1～31

加藤　孝他(1970.11)：「伊治城跡出土遺物目録並文献資料」『伊治城資料』第2集　№.191
№.193　築館町文化財保護委員会

加藤道男(1980.3)：「東館遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第65集　P.243～304

工藤哲司(1981.3)：「史跡遠見塚古墳」『仙台市文化財調査報告書』第26集　P1～24

小井川和夫(1978.2)：「今熊野遺跡」『どるめん』第16号　P.73～79　ＪＩＣＣ出版局

佐佐木忠雄(1977.4)：「青塚古墳とその周辺遺跡」『初期古代東北の研究』P.97～166
図版　14～23

斎藤吉弘(1979.3)：　「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集　P.1～68

篠原・工藤他（1980.8）：「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書』第24集　P.1～82

仙台市教委(1983.12)：　『戸ノ内遺跡発掘調査説明会資料』P.1～10

多賀城市教委(1983.10)：　『新田遺跡』現地説明会資料　多賀場市教育委員会

田中則和他(1981.12)：「六反田遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第34集　P.362

高倉敏明（1981.3）：「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第2集　P.1～57

手塚　均（1980.3）：「留沼遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第65集　P.153～221

手塚　均（1981.9）：「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集　P.359～421

土岐山武（1980.9）：「安久東遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集　P.1～112

中川・小川・鈴木(1960.5)：「仙台付近の第四系および地形（1）」『第四紀研究』
第1巻　第6巻　日本第四紀学会

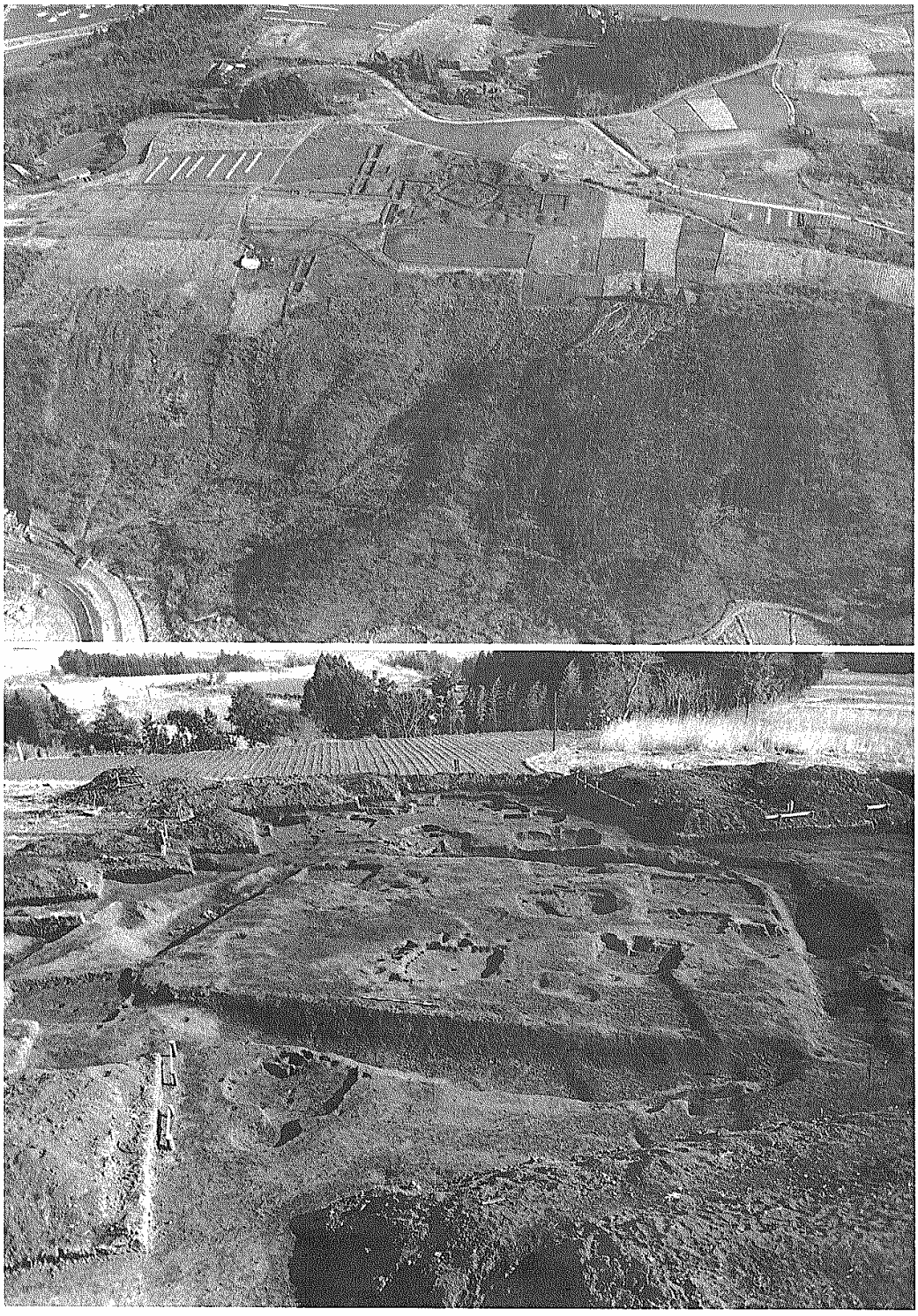
中川・大川原・小滝・中村・穴沢(1973.2)：「塩川十九壇古墳群調査報告」『福島考古』第14号

Ｐ.53～73　福島県考古学会
長橋　至(1981.3)：「下槇遺跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第39集　Ｐ.1～20
丹羽・柳田・阿部(1974.3)：「西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集　Ｐ.18～166　図版1～29
丹羽・小野寺・阿部(1981.3)：「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第77集　Ｐ.1～540
丹羽　茂(1983.3)：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集　Ｐ.69～213
早坂・渡部(1985.1)：「戸ノ内遺跡の方形周溝墓」『えとのす』第26号　Ｐ.89～99　新日本教育図書株式会社
藤田宥宣他(1984.2)：「天神森古墳」『川西町文化財調査報告書』第6集　Ｐ.1～33
藤沼邦彦(1971.3)：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集　Ｐ.91～104
古川一明(1983.3)：「色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第95集　Ｐ.131～134　図版16
宮城県多賀城跡調査研究所(1978.3)：「多賀城跡ー昭和52年度発掘調査概報ー」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』Ｐ.1～40　図版　8・9
宮城県文化財保護課編(1976.3)：『山前遺跡』Ｐ.1～59　小牛田町教育委員会
山田　稔他(1978.3)：「関ノ内古墳」『宮城県角田市文化財調査報告書』第2集　Ｐ.6～14
結成・工藤(1978.3)：「史跡遠見塚古墳」『仙台市文化財調査報告』第18集　Ｐ、1～42
結城慎一（1980.3）：「史跡遠見塚古墳」『仙台市文化財調査報告書』第20集　Ｐ.1～12
結城・工藤(1984.3)：「史跡遠見塚」『仙台市文化財調査報告書』第15集　Ｐ.1～36

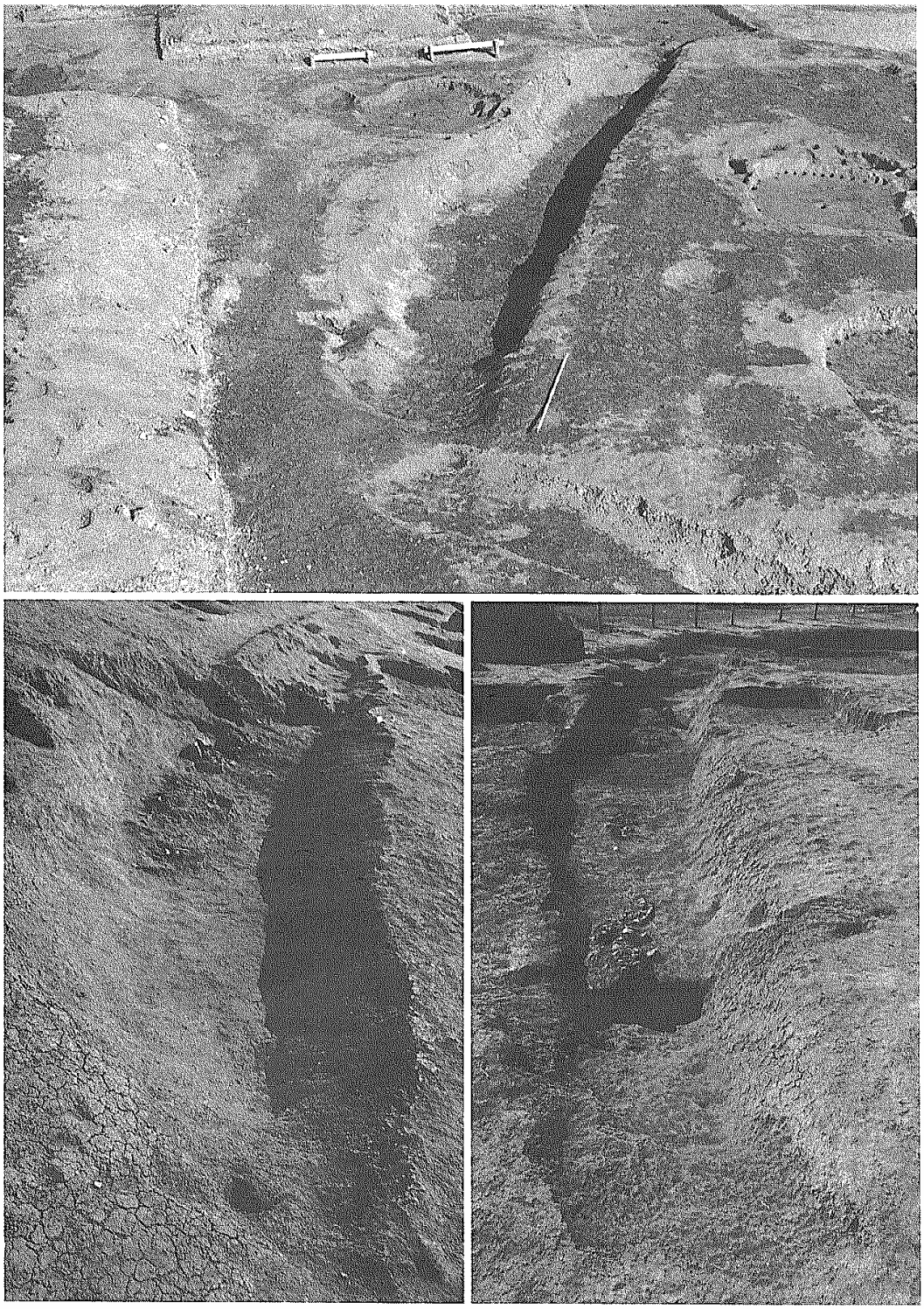
参考文献

安達厚三・木下正史(1974.10)：「飛鳥地城出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻　第2号　Ｐ.1～30
伊東信雄編（1964.9）：『会津大塚山古墳』Ｐ.1～180　図版　1～33　会津若松市　学生社復刻版(1975.5)
伊東信雄編（1981.6）：「古墳時代」『宮城県史』34　Ｐ.189～207
石野博信(1983.3)：「古墳出現期の具体相」『考古学論叢』Ｐ.21～131　関西大学
石野博信・都出比呂志(1984.1)：「古墳の発生と発展」『東アジアの古代文化』第38号　Ｐ.2～49
上田宏範・中村春寿(1961.3)：「桜井茶臼山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書』第19冊　Ｐ.1～89　図版　1～24
氏家和典(1984.12)：「宮城の古墳」『宮城の研究』第1巻　Ｐ.306～353　清文堂
大村　直(1982.8)：「東国における前期古墳の再評価」『物質文化』第39号　Ｐ.1～19　物質文化研究会
小林行雄(1956.11)：「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京部大学文学部五十周年記念論集』『古墳時代の研究』　Ｐ.163～190　青木書店刊再録
末永雅雄・小林行雄・中村春寿(1938.10)：「大和に於ける土師器住居址の新例」『考古学』第9巻　第10号　P481～490　東京考古学会
田中　琢（1965．）：「布留式以前」『考古学研究』第12巻　第2号　Ｐ.10～17
都出比呂志(1979.12)：「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻　第3号　Ｐ.17～34
都築みどり(1983)：「元屋敷式土器の再検討」『南山考古』2　Ｐ.13～32
宮城県教育庁文化財保護室(1973.3)：「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第33集　Ｐ.1～46
横山浩一(1959.11)：「土師器」『世界考古学大系』3　Ｐ.125～132　平凡社

写　真　図　版

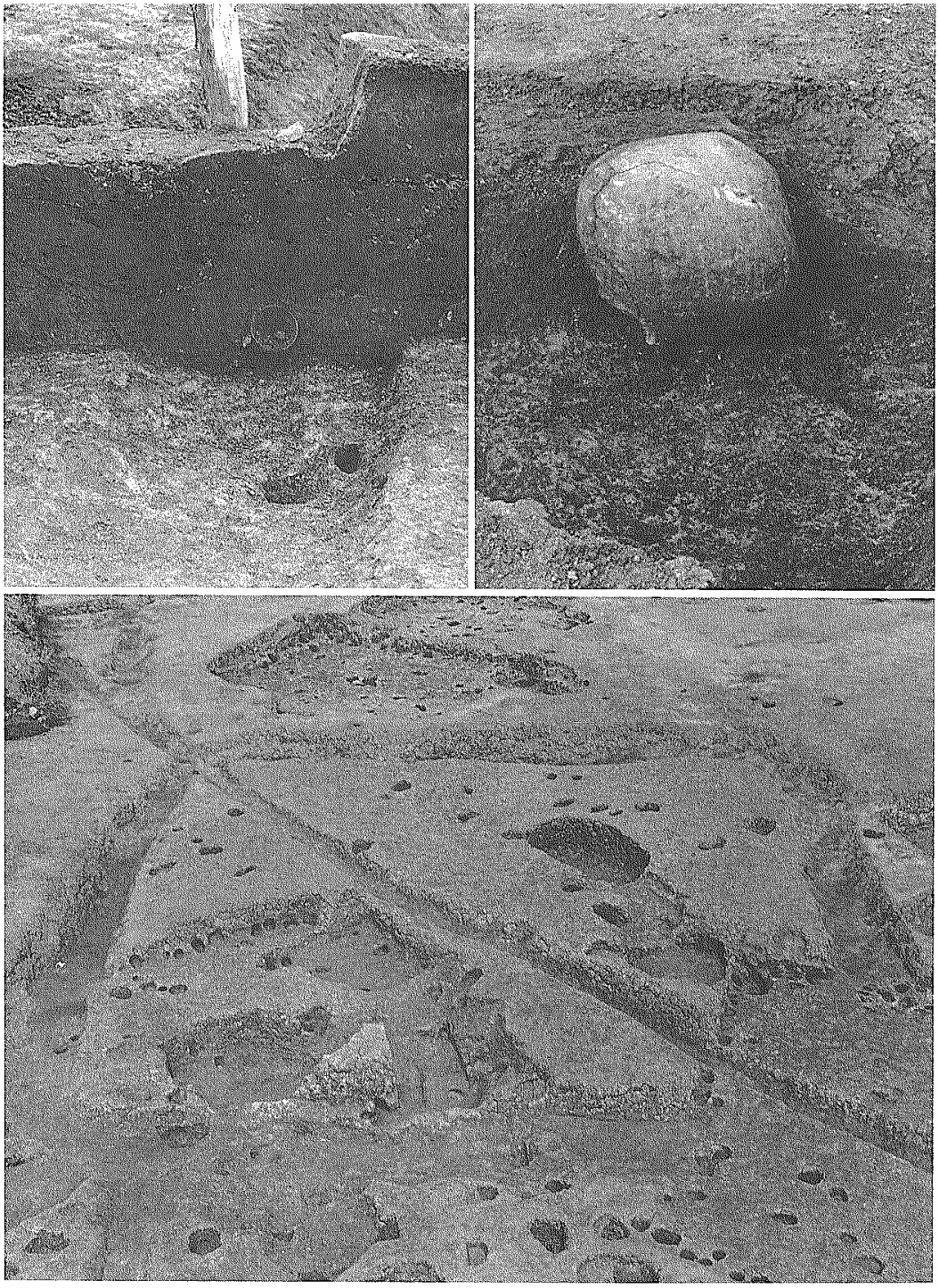


図版1　上：遺跡全景
下：第1号方形周溝墓

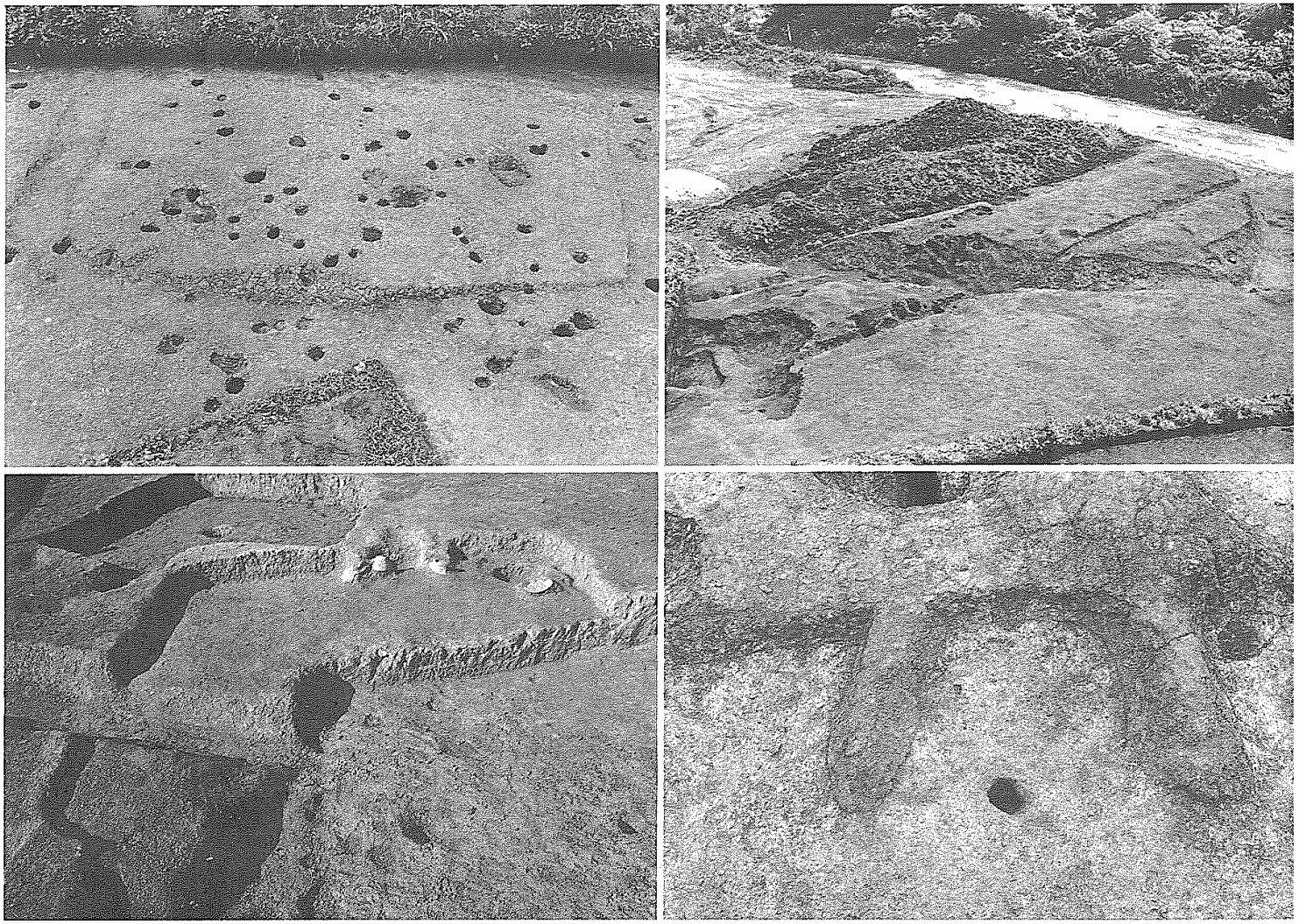


図版２　第１号方形周溝墓　上：西辺　左下：北辺　右下：東辺

図版3　上：第1号方形周溝墓土器出土状況　左：東辺 HE－5・6　右：HE－7
下：第2号方形周溝墓

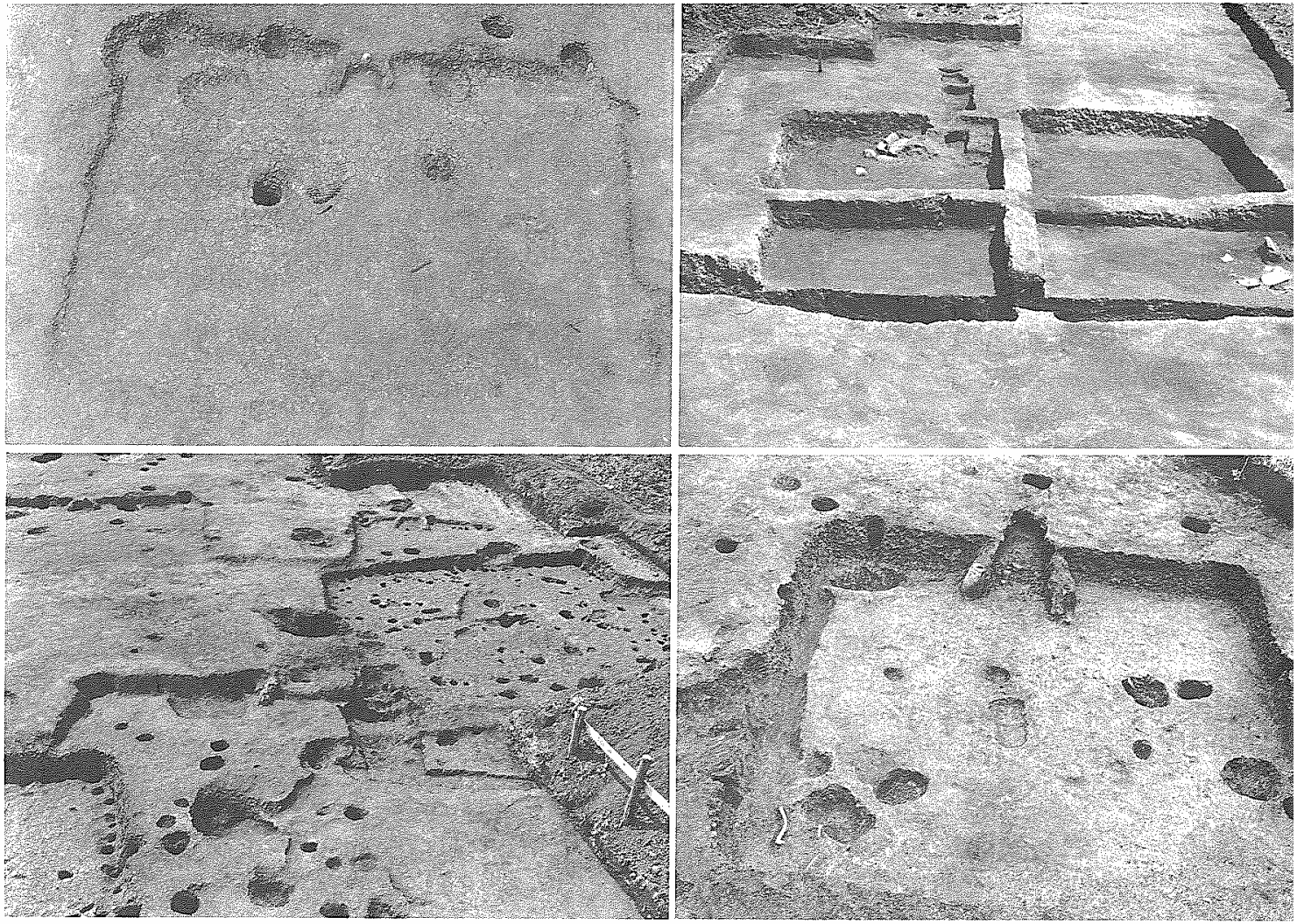


図版４　第４号方形周溝墓と土器出土状況



図版5

上右　第6号方形周溝墓　下右　IK第43号住居跡
上左　第5号方形周溝墓　下左　IK第25号住居跡



図版6

上右 IK第45号住居跡
上左 IK第44号住居跡
下右 IK第70号住居跡
下左 IK第62・88号住居跡

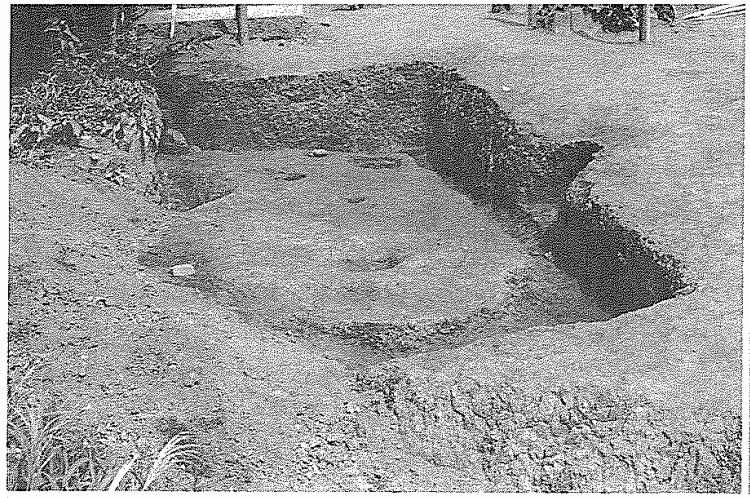
図版7

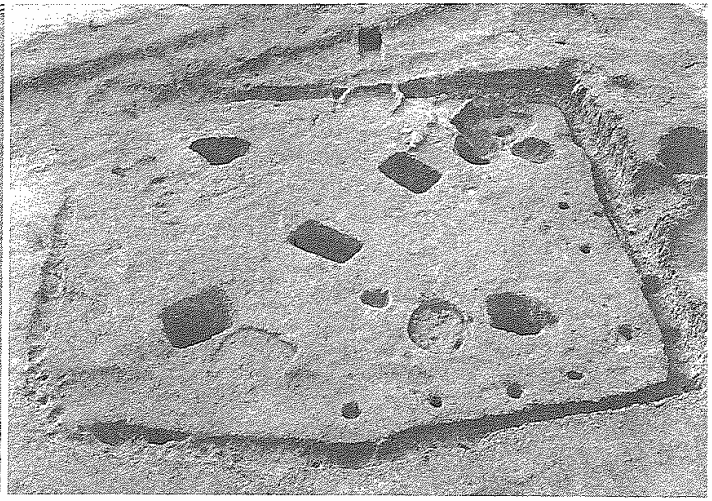
上右　KS第21号A住居跡　下右　KS第21号B住居跡

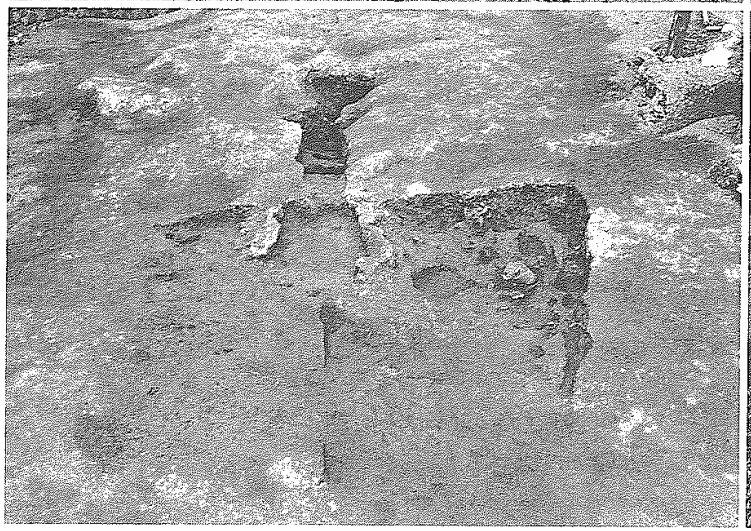
上左　KS7号住居跡　下左　KS第27号住居跡

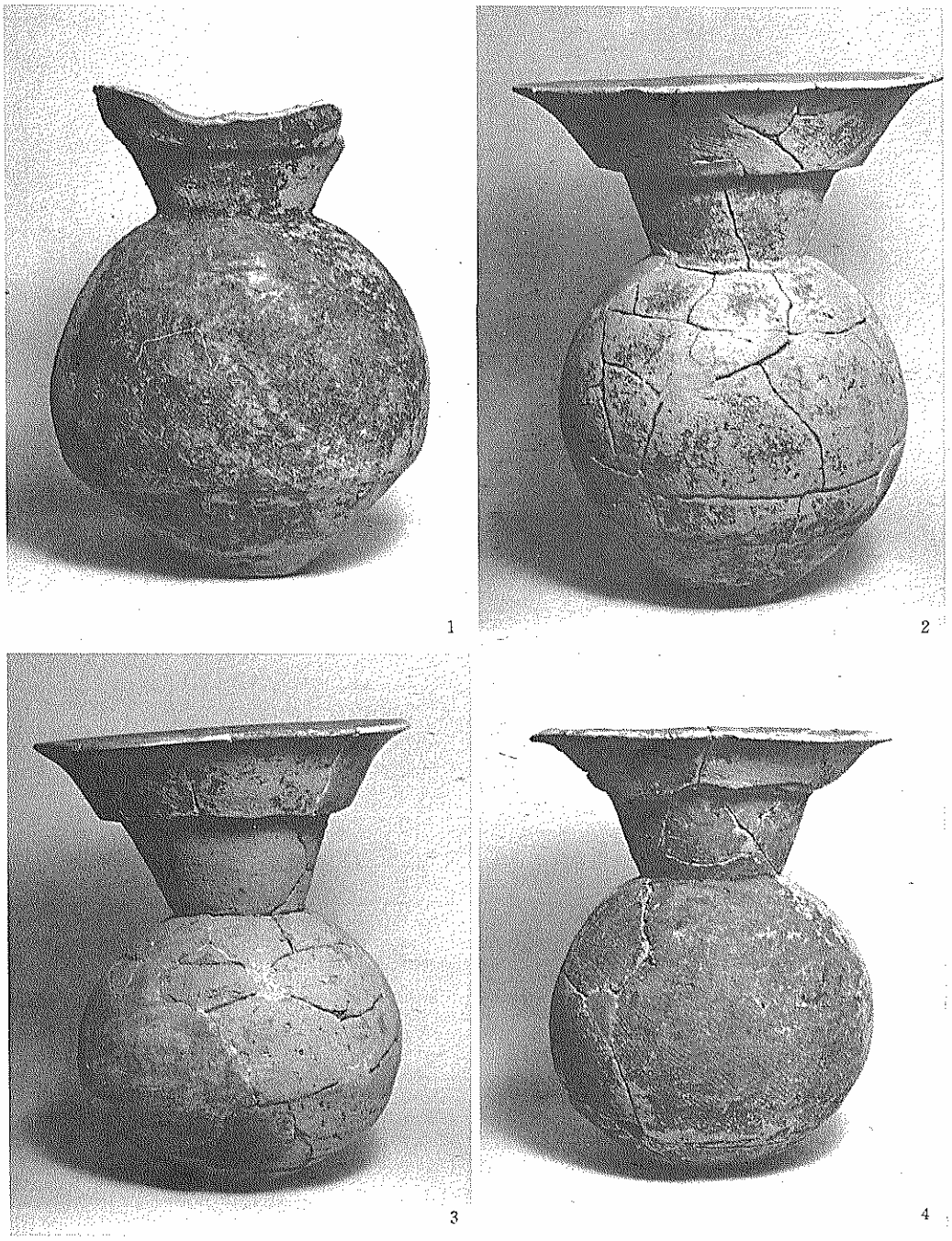
図版8

上左　KS第34号住居跡
上右　KS第35号住居跡
下左　KS第37号住居跡
下右　KS第52号住居跡

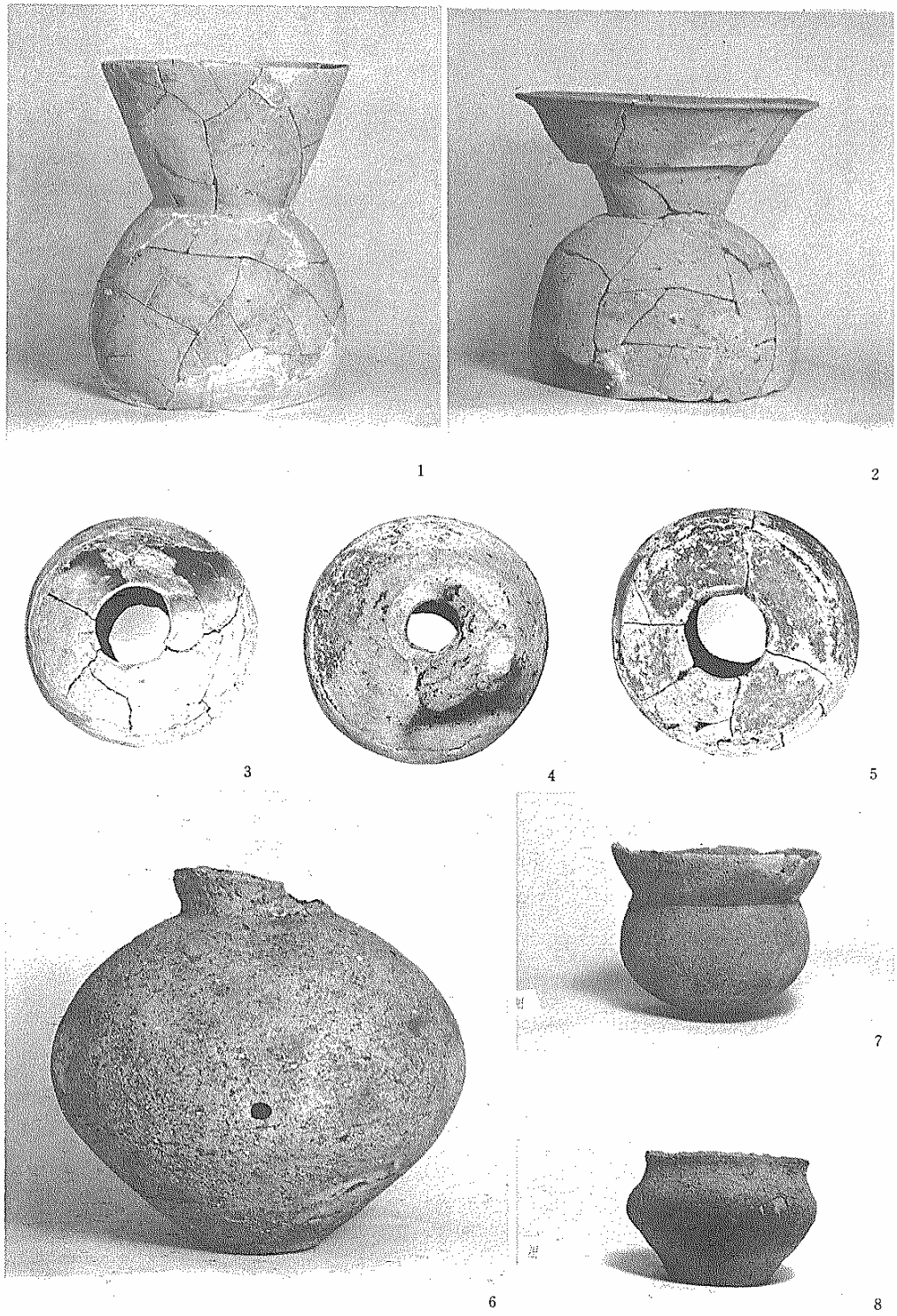




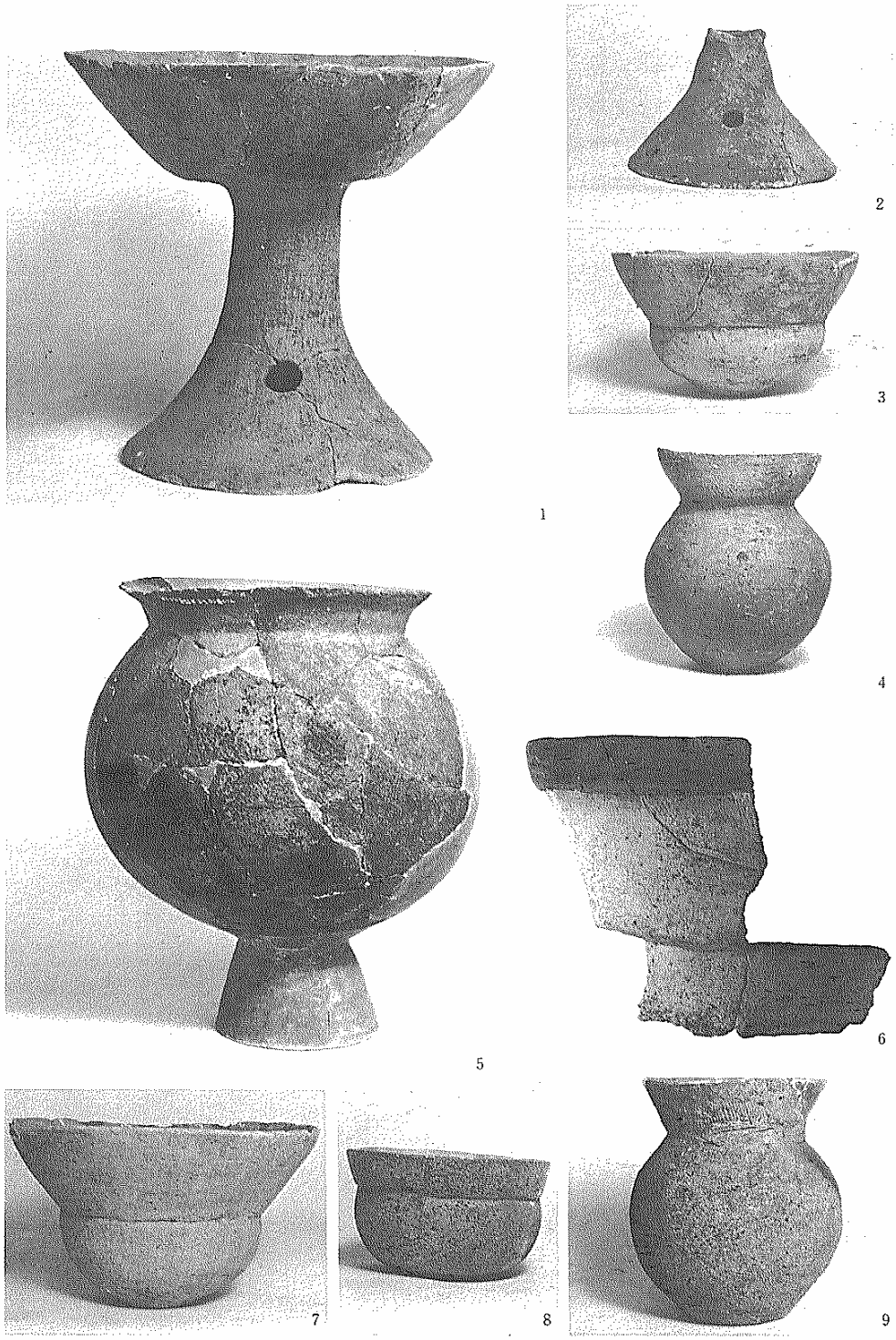




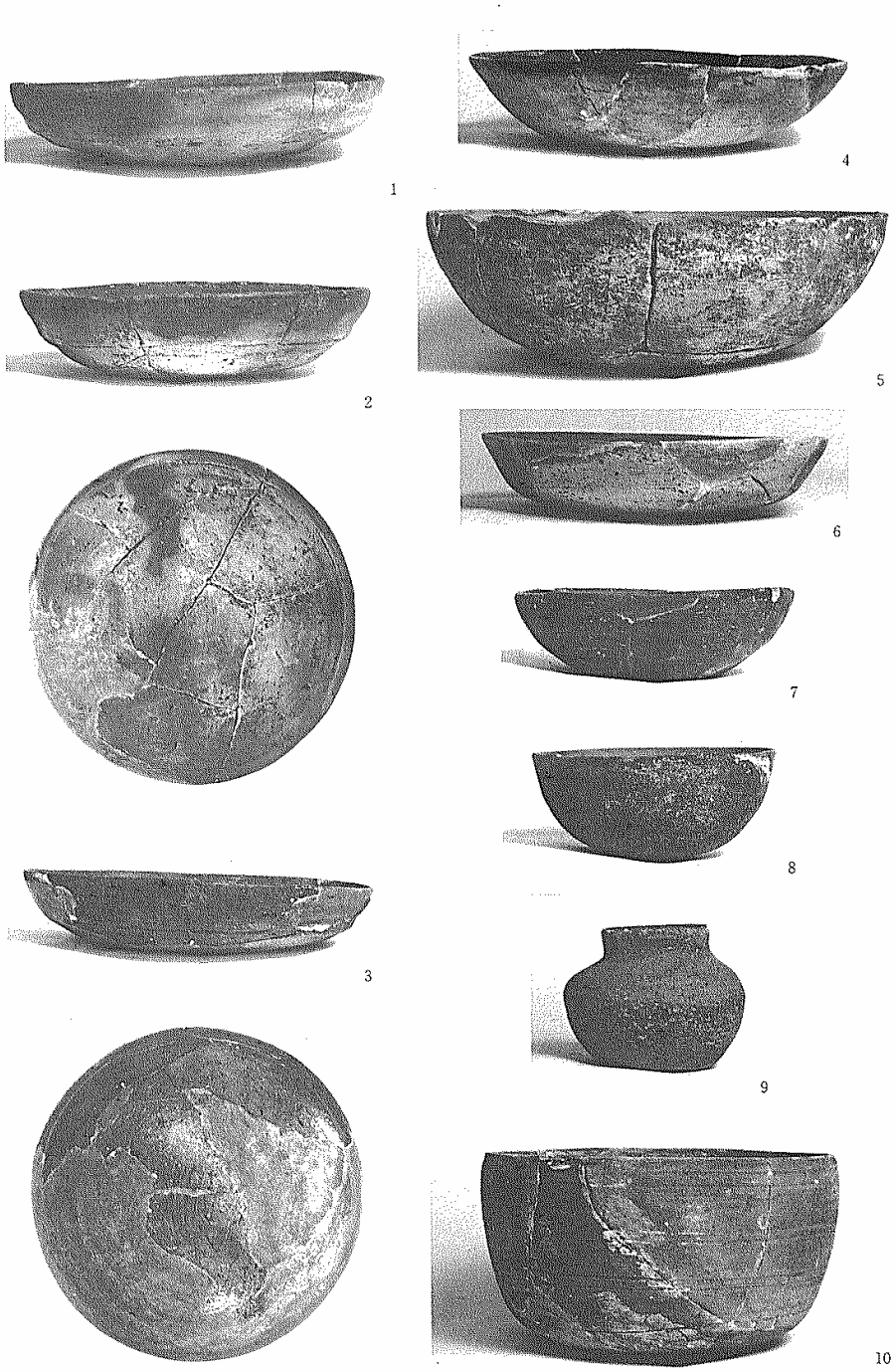
図版９　第１号方形周溝墓出土土器



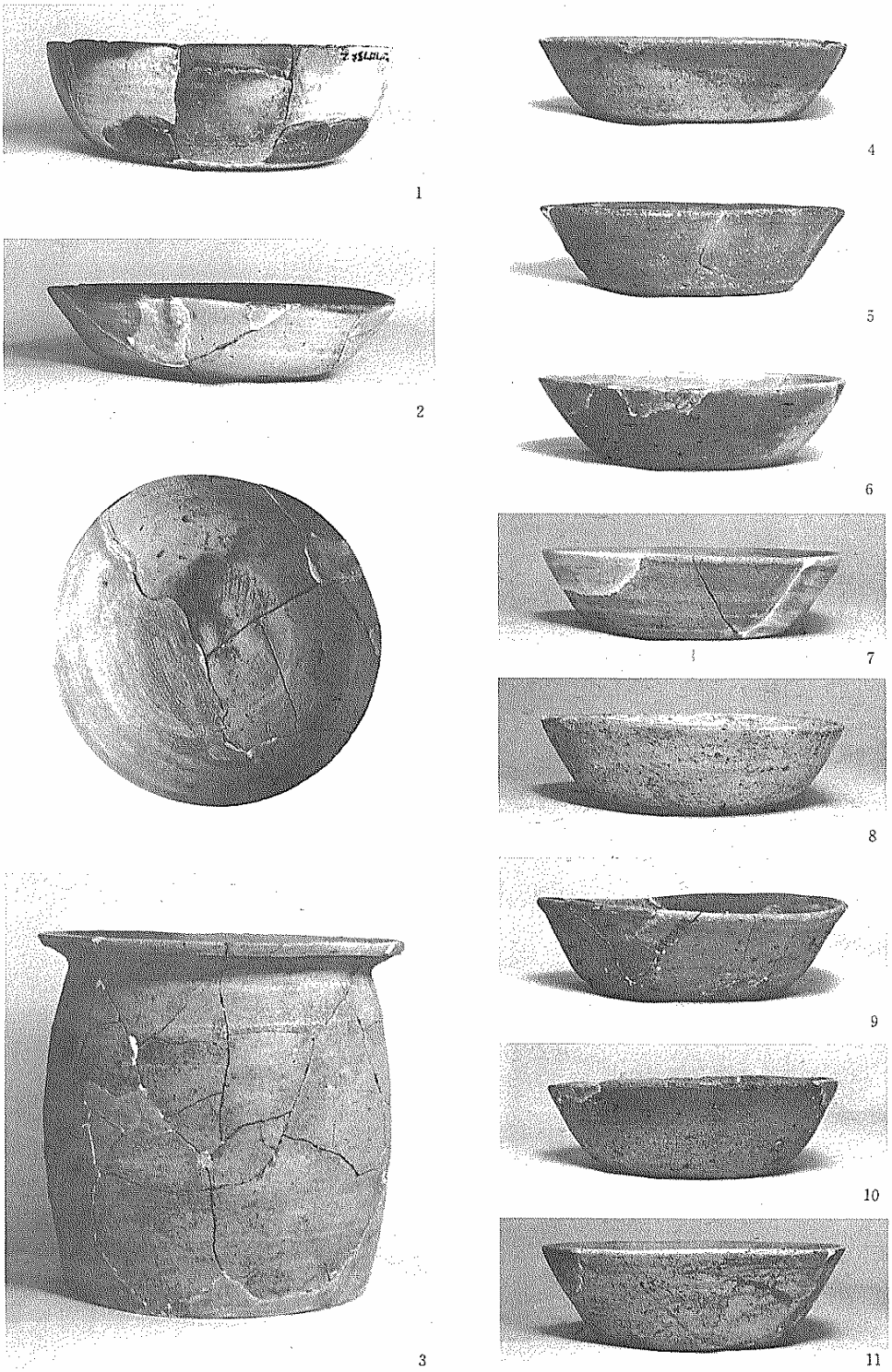
図版10　方形周溝墓出土土器（1～5：第1号　6・7：第4号　8：第6号）



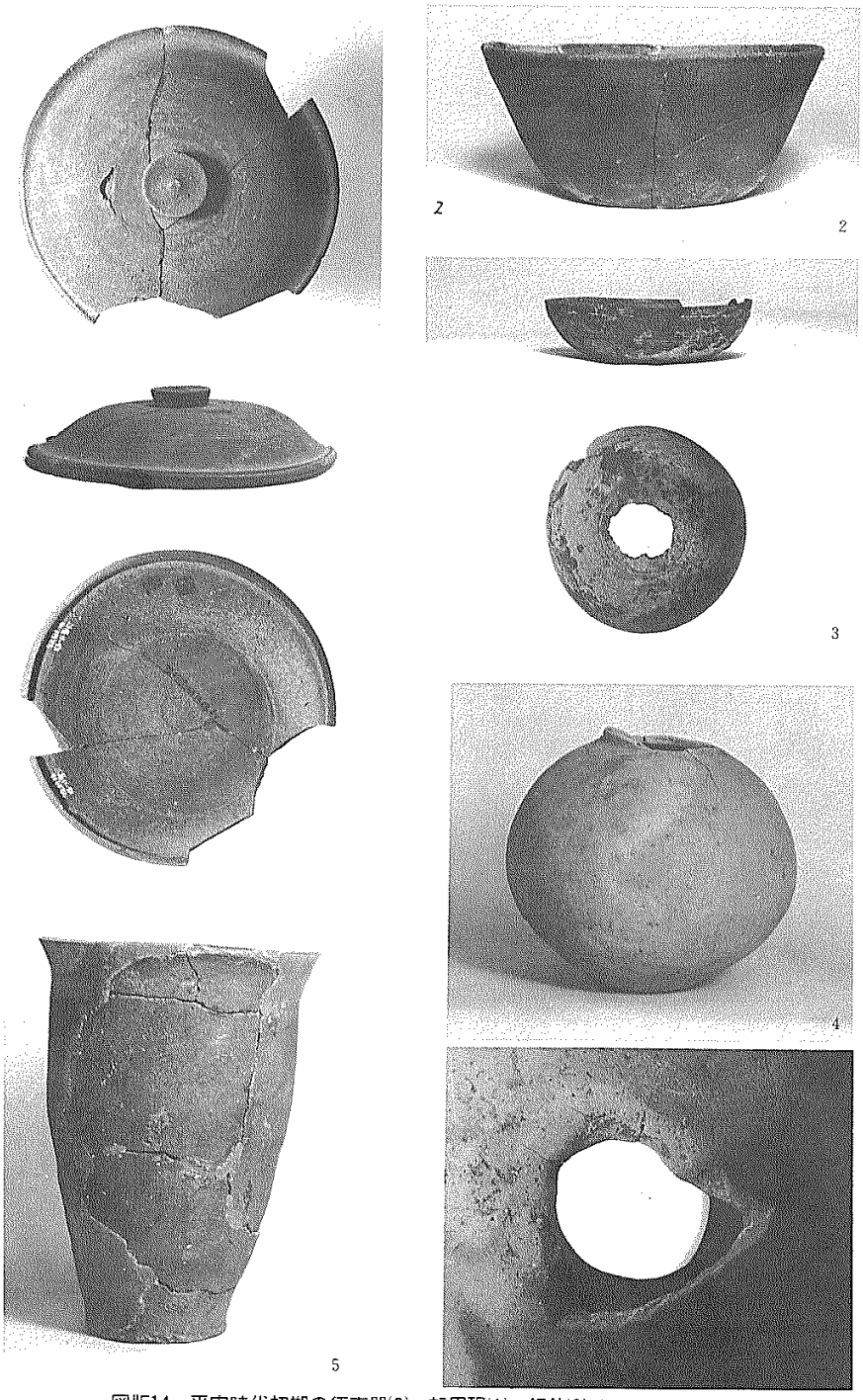
図版11　住居跡等出土の古墳時代前期の土器（1～5：ＫＳ第15号住　6：ＫＳ第21号住　7：ＫＳ地区
8：ＫＳ第46号住　9：KS CA－39住）



図版12　古墳時代終末から奈良時代の土器　1～3：ⅡK第43号住居跡
4：Ⅰ第44号住居跡
5・6：ⅡK第62号住居跡
7～9：KS第34号住居跡
10：KS第35号住居跡



図版13　平安時代初期の土師器・須恵器（KS第13号住居跡）



図版14　平安時代初期の須恵器(2)・転用硯(1)・銅鉢(3)（KS第13号住居跡）
その他の遺物　4：第11号方形周溝墓出土焼成後底部穿孔土器
5：IK第70号住居跡出土土師器甕

一本杉遺跡（いっぽんすぎ）

調　査　要　項

遺 跡 記 号：ＨＰ（宮城県遺跡地名表登載番号　21133）
遺跡所在地：宮城県宮城郡宮城町下愛子字森下・字一本杉
調 査 期 間：第1次調査　昭和58年9月19日～10月29日
　　第2次調査　昭和59年4月9日～4月11日
調査主体者：宮城県教育委員会　宮城県土木部
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
　　調査員：第1次調査　平沢英二郎・藤沼　邦彦
　　斎藤　吉弘・阿部　　恵
　　佐々木和博・小山田正男
　　第2次調査　斎藤　吉弘・真山　　悟
　　後藤　彰信・小山田正男
調査対象面積：約59,765㎡（1次：約51,900㎡、2次：約7,865㎡）
発 掘 面 積：約15,631㎡（1次：約13,646㎡、2次：1,985㎡）
調査協力者：宮城町教育委員会

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 145
1．位置と立地 …… 145
2．周辺の遺跡 …… 145
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 146
Ⅲ．調査の成果 …… 147
1．基本層位 …… 147
2．発見された遺構と遺物 …… 150
（1）竪穴住居跡と出土遺物 …… 150
（2）土壙と出土遺物 …… 156
Ⅳ．考察 …… 159
Ⅴ．まとめ …… 161
写真図版 …… 163

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．位置と立地

一本杉遺跡は、宮城県宮城町下愛子(あやし)字森下・字一本杉に位置している(第1図)。国鉄仙山線陸前落合駅の北西約200mにあり、宮城県宮城広瀬高等学校東側の地域にあたる。これまで、農学寮の実習地として使用されていた。

宮城町は、仙台市の北西に位置し、東西に長い町である。また、町のほとんどは山地および丘陵によって占められている。町の北側には七北田丘陵、南側には青葉山丘陵が奥羽山脈から派生して、東にのびている。標高は、両者とも200m前後である。東側では、この二つの丘陵から張り出す小起状丘陵・舌状丘陵により狭隘部が形成され、盆地状をしている。この盆地は、通称愛子盆地と呼ばれ、そのほぼ中央部を、関山峠を水源とする広瀬川が丘陵を開析しながら東流し、数段の河岸段丘を形成している。この間、広瀬川は北から大倉川・芋沢川、南から山鳥川等の小河川と合流し、さらに、仙台市日辺付近で名取川と合流して、太平洋に注いでいる。

本遺跡は、愛子盆地の東部、広瀬川と芋沢川との合流点からやや西側の広瀬川右岸の段丘上に立地している。遺跡内の標高は、90～93mである。また、微地形をみると、北西部に広瀬川から南西に入る沢がある。沢の南側は、ほぼ平坦であるが、南西部がわずかに高く北東部に向って緩やかに傾斜している。

2．周辺の遺跡

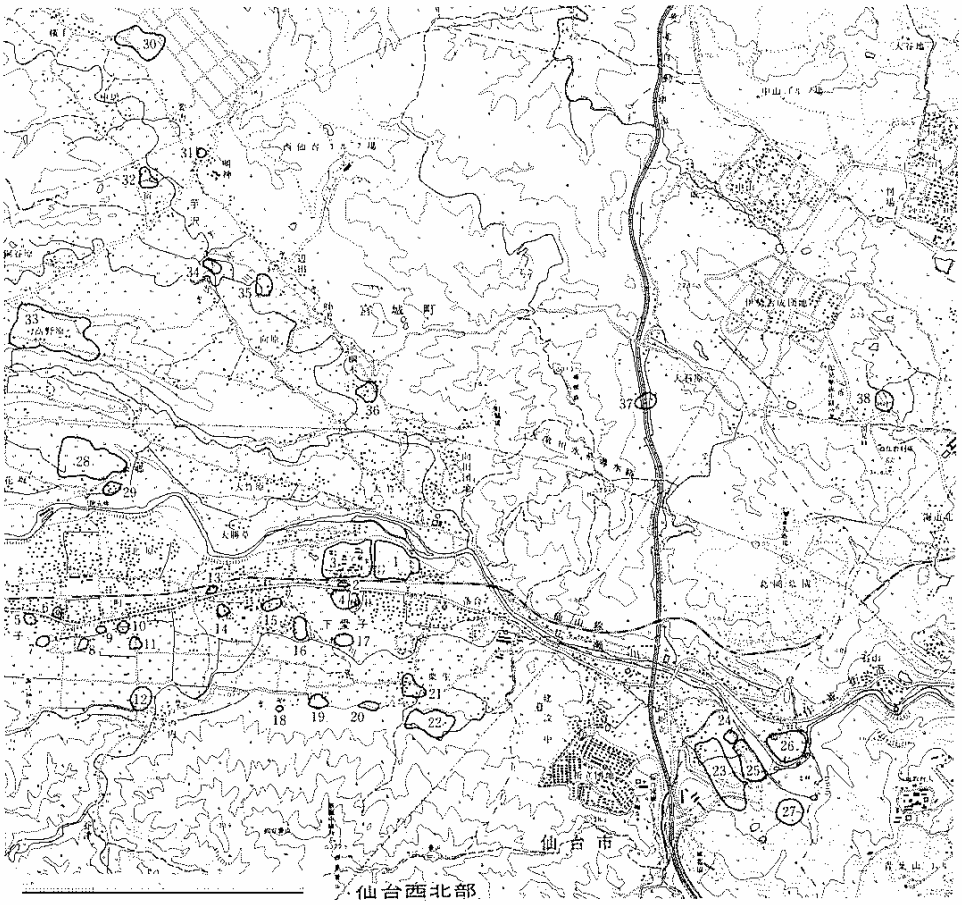
宮城県遺跡地名表によると、宮城町内では132の遺跡が確認されている。（宮城県教委：1981）。これらの遺跡の多くは、愛子盆地内の河岸段丘や周辺の丘陵・台地に集中しており、本遺跡周辺地域にも約40ヶ所の分布が認められる（第1図）。

本遺跡と同時代と思われる奈良・平安時代の遺跡には、農学寮跡・一本杉Ｂ・館遺跡等がある。これらは、広瀬川右岸の比較的低位の段丘や台地に分布している。本遺跡に隣接するものとして、西側に農学寮跡遺跡、西南側に一本杉Ｂ遺跡があり、奈良・平安時代の竪穴住居跡が発見されている(狩野・真山：1982、宮城町教委:1983)。また、粟生・館遺跡は山鳥川の南側段丘上に立地し、土師器・須恵器の散布が認められている。

縄文時代の遺跡は、農学寮跡・棟林A遺跡など本遺跡周辺の段丘上にも数ヶ所認められるが、多くは、赤坂川・大倉川流域などを含めた広瀬川左岸の段丘、丘陵に分布している。

弥生・古墳時代の遺跡は、現在のところ発見されていないが、今後の分布調査によって、その存在が明らかになると思われる。

中世から近世にかけては館跡が多くみられ、これらは盆地周縁の丘陵麓や芋沢川流域の段丘に立地している。



No	遺跡名	立地	時代	No	遺跡名	立地	時代
1	一本杉遺跡A	段丘	平安	20	淮遺跡	丘陵麓	奈良、平安
2	一本杉遺跡B	段丘	平安	21	栗生遺跡	台地	奈良、平安
3	農学寮跡遺跡	段丘	縄文（中・後）、平安	22	西館跡	丘陵	中世、近世
4	梗林A遺跡	台地	縄文	23	郷六城跡	台地	中世
5	蛇台原B遺跡	台地	縄文	24	沼田遺跡		平安
6	樋田遺跡	台地	縄文、奈良、平安	25	郷六御殿跡	台地	近世
7	榎遺跡	台地	奈良、平安	26	葛岡城跡	台地	中世
8	上町A遺跡	台地	奈良、平安	27	郷六遺跡	丘陵麓	縄文、奈良、平安
9	上町B遺跡	台地	奈良、平安	28	本郷館跡	台地	近世
10	補蛇寺跡	台地	近世	29	本郷遺跡	段丘	縄文
11	観音A遺跡	台地	奈良、平安	30	荒神館跡	丘陵	中世、近世
12	南館跡	台地	中世	31	宇那弥神社跡	丘陵斜面	近世
13	想海塚跡	台地	中世	32	寺下館跡	台地	中世、近世
14	二本松A遺跡	台地	縄文、奈良、平安	33	高野原遺跡	台地	縄文
15	梗林C遺跡	台地	縄文、奈良、平安	34	芋沢の嘉元の碑		中世
16	梗林B遺跡	台地	奈良、平安	35	馬場城跡	台地	中世、近世
17	五輪塔遺跡	台地	縄文	36	西館遺跡	台地	中世、近世
18	弥勒寺の元亨の碑		中世	37	権現森遺跡	丘陵斜面	縄文
19	館遺跡	丘陵端	奈良、平安	38	臨済院寺跡	丘陵斜面	近世

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ．調査の方法と経過

一本杉遺跡は、県営広瀬住宅建設予定地に含まれていたため、県土木部の依頼により宮城県教育委員会は遺跡の調査を実施した。発掘調査は工事施工にあわせて、昭和58年9月19日～10

月29日と昭和59年4月9日～11日の2回行なった。対象面積は約60,000㎡である。

調査区：地形測量時に打設した60m単位の杭No.1とNo.6を結ぶ線(磁北からN－10’30”－Eである)を基準とし、1辺60m単位の大グリッドで調査区全体を区画した。さらに、それぞれの大グリッド内に1辺3mの小グリッドを設定した。グリッド名は東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で示した(第2・3図)。

調査経過：第1次調査－遺跡南東部の住宅建設地である。対象地の地形は南北方向に緩やかに傾斜しているため、調査に際しては傾斜に沿って南北方向のトレンチ（3m×24m）を6～9m間隔に設定し、遺構確認を行なった。調査区内に盛土建設土台があったため、表土除去には重機を使用した。その結果、段丘の中央部に入る浅い窪地の北側で住居跡2軒・土壙3基を確認した。10月に入り、県土木部と協議し遺構の数が少ないことから事前調査に切りかえた。1次調査の発掘面積は約13,646㎡である。

精査した遺構については、1/20の平面図・断面図及び写真撮影を行なった。地形については、1/200のグリッド配図にレベルを記入し、ＡＲ・ＤＲのトレンチについて土層断面図を作成した。

第2次調査－1次調査の北側(テニスコート、浄化槽、駐車場予定地)と西側（道路建設予定地）の約7,865㎡を対象として調査を行なった。

調査区：北側は1次調査の基準線を延長して、7本のトレンチ（3m×12～30m）を設定し、西側は道路建設予定地（8m×155m）にあわせた。

調査経過：調査に入った時点で、テニスコート予定地には盛土されており浄化槽、駐車場予定地は著しく削平されていた。そのため、テニスコート部分は、重機によって盛土と表土を除去し、浄化槽・駐車場部分は、表土の残存している所に限り調査を行なった。なお、道路建設予定地も表土の除去には重機を使用した。

調査の結果、北側・西側ともに遺構は確認されなかった。2次調査の発掘面積は約1,985㎡である。

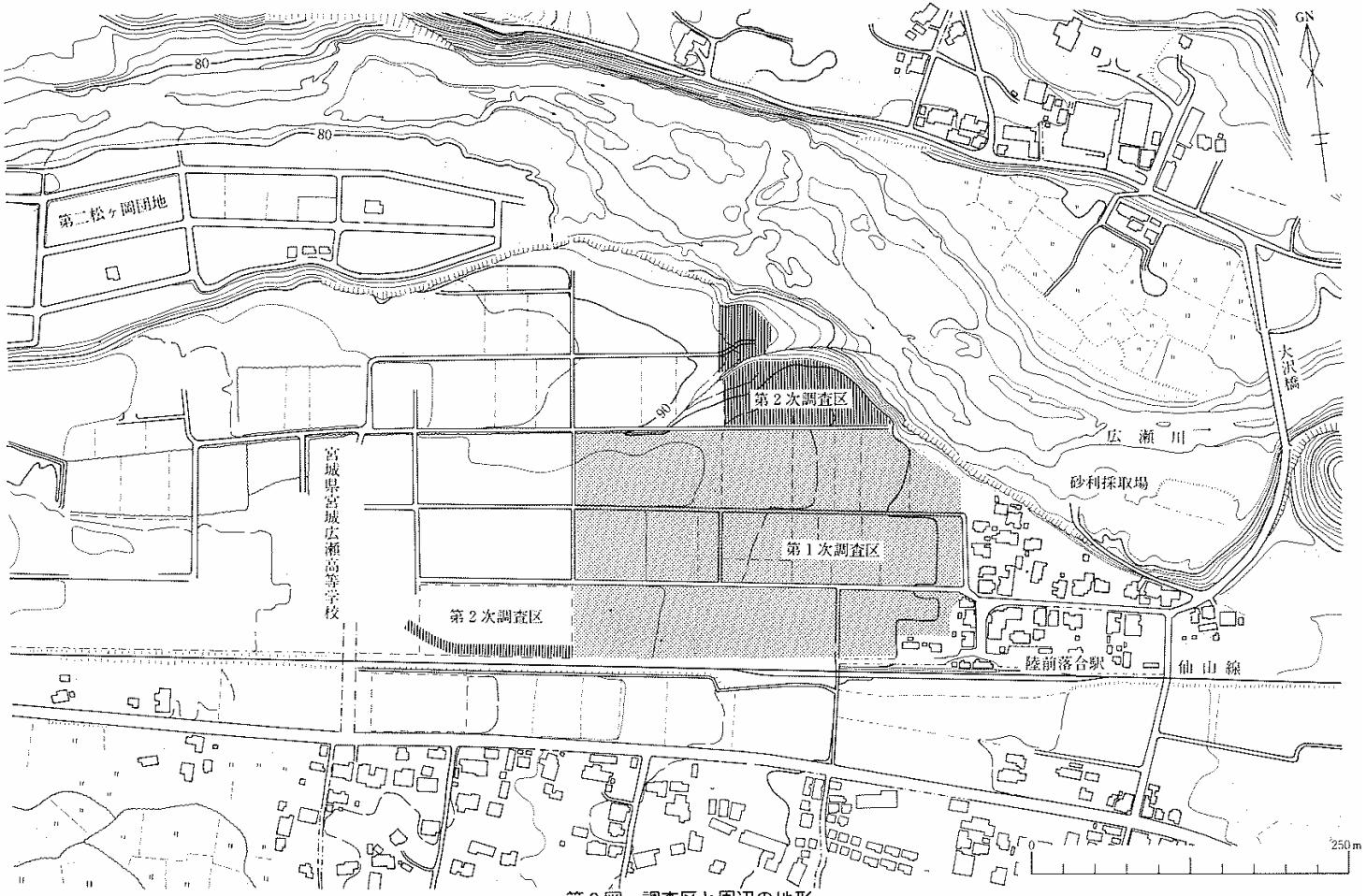
Ⅲ. 調査の成果

1. 基本層位

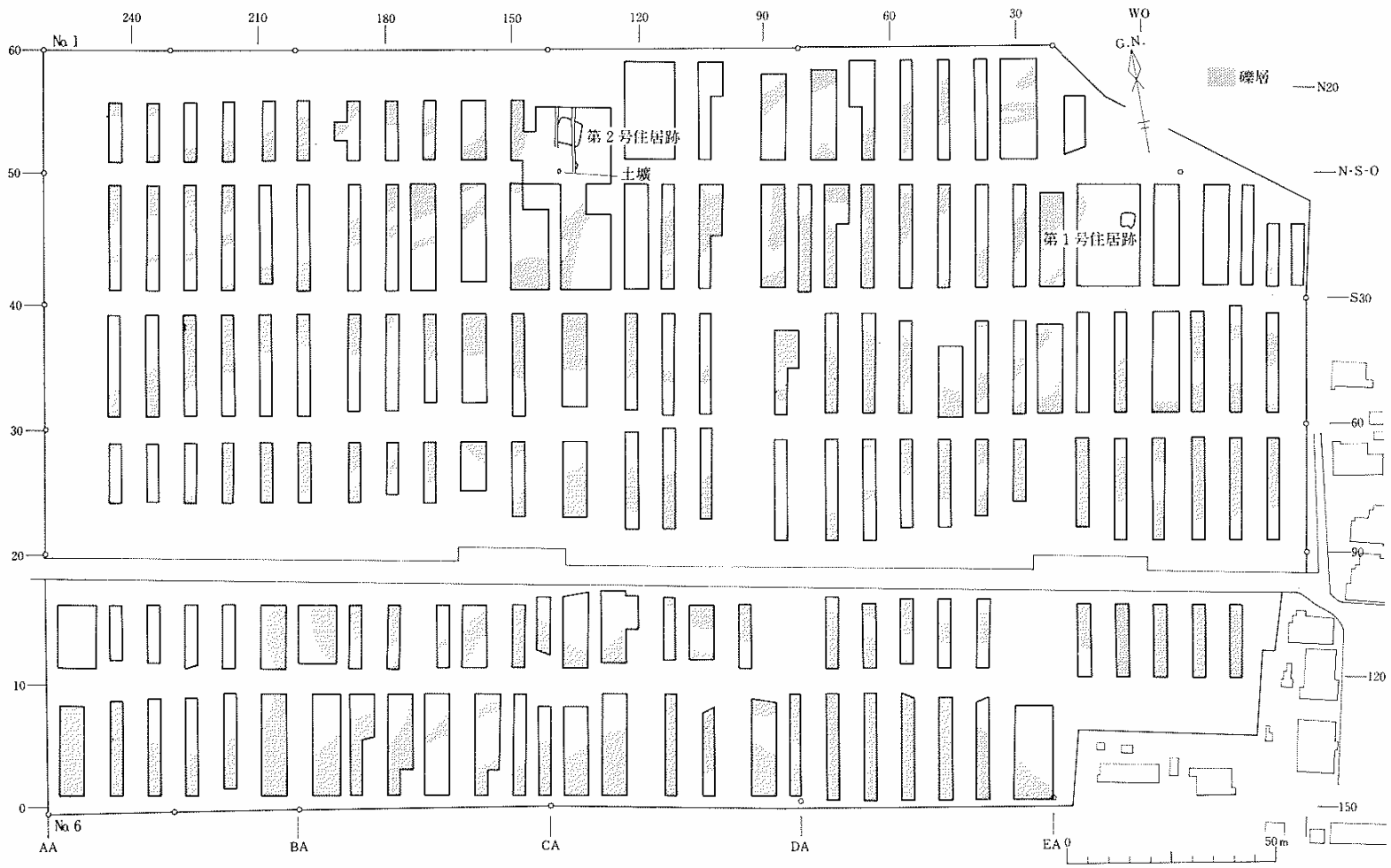
調査区内における堆積土は、基本的には5層からなっているが、場所によっては厚さが異なる（第4図）。

第1ａ層は耕作土で、厚さは平坦部で約20～50cm（1）、北側の斜面では約20～140cm（3）である。この層は、黒褐色シルトからなる、第1ｂ層は風倒木によるもので、調査区北側で比較的多くみられ、黒褐色シルトからなる（2）。

第Ⅱ層は、厚さ約10～15cmの黒褐色シルトからなり、色調は第Ⅰ層よりやや黒味を帯びてい



第２図　調査区と周辺の地形


No 1
No 6
240
210
180
150
120
90
60
30
WO
G.N-
60
50
40
30
20
10
0
AA
BA
CA
DA
EA
0
50m
第2号住居跡
土壙
第1号住居跡
礫層
N20
N-S-O
S30
60
90
120
150

第3図 遺 構 配 図

る。また、耕作による溝がこの層までおよんでいる部分もある。遺物は出土していない。

第III層は、厚さ約10～50cmの褐色シルトからなるローム漸移層であり、第IV層の分布する地域にみられる。

第IV層は、ローム層である。段丘礫層の窪地にみられ、第1次調査の遺構確認面となった。厚さは場所によって異なるが、確認はしなかった。

第Ⅴ層は、段丘礫層である。若干の起伏があり、その窪地には第IV層が堆積する。しかし、平坦な部分では、第Ⅱ層が堆積する。

2．発見された遺構と遺物

第1次調査では、竪穴住居跡2軒・土壙3基が検出され、須恵器・土師器・鉄製品等が出土した。しかし、第2次調査では、先述したように遺構は検出されず、遺物は縄文土器片一点が出土しただけである。

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

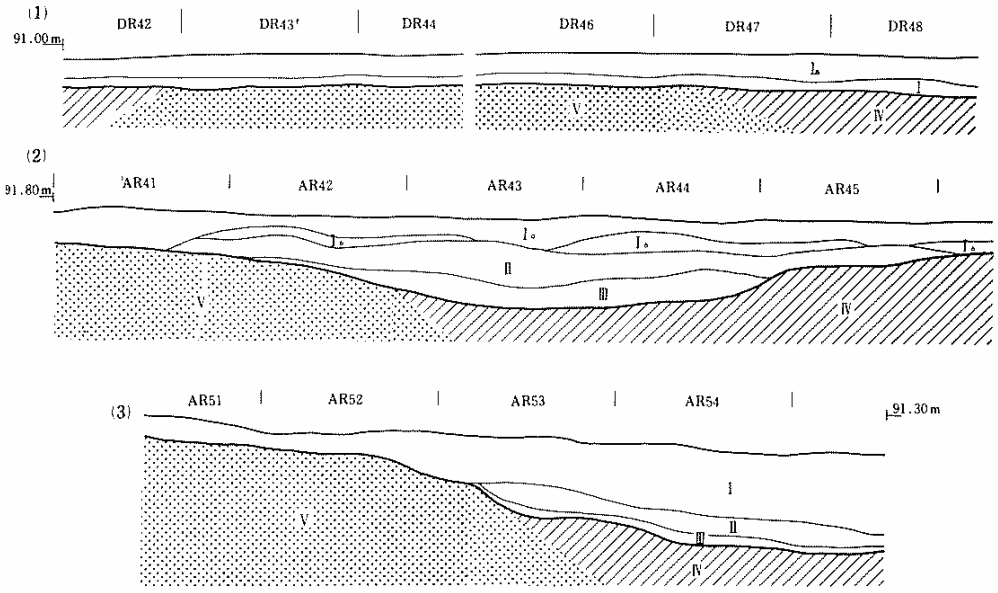
第1号住居跡(第5図)

〔位置〕ＥＦ・ＥＧ－45・46区で確認された。

〔重複〕土壙1と重複し、それよりも新しい。

〔平面形・規模〕一辺が約3mの正方形である。

〔壁〕東壁を除いてローム層（第IV層）である。東壁は、風倒木による堆積土（第1ｂ層）を壁

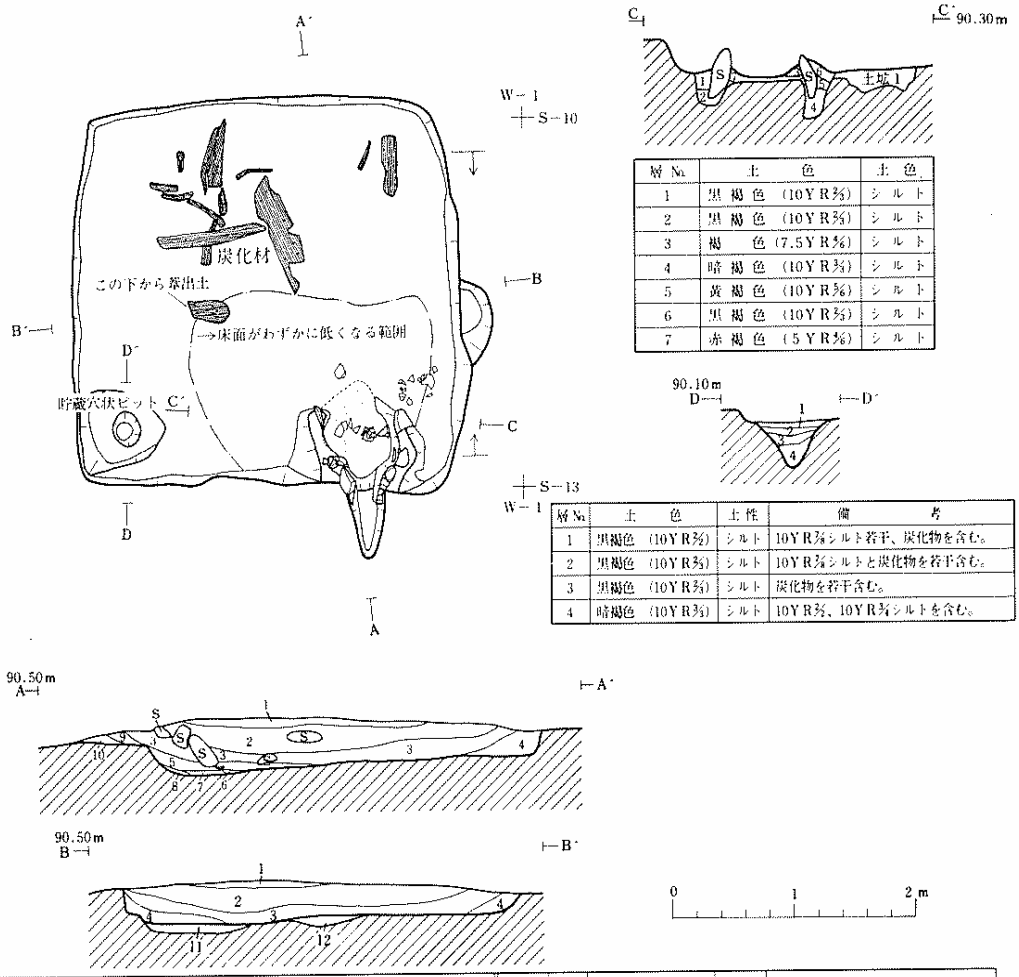


第４図　基　本　層　位

としている。床面からの立ちあがりはほぼ垂直で、確認面からの高さは、北壁および東壁の遺存状態のよい部分で約20cmである。

〔床面〕風倒木痕と土壙1の部分が貼り床で、他はロームを床面としている。前者は軟らかくわずかに窪んでいるが、後者では堅くしまり、平坦である。また、床面の北半分に炭化材が多く検出され、その下から葦のような炭化物が出土した。

〔柱穴・周溝〕検出されなかった。



層No.	土色	土色
1	黒褐色 (10YR3/4)	シルト
2	黒褐色 (10YR3/4)	シルト
3	褐色 (7.5YR4/6)	シルト
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト
5	黄褐色 (10YR5/6)	シルト
6	黒褐色 (10YR3/4)	シルト
7	赤褐色 (5YR5/6)	シルト

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	10YR3/4シルト若干、炭化物を含む。
2	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	10YR3/4シルトと炭化物を若干含む。
3	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物を若干含む。
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	10YR3/4、10YR3/4シルトを含む。

層位	層No.	土色	土性	備考
Ⅰ	1	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	灰白火山灰 (10YR7/4) を若干含む。
	2	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック (10YR7/4)・灰白火山灰を含む。炭化物を若干含む。
Ⅱ	3	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物（材）を多量に含む。
Ⅲ	4	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック (10YR7/4) を含む。
カマド	5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土を含む。炭化物を多量に含む。
	6	暗赤褐色 (5YR3/4)	シルト	焼土と炭化物を含む
カマド	7	赤褐色 (5YR5/6)	シルト	焼土。
	8	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	焼土を少量、炭化物。
煙出	9	暗赤褐色 (5YR3/4)	シルト	焼土。
	10	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土を若干含む。
	11	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	10YR5/4、3/4シルトを含む。炭化物を若干含む。風倒木痕のため貼っている部分。
	12	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	貼り床されている。

第5図　第1号住居跡

〔カマド〕南壁の東隅寄りに付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は底面を浅く掘り窪め、側壁は河原石をすえ、粘土を貼り付けて構築したものである。底面および側壁内面は、火熱によって赤褐色に変色している。規模は、奥行き約85㎝・幅約55㎝である。煙道部は、燃焼部の奥壁の高さ約15㎝のところから住居の外に向って浅い溝状にのびている。規模は、長さ約65㎝・幅約25㎝で、底面はほぼ水平である。本来の形は、トンネル状であったと推定される。

〔貯蔵穴状ピット〕床面南西隅にある。平面形は不整円形で、径約65㎝・深さ約35㎝である。堆積土は4層に分かれ、ほぼ水平に堆積する。1層から3層には、炭化物の混入が認められる。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は3層に大別され、壁際から流れ込むような堆積状況を示している。第1層は灰白色火山灰をわずかに含み、住居跡中央部に厚く堆積している。第2層は多量の炭化物を含み、住居跡中央部の床面を直接覆っている。なお、住居北側の第2層下部に大きな炭化材がみられる。第3層は壁際に堆積し、ローム粒を含んでいる。

〔出土遺物〕（第6図）床面・カマド・貯蔵穴状ピットから出土したものを住居跡に伴うものと考え、これらを一括して説明する。特徴的な部位では、その個体数を示すが、他のものについては、後掲の「出土遺物集計表」を参照してもらいたい。また、遺構との関連についても同様である。

土師器

坏　床面・カマド・貯蔵穴状ピット第2層から出土している。

すべて製作にロクロを使用している。器形がわかるものは、体部から口縁部まで外傾して立ちあがる(1)。小破片の形状も、ほぼこれに類似していると考えられる。底部資料は2点あり、切り離しはすべて回転糸切リで、底部周縁や体部下半に回転ヘラケズリがみられる（1・2）。また、内面にはヘラミガキ・黒色処理が認められる。ヘラミガキの方向は、底部で放射状、体部では横方向である。

甕　カマドから出土している。製作にロクロを使用しているものと、ロクロを使用していないものとがある（3・4）。前者は、底部の切り離しが回転糸切りで、体部にロクロナデがみられ、体部下半にはケズリが施されている。後者は、いずれも口縁部が強く外反し、端部に弱い沈線がある。また、内外面とも口縁部から頸部にかけて横ナデが施されている。体部の内面にはヘラナデ、外面には刷毛目がみられる。なお、底部にムシロ状か、あるいは網代状の圧痕が認められる(3)。

須恵器

坏　床面・カマドから出土している。

器形がわかるものは、いずれも体部から口縁部まで外傾して立ちあがる。底部の切り離しは

回転糸切りで再調整はない(5・7)。

甕　カマドから底部と体部の破片が出土している。底部の切り離しは糸切りでなく、形状不明の圧痕が認められる。全体の形は不明である。

鉄製品　床面から平棟平造りの刀子が1点出土している(8)。先端部と身の一部が欠損している。両関で茎に木質部が残存している。

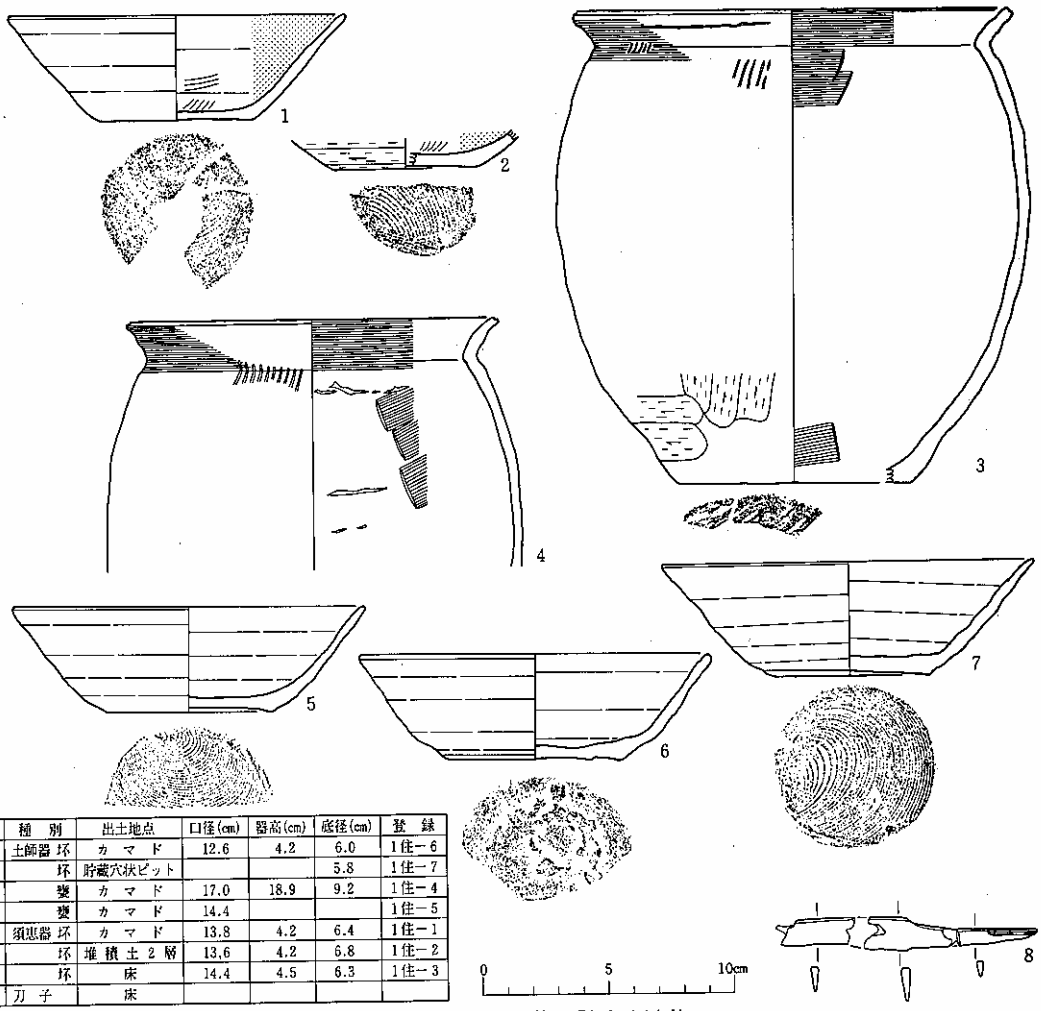
堆積土出土遺物

土師器

坏　第2層から底部の小破片が出土している。全面に回転ヘラケズリが施され、内面にはヘラミガキ・黒色処理が認められる。

須恵器

坏　第1層と第2層から出土している。器形がわかるものは1点だけで、体部は外傾して立



No.	種　別	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登　録
1	土師器 坏	カ マ ド	12.6	4.2	6.0	1住－6
2	坏	貯蔵穴状ピット			5.8	1住－7
3	甕	カ マ ド	17.0	18.9	9.2	1住－4
4	甕	カ マ ド	14.4			1住－5
5	須恵器 坏	カ マ ド	13.8	4.2	6.4	1住－1
6	坏	堆 積 土 2 層	13.6	4.2	6.8	1住－2
7	坏	床	14.4	4.5	6.3	1住－3
8	刀 子	床				

第6図　第1号住居跡出土遺物

ちあがり、口縁部で弱く外反する。底部の切り離しはヘラ切りである（6）。

第2号住居跡（第7・8図）

〔位置〕ＣＡ52－54、ＣＣ52－53区で確認された。

〔重複〕後世の溝が、住居跡を南北方向に横切っている。

〔平面形・規模〕住居壁は、削平のため東壁と西壁がわずかに残るだけで、北と南は不明である。平面形は、残存する周溝の位置から、長軸約5m60cm、短軸約5m35cmのほぼ正方形である。

〔床面〕床面の周縁では掘り方が深く、貼り床がなされている。中央部では、ロームを床としている。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は、削平のため東側と西側がわずかに残っているだけである。ともに、木炭粒およびローム粒を多く含む層である。

〔周溝〕部分的ではあるが、住居跡の各辺でみられる。状態のよい西辺では、幅約20cm・深さ約10cmである。

〔カマド〕東辺中央のやや南よりに付設されている。燃焼部の側壁が残存している。燃焼部の規模は、幅約80cm・長さ約180cmである。側壁は、河原石を2個ずつ並べて、粘土で構築されている。

〔柱穴〕ピットは11個検出された(Ｐ1～Ｐ11)。そのうち、柱痕跡が認められ、配置のあり方からも柱穴と思われるものは、Ｐ8・9・10・11である。これらを結ぶとほぼ長方形をなし、Ｐ8とＰ9の間は2m65cm、Ｐ8とＰ10の間は4m5cm、Ｐ10とＰ11の間は2m55cm、Ｐ9とＰ11の間は4m20cmである。

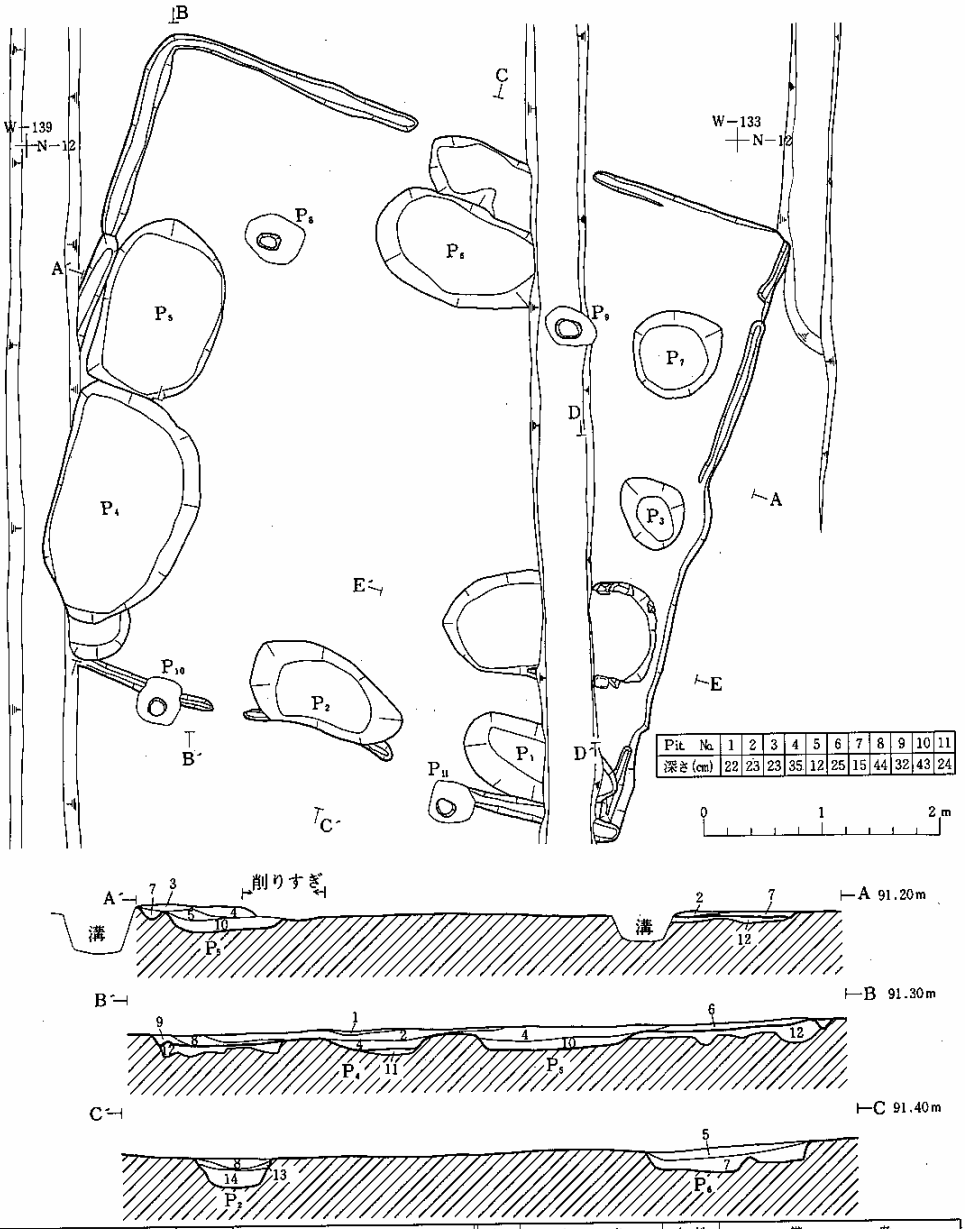
〔その他の施設〕Ｐ1～Ｐ7は、検出状況や堆積土から住居跡に伴うと思われるが、性格は不明である。

〔出土遺物〕(第9・10図)ここでは、床面・カマド・ピットから出土したものを住居跡に伴うものと考え、一括して説明する。

土師器

坏　ピットから出土している。すべて製作にロクロを使用し、内面にはヘラミガキ・黒色処理がみられる。その中で、体部および底部に再調整のあるもの(2点)と、再調整のないもの(2点)とにわかれる。前者は、体部下半から底部全面に回転ヘラケズリが施されているため、底部の切り離しは不明である(第9図1)。後者は、2点とも底部の切り離しは回転糸切りである(2)。

甕　カマドとピットから出土している。製作にロクロを使用するものと、ロクロを使用しないものがある。前者で全体の器形を示すものはない。底部資料は1点あり、切り離しは回転糸切りである。後者の体部は丸味をもち、口縁部は外反している。器面調整は剥落のため内面の刷毛目が認められるだけである(3)。また、破片資料では、外面に刷毛目や横ナデ調整がみら



層No.	土色	土性	備考	層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	粉状パミス (10YR7/4) を含む。	8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土、木炭粒を多量に含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	木炭粒を少量含む。	9	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	木炭粒を少量含む。
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト		10	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	焼土、木炭をごく少量含む。
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土 (5YR5/6) 木炭をブロック状で多量に含む。	11	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	焼土、木炭をごく少量含む。地山土の貼り床で粘性が強い。
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	木炭粒を少量含む。	12	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	地山土 (10YR5/6) ブロック状に含む、貼り床土で木炭少量含む。
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒を含む。	13	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む。
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多量に含む。	14	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む。焼土礫混入。

第7図 第2号住居跡(1)

れるものが多い。口縁部資料では、1点のみ内面に黒色処理されたものがある。

須恵器

坏　床面・カマド・ピットから出土している。器形がわかるものは、すべて体部が内弯気味に外傾して立ちあがるものであるが、口縁部は弱く外反するもの(4～8)と、外反しないもの(9～14)とにわかれる。底部資料は10点あり、切り離しはすべて回転糸切りで、再調整のないものである。

高台付坏　ピットから1点出土している(13)。器形は、体部から口縁部にかけて外傾して立ちあがる。底部の切り離しは回転糸切りで、底部周縁に高台を貼り付ける際のナデがみられる。高台は付高台で、「ハ」字状に開く。また、体部には「川」の墨書が認められる。

甕　カマド・ピットから出土している。全体の器形を示すものはない。口縁部から体部上半にかけての破片は頸部で屈曲し、口縁端部は上方につまみだされ狭い縁帯をつくっている（第10図1）。体部外面には、ヘラケズリが縦方向にみられる。なお、大甕の破片には外面に平行叩目、内面には押えの圧痕がある。

壺　カマド・ピットから出土している。台付の長頸壺と思われる底部から体部下半にかけての破片(2)と、体部の破片がある。いずれも体部外面に回転ヘラケズリがみられる。

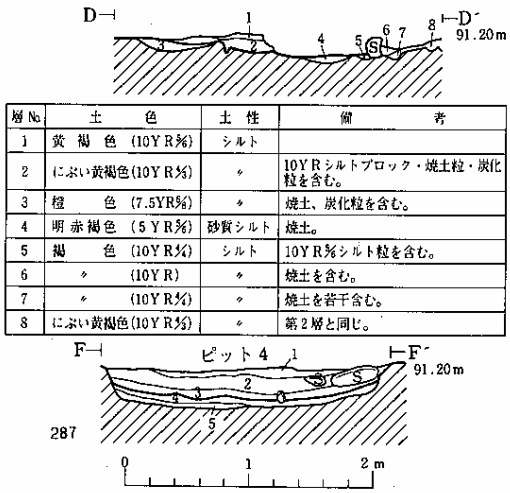
鉄製品　棒状で直径5㎜の小破片がピットから出土している。鏃の基部・紡錘車の糸巻き部分、釘等と思われる。

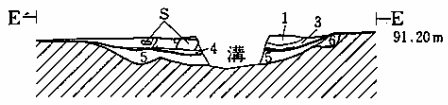
(2) 土壙と出土遺物（第11図）

土壙は3基検出されている。

土壙1は、第1号住居跡貼り床下から検出され、不整楕円形をしている。遺物は出土していない。

土壙2は不整円形をしている。遺物は出土していない。



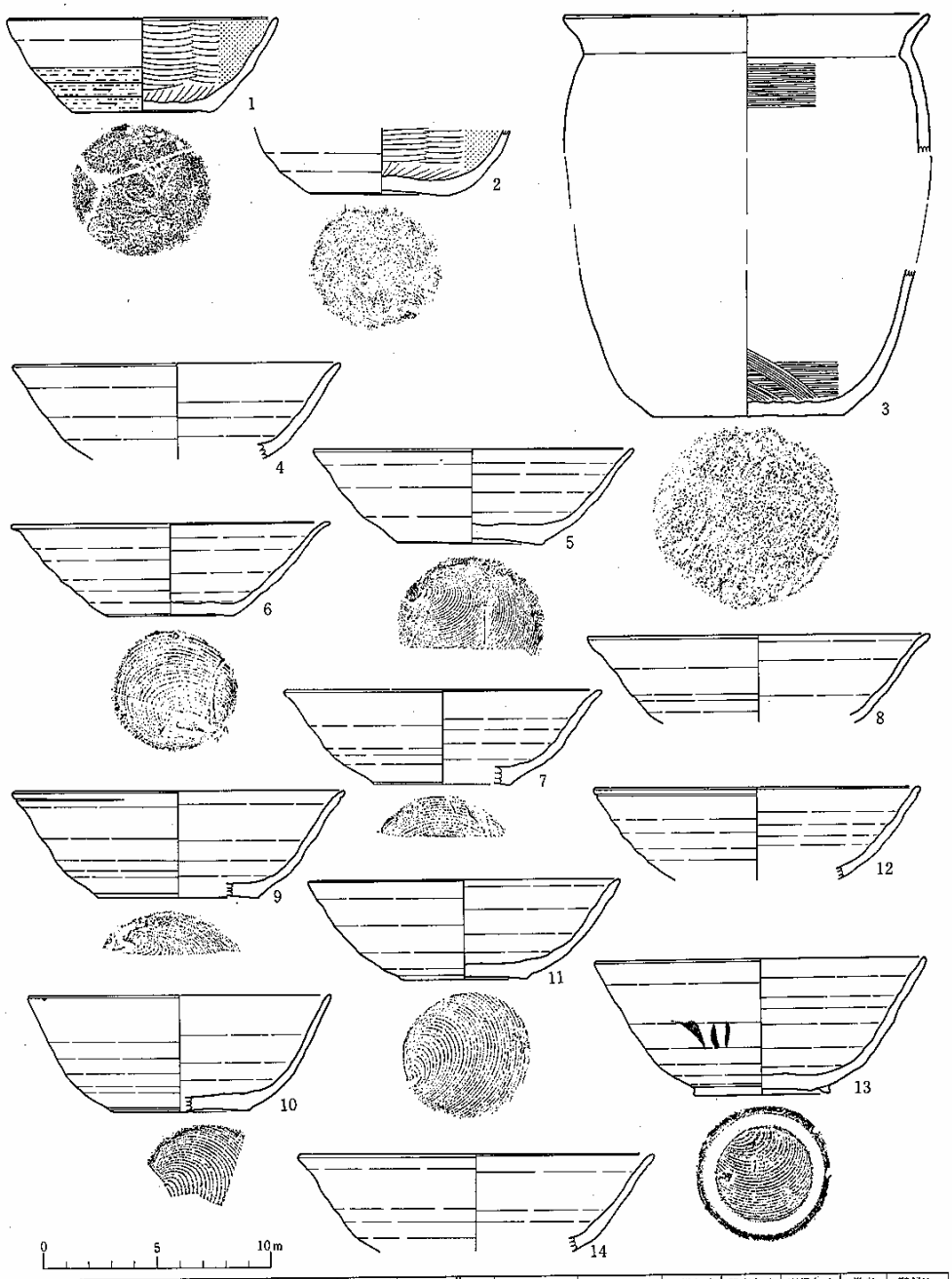


層No.	土色	土性	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	〃	10YRシルトブロック・焼土粒・炭化粒を含む。
3	橙色 (7.5YR6/6)	〃	焼土、炭化粒を含む。
4	明赤褐色 (5YR5/6)	砂質シルト	焼土。
5	褐色 (10YR5/4)	シルト	10YR5/6シルト粒を含む。
6	〃 (10YR)	〃	焼土を含む。
7	〃 (10YR5/4)	〃	焼土を若干含む。
8	にぶい黄褐色(10YR5/3)	〃	第2層と同じ。

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土（5YR5/6）をブロック状に含む。
2	黒褐色 (10YR3/2)	〃	木炭を多量に含む。
3	暗褐色 (10YR3/4)	〃	焼土粒を少量含む。
4	赤褐色 (5YR4/6)	〃	
5	明赤褐色 (5YR5/6)	砂質シルト	焼土。
6	褐色 (10YR5/4)	〃	

ピットNo.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	木炭、焼土を少量含む。
2	〃 (〃)	〃	焼土（5YR5/6）、木炭をブロック状で多量に含む。
3	〃 (10YR3/3)	〃	焼土、木炭を少量含む。
4	黄褐色 (10YR5/6)	〃	焼土、木炭を若干含む。地山地の貼り床で粘性が強い。
5	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	

第8図　第2号住居跡(2)

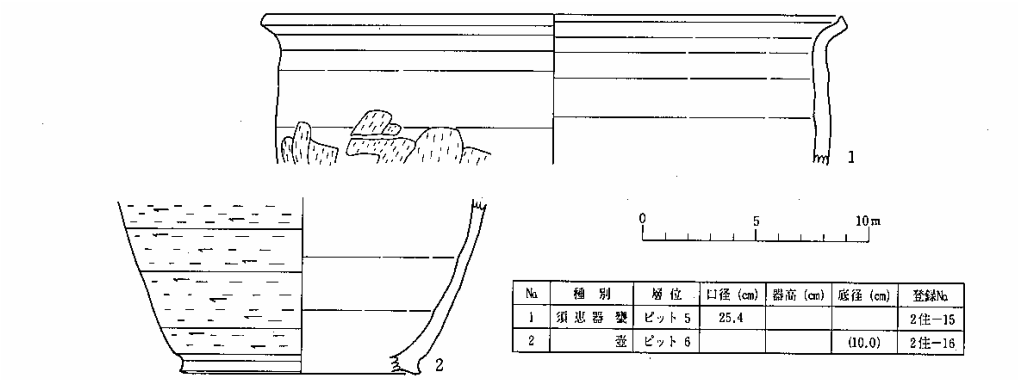


No.	種別	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録No.	No.	種別	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考	登録No.
1	土師器　坏	ピット3・7	11.6	4.2	6.2	2住−10	8	須恵器　坏	ピット6	14.9				2住−13
2	坏	ピット4・6			6.1	2住−11	9	坏	ピット5	14.4	4.7	7.0		2住−3
3	甕	ピット5	16.0		8.3	2住−12	10	坏	ピット5	13.1	5.1	6.0		2住−5
4	須恵器　坏	ピット5	14.2			2住−2	11	坏	ピット1	13.4	4.4	5.6		2住−1
5	坏	ピット1	13.9	4.2	6.4	2住−6	12	坏	ピット5	14.2				2住−9
6	坏	ピット5	13.8	4.1	5.5	2住−7	13	高台付　坏	ピット4・5	14.4	6.0	5.9	「川」墨書	2住−14
7	坏	ピット4	13.8	4.2	(6.0)	2住−8	14	坏	ピット1・5	15.5				2住−4

第9図　第2号住居跡出土遺物(1)

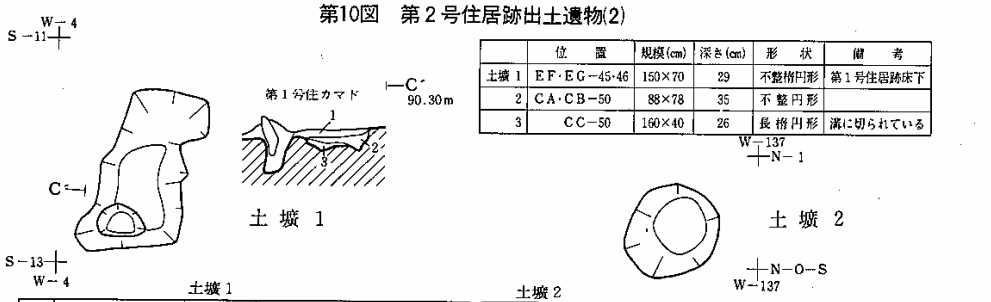
土壙3は、溝に切られているため全体の形は不明であるが、残存状況から長楕円形をしているものと思われる。底面は平坦で、壁は斜めに立ちあがる。堆積土には、多量の炭化物、焼土粒が含まれている。第1層から須恵器坏が1点出土している。

須恵器　坏　体部は内弯気味に外傾して立ちあがり、口縁部は弱く外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、再調整はない。



No.	種別	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録No.
1	須恵器 甕	ピット5	25.4			2住−15
2	壺	ピット6			(10.0)	2住−16

第10図　第2号住居跡出土遺物(2)



	位置	規模(cm)	深さ(cm)	形状	備考
土壙1	EF・EG−45・46	150×70	29	不整楕円形	第1号住居跡床下
2	CA・CB−50	88×78	35	不整円形	
3	CC−50	160×40	26	長楕円形	溝に切られている

土壙1

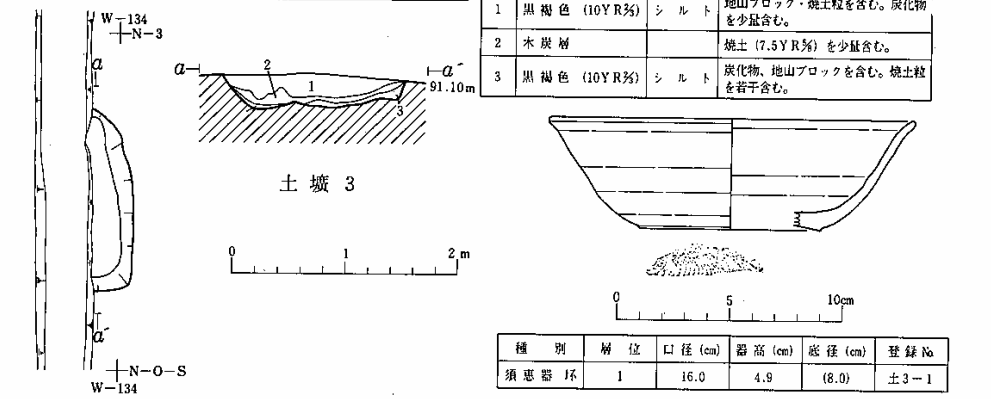
層No.	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR5/6)	シルト	10YR5/4シルトと炭化物を若干含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	〃	炭化物を若干含む。
3	褐色 (10YR5/6)	〃	炭化物を含む。

土壙2

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック (10YR5/6) を含む。

土壙3

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック・焼土粒を含む。炭化物を少量含む。
2	木炭層		焼土 (7.5YR5/6) を少量含む。
3	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、地山ブロックを含む。焼土粒を若干含む。



種別	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録No.
須恵器 坏	1	16.0	4.9	(8.0)	土3−1

第11図　土壙と出土遺物

Ⅳ. 考　　察

ここでは、竪穴住居跡・土壙と、それに伴う土器を中心に検討してみたい。

第1号住居跡に伴うと考えられる土器は、床面・カマド・貯蔵穴状ピットからのものに限定した。また、第2号住居跡についても、床面・カマド・ピットからのものに限った。両住居跡ともに遺物は量的に少なく、各器種の特徴や組成を必ずしも正確に示すものとは思われないが、簡単に土器の特徴や技法をあげて、その年代について考えてみたい。

第1号住居跡出土の土師器坏は、すべて製作にロクロを使用し、底部および体部下半に回転ヘラケズリの再調整がみられる。内面には、ヘラミガキ・黒色処理が認められる。

甕は、製作にロクロを使用するものと、ロクロを使用しないものとが共伴する。

須恵器坏は、すべて底部の切り離しが回転糸切りで、再調整のないものである。

甕も出土しているが、全体の形は不明である。

第2号住居跡の土師器坏は、すべて製作にロクロを使用し、底部および体部下半に回転ヘラケズリの再調整があるものと、再調整のないものとが共伴する。いずれも、内面にはヘラミガキ・黒色処理がみられる。

甕は、製作にロクロを使用するものと、ロクロを使用しないものとが共伴する。

須恵器坏は、すべて底部の切り離しが回転糸切りで、再調整のないものである。高台付坏も出土している。

甕と壺も出土しているが、全体の形は不明である。

両住居跡の違いは、組成的にみると、第1号住居跡に須恵器の高台付坏・壺がないことである。技法的にみると、第1号住居跡の土師器坏は、すべて再調整されているのに対して、第2号住居跡は、再調整のあるものと再調整のないものとが共伴している。他の点では共通する部分が多い。しかし、組成の差や技法についても、出土土器の絶対量が少ないことに原因があると思われ、年代差によるものかどうかは不明である。

総合的に考えれば、これらの特徴をもつ土師器坏は、いずれも表杉ノ入式(氏家:1957)に比定できるものであり、平安時代に位置づけられている。よって、土師器に伴う須恵器も同時期のものと思われる。

次に、土師器坏に限定して、平安時代とされている他の遺跡と比較してみる。ただし、器形まで比較可能な個体数が少ないため、外面調整の特徴だけをみていく。

白石市青木遺跡（小川:1980）刈田郡蔵王町東山遺跡(真山:1981)や、白石市家老内遺跡(前掲：真山)では、坏の底部および体部に再調整のあるものと再調整のないものとが共伴している。年代は、青木遺跡で平安時代前半、東山遺跡で9Ｃ中葉と考えられている。家老内

遺跡は、東山遺跡に後続するものと考えられている(丹羽：1983)。

以上のことから、第1号・第2号住居跡に伴う土師器坏は、大きく9C頃のものと考えたい。

次に、第1号住居跡と第2号住居跡について検討してみる。

両住居跡は、平面が方形の竪穴住居跡であり、カマドが付設されていることに共通部分がみられる。しかし、第1号住居跡には柱穴や周溝がみられず、カマドの方向も異なっている。また、第1号住居跡から多量の炭化材が出土している。これらは住居の上部構造の部材で、火災によって焼け落ちたものと思われる。葦のような炭化物は、屋根に葺かれたものか、床に敷かれたものと思われる。第2号住居跡の堆積土中にも、焼土粒や木炭粒を多量に含む層が認められる。しかし、火災によるものかどうかは不明である。

第1号住居跡と第2号住居跡の年代は、出土した土師器坏から9C頃と考える。また、土師器坏の特徴から、第1号住居跡のように器面に再調整のないものを含まない場合は、再調整のないものを含む第2住居跡より古いと考えられるが、いずれも個体数が少ないため、この両住居跡が同時に存在したか、あるいは新旧関係にあるかについては言及できない。ただ、第1号住居跡は、平安時代前半に短期間使用され、火災によって廃棄された遺構であると思われる。

土壙3の年代は、出土した須恵器坏の特徴から、両住居跡とほぼ同じ頃と思われる。

第1号・第2号住居跡は、いずれも第1次調査区北側の標高約90㎜の沢に近い部分で検出されている。また、本遺跡に隣接する農学寮跡遺跡、一本杉B遺跡でも奈良・平安時代の住居跡が確認されている。

以上のことから、本遺跡を含めて、段丘上には奈良・平安時代の住居が点在していたことになる。したがって、農学寮跡遺跡と一本杉B遺跡とで検出された住居跡は、第1次調査で精査した2軒の住居跡と、地形的な立地条件などから一つの集落を形成する遺構と思われる。

よって、本遺跡の範囲は、農学寮跡遺跡の一部と一本杉B遺跡を含み、沢を囲むような地域であると考えられる。

Ⅴ．ま　と　め

1．　本遺跡は、広瀬川右岸の河岸段丘上に立地する。

2．　調査の結果、竪穴住居跡2軒・土壙3基が検出された。遺物は、土師器・須恵器・鉄製品等が出土している。竪穴住居跡と土壙3の年代は、いずれも平安時代に属する。土壙1・2の年代は不明である。

3．　第1次調査と先に調査した農学寮跡遺跡の遺構の検出状況から、本遺跡の範囲は、北側の一段低い段丘面まで広がるものと考えていた。しかし、その地区は削平されていたため、第2次調査で確認することはできなかった。

引用・参考文献

阿部博志・千葉宗久(1980)：「台ノ山遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第62集　宮城県教育委員会

阿部正光・赤沢靖章(1983)：「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第4集　瀬峰町教育委員会

氏家和典(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

小川淳一(1980)：「青木遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会

狩野正昭・真山悟(1982)：「農学寮跡遺跡ー遺跡詳細分布調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第86集　宮城県教育委員会

佐々木和博(1984)：「鹿島遺跡・竹之内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第101集

土岐山武(1980)：「安久東遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会

奈良国立文化財研究所(1983)：「平城宮出土墨書土器集成Ⅰ」『奈良国立文化財研究所30周年記念史料』史料第25冊

丹羽茂(1983)：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集　宮城県教育委員会

早坂春一・阿部恵(1980)：「西手取・手取遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集

原河英二(1983)：「一本杉遺跡範囲確認調査報告書」宮城町教育委員会

真山悟(1981)：「家老内遺跡、東山遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会

森貢喜（1982）：「水入遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第84集　宮城県教育委員会

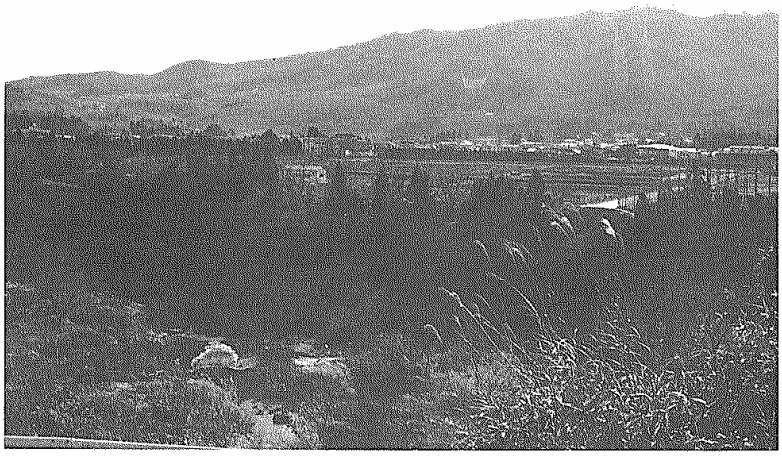
（1983）：「佐内屋敷遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」『宮城県文化財調査報告書』第93集　宮城県教育委員会

出土遺物集計表

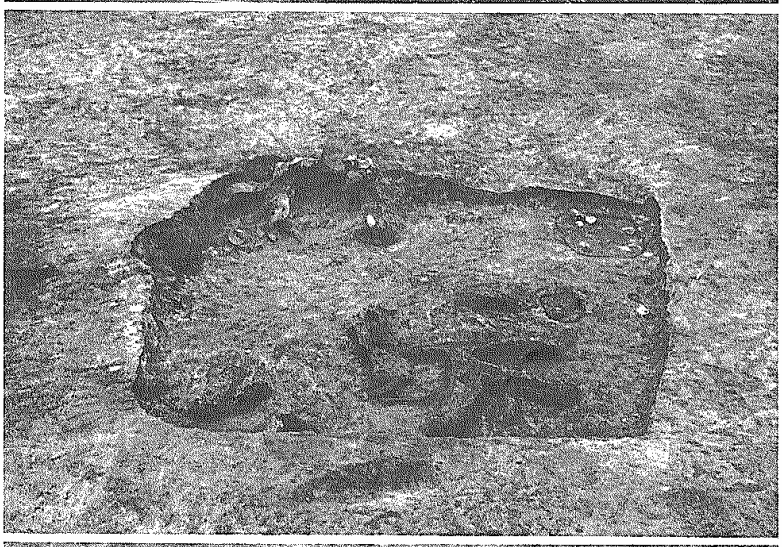
種別	器形	部位	器面調整 外面・内面	第1号住居跡 堆積土1層	堆積土2層	床	カマド	貯蔵穴	小計	第2号住居跡 床	カマド	ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6	ピット7	住居掘り方	不明	小計	土壙3
土師器	坏	口縁部	ロクロ——ミガキ(黒色)			1	2		3			1	6		6	1	1	(1)	1	1	(1) 17	
			不明——ミガキ(黒色)									4	1	1		2		1	2		11	
			不明——不明(黒色)									3				2	1	1			7	
			不明——不明												2						2	
		体部	ロクロ——ミガキ(黒色)									1	1		(1)						(1) 2	
			不明——ミガキ(黒色)							1		1	4	1		3					10	
			不明——不明(黒色)							3			6		1	4					14	
			不明——不明				1		1						3						3	
		底部	回転糸切り 回転ケズリ——ミガキ(黒色)				(1)	(1)	(2)													
			回転糸切り——ミガキ(黒色)													1	(1)				(1) 1	
			不明 回転ケズリ——ミガキ(黒色)		2				2					(1)							(1)	
			ヘラケズリ——ミガキ(黒色)										1									1
			不明——ミガキ(黒色)							1			1		1	2			1		6	
			不明——不明(黒色)											1							1	
	甕	口縁部	横ナデ——横ナデ 刷毛目				(1)		(1)							(1)				1	(1) 1	
			不明——横ナデ													2					2	
			不明——刷毛目													1					1	
			ロクロ——ロクロ				1		1		1										1	
			横ナデ 刷毛目——ミガキ(黒色)												1					1	2	
			不明——不明												1	1					2	
		体部	刷毛目——刷毛目							2	1				1	1		1			6	
			刷毛目——ナデ								1						1				2	
			刷毛目——不明								5			1	2	2	2				12	
			ヘラケズリ——ナデ								1						1				2	
			ヘラケズリ——不明														1				1	
			不明——刷毛目							3			1			5	1			2	12	
			不明——ナデ												1						1	
			不明——不明				1		1	3	1	1		6	1	7	2	1		9	31	
		底部	糸切り——ナデ													1					1	
			回転糸切り——ロクロ				1		1							1					1	
			ケズリ——ヘラナデ													1					1	
			ムシロ状圧痕——ナデ・刷毛目				(1)		(1)													
			不明——刷毛目													(1)					(1)	
			不明——不明												1						1	
須恵器	坏	口縁部	ロクロ——ロクロ	2					2	1	2	(2) 5	11	1	(1) 9	(3) 8	(1) 4	2		1	(7) 44	
		体部	ロクロ——ロクロ				1		1	1			5	1	4	2	1		1	2	17	
		底部	回転糸切り——ロクロ		(1)	(1)	(1)		(3)			(1)	3		(1)	(4)			1		(6) 4	(1)
	甕	口頸部	ロクロ——ロクロ															1			1	
			ロクロ——ケズリ														(1)				(1)	
			平行タタキ——オサエ目														1				1	
		体部	ロクロ——ロクロ				1		1		1						1		1	1	4	
			タタキ・ロクロ——ロクロ															1			1	
			タタキ——オサエ目								1				1		1				3	
			タタキ ヘラケズリ——ロクロ							1							1				2	
			ヘラケズリ——不明														1				1	
		底部	ケズリ——不明		1				1													
	壺	体部	回転ヘラケズリ——ロクロ								1						1				2	
		底部	回転ヘラケズリ——ロクロ													(1)					(1)	
鉄製品	刀子		——																		(1)	
	鉆(?)		——														3				3	
			計	2	(1) 2	(1) 2	(4) 8	1	(6) 15	(1) 16	15	(3) 16	40	(1) 12	(3) 35	(10) 47	(3) 24	(1) 8	7	18	(22) 238	(1)

( )内の数字は図示した個体数を表わす。口縁部から底部まで残存するものは、底部の項に記入した。

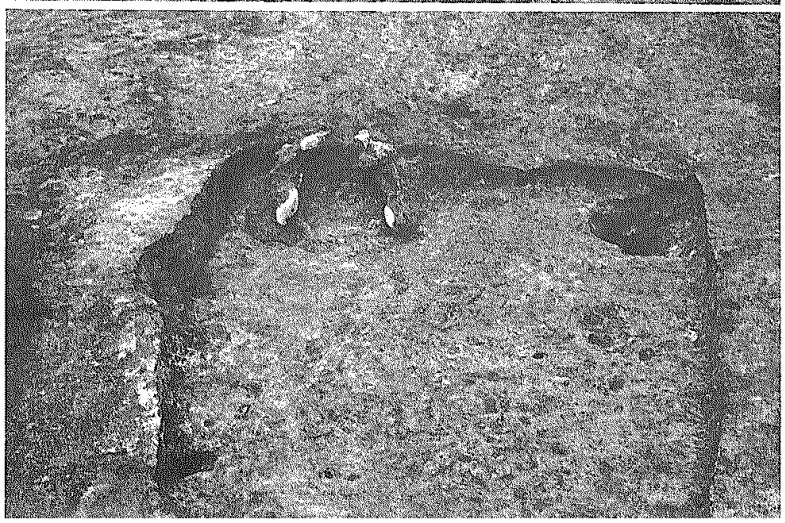
遺跡遠景
（北から）



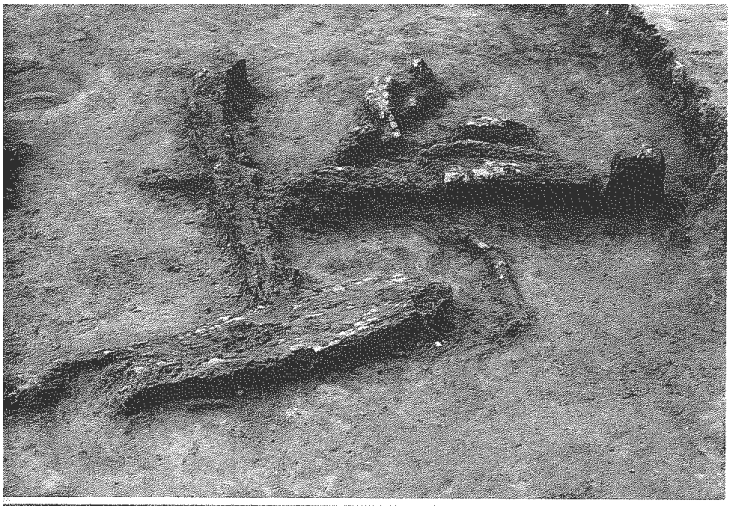
第１号住居跡（１）



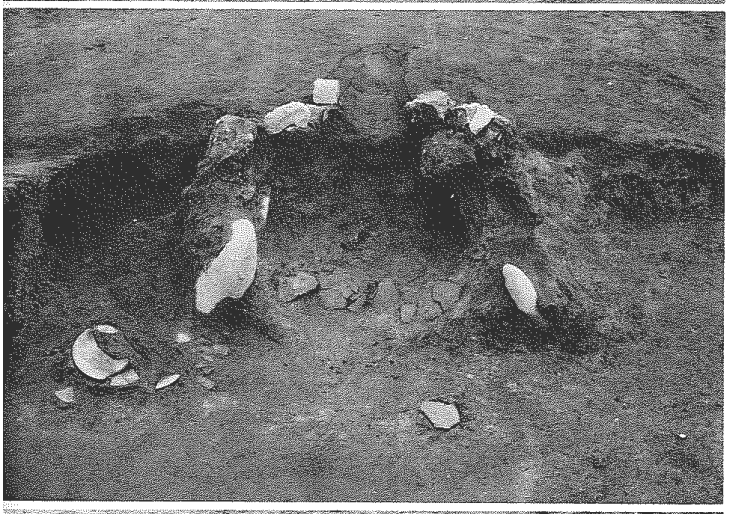
第１号住居跡（２）



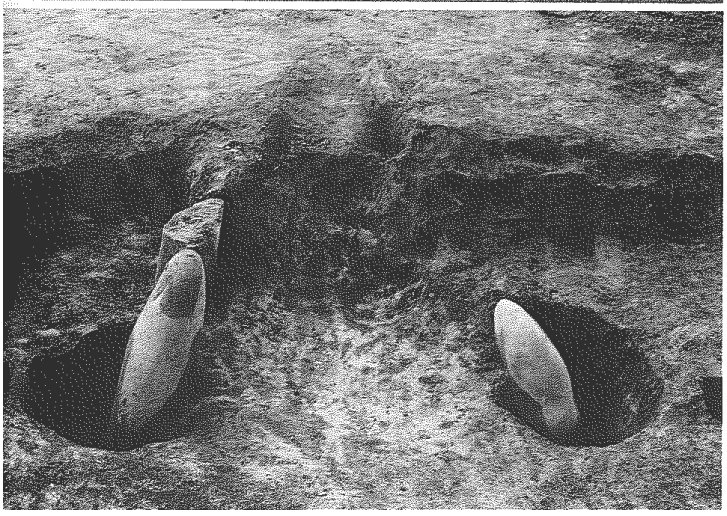
図版１



第１号住居跡
炭化材



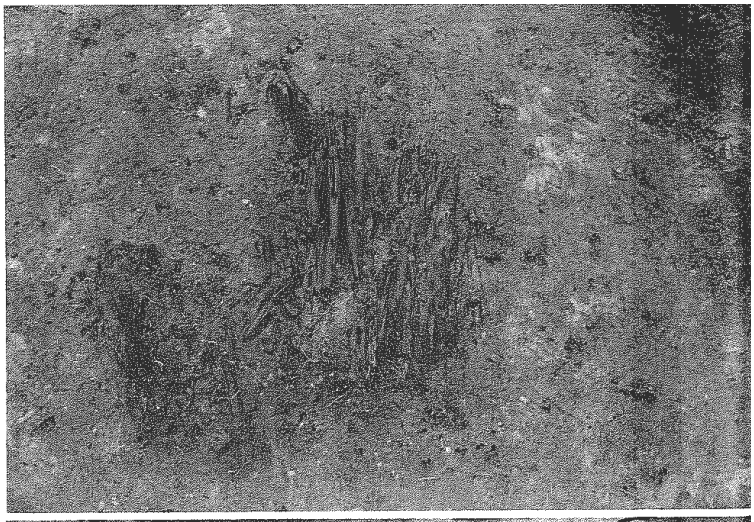
第１号住居跡
カマド(1)



第１号住居跡
カマド(2)

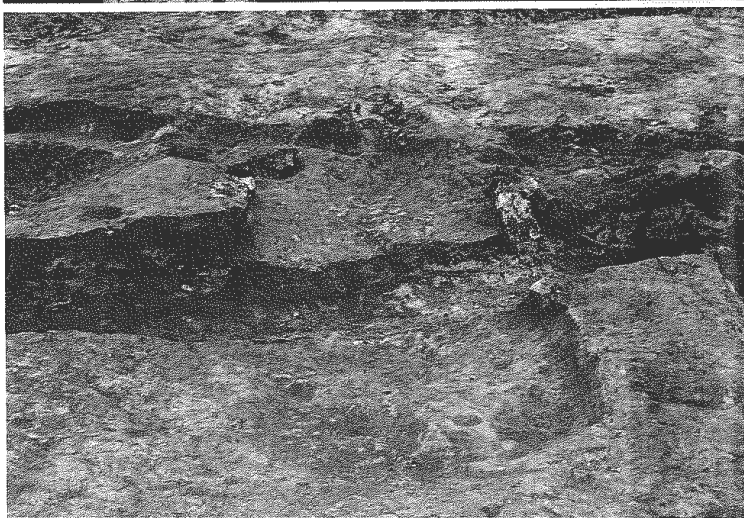
図版２

第１号住居跡
炭化物葦（？）



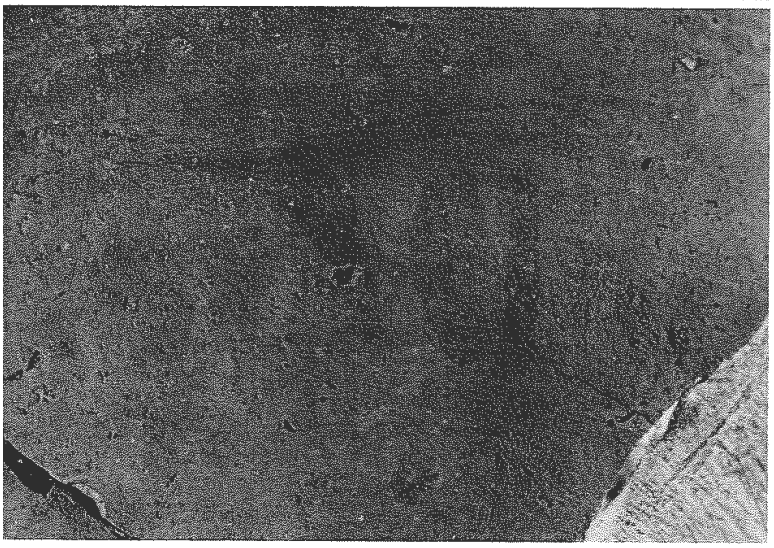
第２号住居跡

第２号住居跡
カマド



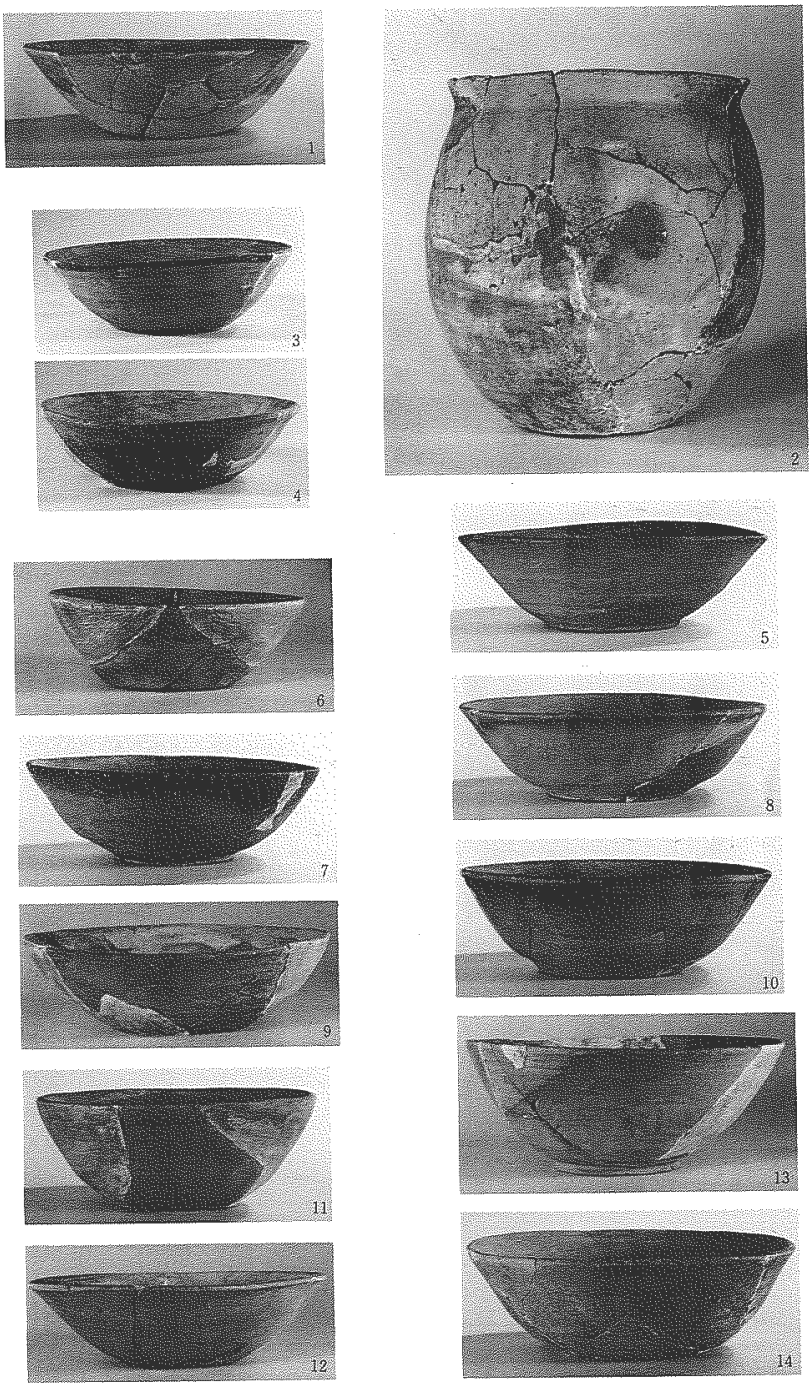
図版３

第２号住居跡
ピット１



第２号住居跡出土
墨書土器「川」

図版４



1：第6図1
2：〃 3
3：〃 5
4：〃 6
5：第6図7
6：第9図1
7：〃 11
8：〃 5
9：第9図7
10：〃 9
11：〃 10
12：〃 6
13：第9図13
14：第11図

図版5　出土土器

馬越石塚（まごいし）

調　査　要　項

遺跡所在地：宮城県仙台市茂庭字馬越石
遺 跡 記 号：HD(宮城県遺跡地名表登載番号：01160)
調 査 期 間：昭和57年5月6日～5月10日
調査対象面積：90㎡
発 掘 面 積：90㎡
調 査 主 体：宮城県教育委員会、宮城県企業局
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課
丹羽　茂・阿部　博志・村田　晃一

は　じ　め　に

豊かな自然に恵まれた宮城県には数多くの有形無形の文化財があります。しかし、近年の急激な都市化現象によって消滅の危機に瀕している文化財もあります。とくに約5,300余箇所を数える埋蔵文化財の保護と開発との調整は大きな課題であります。

埋蔵文化財を包蔵する地域の開発に当たっては、関係者に対しつとめて遺跡の現状保存の措置をとられるよう協力を要請し、止むを得ず現状保存のできないものについては、記録保存をするための発掘調査を実施するようにしております。

仙南・仙塩広域水道事業は、七ヶ宿ダムと白石川に水源を求め、仙南・仙塩8市11町、184万人に「生命の水」を供給する事業であり、事業の公共性と文化財保護の重要性から関係機関で十分な協議を重ね、昭和54年から56年まで9遺跡の発掘調査をし、「宮城県文化財調査報告書第79・第88集」『仙南・仙塩広域水道関係遺跡調査報告書Ⅰ・Ⅱ』として公表しております。

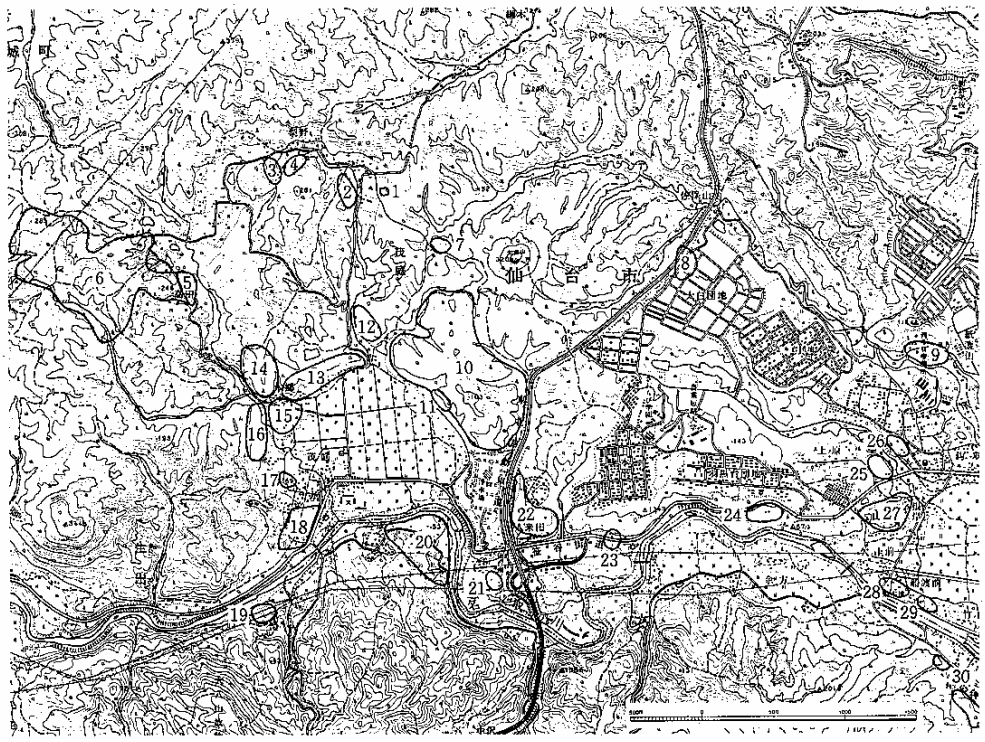
昭和57年度は、高区調整池建設予定地に係る「馬越石塚」の調査を実施しました。

本報告書は、その調査結果をとりまとめたもので、学術研究上は勿論のこと社会教育の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が一層深められるよう願うものであります。

最後に、本報告書を刊行するに当たり御協力をいただいた関係者の方々に深く感謝を申しあげます。

目　　次

はじめに …… 170
Ⅰ．遺跡の位置と周辺の地形 …… 171
Ⅱ．調査の方法と成果 …… 173
Ⅲ．まとめ …… 174



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	馬越石塚	2	梨野A遺跡	3	梨野B遺跡	4	梨野C遺跡	5	カナクソ遺跡	6	茂庭大館
7	梨野横穴墓群	8	佐保山東遺跡	9	御堂平遺跡	10	けんとう城	11	向根横穴墓群	12	向根遺跡
13	本郷遺跡	14	茂庭西館	15	鼠岸遺跡	16	門野山囲遺跡	17	西前遺跡	18	新組遺跡
19	塩ノ瀬遺跡	20	富田南西遺跡	21	人来田B遺跡	22	人来田遺跡	23	人来田C遺跡	24	羽黒台遺跡
25	北前遺跡	26	上ノ山遺跡	27	山田上ノ台遺跡	28	清太原西遺跡	29	船渡前遺跡	30	熊野堂横穴墓群

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　（国土地理院発行　1：25,000 仙台西南部）

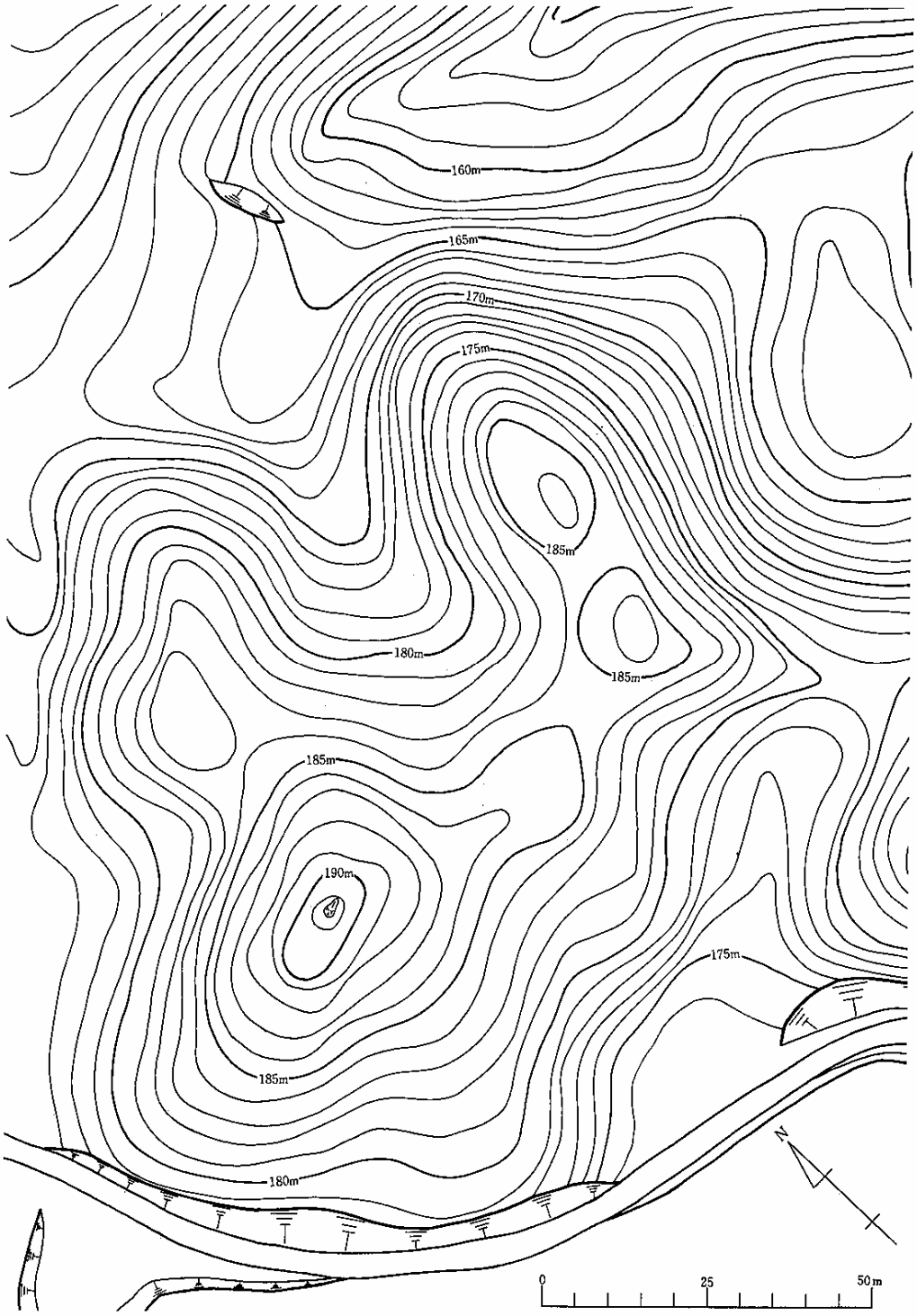
Ⅰ．遺跡の位置と周辺の地形

馬越石塚は国鉄長町駅から西方に約10㎞、仙台市茂庭字馬越石に所在する。

茂庭地区周辺の地形を概観すると大きく北部の丘陵地帯と南部の低地面とに分けることができる。北部の丘陵は奥羽山脈から派生し東にのびる蕃山丘陵で、標高300m前後ないし、300mを越える丘頂が続いている。南部は東流する名取川によって段丘面が形成され、水田として利用されている。

北部の丘陵地帯の中でも梨野付近は周囲を起伏の大きい丘陵に囲まれた盆地状の地形(梨野平坦面)を成している。馬越石塚はこの平坦面の東部にある標高190mの独立状の丘陵頂部に立地する。そこは梨野の集落の東縁にあたり、また茂庭から郷六へ向かう道の峠付近にもあたっている。そのため塚のある場所からは東に太白山、西に梨野の集落が望め、北を望むと茂庭と郷六を結ぶ道を見おろすことができる。

調査時塚周辺は雑木林であったが、現在は仙南仙塩広域水道の高区調整池となっている。


160m
165m
170m
175m
185m
180m
185m
185m
190m
175m
185m
180m
N
0
25
50m

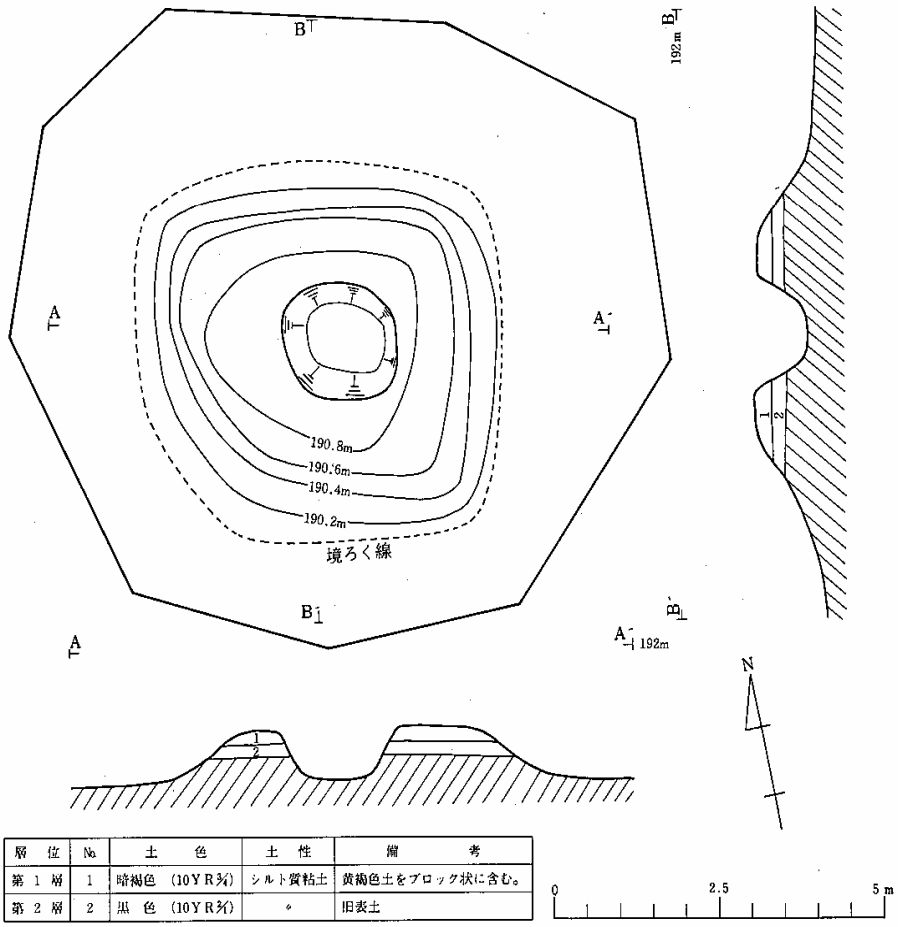
第２図　周辺の地形

Ⅱ． 調査の方法と成果

馬越石塚は標高190mの丘陵頂部の平坦面に位置する(第2図)。丘陵の尾根は北東へ約110mのびている。

調査は高区調整池となる地域の雑木を除去し、尾根部を中心に他に塚が存在するのかを確認することから始まった。結局、塚は1基しか確認されず、塚周辺の地形に削平された形跡もないことから馬越石塚は単独で存在するものと推定された。

発掘は塚のある平坦面約90m²を対象として5月6日から行なわれた。塚は土層観察用に十字のベルトを残して精査し、構築方法と内部施設の有無を確認した。断面図終了後ベルトをはずし平面図を作成した。写真撮影は発掘の状況に応じて行ない、調査が終了したのは5月10日である。



層　位	No.	土　色	土　性	備　考
第 1 層	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	黄褐色土をブロック状に含む。
第 2 層	2	黒　色 (10YR2/1)	〃	旧表土

第３図　塚平面図及び断面図（表土除去後）

発掘の結果判明したことは以下の通りである。

馬越石塚は塚の麓で長軸5m70cm、短軸5m50cmある。西南のコーナーがまるくなっているのは後世に崩れたためで、塚本来の形は方形を呈していたと考えられる。塚の高さは周囲の地山面から90cm程ある。

塚の構築方法は、丘陵頂部の地山を削って方形の基底部と10×9m程の平坦面を作り出し、その後基底部上に残った旧表土の上に積土を一枚のせている。旧表土・積土の双方ともしまりは認められなかった。このことから塚の構築時に封土を丁寧に突き固めるという作業はしなかったと思われる。

塚の頂部は平坦である。塚内部の施設については塚の中央部に攪乱孔があるため、その有無を確認できなかった。塚及びその周辺からも遺物は出土していない。

Ⅲ. ま　と　め

1. 馬越石塚は梨野平坦面東部にある標高190mの独立状の丘陵頂部に単独で所在する。
2. 塚は積土が1枚確認され、人為的な築造物であることがわかった。平面形は方形である。
3. 塚内部の施設は攪乱のためその有無を確認できなかった。付近の人の話では昭和15年頃に塚中央部を掘った人がいたが、その際も何もなかったとのことである。
4. 馬越石塚は内部施設の有無が不明で出土遺物もなく、塚の年代と関係がある茂庭周辺の中世・近世の様子にわからない点が多くあり、似たような塚の分布も坪沼に十三塚(上前十三塚)みられるだけなので、塚の性格や構築時期についてはっきりしたことはわからない。

しかし、塚が独立状の丘陵頂部に単独で所在し、伝承もないことなどから十三塚・境塚・墳墓の可能性は薄いと思われる。塚の立地する場所が梨野の集落と太白山とを結ぶ線上にあること、塚の位置が茂庭から郷六へ通じる道の峠付近にあり、道から仰ぎ見る高所に立地していることから、馬越石塚は信仰上の対象や祭りの場、あるいは境域通過の儀礼に関わる施設であった可能性がある。

引用・参考文献（五十音順）

大河峯夫・佐藤耕三(1983)：「栗木内塚」『福島県文化財調査報告書』第117集

木下忠・中村ひろ子(1984)：「十三塚」『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告』第9集

斎藤吉弘(1981)：「日光山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集

佐藤甲二・斎野裕彦他(1983)：「茂庭」『仙台市文化財調査報告書』第45集

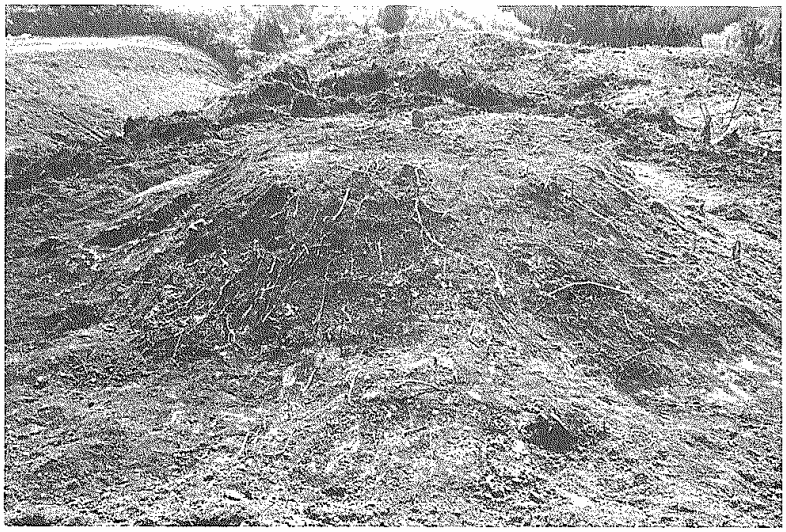
西間木・橋本・佐藤(耕)(1984)：「小倉地区塚群」『福島県文化財調査報告書』第130集

堀　一郎（1972）：「十三塚」『神道考古学講座』第5巻

宮城県教育庁文化財保護課（1977）：「清水側遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第50集

調査開始前（北から）

塚 全 景（南から）



調査終了後（北から）

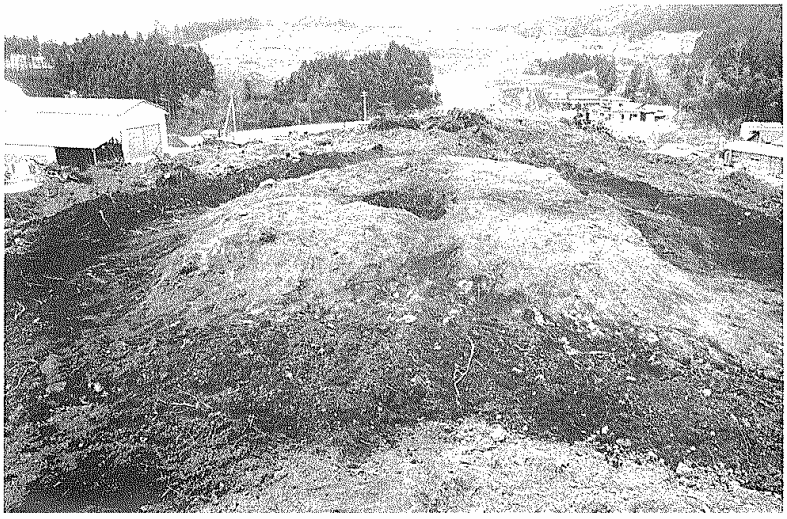


図 版

昭和58・59年度発掘届等一覧

(1)　文化財保護法第57条の２、３による届出及び通知(土木工事等)
昭和57年度分残(昭和58年２、３月)

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
354	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目36-10	斎藤　貞男	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
355	牛小舎遺跡	仙台市蒲生一丁目4-3	阿部　小旬	一般住宅新築	包含地、古代	立会
356	袋原畑中遺跡	仙台市袋原字畑中10-1、10-2他	佐藤幸一郎、佐藤清	宅地造成	包含地、古代	発掘
357	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目151-3	小川　茂夫	倉庫建設	官衙跡	試掘
362	後楽東遺跡	利府町字郷楽1-5 ほか	利府町長	通学路拡幅	旧石器	発掘
364	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字本新田角1	東條　秀則	社屋建設	包含地、奈良・平安	立会
365	長町清水遺跡	仙台市大野田字清水15、14、4	小野　紘丈	宅地造成	包含地、奈良・平安	発掘
366	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地追廻住宅135号	工藤　博志	一般住宅新築	城館跡	立会
367	山田上ノ台遺跡	仙台市山田字根岸前3	佐藤繁兵衛	一般住宅新築	集落跡、縄文～平安	立会
368	萩ヶ丘遺跡	仙台市萩ヶ丘9-1	仙台市長	プレハブ校舎増築	包含地、縄文	立会
369	泉崎浦遺跡	仙台市富沢字泉崎前10-7	阿部　要治	建物新築	包含地、縄文～平安	発掘
370	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目18-36	妹尾　益夫	広告塔建設	集落跡、弥生～平安	発掘
371	南小泉遺跡	仙台市南小泉字二の坪28-45	伊藤　雅俊	一般住宅新築	集落跡、弥生～古墳	立会
372	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目109-6	佐々木恒孝	一般住宅増築	集落跡、弥生～古墳	立会
373	砂押屋敷遺跡	仙台市砂押町142-2	大友　光男	貸家新築	包含地、奈良・平安	立会
374	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣77-4	加藤　幸吉	一般住宅新築	集落跡、古墳～中世	立会
375	鶴巻１遺跡	仙台市福室字鶴巻1番109-7	高橋　融治	一般住宅新築	包含地、平安	立会
376	山口遺跡	仙台市富沢字中谷地10、11-2	関東　英次	一般住宅新築	包含地、奈良・平安	立会
377	萱蒲沢遺跡	仙台市鶴ヶ谷萱蒲沢29-5	佐々木健一	一般住宅新築	包含地、奈良・平安	立会
381	長岫遺跡Ｂ地点	泉市松森字長岫48	関　兵馬	雨水管埋設	包含地、縄文・古代	立会
382	新田遺跡	多賀城市新田字後103-11	芦野　喜好	一般住宅新築	集落跡、古墳～平安	立会
383	高崎遺跡	多賀城市東田中一丁目262-1	多賀城市長	市営住宅改築	集落跡、古代～中世	発掘
384	下ノ内浦遺跡	仙台市富沢字下谷地5-4	海老名十郎	一般住宅新築	集落跡、縄文～古代	発掘
385	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目1232	山田　大樹	長屋住宅新築	集落跡、平安	立会
386	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地	小野　雅美	一般住宅解体新築	城館跡	立会
387	小田原長命坂窯跡	仙台市小松島三丁目40-51	吉川きよ子	一般住宅解体新築	瓦窯跡、平安	立会
388	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣164-5	村上　一	一般住宅新築	集落跡、古墳～平安	立会
391	色麻古墳群	色麻町四釜字地蔵堂1-18	宮城県知事	県営ほ場整備	古墳群	発掘
392	長者館跡	石巻市蛇田字土和田地内	石巻地方広域水道企業団	浄水場建設	城館跡	立会
393	茂ヶ崎城跡	仙台市長町字茂ヶ崎46番地106	加藤卓造、加藤幸	一般住宅新築	城館跡	立会
394	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣147	丹野しづえ	一般住宅新築	集落跡、古代	立会
395	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣75-2	小畑二郎、小畑進一	一般住宅新築	集落跡、古代	立会
396	坂ノ下遺跡	仙台市茂庭字坂ノ下25-10	沼田ツユ子	一般住宅新築	集落跡、平安	立会
397	越田台遺跡	石巻市沼津字越田10-2 、10-1、18	阿部　勝利	個人ほ場整備	散布地、縄文・平安	試掘
398	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地住宅278号	磯田　一	一般住宅新築	城館跡	立会
399	栗遺跡	仙台市西中田七丁目3-4	渡辺　義行	共同住宅建築	集落跡、古墳	立会
400	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地	高橋　良次	一般住宅新築	城館跡	立会
401	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地554	若生　晃	一般住宅新築	城館跡	立会
402	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字行屋敷前11	遠藤　兵一	社屋建築	集落跡、古代	立会
403	富沢水田遺跡	仙台市富沢二丁目49-1	角田　四郎	一般住宅新築	集落跡、奈良・平安	立会
404	四保館跡	柴田町大字船岡字館山	柴田市長	公園整備	城館跡	立会
405	留沼遺跡	古川市幸町二丁目1-1	菊田　一馬	構造物撤去	集落跡、古墳	立会

昭和58年度分

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
5	市川橋遺跡、山王遺跡	多賀城市市川字坂下、南宮字八幡地内外	田村　恵一	広域水道建設	集落跡、古代・中世	立会
6	南小泉遺跡	仙台市南小泉字遠見塚西92-1	引地　征志	一般住宅解体新築	集落跡、弥生～平安	立会
7	長町六丁目遺跡	仙台市長町六丁目65-9	小林　正	一般住宅新築	包含地、奈良・平安	立会
8	山口遺跡	仙台市富沢字山口54-1 外	京谷仁作、京谷　武	一般住宅新築	集落跡、縄文・中世	立会
9	萱蒲沢遺跡	仙台市鶴ヶ谷字萱蒲沢26番4	三村　徹	一般住宅新築	集落跡	立会
10	史跡、陸奥国分寺跡	仙台市木の下二丁目24-3	秋野　正、秋野　治	一般住宅新築	史跡隣接地	立会

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
11	今熊野遺跡	名取市高館川上字南台16番地	木村　秀寿	駐車場造成	集落跡、縄文～平安	立会
12	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地(住宅 363号)	熊谷和夫、熊谷嘉子	一般住宅解体新築	城館跡	立会
13	仙台東郊条里跡	仙台市南小泉字七曲86-1	林　弘司	事務所解体新築	条里跡、古代	試掘
14	南小泉遺跡	仙台市南小泉字七曲27-16	佐藤　孝男	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
15	鶴巻Ⅱ遺跡	仙台市福室字鶴巻2番51-1	石川　実	作業場兼倉庫新築	包含地、平安	立会
17	御殿館跡	宮城町上愛子字塩柄外	宮城町長	林道工事	城館跡	立会
18	中峰遺跡	大和町吉田字中峰140-6	県公営企業管理者	浄水場建設	旧石器、縄文平安集落	発掘
30	七尾城跡	河北町相野田地内	石巻土木事務所長	県道改修	城館跡	立会
31	鳥井原遺跡	泉市市名坂鳥井原	東北電気通信局	とう道建設	包含地、縄文	立会
32	山田上ノ台遺跡	仙台市山田字北前63-1	大友　克介	一般住宅増築	旧石器、縄文平安、江戸集落	立会
33	今泉遺跡	仙台市今泉字久保田97-1、97-6	武田　修	一般住宅増築	集落跡、弥生～近世	立会
34	館森館跡	北上町長尾字西沢2番地	北上町長	町道改良	城館跡	立会
35	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目14	仙台市長	道路の舗装工事	官衙跡	立会
36	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目3-6	浅野　菊治	車庫の建設	官衙跡	試掘
37	案内古墳 大蓮寺窯跡	仙台市安養寺下82-94	五十嵐保裕	墓地造成	瓦窯跡、古代	試掘
38	堤町窯跡	仙台市堤町一丁目9-24	宍戸　光夫	鉄筋コンクリート3階建建物建設	瓦窯跡、平安	試掘
39	砂押遺跡	仙台市沖野字砂押45-3	江刺　長治	一般住宅増築	散布地、平安	立会
40	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市福室字鶴巻一番114-5	横山　信	一般住宅新築	集落跡	立会
41	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目1	今野　昭男	一般住宅解体新築	集落跡、弥生～平安	立会
42	北屋敷遺跡	仙台市六丁目字屋敷42-1	山城　定一	一般住宅新築	散布地、平安～明治	立会
43	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目42-41	伊藤　寛	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
44	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目128-35	佐々木利二	一般住宅新築	官衙跡	試掘
47	目の出山瓦窯跡群	色麻町四釜字東原134他	色麻町長	農道拡幅	瓦窯跡群、古代	立会
48	品ノ浦窯跡群	迫町新田字品の浦202-1、井守沢60	迫　町　長	道路拡幅	窯跡群、中世	立会
49	市川橋遺跡	多賀城市市川字五万崎19-3	鈴木　正義	一般住宅増築	集落跡、古代	立会
50	明ヶ崎遺跡	角田市横倉字明ヶ崎148-1	小池　信也	一般住宅増築	包含地、縄文	立会
51	八谷館跡	大和町落合相川字蜂谷1-1	大和町長	東屋設置	城館跡	立会
52	嘉倉貝塚遺跡	築館町萩沢嘉倉52-1～53-7	宮城県知事	道路改修	貝塚、縄文	発掘
53	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅378号	佐光　国生	一般住宅解体新築	城　跡	立会
54	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目236-5	洞口　孝行	一般住宅新築	官衙跡	立会
55	内手遺跡	仙台市袋原字内手71	木村　範子	木造家屋の一部増築	散布地、平安	立会
56	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣145-5	猪股　昭治	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
57	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目153	吉田　正敏	倉庫及び離れの新築	集落跡、弥生～平安	立会
59	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目26-27	三浦　良男	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
60	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目291-27	志賀　寛	一般住宅二階建の新築	集落跡、弥生～平安	立会
62	大岳遺跡	南方町本郷大岳155～157、荷前211～225	南方町長	運動広場造成	散布地、縄文	立会
65	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目1115-1	青木守雄、青木保子	一般住宅新築	集落跡、平安	立会
66	堤町窯跡	仙台市堤町二丁目99	鈴木　光彦	一般住宅増築	窯　跡	立会
67	南ノ東遺跡	仙台市富田字八幡中10-2	千歳千代子	一般住宅増築	散布地、弥生～古代	立会
68	釣場遺跡	仙台市郡山七丁目7-36	山川　裕	一般住宅解体増築	散布地、平安	立会
69	郡山遺跡	仙台市郡山二丁目116-27	佐藤　昭一	一般住宅増築	官衙遺跡、隣接地	立会
70	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目6-15	千田　進	一般住宅新築	官衙遺跡	立会
71	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目210-7	斉藤キヨエ	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
72	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目10-4	武田　広志	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
73	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目202-12	遠藤　公、遠藤陵子	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
74	南小泉遺跡	仙台市南小泉四丁目103-2	早坂長一郎	共同住宅建設	集落跡、弥生～平安	立会
75	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目51-66	佐々木秀紀	一般住宅建替	官衙跡	立会
76	小鶴遺跡	仙台市小鶴字屋舗53	佐藤　進	一般住宅増築	城館跡	立会
77	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地	斉藤　誠子	一般住宅新築	城　跡	立会
78	菖蒲沢遺跡	仙台市鶴ヶ谷字菖蒲沢26-14、15	八島　忠夫	一般住宅新築	集落跡、縄文奈良平安	立会
79	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣1-6	畠山　長蔵	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
80	市川橋遺跡	多賀城市浮島字矢中44番2	野崎　章吉	一般住宅新築	集落跡、古代	立会
81	軍場山遺跡	登米町目野軍場山100番地他	島原　正弘	水田基盤整備	集落跡、縄文	立会
82	市川橋遺跡	多賀城市浮島字高平1　他	菊池　三夫	宅地造成	集落跡、古代	発掘
83	羽 山 館	白石市白川犬卒都婆字羽山50番地	中村　正輝	採石	城館跡	発掘
84	上堤遺跡	若柳町字川南上堤6番	宮城県知事	旧堤防の盛土除去	包含地、縄文	立会

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
85	安養寺下瓦窯跡	仙台市東仙台六丁目142-2	田山　彦六	養護学校寄宿舎建設	窯　跡、平安	試掘
86	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地(住宅 348号)	小笠原和宏	一般住宅解体新築	城館跡	立会
87	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地(住宅 208号)	千葉　隆夫	一般住宅新築	城館跡	立会
88	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地(住宅 563号)	菊地　信秋	一般住宅解体新築	城館跡	立会
89	仙台城跡	仙台市川内地内、市道・筋違橋通線	仙台市水道事業管理者	上水道布設	城館跡	立会
90	仙台城跡(三の丸)	仙台市川内3番9号	仙台市長	博物館改築	城館跡	発掘
91	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目7-20	仙台市水道事業管理者	水道管布設工事	集落跡、弥生～平安	立会
92	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目42-42	伊藤　寛	共同住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
93	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市福室字鶴巻二番29-1	斉藤　賢一	一般住宅新築	散布地、平安	立会
94	鶴巻Ⅱ遺跡	仙台市福室字鶴巻二番46-1	佐藤忠比古	倉庫新築	集落跡、平安	立会
95	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣75-5	㈱セイコー住建	一般住宅新築	集落跡、古代～中世	立会
96	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣168-6、169-7	杉山　三夫	一般住宅新築	集落跡、古代～中世	立会
97	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣73-3	梶田　新市	一般住宅増築	集落跡、古墳～中世	立会
98	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目1150番	古関　卓	一般住宅新築	集落跡、平安	立会
99	山田翅地東南遺跡	仙台市堤町二丁目1-20	菅原真佐子	共同住宅新築	集落跡、平安	立会
100	萩ヶ丘遺跡	仙台市萩ヶ丘9-1	仙台市教育委員会	校舎建設	散布地、縄文	立会
101	北目城跡	仙台市郡山四丁目107	熊本　嘉方	一般住宅新築	城館跡	立会
102	郡山遺跡	仙台市郡山二丁目37-25	豊田　種彦	一般住宅新築	官衙跡	発掘
103	郡山遺跡	仙台市郡山二丁目58-25	斉藤　真	一般住宅解体新築	官衙跡	立会
104	鳥井原遺跡	泉市市名坂字鳥井原38-1、48-1、49-1	山田　敏	事務所駐車場の造成	包含地、縄文	立会
105	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目330-1	富谷　芳夫	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
106	富沢水田遺跡	仙台市富沢字清水39-4	杉本　繁	事務所新築	水田遺構、平安	試掘
107	上野遺跡	仙台市富田字上野中地内	仙台市長	市道側溝工事	集落跡、縄文	発掘
110	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目295-8	佐藤仁一朗	一般住宅増築	集落跡、弥生～平安	立会
111	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目、二丁目地内	仙台市長	下水道布設	集落跡、弥生～平安	立会
112	戸ノ内Ⅰ遺跡	仙台市四郎丸字戸ノ内1番地先	仙台市水道事業管理者	上水道布設	集落跡、古代	試掘
113	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字三所北地内	仙台市長	下水溝布設	集落跡、古代～中世	立会
114	地蔵浦遺跡	仙台市六丁目字行屋前2-2、14-8	天野　信二	事務所建設	散布地、中世	立会
115	富沢水田遺跡	仙台市富沢字教塚2-1、2-2、2-3	犬童　俊介	看板設置	水田跡、弥生～平安	立会
117	大谷地遺跡	色麻町小栗山字下原中谷地地内	宮城県知事	県営ほ場整備	包含地、縄文	発掘
118	一本杉遺跡	宮城町下愛子字森下一本杉	宮城県知事	道路改良	散布地、縄文・古代	発掘
119	大谷地遺跡	色麻町小栗山字中谷地74～76番地	色麻町長	県営ほ場整備	包含地、縄文	立会
120	高古屋城	東和町米川字東上沢230番1	東北電力㈱	送電線布設	城館跡	立会
121	新田古墳群	古川市小野字新田41-1	本下　日勝	店舗建設	古墳群	立会
122	安久東遺跡	仙台市西中田四丁目8-12	玉田　仁一	一般住宅新築	集落跡、古代	立会
123	富沢水田遺跡	仙台市富沢字清水39-5	瀬戸　君子	一般住宅新築	水田遺構、弥生～平安	立会
124	郡山遺跡	仙台市郡山一丁目194-7	高橋　繁	既存建物解体新築	官衙跡	立会
125	郡山遺跡	仙台市郡山一丁目12-3	佐藤　充	既存建物解体新築	官衙跡	立会
126	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目29-2	高橋　弘	一般住宅増築	集落跡、弥生～平安	立会
127	南小泉遺跡	仙台市南小泉字二ノ坪10-27	早坂　直志	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
128	色麻古墳群、上郷支群	色麻町四釜字新宿地内	宮城県知事	県営ほ場整備	群集墳	発掘
131	南小泉遺跡	仙台市南小泉字伊藤屋敷49-24	庄子清代子	鉄筋住宅建築	集落跡、弥生～平安	立会
132	郡山遺跡	仙台市郡山四丁目8-9	土生　功	一般住宅増築	官衙跡	立会
134	日和山城跡	石巻市日和が丘二丁目18、20-1	石巻市長	総合文化センター	城館跡	発掘
135	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅230号	熊谷　隆	一般住宅新築	城館跡	立会
136	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目28-1	鈴木　勝美	一般住宅解体新築	官衙跡	立会
137	史跡、陸奥国分寺跡	仙台市木ノ下二丁目63-10	伊藤　光雄	一般住宅新築	寺院跡	立会
138	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅303号	小出　淑郎	一般住宅建替	城館跡	立会
141	十三塚遺跡	名取市手倉田字山250番地の1	名取市長	テニスコート建設	散布地、縄文～古墳	発掘
142	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅458号	菊池　寿子	一般住宅新築	城館跡	立会
143	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅299号	山内　春夫	一般住宅新築	城館跡	立会
144	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目14-35	吉岡正八郎	一般住宅増築	官衙跡	立会
145	前沖北遺跡	仙台市中田町字前沖北23-8	小原　邦夫	一般住宅新築	散布地、古墳～平安	立会
146	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目1-30	小林　啓一	一般住宅解体新築	集落跡、弥生～平安	立会
147	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目10-11	高橋　義明	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
148	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣89-1	佐藤　勝美	一般住宅新築	集落跡、古墳～中世	立会
149	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣北6-3、6-4、6-6、10-4	花田　一雄	一般住宅新築	集落跡、古墳～中世	立会

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
150	菖蒲沢遺跡	仙台市鶴ヶ谷字菖蒲沢25-11	生矢目忠繁	一般住宅新築	集落跡・縄文奈良平安	立会
151	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目26番	荘司　和男	幼稚園増築	集落跡、平安	立会
152	山口遺跡	仙台市富沢四丁目308-10	斉藤　瀧雄	一般住宅新築	集落跡、縄文～平安	立会
153	長命荘窯跡	仙台市小松島三丁目15-2	庄子　繁	共同住宅建設	窯跡、平安	試掘
154	泉崎浦遺跡	仙台市富沢字泉崎24-1	小池　貞治	共同住宅建設	集落跡、縄文～平安	立会
155	仙台城跡	仙台市川内１番地	田中　靖磨	護国神社改築	城館跡	立会
157	中新田城跡	中新田町字北町3	宮城県知事	都市計画街路改良	城館跡	発掘
158	矢の目遺跡	丸森町小斉字西矢の目8	宮城県知事	かん排事業送水管理設	集落跡、古墳	発掘
159	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目204-15	佐保　定夫	一般住宅増築	官衙跡	立会
160	仙台城跡	仙台市川内追廻	永瀬　安雄	一般住宅新築	城館跡	立会
161	小鶴城跡	仙台市小鶴字屋舗47-13	柿沢　修二	共同住宅建設	城館跡	立会
162	後河原遺跡	仙台市中田町字北44-3	荒川　七衛	一般住宅倉庫等の新築	水田遺跡、平安・中世	立会
163	富沢水田遺跡	仙台市長町字宮田17-4	庄子　正文	店舗新築	水田遺跡、弥生～平安	試掘
164	富沢水田遺跡	仙台市富沢字中谷地30-1	小関正美、小関久男	店舗・共同住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	試掘
165	六反田遺跡	仙台市大野田字六反田10-5	仙台市教育委員会	給食棟建設	集落跡、縄文～平安	発掘
167	赤井遺跡	矢本町赤井字関下52-32	斉藤　憲由	盛土による宅地造成	包含地・弥生奈良平安	立会
170	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目236-5	洞口　孝行	一般住宅新築	官衙跡	立会
171	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目302-3	猪股文生、猪股和子	一般住宅新築	官衙跡	立会
172	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣154-1	田口権十郎	一般住宅新築	散布地、古墳～中世	立会
173	砂押古墳	仙台市砂押町108-2	増田　良一	共同住宅建設	円　墳	立会
174	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目1の1	加藤　義昭	一般住宅増築	集落跡、弥生～平安	立会
175	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目4-34	小出貞津夫	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
176	富沢水田遺跡	仙台市富沢字泉崎前27-1、10-1、27-2	阿部卯三郎	店舗建築	水田跡、弥生～平安	立会
177	朽木橋横穴古墳群	古川市小野字朽木橋	宮城県知事	ダム工事用道路	横穴、古墳群	立会
178	中峰遺跡	大和町吉田字中峰164-1	宮城県企業局	浄水場建設	旧石器・縄文平安集落跡	立会
179	若林城跡	仙台市古城二丁目3-1	宮城刑務所	倉庫建設	城館跡	立会
180	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目12-2	菅野　三郎	一般住宅増築	集落跡、弥生～平安	立会
181	北目城跡	仙台市郡山四丁目5-10	安斉　照子	作業場新築	城館跡	立会
182	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目3-24	橋川　正治	車庫建設	集落跡、弥生～平安	立会
183	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目128-57	堀江　登、堀江貞子	一般住宅新築	官衙跡	発掘
184	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目231-13,231-14	沼田　富男	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
185	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻巣143-8、144-7	猪股貞子、猪股洋子	一般住宅解体新築	集落跡、古墳～平安	立会
186	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅10号	皆川　正夫	一般住宅解体新築	城館跡	立会
187	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目30-4	大宮　久	一般住宅増築	官衙跡	立会
188	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目14-1	佐藤　儀平	一般住宅増築	集落跡、平安	立会
189	富沢水田遺跡	仙台市長町三丁目3番地内	佐竹　栄吉	銀行支店建設	水田遺跡、弥生～平安	発掘
190	茂ヶ崎城跡	仙台市向山四丁目30-20	近藤　應恭	擁壁工事	城館跡	立会
191	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅555号	伊藤　實、伊藤雪江	一般住宅増築	城館跡	立会
193	作田遺跡、畑中遺跡	亘理町大字吉田字作田73番地1、字畑中57他	宮城県知事	流路工工事	集落跡・縄文奈良平安	立会
194	上野山遺跡	仙台市鈎取字上野山10-140	及川　典郎	一般住宅新築	集落跡、縄文	立会
195	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目41-6番地先	仙台市水道事業管理者	上水道工事	集落跡、弥生～平安	立会
196	人来田Ｂ遺跡	仙台市茂庭字人来田西8-13外	鈴木　誠	事務所建設	散布地、古代	試掘
197	鶴巻１遺跡	仙台市福室字鶴巻一番39番地	浅野喜英、しづを	一般住宅新築	集落跡、平安	立会
198	下ノ内浦遺跡	仙台市富沢字下谷地5-2	武田　信一	一般住宅新築	集落跡、縄文～平安	立会
199	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切鴻ノ巣66-3、4、5	対馬　孝悦	一般住宅増築	集落跡、古墳～平安	立会
200	上野遺跡	仙台市富田字上野中28-4	八谷　藤行	一般住宅増築	集落跡、縄文	立会
201	砂押Ⅰ遺跡	仙台市沖野字神柵地内	仙台市水道事業管理者	上水道工事	集落跡、古墳～平安	試掘
205	新田遺跡	多賀城市新田字堀西32-1、字関合43-2他	木川田十三男	分譲住宅建設	集落跡、古代	試掘
206	大代横穴古墳	多賀城市大代五丁目81-1	仙台東土木事務所長	都市計画街路工事	横穴古墳	発掘
207	大橋遺跡	丸森町館矢間山田字小原瀬東	大河原土地改良事務所	農道建設	城館跡	立会
208	富沢水田遺跡	仙台市富沢字泉崎前29-1	白木　清	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
209	富沢水田遺跡	仙台市長町七丁目301-18	大友勘次郎	共同住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
210	富沢水田遺跡	仙台市長町字砂押18番5	高橋　登	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
211	富沢水田遺跡	仙台市富沢字一本杉28-5	吉田　寛志	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
212	南小泉遺跡	仙台市遠見塚三丁目8番17号	菊地　清造	事務所建設	集落跡、弥生～平安	立会
213	仙台城跡(二の丸)	仙台市川内	東北大学長	排水路整備	城館跡	試掘
214	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字庚田上14	遠藤　昇	事務所建設	散布地、平安	立会

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
215	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字北屋敷前24	角田　邦夫	事務所建設	集落跡、平安	立会
216	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地(追廻住宅139号)	千葉　勲	一般住宅新築	城館跡	立会
217	大沢9番窯跡	利府町春日字大沢27番他	宮城県道路公社	利府バイパス建設	瓦窯跡	試掘
218	壇山A遺跡	松島町桜渡戸字壇山3番他	宮城県道路公社	利府バイパス建設	散布地、縄文	試掘
219	壇山B遺跡	松島町桜渡戸字壇山5番30他	宮城県道路公社	利府バイパス建設	散布地、縄文	試掘
220	倶の上遺跡	七ヶ宿町倶の上74番地他	七ヶ宿町長	町道改良	散布地、縄文	立会
221	高崎遺跡	多賀城市東田中一丁目地内	多賀城市長	下水道工事	集落跡、古代	立会
222	にら塚貝塚	石巻市渡波字旭ヶ浦96-1	伊藤啓二、伊藤もり子	一般住宅新築	貝塚、縄文	立会
223	原遺跡	仙台市西多賀三丁目2-15	小野　恭一	一般住宅改築	集落跡、弥生～平安	立会
224	南小泉遺跡	仙台市南小泉字村東80-16	桜井　笑子	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
225	富沢水田遺跡	仙台市富沢字教塚4(換地区15-3街区3-7)	庄子　精一	共同住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
226	郡山遺跡	仙台市八本松二丁目78-22	沼田　英一	一般住宅新築	官衙跡	立会
227	C－501(仙台城跡)	仙台市川内1-1	仙台市長	石垣変位計設置等	城館跡	立会
228	C－501(仙台城跡)	仙台市川内無番地	仙台市長	テニスコート建設	城館跡	立会
229	南小泉遺跡	仙台市南小泉字霞目西79、陸上自衛隊霞目駐屯地内	仙台防衛施設局長	自衛隊用施設建設	集落跡、弥生～平安	試掘
230	C－501(仙台城跡)	仙台市川内1-1　他	仙台市長	公園施設整備	城館跡	立会
231	砂押1遺跡	仙台市沖野字神柵地他	仙台ガス業管理者	ガス管布設	散布地、古代	立会
232	長命館跡	泉市加茂二丁目8、1番地	泉市長	公園整備	城館跡	立会
234	田高遺跡	名取市高館吉田字東中在家31-3番地	東北電力㈱	鉄塔建設	集落跡、縄文～平安	試掘
235	清水遺跡	名取市田高字清水414番地	東北電力㈱	鉄塔建設	集落跡、縄文～平安	試掘
236	余方上西遺跡	名取市高館熊野堂字余方上西22番15	東北電力㈱	鉄塔建設	集落跡、縄文～平安	試掘
237	下中東遺跡	名取市高館熊野堂字余方下28番1	東北電力㈱	鉄塔建設	集落跡、弥生～平安	試掘
238	長者館跡	河南町須江字関の入地内	石巻地方広域水道企業団	浄水場建設	城館跡	試掘
239	富沢水田遺跡	仙台市泉崎二丁目19-3	小池孝之助	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
240	長者館跡	石巻市蛇田字土和田山地内	石巻地方広域水道企業団	浄水場建設	城館跡	試掘
245	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目212～2	庄子　善重	一般住宅新築	官衙跡	試掘
246	上野遺跡	仙台市富田字上野西37-1	佐藤　弘志	事務所及び独身寮建設	集落跡 縄文奈良平安	試掘
247	市川橋遺跡	多賀城市高崎字水入41、42-1、42-3	鈴木たつ江	住宅建設	集落跡、奈良・平安	発掘
248	富沢水田遺跡	仙台市富沢字一本杉16-3-9、16-3-10	猪股農夫男	倉庫建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
249	地蔵浦遺跡	仙台市六丁目字行屋前12番地	工藤　正佳	住宅新築	散布地、平安	立会
250	日辺館跡	仙台市日辺字田中43	井筒　慶治	住宅解体新築	城館跡	立会
251	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目236-2	八島　俊一	住宅建設	官衙跡	立会
252	泉崎浦遺跡	仙台市泉崎一丁目18-14	菅野　定男	店舗付き住宅新築	集落跡、縄文～平安	立会
253	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣33-17	林賢一郎、林　憲子	住宅増築	集落跡、奈良・平安	立会
254	南小泉遺跡	仙台市南小泉四丁目20-5	一條　久男	車庫新築	集落跡、弥生～平安	立会
255	南小泉遺跡	仙台市南小泉四丁目82-6	斉藤あい子	住宅建設工事	集落跡、弥生～平安	立会
256	鶴巻1遺跡	仙台市福室字鶴巻1番114の2、116、115の1	村岡　福蔵	住宅建設	集落跡、平安	立会
257	鶴巻II遺跡	仙台市福室字弁当一番12-1、13-1、14、15-1他	高橋　清信	倉庫建設	散布地、平安	立会
258	青葉山B遺跡	仙台市荒巻字青葉	東北大学長	東北大学付属図書館青葉山分館建設	包含地、旧石器	試掘
259	新山崎遺跡	石巻市蛇田字新山崎50番地	石巻地方広域水道企業団	導水管並びに排水管布設工事	散布地、古墳・平安	試掘
260	北沢北又遺跡	一迫町王沢字北沢北又	一迫町長	道路改修工事	墳	立会
261	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目218-13	小池　光雄	住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
262	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目	庄子　末吉	貸家新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
265	燕沢遺跡	仙台市燕沢東三丁目508-1	柿沢純治、柿沢信子	一般住宅新築	集落跡、官衙跡	立会
267	小館跡	名取市高館熊野堂五反田山11-1他	伊藤忠㈱	学校用地造成	城館跡	発掘
268	富沢水田遺跡	仙台市富沢字泉崎浦27-4、27-6	鈴木　文夫	貸事務所建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
269	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目218-9	高橋　幸三	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
270	陸奥国分寺跡	仙台市木の下三丁目13-16	遠藤　文夫	電柱建替	寺院跡	立会
271	茂ヶ崎城跡	仙台市長町字茂ヶ崎3番地先	遠藤　文夫	電柱建替	城館跡	立会
272	茂ヶ崎城跡	仙台市長町字茂ヶ崎	遠藤　文夫	電柱建替	城館跡	立会
273	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目104-27	小野　頼路	一般住宅新築	官衙跡	立会
274	上野遺跡	仙台市鈎取新田町20-5	高橋　義明	一般住宅新築	集落跡・縄文奈良平安	立会
275	長町南遺跡	仙台市長町南二丁目9番地先	仙台市ガス事業管理者	ガス管布設工事	集落跡、奈良・平安	立会
276	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目212-2	菊地彦三郎	一般住宅新築	官衙跡	発掘

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
277	後河原遺跡	仙台市中田町字前沖地内	仙台市長	用水路工事	水田遺跡、平安～中世	試掘
278	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目203-8	菅原　利広	園舎の増築	官衙跡	試掘
279	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市福室字鶴巻1番岡田字小広目16-2、他	須貝　久男	下水管理設	散布地、平安	立会
280	上野遺跡	仙台市富田字上野中19-24	工藤　隆	一般住宅増築	集落跡・縄文奈良平安	立会
281	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目1-30	小林　啓一	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
282	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目13-3	寺田　武雄	一般住宅新築	官衙跡	立会
283	富沢水田遺跡	仙台市富沢字泉崎浦19-10	寺嶋　好男	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
284	長泉寺古墳群	角田市角田字田袋75-1番地	角田市長	公園敷地造成工事	円　墳	発掘
285	長者館跡	河南町須江字関の入290番地	石巻地方広域水道企業団	浄水場建設	城館跡	立会
286	一本杉遺跡	宮城町下愛子字一本杉1-49	東北電気通信局長	線路庁舎建設	集落跡、平安	立会
287	富沢水田遺跡	仙台市富沢字清水40-1	相原　正元	貸事務所建設	水田遺跡、弥生～平安	試掘
288	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣33-12	高橋　一	一般住宅建設	集落跡、古代	立会
289	籠ノ瀬遺跡	仙台市郡山七丁目208-9	佐藤三千代	共同住宅新築	集落跡、古墳～平安	立会
290	山口遺跡	仙台市富沢一丁目12-26	新田　紀夫	病院増築	集落跡、縄文～中世	試掘
291	富沢水田遺跡	仙台市長町七丁目301-5	百田　秀人	事務所建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
292	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅591号	檜野　正俊	一般住宅解体新築	城館跡	立会
293	富沢水田遺跡	仙台市長町字鳥居原34-6	春木　博明	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
294	地蔵浦遺跡	仙台市六丁目字行尾前11-1	由本　哲彦	ホテル新築	散布地、平安	立会
295	長町清水遺跡	仙台市大野田字清水地内	仙台市長	測溝工事	集落跡、古墳	立会
296	新田遺跡	多賀城市山王字北寿福寺29外	角田　文彦	宅地造成	集落跡、古代	発掘
297	山王遺跡	多賀城市山王字北寿福寺42-1 外	角田　文彦	宅地造成	集落跡、古代	立会
298	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目24番9号	松浦　庄七	共同住宅建築	水田遺跡、弥生～平安	立会
299	土樋遺跡	仙台市土樋一丁目197番の2	河野　和雄	解体新築	集落跡、縄文	立会
300	郡山遺跡	仙台市郡山二丁目5-20	佐々木義虔	住宅増築	官衙跡	立会
305	内脇Ⅰ貝塚	気仙沼市幸町三丁目29番1号他	気仙沼市長	下水道工事	貝　塚、縄文	立会
306	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字庚田南17-2他	庄子　光治	浄化槽建設	集落跡、平安	試掘
307	上野遺跡	仙台市富田字上野西7、11	山田　辰雄	家庭用排水路	集落跡、縄文	試掘
308	上野遺跡	仙台市富田字上野西49	山田　辰雄	家庭用排水路	集落跡、縄文	立会
309	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目6-30	武田　慶吾	一般住宅解体新築	官衙跡	立会
310	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地追廻住宅558	天満　戦三	一般住宅新築	城館跡	立会
311	山田条里遺構	仙台市山田字田中前48-8	高橋　孝之	一般住宅改築	条里遺構、古代	立会
312	若林城跡	仙台市古城二丁目3番1号	宮城刑務所長	作業場建設	城館跡	立会
313	長沼遺跡	古川市川熊字長沼25	加藤　邦則	牧草地に開墾	古　墳	立会
314	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字北屋敷17-2	遠藤　忠夫	工場増築	散布地、平安	立会
315	戸ノ内Ⅰ遺跡	仙台市四郎丸字神明92	菅野　次郎	一般住宅新築	集落跡、古代	立会
316	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目42番32号	伊藤　寛	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
317	北目城後	仙台市郡山四丁目103-20	安斉　秀雄	一般住宅新築	城館跡	立会
318	石巻城跡遺跡	石巻市日和ヶ丘一丁目32番2号地内	浅野　亨	受信アンテナ設備建設	城館跡	発掘
319	地蔵浦遺跡	仙台市六丁目字行屋前12番地	工藤　正佳	一般住宅増築	散布地、古代	立会
320	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目150-12	荒　秀光	一般住宅増築	官衙跡	立会
321	上野遺跡	仙台市富田字上野地内	仙台市長	市道側溝工事	集落跡、縄文	発掘
322	南目城跡	仙台市南目館跡1番 陸上自衛隊仙台駐屯地内	仙台駐屯地業務隊長	病院管理棟建設	城館跡	試掘
323	富沢水田遺跡	仙台市長町南四丁目16番	相原達三郎	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
324	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市福室字鶴巻1番74-2、115-1、113-1 他	村岡　福蔵	共同住宅建設	散布地、古代	立会
325	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字本新田角3、4番	志田　良穂	工場建設	散布地、平安	試掘
326	南小泉遺跡	仙台市南小泉四丁目95-1	菅原多利蔵	共同住宅建設	集落跡、弥生～平安	試掘
327	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目14-16	菅原　武	一般住宅解体新築	官衙跡	試掘
328	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市福室字鶴巻1番29-2	富沢とみ子	一般住宅新築	散布地、古代	立会

昭和59年度分（昭和59年４月～昭和60年１月）

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
1	一本杉遺跡	宮城町下愛子字森下一本杉	宮城県知事	県営住宅	集落跡、古代	発掘
2	宮沢遺跡	古川市川熊字北迫41外	宮城県知事	化女沼ダム	官衙跡	発掘
3	若林城跡	仙台市古城二丁目3-1	宮城刑務所長	渡廊下建設	城館跡	発掘
4	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目28-4	鈴木　喬	一般住宅建設	官衙跡	発掘

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
5	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字三所南169-2	赤間　伸一	一般住宅建設	集落跡、古代	立会
6	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目17-2	佐藤　俊吉	一般住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
7	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地追廻住宅426	木村光義、和江	一般住宅新築	城館跡	立会
8	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地	庄子　忠雄	一般住宅建設	城館跡	立会
9	富沢水田遺跡	仙台市泉崎二丁目18-25	片岡　保	共同住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
10	堤町窯跡	仙台市堤町二丁目102-30	板垣　敦士	一般住宅新築	窯　跡、平安	立会
11	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目9-11	小林　茂	一般住宅新築	官衙跡	立会
12	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目35-8	今野　義嗣	一般住宅新築	官衙跡	立会
13	関場・雷・雷東遺跡 日向古碑群	仙台市柳生	柳生土地区画整理組合理事長	土地区画整理	集落跡－古代 板碑群	発掘
14	石田遺跡	利府町森郷字石田8 外	宮城県知事	利府バイパス	集落跡、古代	発掘
15	七尾城跡	河北町相野田	石巻土木事務所長	県道改修	城館跡	立会
16	堤町窯跡	仙台市堤町一丁目10-19	新田　弘	一般住宅増築	窯　跡、平安	立会
17	西沢遺跡	多賀城市浮島字西沢32-2	志賀　孝男	軽作業工場新築	集落、奈良・平安	立会
18	堤町窯跡	仙台市堤町一丁目101-71	高橋　通宏	一般住宅新築	窯　跡、平安	立会
19	大平山B遺跡	村田町足立字大平山1-34外	日本道路公団	東北横断道	散布地、縄文	発掘
20	大平山D遺跡	村田町足立字大平山1-20外	日本道路公団	東北横断道	散布地、縄文	発掘
21	花　館　跡	村田町足立字楊枝木1-1	日本道路公団	東北横断道	城館跡	発掘
22	梅ヶ久保遺跡	村田町足立字愛宕13-1 外	日本道路公団	東北横断道	集落跡、平安	発掘
23	寺入A遺跡	村田町足立字元館42外	日本道路公団	東北横断道	集落跡、縄文・平安	発掘
24	寺入B遺跡	村田町足立字星城山1 外	日本道路公団	東北横断道	集落跡、縄文・平安	発掘
25	星野城跡	村田町足立字星城山29-5	日本道路公団	東北横断道	城館跡	発掘
26	香ノ木遺跡	色麻町清水字香ノ木	宮城県知事	県営ほ場整備	集　落、縄文	発掘
27	色麻古墳群 上郷支群	色麻町四釜字天王	宮城県知事	県営ほ場整備	古墳群	発掘
28	兵庫館跡	古川市下中ノ目字館6 外	宮城県知事	県営ほ場整備	城館跡	発掘
29	欠ノ上I遺跡	仙台市郡山字谷地田西1-1 外	仙台農業共同組合長	宅地造成	散布地、古代	発掘
30	富沢水田遺跡	仙台市富沢一丁目10-8	佐藤　幸夫	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	発掘
31	本郷遺跡	仙台市茂庭字町田54	佐藤甲子郎	一般住宅増築	散布地、古代	立会
32	燕沢遺跡	仙台市岩切字山崎西186-10	堀　軍一	一般住宅増築	集落跡 縄文・奈良平安	立会
33	入来田遺跡	仙台市茂庭字入来田11-29	高木　茂	一般住宅新築	集落跡、縄文	立会
34	砂押II遺跡	仙台市沖野字砂押61	石川　弘	物置新築	散布地、古代	立会
35	東光寺城跡	仙台市岩切字入山22	吉岡　弘道	幼稚園増築	城館跡	立会
36	富沢水田遺跡	仙台市長町南四丁目10-10	赤井沢孝子	一般住宅増築	水田遺跡、弥生～平安	立会
37	上野遺跡	仙台市富田字上野中29-1	千石　正	一般住宅増築	集落跡 縄文・奈良平安	立会
38	鶴巻I遺跡	仙台市福室字鶴巻一番8-2	浅野　正男	共同住宅新築	散布地、平安	立会
39	富沢水田遺跡	仙台市富沢一丁目12- 1	赤井沢孝子	一般住宅増築	水田遺跡、弥生～平安	立会
40	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目222-54	樋口　一政	一般住宅新築	集落跡、弥生～古墳	立会
41	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目13-7	草野　正己	一般住宅増築	集落跡、弥生～古墳	立会
42	支倉遺跡	川崎町支倉字金田11-1	日本道路公団	東北横断自動車道	散布地、縄文	発掘
43	香ノ木遺跡	色麻町清水字川端南	後藤　英子	個人ほ場整備	集落跡、縄文	立会
44	後河原遺跡	仙台市中田町字前沖29-2、30-1、31	三和住宅産業㈱	宅地造成	集落跡・水田跡	発掘
45	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目7-4	仙台市水道事業管理者	上水道配水管布設	集落跡、弥生～古墳	立会
46	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目11-3	成見　利夫	一般住宅新築	集落跡、弥生～古墳	立会
47	石兜遺跡	気仙沼市赤岩字石兜87-2 他	東北地方建設局	気仙沼バイパス	集落跡、平安	発掘
48	和泉沢古碑群	河北町中島字和泉沢畑21	武山架設工業	宅地造成	古碑群	立会
49	竹ノ内遺跡	泉市市名坂字鹿島43-1 他	宮城県知事	仙塩流域下水道	集落跡、平安	立会
50	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣129-1～5 他	ニッセン開発㈱	住宅新築	集落跡、古代～中世	立会
51	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地追廻住宅294号	呂　忠仁	一般住宅新築	城館跡	立会
52	富沢水田遺跡	仙台市泉崎二丁目10-2	工藤　寿	貸家建築	水田遺跡、弥生～平安	立会
53	富沢水田遺跡	仙台市泉崎二丁目10-2	工藤　寿	貸家建築	水田遺跡、弥生～平安	立会
54	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目27	仙台市長	ブロック塀補修工事	官衙跡	立会
55	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目5-34	五島　敏明	一般住宅新築	集落跡、弥生～古墳	立会
56	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目13-29	門脇　俊吉	一般住宅増築	集落跡、弥生～古墳	立会
57	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目1-1	加藤　義昭	物置建築	集落跡、弥生～古墳	立会
58	南小泉遺跡	仙台市遠見塚東19	村田住建㈱	店舗建築	集落跡、弥生～古墳	発掘
59	富沢水田遺跡	仙台市長町南四丁目16-2	相原達三郎	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
60	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目23	永沼　武治	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
61	茂ヶ崎城跡	仙台市長町字茂ヶ崎38-15	細井　竹治	一般住宅増築	城館跡	立会
62	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目10-1	仙台市長	仮設教室建設	官衙跡	立会
63	台原七丁目五番窯跡	仙台市台原五丁目418-18他	高橋　静	一般住宅新築	瓦窯跡	立会
64	鶴巻Ⅱ遺跡	仙台市福室字弁当一番12他	協和運輸倉庫㈱	工場建築	包含地、平安	立会
65	一本杉遺跡	宮城町下愛子一本杉1-49	東北電気通信局	配水管布設	集落跡、平安	立会
66	四ツ壇原遺跡	瀬峰町大里字中四ツ壇19-7	加藤　光明	松林伐採・伐根	包含地、奈良・平安	立会
67	中田畑中遺跡	仙台市袋原字小平5	佐藤　亀治	側溝布設	集落跡、奈良・平安	発掘
68	西原遺跡	仙台市蒲生二丁目2-6	宮城県公営企業管理者	工業用地道路工事	集落跡、奈良・平安	立会
69	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣168-3	鷹觜　和芳	一般住宅新築	集落跡、古墳～中世	立会
70	神明社浦遺跡	仙台市古城三丁目207-8	鈴木　長吉	一般住宅新築	散布地、古代	立会
71	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目207-8	砂金　博	一般住宅新築	集落跡、弥生～古墳	立会
72	葉坂遺跡	柴田町葉坂字妻見山	柴田町長	道路拡幅	集落跡、縄文～平安	立会
73	熊野堂大館跡	名取市高館熊野堂字大門山105 他	伊藤忠不動産㈱	学校敷地造成	城館跡	発掘
74	若宮前遺跡	仙台市岩切字入山72-2、3	斎藤　信	一般住宅新築	集落跡、縄文～中世	立会
75	新浜A遺跡	塩釜市新浜町三丁目51-83～86、51-66	宮城県漁港事務所	塩釜漁港修築工事	製塩遺跡、古代	発掘
76	新浜B遺跡	塩釜市新浜町三丁目91-10、109-4	宮城県漁港事務所	塩釜漁港修築工事	製塩遺跡、古代	発掘
77	取場坂下貝塚	石巻市流留字取揚坂5-8、9	山田　信次	一般住宅新築	貝　塚、縄文	立会
78	南小泉遺跡	仙台市南小泉字村東87-2	東北エンジニアサイエンス㈱	社屋建設	集落跡、弥生～古墳	立会
79	北目遺跡	仙台市郡山字館ノ内55-1	伊藤　正勝	事務所建設	城館跡	立会
80	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣169-12	鈴木　隆志	一般住宅新築	集落跡、古墳～中世	立会
81	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目207-9	田所レイ子	一般住宅新築	集落跡、弥生～古墳	立会
82	長命館跡	泉市加茂二丁目81	泉　市　長	公園整備事業	城館跡	立会
83	上野遺跡	仙台市富田字上野中126	入間川三郎	一般住宅新築	集落跡、縄文～平安	立会
84	富沢水田遺跡 袋東遺跡	仙台市長町南三丁目35-7	佐藤　洸	一般住宅増築	集落・水田遺跡 弥生～平安	立会
85	二の森遺跡	仙台市二の森22-37	小山　勝雄	宅地造成擁壁工事	散布地、平安	立会
86	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目42-3、43-7	遠藤敏夫、辰子	一般住宅新築.	官衙遺跡	発掘
87	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目220-4	河野　卯吉	事務所建設	集落・水田遺跡 弥生～平安	立会
88	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目50-5	大久　和昭	一般住宅新築	官衙遺跡	立会
89	富沢水田遺跡	仙台市富沢二丁目3-17	瀬戸　君子	一般住宅増築	集落・水田遺跡 弥生～平安	立会
90	地蔵浦遺跡	仙台市六丁目字行尾前11-1	山本　好子	ホテル新築	集落跡、中世	発掘
91	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目13-16	荒川　修二	一般住宅新築	官衙遺跡	立会
92	前田遺跡	川崎町今宿字前田2-1	川崎町長	町道拡幅工事	包含地、縄文・奈良平安	試掘
93	中田畑中遺跡	仙台市袋原字畑中	仙台市長	市道側溝工事	集落跡、古墳・奈良平安	発掘
94	鶴巻Ⅱ遺跡	仙台市福室字鶴巻2-3	仙台市消防局長	防火水槽設置工事	集落跡、平安	発掘
95	岩切城跡	仙台市岩切台屋敷	仙台市水道事業管理者	水道管布設	城館跡	試掘
96	萩ヶ丘B遺跡	仙台市長嶺20-18	仙台市下水道管理者	下水道布設	集落跡、縄文	試掘
97	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目、二丁目、古城三丁目	仙台市下水道管理者	下水道布設	集落跡、弥生～平安	試掘
98	今泉城跡	仙台市今泉字久保田85-17	佐藤　直郎	一般住宅新築	城館跡	立会
99	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切鴻ノ巣169-11	石垣　幸雄	一般住宅新築	集落跡、古墳～中世	立会
100	鶴巻Ⅱ遺跡	仙台市福室字鶴巻二番13-1他	東海林秋広、輝夫	農業用倉庫建築	集落跡、平安	立会
101	堤町窯跡	仙台市堤町二丁目6	高橋捨之進	一般住宅新築	窯　跡、平安	立会
102	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目16-12	武藤　勝彦	一般住宅解体新築	集落跡、弥生～平安	立会
103	富沢水田遺跡	仙台市長町南四丁目12-9	越後　益雄	洗車用ポンプ小屋建築	水田遺跡、弥生～平安	立会
104	笹森城跡	仙台市鶴ヶ谷字館下21-2	横田　陽一	一般住宅新築	城館跡	立会
105	富沢水田遺跡	仙台市長町南三丁目16-16	市川　崇	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
106	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目42-32、41	伊藤　寛	一般住宅増築	集落跡、弥生～平安	立会
107	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣89-1	佐藤　勝美	一般住宅解体新築	集落跡、古墳～中世	立会
108	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅11	浜鍛治賢一	一般住宅新築	城館跡	立会
109	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目14-3～18-21、12-7、8	仙台市水道事業管理者	上水道配水管布設	官衙遺跡	立会
110	菅生田遺跡	白石市福岡倉本字菅生田	太田　重信	倉庫建設	集落跡、縄文	発掘
111	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市福室字鶴巻1番23-1	佐藤　寿見	一般住宅新築	集落跡、平安	立会
112	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目528-1	米倉　征三	店舗建設	集落跡、弥生～平安	立会
113	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目211-7	高橋　守雄	共同住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
114	郡山遺跡	仙台市郡山一丁目18-14	金森　康彦	作業場建設	官衙遺跡	立会

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
115	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目8-11	高野　彰	店舗新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
116	堤町窯跡	仙台市堤町二丁目6、114-268　仙	守末　紀生	一般住宅新築	窯　跡、平安	立会
117	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目148-10	佐藤みよ子	貸家新築	官衙遺跡	発掘
118	仙台東郊条里跡	仙台市南小泉字伊藤屋敷下25-29	大和田勝市	一般住宅新築	条里、奈良	立会
119	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字庚田南7	沼田　一郎	事務所建設	散布地、平安	立会
120	松本遺跡	大衡村大衡字松本13-1、14	遠藤　幸一	飲食店建設	包含地、縄文・奈良平安	立会
121	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目3	仙台市長	舗装補修工事	官衙遺跡	立会
122	上野遺跡	仙台市富田字上野中28-3	佐藤　久好	一般住宅新築	集落跡 縄文・奈良・平安	立会
123	上野遺跡	仙台市富田字上野中16-2	三浦　貢	一般住宅新築	集落跡 縄文・奈良・平安	立会
124	富沢水田遺跡	仙台市泉崎二丁目25-2	大友　恵一	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
125	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字三所北125-27	須藤　貞雄	一般住宅新築	集落跡、古墳～中世	立会
126	山田条里遺跡	仙台市山田字新田堀下中、下南	仙台市長	舗装補修工事	条里、奈良	立会
127	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目27-10	仙台市長	洗車場汚水分離槽改良工事	官衙遺跡	立会
128	汚田通A遺跡 山田上ノ台遺跡	仙台市山田字根岸21-6	二階堂　勉	一般住宅新築	旧石器、集落跡 縄文・平安	立会
129	上野遺跡	仙台市富田字上野中 〃西	仙台市長	舗装補修工事	集落跡 縄文・奈良・平安	立会
130	上杉六丁目遺跡	仙台市上杉六丁目10-13	戸塚　三郎	アパート建築	散布地、平安	立会
131	富沢館跡	仙台市富沢字館76-4	斎藤　一治	一般住宅改築	城館跡	立会
132	堤町窯跡	仙台市堤町二丁目114-263	塚原　祐典	一般住宅新築	窯跡、平安	立会
133	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目115-11、28	神山　幹	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
134	南小泉遺跡	仙台市南小泉字村東80-18	桐ヶ窪英治	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
135	向山高校裏遺跡	仙台市八木山緑町1-1	宮城県知事	向山高校改築	包含地、縄文	試掘
136	河原越遺跡	仙台市上飯田字遠西39	太田　広茂	分譲宅地造成	散布地、古墳～平安	発掘
137	富沢水田遺跡	仙台市長町南一丁目9-11	笠原　哲男	ガス整圧器設置	水田遺跡、弥生～平安	立会
138	坊主門遺跡	仙台市荒巻字西雷神3	千葉美津子	共同住宅建設	散布地、縄文・奈良	立会
139	館山館跡	桃生町太田字薬田175 他	武山　郁郎	土取り工事	城館跡	立会
140	大熊南遺跡	白石市小原字大熊	東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	散布地、縄文	発掘
141	中沢遺跡	牡鹿町給分浜字大房12	日本放送協会	テレビ中継設備用ケーブル埋設	散布地、縄文	立会
142	坊主門遺跡	仙台市荒巻字坊主門9	近藤幸太郎	一般住宅増築	散布地、縄文・奈良	立会
143	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目14-11	桜中　幸夫	店舗建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
144	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目20-3、21	仙台市農業共同組合	宅地造成	集落跡、弥生～平安	発掘
145	岩石I遺跡	瀬峰町藤沢字要害4-1、6-2、167-2、4	瀬峰町長	町道改良工事	包含地、奈良・平安	立会
146	保呂羽館跡	登米町寺池道場山	登米神社	社務所建設	城館跡	立会
147	樋場下遺跡	大郷町味明字樋場下7	宮城県知事	県営ほ場整備	包含地、奈良	立会
148	河原田遺跡	川崎町小野	東北地方建設局	釜房湖畔公園建設	包含地 縄文・奈良・平安	発掘
149	二本松遺跡	川崎町小野	東北地方建設局	釜房湖畔公園建設	包含地、奈良・平安	発掘
150	高野遺跡	川崎町小野	東北地方建設局	釜房湖畔公園建設	包含地、縄文	発掘
151	合道遺跡	花山村本沢字合道41-4	宮城県知事	橋梁架換工事	包含地、縄文	立会
152	菖蒲沢遺跡	仙台市鶴ヶ谷字菖蒲沢31-1	西田清二、信子	一般住宅新築	散布地 縄文・奈良・平安	立会
153	菖蒲沢遺跡	仙台市鶴ヶ谷字菖蒲沢31-2	吉田健一郎 美江子	一般住宅新築	散布地 縄文・奈良・平安	立会
154	菖蒲沢遺跡	仙台市鶴ヶ谷字菖蒲沢31-20	塚越　操	一般住宅新築	散布地 縄文・奈良・平安	立会
155	仙台城跡	仙台市川内字追廻無番地　追廻住宅99号	高橋　良	一般住宅新築	城館跡	立会
156	仙台城跡	仙台市川内字追廻無番地 追廻住宅177号	木村　猛志	一般住宅新築	城館跡	立会
157	大年寺横穴群	仙台市向山四丁目26-20	影山　幾男	共同住宅建設	横穴古墳	立会
158	山口遺跡	仙台市富沢一丁目7-5	小池　英夫	共同住宅建設	集落跡、奈良・平安	立会
159	国分鞭館跡	仙台市原町南字町170、172	大場　宏雄	一般住宅新築	城館跡	発掘
160	人来田B遺跡	仙台市人来田西41	仙台市長	下水道布設工事	散布地、古墳～平安	発掘
161	沼向遺跡	仙台市中野字掃沼47-33、6、7	奇　泰度	工場建設	集落跡、奈良・平安	発掘
162	峰岸遺跡	仙台市茂庭字峰岸51-3、53-2、6	追木とよの	一般住宅新築	散布地、縄文	立会
163	長喜城跡	仙台市長喜字御蔵堀16	庄子　喜助	農作業場・住宅新築	城館跡	立会
164	高崎遺跡	多賀城市高崎二丁目102、102-10	多賀城市長	下水道布設工事	集落跡、奈良・平安	立会
165	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目11-63	小野寺　誠	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
166	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目11-63	佐々木健衛	店舗建設	店舗建設	立会
167	堤町窯跡	仙台市堤町一丁目25-2	柴山よしみ	一般住宅新築	窯跡、平安	立会

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
168	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目27-1	斎藤　留治	店舗建設	集落跡、弥生～平安	立会
169	北畑遺跡	仙台市鶴ヶ谷字大久保山31-10	徳江　武志	一般住宅新築	散布地、縄文～平安	立会
170	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣163-2	飯田　兼弘	一般住宅新築	集落跡、古墳～平安	立会
171	郡山遺跡	仙台市郡山二丁目11-16	赤井沢正敏	一般住宅新築	官衙遺跡	発掘
172	上追見遺跡	七ヶ宿町町頭	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
173	町頭遺跡	七ヶ宿町町頭、下河原	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
174	大梁川遺跡	七ヶ宿町若林山	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
175	原頭遺跡	七ヶ宿町原頭	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
176	原遺跡	七ヶ宿町原	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
177	原尻遺跡	七ヶ宿町原尻	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
178	若林山遺跡	七ヶ宿町若林山	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文・平安	発掘
179	小梁川遺跡	七ヶ宿町ハゲ板沢、原尻	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
180	小梁川東遺跡	七ヶ宿町小梁川	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
181	道端遺跡	七ヶ宿町道端	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
182	大倉遺跡	七ヶ宿町大倉	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地、縄文	発掘
183	矢立西遺跡	七ヶ宿町桧木沢	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地 縄文・奈良・平安	立会
184	根添遺跡	七ヶ宿町根添	建設省東北地方建設局	七ヶ宿ダム建設	包含地 縄文・奈良・平安	立会
185	貝殻貝塚	若柳町下畑岡字寒111	宮城県知事	道路改修工事	貝塚、縄文	立会
186	向山遺跡	亘理町吉田	仙台土木事務所	流路工工事	包含地、平安	立会
187	安久東遺跡	仙台市西中田四丁目2-1	鈴木　栄子	店舗用地造成	集落跡、古墳～平安	立会
188	仙台城跡	仙台市川内無番地	仙台市長	テニスコート建設工事	城館跡	立会
189	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字庚田北2	沼田運輸㈱	事務所建築	散布地、平安	立会
190	富沢水田遺跡	仙台市富沢三丁目11-63	小野寺　誠	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
191	富沢館跡	仙台市富沢字川前浦47-4 〃　富沢字鍛冶屋敷前43-1	東北電力㈱	鉄塔建設	城館跡	発掘
192	鍛冶屋敷A遺跡	仙台市富沢字熊野前23-4 〃　富田字東ノ北16-1	東北電力㈱	鉄塔建設	城館跡	発掘
193	南ノ東遺跡	仙台市富田字東ノ北1-2 〃　字八幡中60-1	東北電力㈱	鉄塔建設	城館跡	発掘
194	上野遺跡	仙台市富田字上野中129-3 〃　字上野西46-2	東北電力㈱	鉄塔建設	城館跡	発掘
195	竹ノ内前遺跡	仙台市富田字竹ノ内前16-1	東北電力㈱	鉄塔建設	城館跡	発掘
196	山田条里遺跡	仙台市山田字新田堀下中29-3他	東北電力㈱	鉄塔建設	城館跡	発掘
197	新組遺跡	仙台市茂庭字大沢41-3、41-4	東北電力㈱	鉄塔建設	城館跡	発掘
198	高崎遺跡	多賀城市東田中二丁目391　他	多賀城市長	下水道布設工事	集落跡、奈良～南北朝	立会
199	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地追廻住宅16号	森谷　正敏	一般住宅新築	城館跡	立会
200	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目25-7	鈴木　繁	一般住宅増築	官衙遺跡	立会
201	郡山遺跡	仙台市郡山一丁目12-28	岡部　敏	一般住宅新築	官衙遺跡	立会
202	堤町窯跡B遺跡	仙台市堤町二丁目8-44	白石　彦一	一般住宅増築	窯跡、古代	立会
203	富沢水田遺跡	仙台市富沢一丁目5-4	伊藤　昭男	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
204	富沢水田遺跡	仙台市長町南一丁目1-3、4、5	仙台市長	都市計画街路工事	水田遺跡、弥生～平安	発掘
205	富沢水田遺跡	仙台市泉崎二丁目11-17	庄子　学	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
206	富沢水田遺跡	仙台市富沢一丁目5-8	伊藤　廣	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
207	富沢水田遺跡	仙節市長町南二丁目27-15　台	民野　好一	一般住宅増築	水田遺跡、弥生～平安	立会
208	硯沢瓦窯跡	利府町春日字二ツ岩14他	宮城県道路公社	仙台松島道路建設	瓦窯跡、中・近世	発掘
209	新田遺跡	多賀城市新田字南安楽寺78-1、79-1	城不動産㈱	分譲住宅造成	集落跡、古墳～平安	立会
210	火打石遺跡	丸森町火打石5	羽出庭土地改良共同施工	団体営ほ場整備	包含地、縄文	立会
211	燕沢遺跡	仙台市燕沢東三丁目528、529	大本　正喜	一般住宅新築	包含地 縄文・奈良・平安	立会
212	富沢水田遺跡	仙台市長町三丁目28	大浦　栄	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
213	富沢水田遺跡	仙台市富沢一丁目2-2	仙台市長	公園整備工事	水田遺跡、弥生～平安	立会
214	金洗沢古墳	仙台市西多賀一丁目320-2、312-10	伊藤　尚一	一般住宅改築	古墳	立会
215	仙台東郊条里跡	仙台市南小泉字七曲35-4	庄子　壽五	アパート建設	条里遺跡、奈良	立会
216	北目城跡	仙台市郡山四丁目6-10他	仙台市水道事業管理者	上水道配水管布設工事	城館跡	立会
217	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目222-3	菅井　廣	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
218	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目222-3	菅井　廣	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
219	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目5-6	金原建築設計事務所	住宅建築	水田遺跡、弥生～平安	立会
220	伊古田遺跡	仙台市大野田下刈田7-1	板橋興一郎	共同住宅建設	包含地、奈良・平安	発掘

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
221	五本松窯跡	仙台市台原三丁目606-1、2、3、4	仙台市長	都市計画街路建設	窯跡、平安	発掘
222	郡山・西台畑遺跡 北目城跡	仙台市郡山一、二、三、四丁目地内	宮城電気通信部長	公衆電気通信施設設置工事	官衙・集落・城館跡 弥生・奈良・中世	立会
223	上野遺跡	仙台市富田字上野中28-3	菅原　佳信	一般住宅新築	集落跡 縄文・奈良・平安	立会
224	郡山遺跡	仙台市郡山二丁目63	小林　敏夫	一般住宅新築	官衙遺跡	立会
225	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目112-9	伊藤　辰雄	一般住宅新築	官衙遺跡	立会
226	深田・新道町遺跡	鳴瀬町宮戸字深田・新道町	鳴瀬町吉田川右岸土地改良区	団体営ほ場整備	散布地、縄文	立会
227	燕沢遺跡	仙台市燕沢東三丁目14-23、18-27	仙台市水道事業管理者	上水道管布設工事	集落跡、縄文～平安	立会
228	今泉遺跡	仙台市今泉字久保田97-1、6	武田　修	一般住宅増築	集落跡・城館跡 縄文・中世	立会
229	若林城跡	仙台市古城二丁目3-1	宮城刑務所	講堂棟等建設	城館跡	発掘
230	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字庚田南2-3	歯大東	倉庫建築	集落跡、古墳～平安	発掘
231	青葉山B遺跡	仙台市荒巻字青葉	東北大学長	東北大学化学機器分析センター	包含地、後期旧石器	発掘
232	富沢水田遺跡	仙台市長町南三丁目8-7	星　市五郎	共同住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
233	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目26-9、、10	加藤美都夫	共同住宅建設	集落跡、弥生～平安	立会
234	北屋敷遺跡	仙台市大野田字北屋敷31-4他	板橋　勝雄	共同住宅建設	包含地、平安	発掘
235	上野遺跡	仙台市富田字上野東9-8	飯渕　清	一般住宅新築	集落跡、縄文	立会
236	富沢水田遺跡	仙台市富沢字泉崎一丁目20	下山　茂	一般住宅増築	水田遺跡、弥生～平安	立会
237	六田東遺跡	仙台市堤町二丁目1-34	猿田喜一郎	一般住宅新築	散布地、平安	立会
238	牛小舎遺跡	仙台市蒲生一丁目3	仙台市水道事業管理者	上水道配水管布設工事	包含地、奈良・平安	立会
239	仙台東郊条里跡	仙台市南小泉字七曲82-1	三和住宅㈱	宅地造成	条里跡、奈良	発掘
240	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目34-2	伊藤美保子	建物新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
241	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目33、34、35、36-1	㈱こなか	店舗建設	集落跡、弥生～平安	立会
242	仙台城跡	仙台市川内１番地	宮城県護国神社	住宅増築	城館跡	立会
243	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目4-21他	仙台市水道事業管理者	上水道配水管布設	官衙遺跡	立会
244	富沢水田遺跡	仙台市泉崎二丁目1-2	㈱いわしや器械店	事務所建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
245	宮後古墳群	丸森町館矢間木沼地宮後180	大江　良敦	参道・駐車場建設	古墳群	立会
246	矢ノ目遺跡	丸森町小斎字西矢ノ目他	角田市長	導水管布設工事	集落跡、古代	立会
247	多賀城跡隣接地	多賀城市浮島字宮前	多賀城市長	公共下水道築造工事	散布地、奈良・平安	立会
248	南小泉遺跡	仙台市遠見塚三丁目8-17	高橋　利夫	店舗増改築	集落跡、弥生～平安	立会
249	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目204-9	杉浦　良男	一般住宅新築	官衙遺跡	発掘
250	新山崎遺跡	石巻市蛇田字新山崎32～41	石巻地方広域水道企業団	導・配水管布設工事	包含地、古墳～平安	確認
251	富沢水田遺跡	仙台市長町南三丁目9-3	相沢　国雄	店舗建設	水田遺跡、弥生～平安	発掘
252	元袋Ⅲ遺跡	仙台市大野田6-1	小林　幸作	宅地分譲・共同住宅建築	散布地、平安	発掘
253	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目7-23	及川かつよ	建造物新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
254	南小泉遺跡	仙台市南小泉四丁目35-36	斎藤　喜助	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
255	明屋敷遺跡	仙台市六丁目字庚田南2-5	大和薬品㈱	事務所建築	散布地、平安	立会
256	堤町B遺跡	仙台市堤町二丁目201-6	内藤　友子	共同住宅建設	窯跡、平安	立会
257	長命荘窯跡	仙台市小松島三丁目15-2	東北文化学園	学生寮建設の擁壁・盛土造成	窯跡、平安	発掘
258	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目3-1、4、5	森　邦夫	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
259	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目1-45	仙台市ガス事業管理者	都市ガス本管敷設工事	官衙遺跡	立会
260	台原七丁目五番窯跡	仙台市台原五丁目418-16、17、419-3、6	武田庄次、美智子	一般住宅新築	窯跡、平安	立会
261	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目203-2	桜庭けい子	共同住宅建築	集落跡、弥生～平安	立会
262	富沢水田遺跡	仙台市富沢二丁目205-5	菅原　茂	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
263	郡山遺跡	仙台市郡山二丁目36-4	加藤　安雄	店舗付住宅建設	官衙遺跡	立会
264	郡山遺跡	仙台市郡山一丁目11-3	半沢　薫	一般住宅新築	官衙遺跡	立会
265	富沢水田遺跡	仙台市長町南四丁目24-4	高橋　正一	共同住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
266	新庄遺跡	泉市松森字剌松76-1他	宮城県公営企業管理者	仙南仙塩広域水道	包含地、奈良・平安	立会
267	館遺跡	泉市松森字館161他	宮城県公営企業管理者	仙南仙塩広域水道	包含地、古代・中世	立会
268	山居寺跡	北上町十三浜字祭田149	北上町長	中学校建設	寺院跡、時期不明	発掘
269	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目261-26	小金沢文男	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
270	茂ヶ崎城跡	仙台市長町字茂ヶ崎46-106	加藤卓三、幸	建物新築	城館跡	立会
271	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣75-3	狩野　高彦	一般住宅新築	集落跡、古墳～中世	立会
272	堤町窯跡B地点	仙台市堤町二丁目114-74	佐々木靖夫	共同住宅建設	窯跡、平安	立会
273	富沢水田遺跡	仙台市長町南三丁目15-15	森　幹夫	共同住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	立会

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
274	諏訪館跡他９遺跡	蔵王町平沢字諏訪館他	宮城県知事	農道整備事業	集落跡、縄文～古代	発掘
275	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目1155-1、2	色川　信男	宅地造成	散布地、平安	発掘
276	河原越遺跡	仙台市上飯田字遠西48-1、2	高橋　勝治	店舗建設	散布地、古墳～平安	発掘
277	富沢水田遺跡	仙台市長町南三丁目10-10	田代　保臣	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
278	五城中北窯跡	仙台市東照宮一丁目422	日本都市開発㈱	共同住宅建設	窯跡、平安	発掘
279	富沢水田遺跡	仙台市富沢四丁目309-7	高野　知里	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
280	仙台城跡	仙台市川内一番地１	宮城県護国神社	建物解体新築	城館跡	発掘
281	平磯館跡	志津川町深田266-4 他	気仙沼土木事務所	県道改良工事	城館跡	発掘
282	市川橋遺跡	多賀城市市川字館前	多賀城市長	水路工事	集落跡、縄文～古代	立会
283	河原Ａ遺跡	大衡村大衡字河原65-54	百々　三郎	一般住宅新築	集落跡、縄文～古代	立会
284	三代河原遺跡	丸森町大内字三代河原93、95-1	八巻　寛	桑木伐根	集落跡、縄文	立会
285	泉崎浦遺跡	仙台市泉崎一丁目14-10	小島　養治	事務所建設	集落跡、古墳～平安	立会
286	山田上ノ台遺跡	仙台市上ノ台町6-40、10-22	仙台市長	側溝工事	包含地、旧石器	発掘
287	山田上ノ台遺跡	仙台市上ノ台町34-1、17-3	佐々木万兵衛	一般住宅新築	包含地・集落跡 旧石器～平安	立会
288	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市福室字鶴巻一番80-6	小山兵二、とも子	共同住宅建築	包含地、平安	立会
289	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目213-13	石森多美子	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
290	南小泉遺跡	仙台市遠見塚二丁目222-38、4	大場　恒夫	一般住宅新築	集落跡、弥生～平安	立会
291	富沢水田遺跡	仙台市長町南四丁目18-12	太田　繁雄	共同住宅建築	水田遺跡、弥生～平安	立会
292	上野遺跡	仙台市富田字上野西41-16	相原　初雄	住宅新築	集落跡、縄文	立会
293	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣53-5	嵐岸　幹男	一般住宅新築	集落跡、古墳～平安	立会
294	南小泉遺跡	仙台市遠見塚一丁目27-15、2	後藤　邦彦	共同住宅建築	集落跡、弥生～平安	立会
295	六用東窯跡	仙台市堤町二丁目21-2	佐藤　暘一	一般住宅新築	窯跡、平安	立会
296	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目222-1	川本　博久	共同住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
297	関場遺跡	仙台市柳生字関場3-4	阿部　敏郎	一般住宅新築	散布地、平安	立会
298	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目1255	橋本　茂	長屋住宅建築	散布地、平安	立会
299	砂押Ⅱ遺跡	仙台市沖野字砂押45-1	武藤勘三郎	一般住宅改築	散布地、奈良・平安	立会
300	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣169-5	高橋　修	社宅建築	集落跡、古墳～平安	立会

昭和59年度発掘届等一覧

(1)　文化財保護法第57条２・３の届・通知

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格	処理
301	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目35-77	白根　猛	一般住宅増築	官衙跡	立会
302	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣170-4	高橋　修	社宅建築	集落跡、古墳～平安	立会
303	富沢水田遺跡	仙台市長町南四丁目27-3	三浦　正雄	店舗付住宅建設	水田遺跡、弥生～平安	立会
304	富沢水田遺跡	仙台市泉崎一丁目12-10	大宮和明、みよ子	一般住宅新築	水田遺跡、弥生～平安	立会
305	大沼端遺跡	柴田町船岡字大沼端1-1	陸上自衛隊船岡駐屯地	弾薬庫増設	包含地、縄文	立会
306	仙台城跡	仙台市川内追廻無番地追廻住宅71	梅沢ゆき子	一般住宅新築	城館跡	立会
307	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目1253	橋本　茂	長屋住宅建築	散布地、平安	立会
308	福田町遺跡	仙台市福田町二丁目1253	橋本　茂	長屋住宅建築	散布地、平安	立会
309	王ノ壇古墳	仙台市大野田字王ノ壇7-1他	板橋　勝雄	共同住宅建築	古墳	発掘
310	鴻ノ巣遺跡	仙台市岩切字鴻ノ巣168-5	高橋　修	社宅建築	集落跡、古墳～平安	立会
311	安久東遺跡	仙台市西中田四丁目2-1	鈴木　栄子	店舗用地造成	集落跡、古墳～平安	立会
312	窯古城跡	角田市神次郎字館	陸上自衛隊船岡駐屯地	弾薬庫建設	城館跡	立会
313	角山Ａ・Ｂ 円田入Ｂ遺跡	蔵王町円田字角山 清上	宮城県知事	農免道路建設	包含地、縄文	立会
314	郡山遺跡	仙台市郡山六丁目102-4他	仙台市長	防球ネット設置	官衙遺跡	立会
315	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目33-1	㈱こなか	店舗建設	集落跡、弥生～平安	立会
316	川添東遺跡	仙台市茂庭字川添10-1	西本　景淳	自家用給油所	散布地、縄文	発掘
317	秀田通Ｂ遺跡	仙台市上ノ台町410、318-1	Ｈ本電電公社	社員寮建設	散布地、平安	立会
318	貞山堀	仙台市荒浜字北宜林11	仙台市長	護岸改良工事	運河跡、江戸時代	立会
319	仙台城跡	仙台市川内追廻住宅286号	佐野　和男	住宅新築	城館跡	立会
320	伊豆野権現古墳	仙台市西中田町一丁目177、181-1	丹野　巌	倉庫建築	高塚古墳	立会

(2)　文化財保護法第57条５、６による届出及び通知(遺跡発見)

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
57－363	後楽東遺跡	利府町森郷字後楽東1-1、1-20	菅原　孝夫	分布調査	旧石器

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
58－242	裏林窯跡	角田市裏林38-19	佐藤　次男	土取工事中	窯跡、奈良
58－243	山屋敷遺跡	宮城郡利府町加瀬字山屋敷4-3	利府町教育委員会	分布調査	散布地、縄文
58～304	伊勢畑遺跡	雄勝町字伊勢畑67-6	雄勝町長	宅地造成	散布地、縄文
59－1	内田遺跡	気仙沼市波路上内田11-1他	気仙沼市教育委員会	分布調査	包含地、縄文
59－2	沼山大堂遺跡	花山村本沢沼山30	花山村教育委員会	暗渠排水工事中	水路跡
59－3	川前遺跡	角田市蔵出字川前15-3、73-2	角田市教育委員会	土取り工事中	須恵器窯跡、古代
59－4	神明遺跡	田尻町中の目字神明	田尻町教育委員会	河川改修工事中	包含地、古代
59－5	新鹿子島遺跡	田尻町諏訪崎字新鹿子島	田尻町教育委員会	畑耕作中	包含地、縄文
59－6	柏木山遺跡	七ヶ宿町字柏木山308	七ヶ宿町教育委員会	分布調査	包含地、縄文
59－7	清水名遺跡	鳴瀬町宮戸字清水名9	鳴瀬町教育委員会	分布調査	包含地、縄文
59－8	平島遺跡	女川町江島列島平島	女川町教育委員会	分布調査	包含地、縄文
59－9	川内遺跡	山元町坂元字川内5-10	山元町教育委員会	道路工事中	製鉄遺跡、平安？

(3)　文化財保護法第98条の２による届出（発掘）

昭和57年度分残（昭和58年２、３月）

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
361	後楽東遺跡	利府町加瀬字郷楽1-5、ほか	利府町教育委員会	確認調査	旧石器
378	長峰遺跡Ｂ地区	泉市松森字長峰6-2 他	泉市教育委員会	宅地造成	包含地、縄文・古代
379	新田遺跡	多賀城市山王字南寿福寺48-1他	多賀城市教育委員会	宅地造成	集落跡、古墳～平安
380	市川橋遺跡	多賀城市市川字伏石26-1 他	多賀城市教育委員会	宅地造成	集落跡、古墳～平安
389	一本杉遺跡	宮城町下愛子字一本杉	宮城町教育委員会	範囲確認調査	包含地、平安
390	色麻古墳群	色麻町四釜字地蔵堂1-18	宮城県教育委員会	県営ほ場整備	古墳群

昭和58年度分

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
1	大倉遺跡他	刈田郡七ヶ宿町字大倉他	宮城県教育委員会	七ヶ宿ダム	集落跡、縄文・古墳
2	柳津館山館跡	本吉郡津山町柳津字館山	〃	柳津バイパス	館跡、中世
3	中峰遺跡	黒川郡大和町吉田字中峰140-6 他	〃	南川ダム関係浄水場	旧石器・縄文・古代
4	色麻古墳群	加美郡色麻町四釜字地蔵堂20-1 他	〃	県営ほ場整備	7c末～8c初、古墳群
16	泉崎前遺跡	仙台市長町南四丁目20	仙台市教育委員会	病院建設	集落跡、古墳～平安
19	戸の内遺跡	仙台市四郎丸字戸の内10-1他	〃	宅地造成	集落跡、古墳～平安
20	郡山遺跡	仙台市郡山三丁目113他	〃	範囲・遺構確認調査	官衙跡
21	下ノ内浦遺跡	仙台市富沢一丁目2	〃	高速鉄道建設	集落跡、縄文～平安
22	下ノ内遺跡	仙台市富沢四丁目6	〃	高速鉄道建設	集落跡、弥生～平安
23	富沢水田遺跡	仙台市長町南三丁目1他	〃	高速鉄道建設	水田跡、弥生～平安
24	伊古田遺跡	仙台市富沢四丁目1他	〃	高速鉄道建設	集落跡、奈良・平安
25	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目114	〃	ビル建設	集落跡、奈良・平安
26	南小泉遺跡	仙台市古城三丁目114	〃	都市計画街路建設	集落跡、弥生～平安
27	後河原遺跡	仙台市中田町字前沖21、34-1、2、35、36	〃	宅地造成	集落跡、奈良・平安
28	蒲沢山遺跡	宮城郡宮城町芋沢字蒲沢山	宮城町教育委員会	確認調査	製鉄、集落―縄文
29	城生柵跡	加美郡中新田町城生	中新田町教育委員会	遺構確認調査	城柵跡
45	長塩谷板碑群	桃生郡北上町十三浜字長塩谷59他	河北地区教育委員会	移転	板碑群、中世
46	新田遺跡	多賀城市山王字南寿福寺48-1他	多賀城市教育委員会	宅地造成	集落跡、古墳～平安
58	志引遺跡	多賀城市東田中二丁目429	多賀城市教育委員会	範囲確認調査	旧石器
61	嘉倉貝塚	栗原郡築館町萩沢嘉倉52-1～53-7	宮城県教育委員会	県道改良工事	貝塚、縄文
63	今泉城跡	仙台市今泉字久保田85-3、85-9	仙台市教育委員会	住宅建設	城館跡
64	名生館遺跡	古川市大崎字弥栗12、24、25～28	宮城県教育委員会	学術調査	官衙跡
108	富沢水田遺跡	仙台市鹿野三丁目26-21	仙台市教育委員会	とう道工事	水田遺跡、弥生～平安
109	永沼窯跡	石巻市永沼字寺中畑97	石巻市教育委員会	土取り	陶器窯跡、中世
129	仙台城跡	仙台市川内3-9	仙台市教育委員会	博物館解体新築	城館跡
133	日和山城跡	石巻市日和が丘二丁目20-1	石巻市教育委員会	総合文化センター建設	城館跡
139	一本杉遺跡	宮城町下愛子字森下一本杉	宮城県教育委員会	県営住宅建設	集落跡、縄文・平安
140	十三塚遺跡	名取市手倉田字山250-1	名取市教育委員会	テニスコート建設	集落跡、縄文～古墳
156	中新田城跡	加美郡中新田町北町3	中新田町教育委員会	都市計画街路工事	城館跡
166	上野遺跡	仙台市高田字上野中地内	仙台市教育委員会	市道側溝工事	集落跡、縄文

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
168	大谷地遺跡	加美郡色麻町小栗山字下原中谷地	宮城県教育委員会	県営ほ場整備	集落跡、縄文
169	矢の目遺跡	伊具郡丸森町小斎字西矢の目8	宮城県教育委員会	県営ほ場整備	集落跡、平安・中世
192	羽山(権現)館跡	白石市白川犬卒都婆字羽山47-1他	白石市教育委員会	採石	城館跡
202	六反田遺跡	仙台市大野田字六反田10-5	仙台市教育委員会	学校給食棟建設	集落跡、縄文～平安
203	市川橋遺跡	多賀城市浮島字高平1他	多賀城市教育委員会	宅地造成	集落跡、古代
204	山王遺跡	多賀城市山王字東町浦32-1他	多賀城市教育委員会	宅地造成	集落跡、古代
233	塚山A遺跡	松島町桜渡戸字塚山3 他	宮城県教育委員会	松島有料道路	窯跡
241	朽木橋横穴古墳群	古川市小野字朽木橋	宮城県教育委員会	ダム建設工事用道路	横穴古墳
244	市川橋遺跡	多賀城市高崎字水入41、42-1、42-3	多賀城市教育委員会	宅地造成	集落跡、奈良・平安
263	裏林須恵器窯跡	角田市裏林38-19	角田市教育委員会	土取工事	須恵器窯跡、奈良
264	新山崎遺跡	石巻市蛇田字新山崎50	石巻市教育委員会	導・排水管布設工事	散布地、古墳～平安
266	小館跡	名取市高館熊野堂字五反田山11-1	名取市教育委員会	住宅・学校用地造成工事	城館跡
302	長泉寺古墳群	角田市角田字田袋75-3	角田市教育委員会	公園造成工事	円墳

昭和59年度分(昭和59年４月～昭和60年１月)

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
2	宮沢遺跡	古川市長岡・川熊	宮城県教育委員会	化女沼ダム建設工事用道路	官衙跡
3	一本杉遺跡	宮城県下愛子字一本杉	宮城県教育委員会	県営住宅建設	集落跡、縄文・古代
4	石田遺跡	利府町森郷字石田	宮城県教育委員会	都市計画道路建設	集落跡、古代
5	梅ヶ久保遺跡	村田町足立字梅ヶ久	宮城県教育委員会	東北横断自動車道	集落跡、古代
6	寺入A遺跡	村田町足立字寺入	宮城県教育委員会	東北横断自動車道	包含地、縄文
7	寺入B遺跡	村田町足立字寺入	宮城県教育委員会	東北横断自動車道	包含地、縄文
8	石甲遺跡	気仙沼市赤岩字石甲	宮城県教育委員会	気仙沼バイパス	包含地・貝塚、古代
9	色麻古墳群	色麻町四釜字天王17	宮城県教育委員会	県営ほ場整備	古墳群、7c末～8c初
10	香ノ木遺跡	色麻町清水字香ノ木	宮城県教育委員会	県営ほ場整備	集落跡、縄文
11	大梁川遺跡	七ヶ宿町若林山	宮城県教育委員会	七ヶ宿ダム	集落跡、縄文
12	若林山遺跡	七ヶ宿町若林山	宮城県教育委員会	七ヶ宿ダム	包含地、縄文・古代
13	上追見遺跡	七ヶ宿町町頭	宮城県教育委員会	七ヶ宿ダム関係国道付替	包含地、古代
14	町頭遺跡	七ヶ宿町町頭字下河原	宮城県教育委員会	七ヶ宿ダム	包含地、縄文
15	大熊南遺跡	白石市小原字大熊	宮城県教育委員会	七ヶ宿ダム関連道付替	包含地、縄文
16	原遺跡	七ヶ宿町原	宮城県教育委員会	七ヶ宿ダム	包含地、縄文
17	星野城跡	村田町足立字星城山	宮城県教育委員会	東北横断自動車道	城館跡
18	大平山B遺跡	村田町足立字大平山	宮城県教育委員会	東北横断自動車道	包含地、縄文
19	大平山D遺跡	村田町足立字大平山	宮城県教育委員会	東北横断自動車道	包含地、縄文
20	高山宮林遺跡	川崎町前川字高山宮林	宮城県教育委員会	東北横断自動車道	包含地、縄文
21	支倉遺跡	川崎町支倉字斉無	宮城県教育委員会	東北横断自動車道	包含地、古代
22	下ノ内遺跡	仙台市富沢四丁目6	仙台市教育委員会	高速鉄道建設	集落跡、縄文～古代
23	下ノ内浦遺跡	仙台市富沢一丁目2	仙台市教育委員会	高速鉄道建設	集落跡、奈良・平安
24	中田畑中遺跡	仙台市袋原字畑中10-1～4	仙台市教育委員会	宅地造成	集落跡 古墳～奈良・平安
25	大代横穴古墳群	多賀城市大代五丁目81-1	多賀城市教育委員会	都市計画街路工事	横穴古墳群
26	伊古田遺跡	仙台市富沢四丁目1	仙台市教育委員会	高速鉄道建設	集落跡、奈良・平安
27	富沢水田遺跡	仙台市長町南三丁目1 他	仙台市教育委員会	高速鉄道建設	水田遺跡、弥生～平安
28	山田上ノ台遺跡	仙台市山田字上ノ台4 他	仙台市教育委員会	学術的調査	集落跡、旧石器～縄文
29	長畑遺跡A地区	泉市松森字住吉4-1	泉市教育委員会	宅地造成	包含地、旧石器～縄文
30	郡山遺跡	仙台市郡山五丁目2,26-1	仙台市教育委員会	範囲・遺構確認調査	官衙遺跡
31	熊野堂大館跡	名取市高館熊野堂字大門山105 他	名取市教育委員会	学校用地造成工事	城館跡
32	仙台城跡	仙台市川内無番地	仙台市教育委員会	遺構確認調査	城館跡
33	蒲沢山遺跡	宮城町芋沢字蒲沢山	宮城町教育委員会	宅地造成	集落跡、縄文
34	関場遺跡	仙台市柳生字関場14他	仙台市教育委員会	土地区画整理事業	集落跡、奈良・平安
35	雷東遺跡	仙台市柳生字雷8 他	仙台市教育委員会	土地区画整理事業	集落跡、平安
36	雷遺跡	仙台市柳生字雷34他	仙台市教育委員会	土地区画整理事業	集落跡、平安
37	欠ノ上遺跡	仙台市郡山字谷地西1-1他	仙台市教育委員会	宅地造成	集落跡、奈良・平安
38	名生館遺跡	古川市大崎字城内71～74他	宮城県教育委員会	学術的調査	官衙遺跡
39	前田遺跡	川崎町今宿字前田2-1	川崎町教育委員会	町道建設	包含地、縄文
40	富沢水田遺跡	仙台市長町三丁目3	仙台市教育委員会	遺構確認調査	水田遺跡、弥生～平安

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
41	富沢水田遺跡	仙台市富沢一丁目10-8	仙台市教育委員会	遺構確認調査	水田遺跡、弥生～平安
42	菅生田遺跡	白石市蔵本字菅生田111-3	白石市教育委員会	倉庫建設	集落跡、縄文
43	川前遺跡	角田市藤田字川前15-3 73-2	角田市教育委員会	崩壊の危険があり緊急発掘調査	窯跡、古代
44	新浜遺跡	塩釜市新浜町三丁目66	宮城県教育委員会	塩釜漁港建設	製塩遺跡、(縄文)古代
45	河原田遺跡	川崎町小野字河原田3 他	宮城県教育委員会	釜房湖畔公園建設	包含地、奈良・平安
46	二本松遺跡	川崎町小野字二本松53他	宮城県教育委員会	釜房湖畔公園建設	包含地、縄文
47	下新田遺跡	川崎町沖字下新田44他	宮城県教育委員会	釜房湖畔公園建設	包含地、縄文
48	兵庫館跡	古川市下中ノ目字館6 他	宮城県教育委員会	県営ほ場整備	城館跡
49	南小泉遺跡	仙台市遠見塚東19	仙台市教育委員会	仙台玉姫殿新築工事	集落跡、弥生～平安
50	南小泉遺跡	仙台市南小泉字村東87-2	仙台市教育委員会	浄化槽建設	集落跡、弥生～平安
51	小田原A・B 小田裏B遺跡	花山村草本沢字小田原 字小田裏	宮城教育委員会	小田ダム建設	散布地、縄文
53	山田条里遺跡	仙台市山田字欠ノ上前11-19	仙台市教育委員会	送電線鉄塔建設	条里遺跡、古代
54	新組遺跡	仙台市茂庭字大沢41-3、41-4	仙台市教育委員会	送電線鉄塔建設	集落跡、縄文～平安
56	硯沢遺跡	利府町春日字二ツ石14	宮城県教育委員会	仙台松島道路建設	窯跡、近世
57	大沢瓦窯跡	利府町春日字大沢27	宮城県教育委員会	仙台松島道路建設	窯跡、近世
58	伊古田遺跡	仙台市大野字千苅田	仙台市教育委員会	住宅建築	集落跡、縄文～古代
59	観音堂遺跡	宮城町上愛子字観音堂	宮城県教育委員会	愛子バイパス	散布地、縄文・平安
60	市川橋遺跡	多賀城市浮島字高平12、13	多賀城市教育委員会	宅地造成	集落跡、古代
62	五郎市遺跡 北東宮下遺跡	名取市愛島小豆島字五郎市2-61他	名取市教育委員会	遺構確認調査	集落跡、縄文～平安
65	新山崎遺跡	石巻市蛇田字新山崎～丸沼	石巻市教育委員会	水路改修工事	包含地、古墳・平安
66	平磯館跡	志津川町深田263-6	志津川町教育委員会	県道改良工事	城館跡
67	大木囲貝塚	七ヶ浜町東宮浜字東大木47	七ヶ浜町教育委員会	遺構確認調査	貝塚、縄文
68	川内遺跡	山元町坂元字川内5-10	山元町教育委員会	道路工事	製鉄遺跡、平安？

(4) 文化財保護法第57条1による通知(発掘)

昭和58年度分

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
116	里浜貝塚	桃生郡鳴瀬町宮戸字西畑	東北歴史資料館長	学術調査	貝塚、縄文
130	神明社窯跡	仙台市耕江9-37	古窯跡研究会	学術調査	瓦窯跡、古代
301	後河原遺跡	仙台市中田字前沖29-2、30-1、31	後河原遺跡調査団	学術調査	水田遺跡、平安
303	熊野堂遺跡	中新田町上狼塚字岩出40～70	東北学院大学考古学研究部	学術調査	瓦散布地、古代
59-1	馬場壇A遺跡	古川市清水三丁目北馬場壇2-2223	石器文化談話会	学術調査	旧石器

昭和59年度分

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
52	馬場壇遺跡	古川市清水三丁目北馬場壇	東北歴史資料館	学術調査	旧石器
55	中沢目貝塚	田尻町蕪栗字熊野堂20	東北大学考古学研究室	学術調査	貝塚、縄文
63	仙台東郊条里跡	仙台市南小泉字七曲82-1 他	東郊条里跡発掘調査団	宅地造成に伴う事前調査	条里跡、古代

(5) 文化財保護法第61条・第100条2

昭和59年度

整理番号	遺跡名	所在地	申請者	発掘の原因	遺跡の性格
61	長命館跡	泉市加茂二丁目81	泉市教育委員会	公園整備に伴う立会調査	城館跡
64	里浜貝塚	鳴瀬町宮戸字西畑	東北歴史資料館	学術調査（現状変更発掘調査）	貝塚、縄文